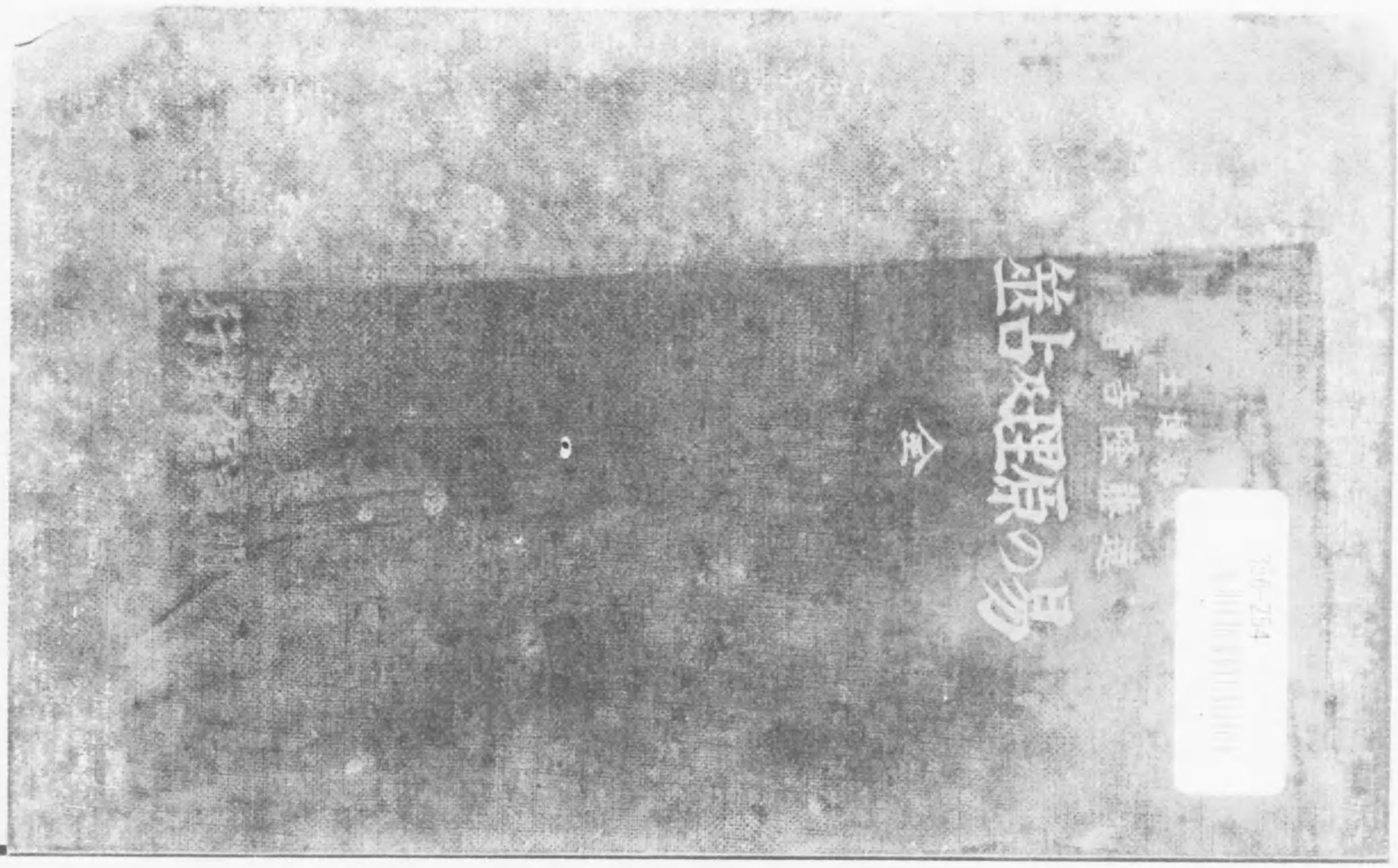
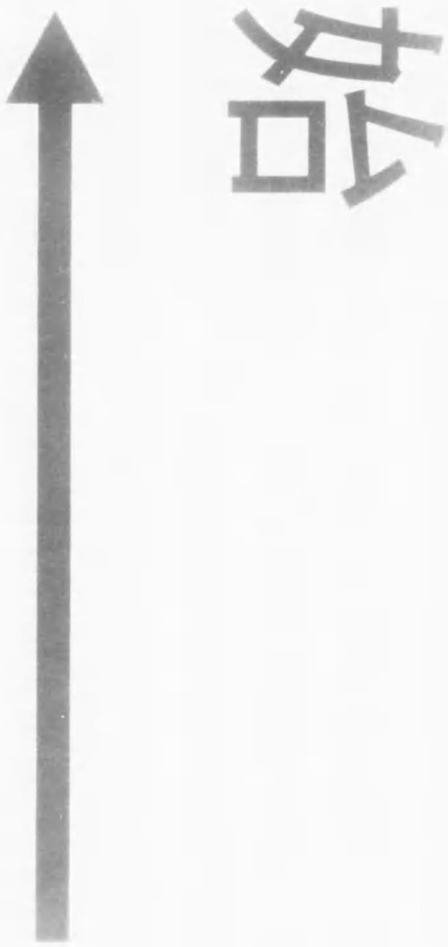


764-754



文學博士遠藤隆吉著

易の原理及占筮 全

東京　明誠館藏版

序

孔子曰はく占はざるのみと、卽ち易の占ひを主とし、孔子の義理を以て解せしを知る。孔子歿して後七十子の徒子夏獨り易傳を得ると稱すれども其の說據なく、今傳ふる所の易傳なるもの亦信ずるに足らず。劉向敬愼篇を著はし、王肅は執辔篇を述べ、孔子子夏との問答を叙すれども是亦信ずるに足るものなし。今の時に當りて易の理を見るべきものは上下經と十翼とを措いて他に之を求むべきなし。十翼は雜なりと雖も古雅尙ふるなく、今に當りて易を解せんとするは必ず十翼を窺はざる可らざるなり。緯書は乃ち雜の雜なるもの、十翼と比較すべくもあらず。而して後世の作者斯理を追窮するもの其の

356
254
I種
W
1200500690282

孔門の範圍を脱するや否やは暫く之を措き、何れも陰陽六十四卦に關聯して必ず起り來る所のものとすれば則ち易書の參考となすべき者極めて廣し。

余十七八歳哲學を好み、斯學の深遠なるを聞き、日夕之を耽讀し、僅かに其の一斑を窺ひ、明治二十六年試みに易學源論を著はし、以後思ひを此に潛め、攻究渉獵二十餘年、然るに淺見寡聞、目を萬分の一にだも曝すこと能はざる也。但一たび斯學の思想を組織せんと欲するの念極めて功なるものあり。筆を執り之を草するに及び、意に滿たざる所極めて多し。殊に六十四卦の分類を列する所に於て甚しとなす。漸く年を越え、書肆督促最も急、乃ち暫く纒めて一書となし、之を世に公にす。嚮きに大正二年を以て易と人生を著はし、余が易に關する說の大略を叙せり。全頁僅かに四十、易の要と余が之を解する所以のものとを擧ぐるのみ。而して明年を期して東洋哲學大全を著はさんとす。本書を讀まんとするものは併せて此れ等を參考せられんことを要す。

揚子已易を著はし易の理を以て心内の理となし卽ち宇宙の理となす。唐土の學者乃至日本の儒生に至る迄亦皆遵奉至聖至神の理寓すとなす。余や愚陋未だ此く信ずること能はずと雖も易が支那一切の思想系統に影響せしことは乃ち之を知る。支那の哲學、東洋の哲學を研究せんとするもの易を知らざれば恰も畫龍の點睛を欠くが如く、畫虎の犬に類するが如し。豈悲しからずや。

今や日本の帝國、支那文學を研究せんとするの士、其人に乏

しからず。恐くは本書に於て多少の指針となる所あるべし。易學を研究せんとするものも亦其人に乏しからず。乃ち或は其の一班を最も平易に知了するを得ん。易を信じ、占筮を業とするものは甚だ多し。本書に於て占筮法の一般を知了し、併せて占筮の原理を解釋するを得ん。此く廣大なる關係あるにも拘はらず、本書の極めて不完全なるは余が最も遺憾とする所なり。識者幸に示教を惜まず、余をして斯學の開發を成さしめられんことを。

大正五年十一月

於巢園學舍　文學博士　遠藤隆吉　識

易の原理及占筮目次

總論……一

第一編　易の思想系統……三

第一章　八卦の成立……三

第一節　自然と神話……三
第二節　相對の原理……六
第三節　二原理の符號……九
第四節　八卦の成立……一〇
第五節　乾坤六子の說……一六
第六節　八卦の性質……一七

第七節　重卦の成立……二三

第二章　卦畫の意義……二九

第一節　八卦と六十四卦……二九
第二節　上下二卦の關係……二九
第三節　六爻は下より上に向つて昇進しつゝある事……三一
第四節　天地人に則ること……三二
第五節　陰位陽位……三二
第六節　各爻の社會的位置……三四
第七節　一爻一卦の象あること……三六
第八節　承乘應比據互體約象……三七
第九節　卦形……四〇
第十節　卦爻は變ずる意味を含む……四一
第十一節　爻と卦との關係……四七

第十二節　三百八十四爻の一般的性質……四八

第三章　易の經典……五一

第一節　易經の體裁及び作者……五一
第二節　六十四爻の順序……五三
第三節　卦綜と卦錯……六〇
第四節　三易の文……六四
第五節　上下經の用字法……六七
第六節　易經は字書なりといふ說……七一
第七節　經典の權威……七七
第八節　十翼の文……七九
第九節　十翼非孔子之作……八二
第十節　彖象の別……八九
第十一節　彖象の時代……九三

第四章　易の思想と易書……九七
第一節　易の根柢……九七
第二節　卦辞爻辞……九八
第三節　十翼……九九
第四節　易關係の思想……一〇一

第二編　易の哲學……一〇三

第一章　陰陽論……一〇三
第一節　陰陽と人事……一〇三
第二節　陰陽と矛盾相對……一〇四
第三節　易と老子(一)……一〇五
第三節　易と莊子(二)……一一〇

第四節　易と太極圖說……一一一
第五節　易と陰符經……一一三
第六節　陰陽思想の應用……一一六

第二章　六十四卦の哲學……一一七
第一節　一卦の意味……一一七
第二節　六十四卦の人生觀……一一八
第三節　六十四卦の名稱……一二九
第四節　六十四卦の分類……一三五
第五節　順境……一四七
第六節　愛撫……一六一
第七節　交際……一六三
第八節　敎育……一六八
第九節　家庭……一六九

第十節　結婚……一七二
第十一節　旅行……一七四
第十二節　牽制……一七五
第十三節　刑罰……一七八
第十四節　戰爭……一八〇
第十五節　訴訟……一八一
第十六節　逆境……一八四
第十七節　進退……一九九
第十八節　社會救濟……二一四
第十九節　努力……二一八
第二十節　修養……二二〇
第二十一節　六十四卦分類表……二二九
第二十二節　易の文……二三三
第二十三節　上下經の八卦數……二三四

第二十四節　經解……二三六
第二十五節　王弼の易應用論……二四一
第二十六節　張孟劬の易論……二四二
第二十七節　六十四卦の占筮的解釋……二四三

第三章　十翼の思想……二五七

第一節　記述法……二五七
第二節　彖の哲學……二五八
第三節　象の哲學……二六〇
第四節　繫辭の哲學……二六〇
第五節　說卦の哲學……二七一
第六節　文言の哲學……二七三
第七節　八卦の象……二七九
第八節　八卦の順序……二八二

第九節　六十四卦貞悔生成の説……二八五
第十節　之八に就て……二八七
第十一節　易の年代に就て……二九三
第十二節　天與神物……二九八
第十三節　考變占……三〇三

第四章　易の應用……三一一

第一節　相談對手……三一一
第二節　倫理的唯心論……三一三
第三節　政治思想……三一五
第四節　易の有形的應用……三一七
第五節　陰符經……三一九
第六節　萬物數の説……三四九

第五章　易と他の哲學系統……三五三

第一節　易と各種の思想……三五三
第二節　易と五行説……三五四
第三節　易と干支及び人相……三五九
第四節　十干十二支の説明……三六一
第五節　易と老莊哲學……三六六
第六節　易と河圖洛書……三六九
第七節　易とピユタゴラス哲學との異同……三七四

第三編　占筮論……四〇一

第一章　占筮法……四〇一

第一節　緒論……四〇一

第二節　過揲說……四〇三
第三節　掛扐說……四〇七
第四節　三十六變說……四一〇
第五節　四十八策說……四一四
第六節　第二第三不掛說……四一八
第七節　五十策の所原(一)……四一九
第八節　五十策の所原(二)……四二七
第九節　五十策の所原(三)……四二九
第十節　五十策の所原(四)……四三四
第十一節　五十策の所原(五)……四三六
第十二節　過揲と掛扐と何れを取るべきか……四四五
第十三節　三十六變說を排す……四四九
第十四節　四十八策說を排す……四五二
第十五節　占筮無用說……四五四

第十六節　筮法の價値……四六五
第十七節　筮法は何に象るか……四六七
第十八節　筮の器……四七六

第二章　占驗論……四八一

第一節　占驗法一般……四八一
第二節　占驗諸例……四八三
第三節　周の史陳敬仲が齊に興ることを占す……四八八
第四節　梅花心易要領……四九七

第三章　占筮法の原理……五〇四

第一節　占筮の原理(一)……五〇四
第二節　占筮の原理(二)……五〇五
第三節　占筮の原理(三)……五〇七

目　次　終

第四節　占筮の根底……五〇八

易の原理及占筮

文學博士　遠藤隆吉　著

總論

鄭玄曰はく、易は日月なりと、然れども鐘鼎古文には蟲形に造る。乃ち蜥蜴の象形文字となすを以て當れりとす。此れ易の字の第一義なり。蜥蜴の性たるや、日に色を變ずること數回に及ぶ。故に易の字を以て「變化」を意味することゝなせり。此れ易の字の第二義なり。而して今所謂易哲學は「變化」を以て根柢となす所の一種の思想系統なるが故に易の字を以て之を表はすこととなせり。之れ易の字の第三義なり。易の字一度作られてより次第に第二第三の意味をも包含することゝなれり。若し易の字を讀むで簡易の易となす如きは今論ずる限りに在らず。

易なる一種の思想系統を論述するを以て主題となすが故に、易經の體裁、作者、

傳來等は之を後に讓り、先づ易の思想系統其者を論述し、而る後機を見て易經に及ばんとす。易經は易の文字に見はれたる者に外ならざればなり。讀者も未だ嘗て自身手を觸れしことなき易經に關する講義を聞くも殆んど理解すること能はざるべし。恰も一種の科學書は全体を讀み了りて後始めて其意味を理解し得べく、始めより其定義を聞くも極めて漠然たる者なる如し。易は宇宙の變化を示めす所の一種の思想系統なることを注意し置き、直ちに思想其者を論述せんと欲す。

然るに易なる思想系統を論述するに當り如何なる書に據るべきか。言ふ迄もなく、易經其者に據らざるを得ず。易經の註釋、易緯、乃至易に關する述作は汗牛充棟啻ならず、中には易經以外の思想をも包含するものあり。然れども易の思想系統を論述せんとする時は必ずや易經を以て中心的典據となさゞるを得ず。今の易經が果して善く易の思想系統を言ひ表はして且つ餘蘊なき者なるか、知るべからざる所に屬す。從て、吾人が易の思想系統を論述せんとするも、「易經を通じて見たる者」に外ならざるなり。

同く易經を通じて見たる者と雖も、解釋の方法は人に由りて一ならず。或る者は遙か想像を逞ふし以て易の微意の在る所を索らんとし、或る者は易經の文字に執着し、殆んど想像の羽翼を張らざらんとす。吾人は易經を以て典據となし之を各國の神話と進化論心理學等に照し、其上に合理的なる想像を弄するは万已むを得ざることと信ず。故に看る者或は之を以て余が一己の易觀となす者あらん。又或は之を以て餘り遙か想像に耽り易經の意に背馳したりとなす者あらん。何れも然かあるべき批評にして余が辭する所にあらず。易の典籍の多き殆んど他經に冠たり。余が目を洒らせし所の者は其の數十分の一に過ぎず。余は此の易經を以て完全なりとなすにあらず。只だ易の思想系統の一般と易經の人生と密接なる關係ある所以とを論述せんとするに外ならず。讀者之を諒せよ。

第一編　易の思想系統

第一章　八卦の成立

第一節　自然と神話

凡そ自然界に於て最も著明なるは天地日月晝夜の如き相對的なる現象なり。去れば如何なる社會に於ても天地日月相對の神話あり。タイロー氏曰はく

凡ての國に於て晝は夜に繼ぎ天は地を覆ひ、日月は交る〳〵天を運り。而して日の出に先ちて曙あり。故に凡ての神話に於て晝と夜、天と地、日と月、日と曙は男と女(或は戀人、或は夫妻或は兄弟として)表さる。而して日は東方に於ける彼の室より出で來る花婿として、曙は頰を赤らませたる花嫁として表さるゝは自然のことなり。故に神話にして日と曙との戀愛を言はざるもの稀なり。されどかゝる神話は必ずしも原始的のものにあらず。

印度のウシャス、(Ushas) イランのウシャン、(Ushanh) 希臘のエーオース、(Eos) 羅馬のオーロラ、(Aurora) リシューアのオースツラ、(Auszra) 等は皆、字義上曙を指すものにして希臘、羅馬にては之を人に擬し印度にては神とせり。されど共通なる神話は存在せず。(L. Taylor, The Origin of the Aryans. p. 311.)

又云はく

彼等(アリアン人及び其他の多くの人種)は皆蒼々焉たる天を以て最上の神となし且つ之を崇拜せり。其の名は種々にして印度人はヴアルーナ、(Varuna) 希臘人はツオイス、(Zeus) ケルト人はカミュロス、(Camulos) チユートン人はウオーデン、(Woden) と呼べり。彼等は又天の配たる地を母として拜せり。印度人は之をプリトヒヴィ (Prithivi) と呼び、希臘人はゲーア (Gaea) 又はデメーテル (Demeter) チユトン人はネルサス、(Nerthus) フリッガ (Frigga) 又はジュールド (Jörd) と呼べり。(ibid. p. 308.)

天地日月晝夜の如きは何れの社會に於ても兩々相對する者として觀察せられ、且つ神として崇拜せられたり。然かも人事界にて經驗する所の性を附し、男性となし、女性となし、又は父性となし、母性となす。此れ等相對の諸神より單に「相對の性」其者を抽象して思考するが如きは遙か後世のことに屬す。支那に於て天地併びに万物は古代皆神視せられたり。舜典に云はく、

肆類于上帝、燔于六宗、望于山川、徧于群神。

又禮記に云はく

柴を泰壇に燔きて天を祭る。泰折に瘞埋して地を祭る。辟犢を用ふ。少牢を泰

昭に埋めて時を祭る。坎壇に相近して寒暑を祭る。王宮に日を祭る。夜明に月を祭る。幽宗に星を祭る。雩宗に水旱を祭る。四坎壇に四方を祭る。山林川谷丘陵の能く雲を出し風雨を爲し怪物を見すを皆神と曰ふ。天下を有つ者は百神を祭る。諸侯は其の地に在るをば則ち之を祭る。其の地を亡へるときは則ち祭らず。

禮記の書は孔子の舊にあらざるべきも、其の習慣は古代に存せし者なるべし。何んとかれば記者が想像的に筆の上にて習慣を作り出すが如きは實際出來得べからざるとなればなり。支那の古代は多神教(polytheism)なりき。其中に於て天地は最も貴き者とせられたり。此くの如くして天地を以て相對的となすは多くの社會に於て見る所の現象なれば支那人が天と地とを以て非常なるものとし、神として崇拜せしも亦異むに足らざるなり。然るに相對といふことに着目して宇宙を觀察する時は寒暑あり、日月あり、晝夜あり、宇宙の萬物は恰も兩々相對する者の如く然り。此れ支那人種の祖先の腦中に浮び來りし所の思想なり。

第二節　相對の原理

此く種々の事象を觀察し相對の性質者を抽象したるは實に易哲學の起源なり。易は相對なる二性を區別し、一を積極的とし、一を消極的とし、名けて陰と陽といふ。陰陽なる概念は極めて概括的にして性質、物體、狀態、位置等悉く之を包含せざるなし。例へば强弱は性なり。然るに陰陽の中に包含せらる。榮枯、盛衰、晝夜、寒暑の如きは狀態なり。然るに是も亦陰陽の中に包含せらる。陰の氣と云ひ、陽の氣と云ふ。形而下の質料なり。男といひ、女といふ、個人を指す。何れも陰陽の中に包含せらる。然るに陰陽の概念は單に相反對せるといふことを以て主要なる要素となし、此の要素さゑ發見せらるゝ所には其性質なると狀態なるとを問はず、又其の物體なると位置なるとを問はず、一樣に之を包容せしめたり。由是觀之、陰陽の概念は極めて概括的なり。

更に一面に於て陰陽なる文字に就て注意すべきは單なる反對と矛盾的反對とを包含すること是れなり。單なる反對とは何ぞや。第三者を許す場合是れなり。例へば黑と白との如し。其の中間には灰色あり、褐色あり、赤あり、紫あり、數多の第三者の介在するものあり。之れを單なる反對と謂ふ。矛盾的反對は之と異なり、第三

者を許さゞるものなり。例へば左手と右手、毒蛇と無毒蛇、有形物と無形物と云はんが如き是れなり。其兩者の何れにも屬せざる第三者あることなし。一切の蛇は毒あるかなきか何れにか分屬せざるを得ず。毒あるにあらず、毒なきにあらずといふが如き蛇の存在を認むること能はず。論理思想の明かならざりし古代にありて陰陽ある概念が漠然此等兩者を包含せしことは決して怪むに足らざるなり。況んや陰陽なる概念は社會の傳說として古代より次第〳〵に發達し來れるものなれば其概念の明了に識別せられざりしこと固より其處と謂ふべし。陰陽ある概念に對する此等兩種の注意は周易を研究せんとするものゝ忽かせにす可からざる所なり。

此く漠然たるにせよ、易の思想は兎に角陰陽二者を立てゝ以て二原理となし、宇宙は是れ等兩者に由りて司配せらるとゐすと同時に此れ等兩者は恰も男女の如きものなりとなせしと明かなり。希臘のロクロスにも亦之に類する思想あり。卽ち男性を以て理想となし、女性を以て資料となし、第三者は其間に生まるとなす。而して周易に於ても陽は男性にして精神的、陰は女性にして物質的なりとするの思想あり。（十翼哲學參考）去ればロクロスの思想は易の概念に該當する所ありといふべし。此外に易の陰陽には法則の意味あり、性質の意味あり、又位置の意味あり。包含する所極めて多し。然るに兎に角陰陽が「相對」と云ふことを以て其中心となすは最も注意すべき所なり。

第三節　二原理の符號

易の作者は陰陽二原理を表はすに、▬と▭とを以てせり。卽ち二原理の符號(Symbol)なり。何故に此符號を撰びしかといふに陽は奇數、陰は偶數、陽は男性にして剛、陰は女性にして柔なればなり。▬は剛の如く思はれ▭は柔の如く思はる。吾人の感情に於て然り。又▬は奇▭は偶ありとは其の形に於て己に然るなり。兎に角支那思想に在りては穩かなる所ゐり。二者は符號なり。易の作者が此等兩符號に對するときは宇宙一切の現象は歷々として其中に表はれ來るが如き感ありしなるべし。晝夜寒暑日月星辰は固より、男女、君臣、夫婦、父子、君子、小人に至る迄皆▬と▭とに由りて代表せらる。乃至は上下、內外、左右、前後の如き

榮枯、盛衰、禍福、善惡の如き亦皆 ▬ と ■ とに由りて代表せられざるはなし。大なる所に於ても ▬ と ■ とあるのみ。其中の小部分に於ても亦 ▬ と ■ とならざるなあるのみ。宇宙何れの方面と雖も何れの部分と雖も皆 ▬ と ■ とならざるなきなり。此れ實に易の主要なる所にして其の根本思想なり。去れば陰陽は普遍的法則なり。此く普遍的法則のあるありて以て一切現象を司配し居るが故に未來の現象をも亦以て卜知すべきなり。

第四節　八卦の成立

然るに個々の現象に就て之を見れば陰の性もあり陽の性もある如し。例へば山は高き所より見れば陽なれども其地上に在る所より見れば陰なる如し。水は其の強き所より見れば陽なれども柔なる所より見れば陰なり。火は其の明なる所より見れば陽なれども其の中心の暗き所より見れば陰なり。去れば單に ▬ と ■ とのみにては不十分なり。何等か方法を講せざる可らず。此れ易の作者の腦中に浮びし所の進動にして之を表はすの法は他にあらず、之を堆積するにあるのみ。陰の上に各々陰と陽とを堆積し、陽の上にも亦各々陰と陽とを堆積し、二爻なる四卦を得、各四卦の上又陰と陽とを堆積し、三爻なる八卦を得。（卦を積むに當り凡て下より上にす。此れ普通の人情より來りしものにして當然のことなり。）二爻四卦に止めずして三爻八卦に至り、四爻十六卦に進まずして八卦に止る者其故なくむばあらず。蓋し左の如し。

(イ)三なる數は最も人情に適し居ること。一體奇數は隅數よりも愉快なる感情を與ふる者なり。されば日本の俗間に於ても贈答には多く奇數を用ふ。正月の繩は七五三を用ふ。奇數は不可分の觀念を起し統一の觀念を起す。偶數は之に反して可分の觀念を起し支離滅裂の觀念を起す。此れが爲めに奇數を好み偶數を嫌ふなるべし。同じく奇數の中にても三なる數は最も簡單にして五七等よりも最も規則正しき觀念を起す。奇數の中にても三なる數は最も人情に投じ居るを見る。此れが爲め周易は三爻にて止めたり。要するに三の數に重きを置きしなり。

(ロ)天地人三才に則ること。天地人三才は支那古代に於ける標準概念なり。換言せば一般に天地人三才を以て宇宙間に於ける主要なる對象となしつゝ

ありしなり。今三爻は天地人三才を代表するものと見ることを得。少なくとも三個の標準概念に依りて影響せられ、三に重きを置き遂に三爻を以て滿足するに至れるものとも想像することを得べし。

乾	兌	離	震	巽	坎	艮	坤
☰	☱	☲	☳	☴	☵	☶	☷
太陽	太陽	少陽	少陽	少陰	少陰	太陽	太陽

(八)三爻ならば陰、陽に勝つか、陽、陰に勝つか、二者同一といふことなし。易の思想に依れば宇宙一切の事は陰か然らざれば陽なり。三爻ならば陰か陽か何れかの性質が強きを示し、從つて易の根本思想に合し居るなり。

(二)八なる數は程よきこと。十六は餘りに多きに過ぐ。易の單位を以て十六となす時は其數餘りに多きに過ぎて取扱上の不便を感ず。然るに八卦ならば所謂手頃(テゴロ)にして極めて便利なり。是又易の作者をして八卦を以て滿足せしめし一條件ならざるべからず。

(ホ)八卦は宇宙間の重なる現象を示すに足ること。宇宙間の重要なる現象は八卦に依りて略ぼ現はされ居るを見る。本より宇宙には判然たる八卦の別なければ何人が見ても妥當と思はるといふにはあらざれども、兎に角易の作者は八卦生成の後、是を以て自然現象の重なるものを代表せしめんとせり。而かも自然現象の重なるものは實際是によりて代表せらる。是又易の作者をして八卦を以て滿足するに至らしめし一原因あらざる可からず。天、澤、火、雷、風、水、山、地、是れなり。

乾鑿度に云はく。物有始、有壯、有氣、故三畫而成乾と。是れ古來の傳說なれども解釋となすに足らず。余が以上の說明は謂はゞ經驗說にして易を以て合理的に作成せられしとなす論者の到底首肯する能はざる所なり。余は易の作者を以て聖人にあらずとなす。易は經驗的に次第〳〵に作られたるものとなすなり。陽を剛となし、明とかし、人に在りては君子となし、善人となし、男となし、父となす。物に在りては上となし、外となす。陰を柔となし、暗となし、人に在りては小人となし、惡人となし、女となし、母となす。物に在りては下となし、內となす。爻を積むで卦をなし、其の性を定むるには此れ等の「加減總計」を以てす。陰一陽二、又は陽一陰二の如き時は其一なるものを以て主となし、其の爻の性に從ひ陽性の卦となし又は陰性の卦となす。或は陰を小といひ、陽を大といふ。故に泰の彖に「小往大來」とあり。王輔嗣の類例に曰はく卦有小大と。（明卦通變通爻）隨て小の卦又は大の卦とも謂ふ可きなり。兎に角一を以て全體の性を定む。其の故何んぞや二說あり。一は陽を君となし陰を民となす。一君二民なるものは尙びて陽卦とし、二君一民なるものは賤みて陰卦となすものなり。即ち繫辭傳に曰はく

陽卦は陰多く、陰卦は陽多し。其の故は何ぞや。陽卦は奇、陰卦は偶、其の德行は何ぞや。陽は一君にして二民、君子の道なり。陰は二君にして一民、小人の道なり。

と。二は陰は陽を求め、陽は陰を求む。求めらるゝ者少ければ珍重せられて求むる者を司配すとなすものなり。王輔嗣の略例に云はく。

夫れ少は多の貴ぶ所なり。寡は衆の宗とする所なり。一卦五陽にして一陰なるときは則ち一陰之が主と爲る。五陰にして一陽なるときは則ち一陽之が主と爲る。夫れ陰の求むる所の者は陽なり。陽の求むる所の者は陰なり。陰苟くも一なれば五陽何ぞ同じうして之に歸せざるを得んや。陽苟くも隻なれば五陰何ぞ同じうして之に從はざるを得んや。故に陰爻賤しと雖も一爻の主と爲り得るは其が至少の地に處ればなり。

と。是れ六爻の卦に付て言へるなれども三爻の卦に付ても亦同じ。二說共に一理ある者と謂ふべし。然れど　第一說の如く「君民」にのみ限るは穩かならず。故に後說を以て可となす。少き者は多き者の望む所となり。其の精神を司配す。故に少き者の性が一卦に於て顯著（Predominant）の如く思はるゝなり。從て之を以て八卦の

性となすなり。

以上の方法にて八卦の成立を説明するは所謂加一倍の法にして邵康節朱子等の取る所なり。余は十翼に「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦」の句あるも三爻の堆積は二爻の後に在り、二爻の堆積は一爻の發明に伴ふこと殆んど疑ひある可らず。然れども他の一面には說卦傳に據つて乾坤六子の說をなす者あり。

第五節　乾坤六子の說

乾坤六子の說より八卦成立の由來を說く者あり。此說に據れば先づ陰陽二畫を設け、積んで三陽☰☳☵三陰☷☴☶となし、之を乾坤と謂ふ。乾坤を以て卦の父母とし、震巽坎離兌艮の六卦を生ず。因りて之を重ねて六十四卦となす。是れ說卦傳中に在る乾坤六子の說より割り出したる者なり。（河田孝成著周易新疏別錄）此說明は說卦傳に據るといふ點に於て將又父母を主とする道德的家庭的の意味あるといふ點に於て取るべきが如くなれども八卦の成立を以て然かく合理的となすは發明の心理に反するが如し。故に、余は八卦の成立は全く加一倍の法に依る者となし、彼の乾坤六子の說の如きは八卦成立の後に附會したる者なるを信ず。然れども何れも想像の說にして確實なる材料あるにあらざれば何れとも斷言し難し。但だ學者の信ずる所如何に在るのみ。

第六節　八卦の性質

八卦は易の根柢なり。之を明かにせざれば易の思想は全く解す可らず。故に今八卦の性質を明かにし、（朱子は之を卦德と謂ふ）自然現象の何に當るや（之を卦象と謂ふ）を述べんとす。

一、乾☰は陽のみにして、剛の極なり。如何なる方面より見るも陰性あるなし。故に其の德を健となし、象を天となす。其の他の象を擧ぐれば

馬、首、圓、君、父、玉、金、寒、氷、大赤、良馬、老馬、瘠馬、駁馬、木果、

二、坤☷は陰のみにして柔の極なり。毫も陽性なし。正さに☰と相對せる者。故に其の德を順となし、象を地となす。其の他の象を擧ぐれば

牛、腹、母、布、釜、吝嗇、均、子母牛、大輿、文、衆、柄、黑(地)

三、震☳は一陽二陰の下にあり、陽は動き、陰は靜かなり。下にある陽は昇りて上に行かんとす。故に一陽二陰の下に在りて昇らんとして動きつゝあるものと見るべし。陽は此の卦の主たり。故に此の爻に付て義を取り。卦德を動となし。卦象を雷となす。其の他の象を擧ぐれば

龍、足、玄黃、大塗、長子、決躁、善鳴(馬)、作足(馬)、的顙(馬)、反生(稼)、健、蕃鮮、

又此の卦は坤の體中に乾の初爻來りて生ずる者と見るを得、因りて之を長男となす。說卦に云はく、

震一索而得男。故謂之長男。(第十章)

四、巽☴は一陰二陽の下にあり。陰は靜かにして二陽に從順なり。故に又二陽の下に入り居る者と見るべし。故に其の德を入となす。其の象を風となす。故に又聯想によりて、命令の意あり。其の他の象を擧ぐれば。

雞、股、木、長女、繩直、工、白、長、高、進退、不果、臭、寡髮(人)、廣顙(人)、多白眼(人)、近利市三倍(人)、躁卦、

此の卦は坤の體中坤の初爻始めて入り來れる者と見るを得、因りて之を長女となす。說卦に云はく、

巽一索而得女。故謂之長女。

五、坎☵は一陽二陰の間にあり。陽は善、陰は惡。惡中にあり。故に其の德を陷るとなす。外柔にして內剛、故に其の象を水となす。凡て液體に關すること、險阻に關することは此の中に包含せらる。其の他の象を擧ぐれば、

豕、耳、溝瀆、隱伏、弓輪、加憂(人)、心病(人)、耳痾(人)、血卦(人)、赤(人)、美脊馬)、亟心(馬)、下首(馬)、薄蹄(馬)、曳(馬)、通、月、盜、堅多心(木)、

此の卦は坤の體中、乾の中爻來れるものなりと見るを得。因りて之を中男とす。說卦に云はく、

坎再索而得男、故謂之中男。

六、離☲は一陰二陽の間に附着し居ると見らる。故に其の德を麗となす。火は外明にして內暗し。試みに蠟燭の火炎を窺ひ見れば周圍は赤けれども內部は黑し

故に其の象を火となす。凡て「見」「明」等の意は此卦に在りとなす。其の他の象を擧ぐれば、

雉、目、日、電、中女、甲冑、戈兵、大腹(人)、乾卦、鱉、蟹、蚌、龜、科上槁(木)

此の卦は乾の體中、坤の中爻來りてなれる者と見るを得。因りて之を中女となす。說卦に云はく、

離再索而得女。故謂之中女。

七、艮 ䷳ は一陽二陰の上に在り。陽は動く者なれども更に行く所なし。超然として止る。其の德を「止」るとなす。又此の卦は坤地の上に高き者ありと見るべし。故に其の象を山となす。其の他の象を擧ぐれば、

狗、手、徑路、小石、門闕、閽寺、指、鼠、黔喙之屬、堅多節(木)、

又此の卦は乾の體中坤の上爻來り成せる者と見るを得。因りて之を少男となす。說卦に云はく、

艮三索而得男。故謂之少男。

八、兌 ䷱ は一陰二陽の上に在り。陰は小人、下に在るべき者。而して上に在り。故に悅ぶ。故に其の德を說(コロコブ)となす。故に凡て口舌言語に關することは此中に包含せらるとかす。䷹ の正反對、故に其の象を澤となす。其の他の象を擧ぐれば。

羊、口、少女、巫、口舌、毀折、附決、剛鹵(地)、妾

此の卦は乾の體中坤の三爻來り成せる者と見るを得。因りて之を少女となす。說卦に云はく、

兌三索而得女。故謂之少女。

此れにて說卦傳中に在る八卦の象は盡きたるなり。此外荀爽集解に列せられたる象あり。今略す。乾坤を父母となし、其の餘の六卦を六子となす。何楷曰はく、

索とは求むるなり。乾と坤とが相互に求むるをいふ。卽ち坤が先づ乾に求め而して乾が之に應ずれば陽が陰中に入る。是れ陰が陽を包みて男を成す。又乾が先づ坤に求めて坤が之に應ずれば陰が陽中に入る。是れ陽が陰を包みて女を成すなり。

是れ等の卦象が古代の傳說として一般に信ぜられしは、上下經中此れ等の卦象を取りて以て辭を繫けし者多きを見て知るべし。但だ一切の卦象は一人の手

に成りしにあらず、次第々々に後人の追加する所となり、遂に一定の者となりしなるべし、凡そ此れ等の卦象は皆八卦の卦德と聯想する所より定められたる者なり。去れど聯想は人々必ずしも一ならず。故に以上擧げたる八卦の卦象を集めて之を混合し改めて、之を八卦に配當せよと言はるゝときは人々各々異なりたる結果を得べし八卦の中に宇宙萬象を網羅せんとする事固と難し。要するに古來讀易家の間に習慣として傳はり來りし者は以上の如くなりしのみ。

第七節　重卦の成立

八卦已に定立す。然るに更に複雜なる宇宙の變化を示めさんとすれば八卦を積むの外なきなり。蓋し易の作者は豫め八卦を重ねんとせしにあらず。偶ま天地の複雜なる進動を表はさんとするの動機を起し、偶然的に八卦を重ね、其の結果、能く天地の複雜なる進動を表はし得る如きを發見せるのみ。之を重卦と云ふ。此れ亦想像の說にして易を以て聖人の作となす者より見れば誠に不都合なる說なり。吾人は易の作者を以て聖人となさざるが故に此く立論せざるを得ざるのみ、去れど、吾人は八卦より十六卦を生じ、十六卦より三十二卦を生じ、三十二卦より六十四卦を生せしとなすこと能はず。何んとなれば易經に在る六十四卦卽ち重卦は八卦を重ねし所に於て始めて其意味を表はし得る者にして、六爻其者を一體、卽ち八卦の重なりたる者にあらずとして見ては其意味を發見すること能はざればなり。要するに吾人は八卦を以て易の根本となし、六十四卦は八卦の上に作られたる者に外ならずとなすなり。

重卦は卽ち六十四卦なり。八卦の上に各八卦を積ぬば則ち六十四卦なり。六十四卦は如何樣の順序に排列せらるべきか。是事に就ては後に論述すべけれども今暫く重卦の性質を示めさんため、易經に就て其の全體を列記すると左の如し。

䷀ 乾　䷁ 坤　䷂ 水雷屯　䷃ 山水蒙　䷄ 水天需　䷅ 天水訟

地水師　天澤履　天火同人　雷地豫　地澤臨

水地比　風天小畜　地天泰　天地否　火地晉

天火大有　地山謙　雷天大壯　火地明夷　風地觀

澤雷隨　山風蠱　火雷噬嗑

山火賁　天雷无妄　澤風大過　澤山咸　雷天大過

山地剝　山天大畜　火地晉　雷風恒　地山謙

地雷復　山雷頤　離　天山遯　地火明夷

風火 家人	雷水 解	澤天 夬	地風 升	澤火 革
火澤 睽	山澤 損	天風 姤	澤水 困	火風 鼎
水山 蹇	風雷 益	澤地 萃	水風 井	震

風火 家人	雷水 解	澤天 夬	地風 升	澤火 革
火澤 睽	山澤 損	天風 姤	澤水 困	火風 鼎
水山 蹇	風雷 益	澤地 萃	水風 井	震
風山 漸	火雷 豐	澤風 兌	風澤 中孚	火水 未濟
火山 旅	巽	風水 渙	雪山 小過	水火 既濟
雷澤 歸妹		水澤 節		

然らば重卦は何人に始まりしか、一言以て之を蔽へば邈として其年代を知る可らず。但だ書經に龜從筮從の句ある以上吾人は夏殷の頃已に其存在せしことを信せんとす。然れども之れに付ては異說あり。王弼は伏羲なりとなし、鄭玄は神農なりとし、孫盛は禹なりとし、司馬遷、班固、楊雄等は文王なりとなす。伏羲氏說を執るものゝ證とする所に曰はく連山歸藏周易の名ありて連山は伏羲氏の易、歸藏は黃帝氏の易と稱せらる。而して各六十四卦を備ふるが故に重卦は伏羲氏の時にありといふべしと。又曰はく、繫辭傳に云はく「昔者庖犧氏の天下に王たるや仰いでは則ち象を天に觀……結繩を作りて網罟となし、以て田し、以て漁す。蓋し之を離に取る」と。離は重卦なれば重卦の伏羲に始まりしと疑ふ可らずと。又曰はく、淮南子に云ふ「伏羲之れが六十四變をなす」と。重卦の伏羲に始まりしを見るべしと。何れも確實なる論據あるにあらず。後世の憶說のみ。吾人は伏羲氏神農氏を以て時代の名となし、而して夏殷以前に於て、殊に支那民族のパミール地方に生存せし頃に於て已に其社會內に存在しつゝありしことを信せんとするなり。

第二章　卦畫の意義

第一節　八卦と六十四卦

八卦の性質は已に之を述べたり。八卦已に意味ある以上は六十四卦も亦各々或る意味なきこと能はず。例へば ☵ 坎、水、雷 の如く坎震を重ぬるときは水と雷との併發せる狀態として雷雨の象なりと觀察し得べきが如し。卦德より見れば上卦は陷、下卦は動なる故、動いて嶮難に陷むる者とも觀察し得べし。一の重卦に付て熟視し居る時は種々の聯想の起り來るありて何んとなく意味ある如く感ずべし。去れば六十四卦は皆一種の意味あり。此意味は始めて六十四卦を見たる人には何んと解釋せらるべきかは分らざれども此には易經を通じて見たる意味を述べんと欲す。余り牽强附會の如く、又或は餘り幼稚に見ゆる者あるべきも暫く記して以て參考に供す。

第二節　上下二卦の關係

上下二卦を其卦象、卦德の上より觀察する時は前述の如き面白き意味を發見することを得べし。今熟ら上下二卦の關係を考ふる時は左の如き意味の伏在するを感ずべし。

(一)上卦は外、下卦は內の如く感ずべし。此れ易の爻を積むや、下より上にするがためなり。

(二)上卦と下卦とは互に相軋轢若しくは交渉しつゝあるが如く感せらる。

(三)下卦は來り上卦は行き去る如くに感せらる。

(四)更に他の一面に於ては上卦は上りし如く下卦は降りし如く感せらる。

此れ等は上下兩卦の關係に付て易の作者の思ひ浮びし所の思想なりとす。此れ等の思想を以て上下二卦の卦德、卦象を比較する時は種々の意味を現はすべし。此の意味(又は後に述る如き意味)より六十四卦の名稱は定められたるなり。尤も其等名稱は必ずしも動かすべからざるものにあらず。單に周易の作者の腦中に浮び出でし一種の聯想と見做す可き者なり。

內卦を貞と曰ひ、外卦を悔と曰ふ。左傳に「蠱之貞風其悔山」とある是れなり。又占筮の場合には本卦を貞と曰ひ、之卦を悔と曰ふ。國語に「貞屯悔豫皆八」とある如き是れなり。然れども此名稱は後世に興りし者にして易創作の當時より存在せしにあらず。

第三節　六爻は下より上に向て昇進しつゝあること

此れ前述せる中に包含せらるれども殊に注意すべき所なれば此に改めて之を記せんとす。周易古來の習慣として爻を積むには必ず下より上にす。故に六爻中の最下爻を謂て初爻となし、順次に二三四五上と數ふ。初爻に陰ある時は小人又は惡の初まりし者としてこれを惡み、之を戒慎す。此くて坤

の初六に於ては「履霜堅冰至」と曰ひ又更に繫辭傳には詳かに此意を敷演して「積善の家には必ず餘慶あり、積不善の家には必ず餘殃あり、臣にして其君を弑し子にして其父を弑す、一朝一夕の故にあらず、其繇て來る所の者漸あり。之

を辯ずること早く辯せざるに由るなり。易に曰はく霜を履みて堅冰至る。蓋し順を言ふ」と謂へり。其代り初めに陽ある時は之を喜ぶ。復（䷗）の象に於ては「復は其れ天地の心を見るか」と謂へり。去れば（䷠）の如き（䷖）の如きは陰の增長せる者として喜ばず。（䷫）の如きは之を喜ぶを常とす。泰（䷊）の卦に於ては小往大來といへり。卽ち陰去り陽來るの意なり。又否（䷋）の卦に於ては大往小來といへり。卽ち陰來りて陽去るの意なり。

第四節　天地人に則ること

六爻は之を二づゝ算ふる時は三なり。三は天地人三才を聯想せしむ、故に六爻が天地人三才を表象すとなすも亦自然の勢なり。上二爻を天となし中二爻を人となし、下二爻を地となす。繫辭傳に曰はく、

易の書たる廣大悉く備る。天道あり、人道あり、地道あり。三才を兼ねて之を兩にす。故に六、六とは他に非ず、三才の道なり。道に變通あり。故に爻と曰ふ。爻に等あり。故に物と曰ふ。物相雜る故に文と曰ふ。文當らず。故に吉凶生ず。

又說卦に云はく。

昔聖人の易を作るや將に以て性命の理に順はんとす。是を以て天の道を立つ。曰はく陰と陽と。地の道を立つ。曰はく柔と剛と。人の道を立つ。曰はく仁と義と。三才を兼ねて之を兩にす。故に易は六畫にして卦を成す。陰を分ち陽を分ち、迭に柔剛を用ふ。故に易は六位にして章を成す。

繫辭說卦何れも六爻は天地人三才に倣ひ、乃至は三才の道を表象するものとなす。三才とか天道地道人道とかの如き思想を懷ける古人が易の六爻を見る時は必ず然か聯想せざるを得ざりしなるべし。卽ち古人が起こせる聯想は此の如きものなりき。

第五節　陰位陽位

六爻は下より數へて一より六に至る。一は奇、二は偶、三は奇、四は偶、五は奇、六は偶なり。奇を陽位とし、偶を陰位とす。

䷾

陰は陰の位に居り、陽は陽の位に居るを以て正しとなす。然らずして陰を以て陽位に居り陽を以て陰位に居るは皆不祥あり。但し此の例外あり。陰を以て陽位に居り、陽を以て陰位に居るとある是れなり。是れ卦の性質如何に由る。一般には立言す可らざるなり。各爻其位を得る時は水火既濟となる。䷾ 是れなり。各爻其位を失ふ時は火水未濟となる。䷿ 是れなり。既濟は各爻其位に安んず。未濟は安んぜず、故に活動す。六十四卦中其位の正きを得る者は既濟の一卦あるのみ。乃ち易の諸卦は皆活動しつゝある者として見るべきなり(六爻に付ては剛柔と云ふべく、陰陽といふ可らずとの說あり。(周易新號)必ずしも從はず。)

第六節　各爻の社會的位置

一卦六爻、初より上に至る。之を社會的階級に應用すれば初爻は未だ仕へざるの人、二爻は士、三爻は大夫、四爻は三公九卿、諸侯、五爻は天子、上爻は無位の地、在野の賢人又既に老いて祿位を去りたる者等是れなり。蠱䷑の上九に不事王侯、高尙其事とある是れなり。(六經圖考には初爻を以て士となせど取らず)其の中に就き、五は天子の位として最も重く、二は下體(即ち下卦)の中位として又重要なる者なり。六爻の位に就き、繫辭傳言へるあり。曰はく。

易の書たる、始を原ねて終を要め、以て質と爲すなり。六爻相雜つて唯其の時の物なり。其の初は知り難し。其の上は知り易し。本末なればなり。初の辭は之を擬す。卒に之が終を成す。若し夫れ物を雜へ德を撰み、是と非とを辨ずるは則ち其の中爻に非ざれば備らず。噫、亦存亡吉凶を要することは則ち居て知る可し。知者、其の彖辭を觀るときは則ち思半に過ぎん。二と四と功を同じうして位を異にす。其の善同じからず。二は譽多く、四は懼多し。近ければなり。柔の道たる、遠かるに利からざる者は其の要、咎无く、其の用柔中なればあり。三と五と功を同じうして位を異にす。三は凶多く五は功多し。貴賤の等なり。其の柔危く、其の剛勝るか。

二と四とは共に陰位なり。故に悔を同ふす。二は陰位に在りて且つ中なり。卽ち

柔にして中なり。譽れ多き所以。四は君に近きを以て其地位危し。柔中の人は君に遠かるを以て利とせず。柔中なれば咎无きを得るを以てあり。三、五、共に陽位、故に功を同ふす。而も位を異にす。三は社會にありて漸く人の注目する所なり。然れども尚ほ賤し、故に凶多く、五は天子の位、功皆之に歸す。初と上とは始と末と也。初は未だ仕へざるの位置、故に其の意味知り難く、六は已に効をなし終れる者、故に其終を言ふべきなり。

第七節　一爻一卦の象あること

八卦には各々其象あり。而かも八卦は各其の主とする一爻を有す。震坎艮の巽離兌の ☳☵ 是れなり。此のことを念頭に置き、以て六畫卦を見るときは各一畫に八卦の象ありとして之を思考するを得べし。易の爻辭の之にて意味を取りし者甚だ多し。乾卦に震あり。然れども各爻に龍を言ふ。此れ一陽爻を以て震と見做したるなり。又田は離の象なり。師卦に離なし、而して六五上六共に田有禽と云ふ。是れ上卦坤中の一偶畫を以て離と見たるなり。坎を隱伏とし、又月とす、夬卦に坎あし、其九二に暮夜を言ふ、是れ乾中の一奇畫を以て坎月の象とあすなり、坤六三に曰はく或從王事无成有終と。而して訟卦に坤あくして六三亦曰ふ、或從王事无成と。是れ坎の一偶畫を以て坤の象と見るなり。凡そ此類少からず。

第八節　承、乘、應、比、據、互體、約象

六爻の關係に就き、承、乘、應、比、據の五者を區別するを得。相隣せる數爻に就き、下は陰、上は陽なる時、下なる陰（其數一定せず）が上なる陽（其數一定せず）を承くると見たるとき之を承と謂ふ。承は消極的作用なり。陰が陽の影響を蒙りつゝあるあり。然れども周易の措辭は凡ての場合に皆此の關係を應用せるにあらず。易の活例として見るべきものなり。

坎　六四が九五を承く

明夷　六二が九三を承く

損　六四、六五が上九を承く。

姤　初六が九二、九三、九四、九五、上九を受く。

乘は乘るなり。超越の意なり。卽ち陰爻が陽爻の上に在りて其の序を失ふとして見たるとき之を乘と謂ふ。

坎 ䷜ 上六が九五に乘る。

爻と爻と相親比するとして見たるとき之を稱して比と謂ふ。比は親比、比周などと讀む字なり。一と二、二と三、三と四、四と五、五と六、二爻づゝ相親比す。一方が剛にして一万が柔なれば善く比す。殊に六四の九五に比するを以て吉となす。例へば ䷇ 比の如し。彖傳に云はく。

外、賢を比す。以て上に從ふなり。

と。又 ䷓ 觀の象傳に云はく。

國の光を觀るとは尙んで賓とするなり。

と。然れども剛柔ならざるも接近すれば則ち相比すと見ることあり。故に泰の初九に云はく。

茅を拔いて茹す。其の彙を以てす。征て吉。

と。此れ其の同類を云ふなり。

應は一と四、二と五、三と六とが相應じ一致協同をなしつゝあるものとして見たるを謂ふ。剛と柔とを以て應ずとおす。剛と剛、柔と柔となれは應せず。但し多少の例外あり。例へば乾の九二と九五と相應じ、坤の六二と六五と相應ずるが如し。應の最も重要なる者は二と五となり。一と四とは次ぎ、三と六とは最も輕し。位置の高下によるなり。乾鑿度に云はく。

三畫已下を地と爲し、四畫已上を天と爲す。地の下に動くものは天の下に應じ、地の中に動くものは天の上に應じ地の上に動くものは天の上に應ず。卽ち初爻と四爻と對し、二爻と五爻と對し、三爻と上爻と對するを應と云ふ。陽が陰の上に據り居るとして見たる時に據と言ふ。陰を「蹈み臺」となし居るとして見たるなり。

䷯ 困、鄭註に云はく。二據陰と。

井、荀爽註に云はく。三不得據陰と。

此れ等の關係は畢竟卦と爻との間に存在する者にして易の卦爻の辭を作りし人の腦中に浮びし者なり。卽ち今の周易の卦爻の辭は此れ等の關係を基礎と

して作られたるものなり。此れ等の關係は又以て支那上代に於る人情の一般を窺ふに足る。批評的に觀察すれば此れ等のことは易の作者が然か感せしと云ふ迄のことにして何人が見ても然か感せざるを得ずといふが如きものにはあらず。其以上に深き意味あるにはあらざるなり。

又第二爻第三爻第四爻を併せて三爻となし之を一卦と觀ることを得べし。例へば䷀に就て䷫丈を特別に取り別けて見得べき如し。之れと同く三四五を併せて三爻となし、一卦と見ることも出來得べし。乃ち此卦に於て䷾を取り別け得べき如し。漢の京房は前者(二三四)を名けて互體と言ひ、後者を約象と言へり。左傳に觀䷓否に之くに遇ふ。曰はく、風爲天於土上山也とあり。而して杜預は之を注して自二至四有艮象と曰へり。即ち古代より此意味を取りし者あるを知るべし。

第九節　卦形

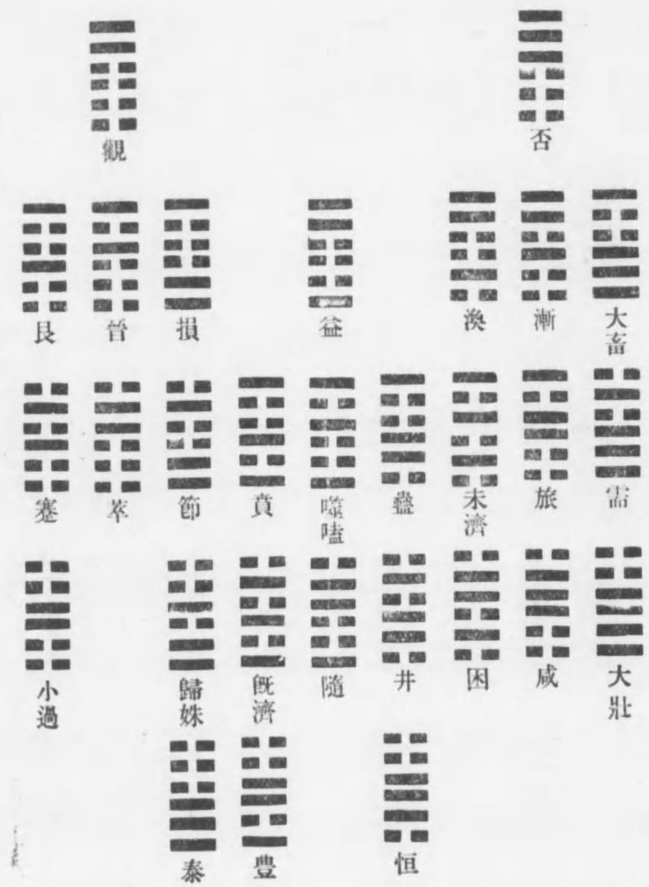
一卦の形狀は又大に注意すべき者あり、凡て物は見樣に由りては奇妙に感せらるゝことあり。枯れたる木根を取り來りて虎の蹲く狀ありとも見るべく、蔓の枯れたるを持ち來りて蛇の蜒蜿として匐へる態なりとも見得べし。易の作者も亦卦形を種々の物象に見立てゝ種々の名を附せり。此くて䷱は頤と見立てられ䷱は鼎と見立てられたり。又䷲は竹の節と見立てられたり。一寸考ふる時は甚だ愚なるとの樣なれども免に角此種の意味を取りしは事實なり。蓋し易の作者は種々に卦形を觀察し、種々なる聯想を起しつゝありしものなり。

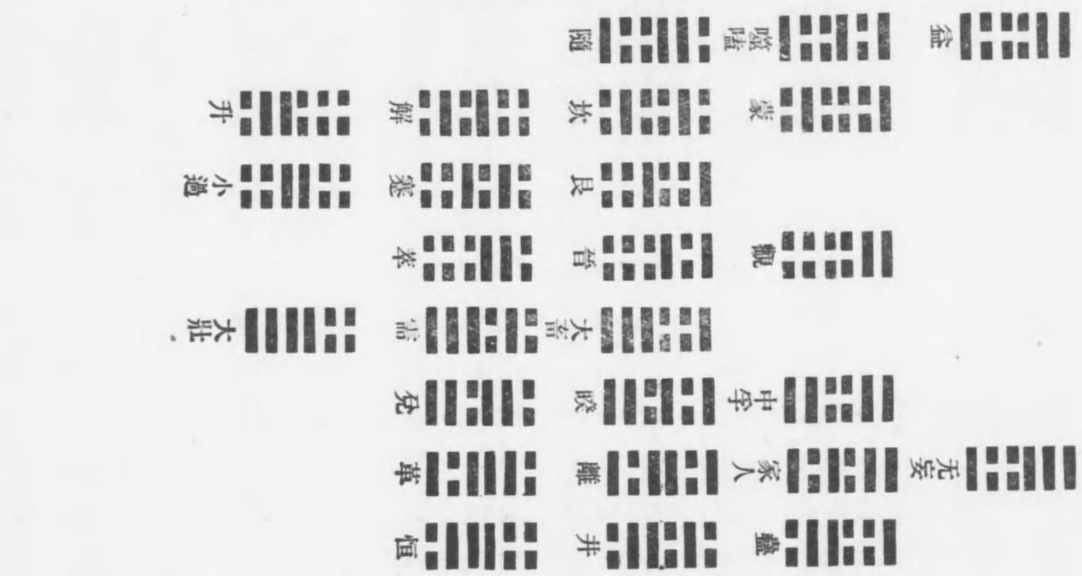
第十節　卦爻は變ずる意味を含む

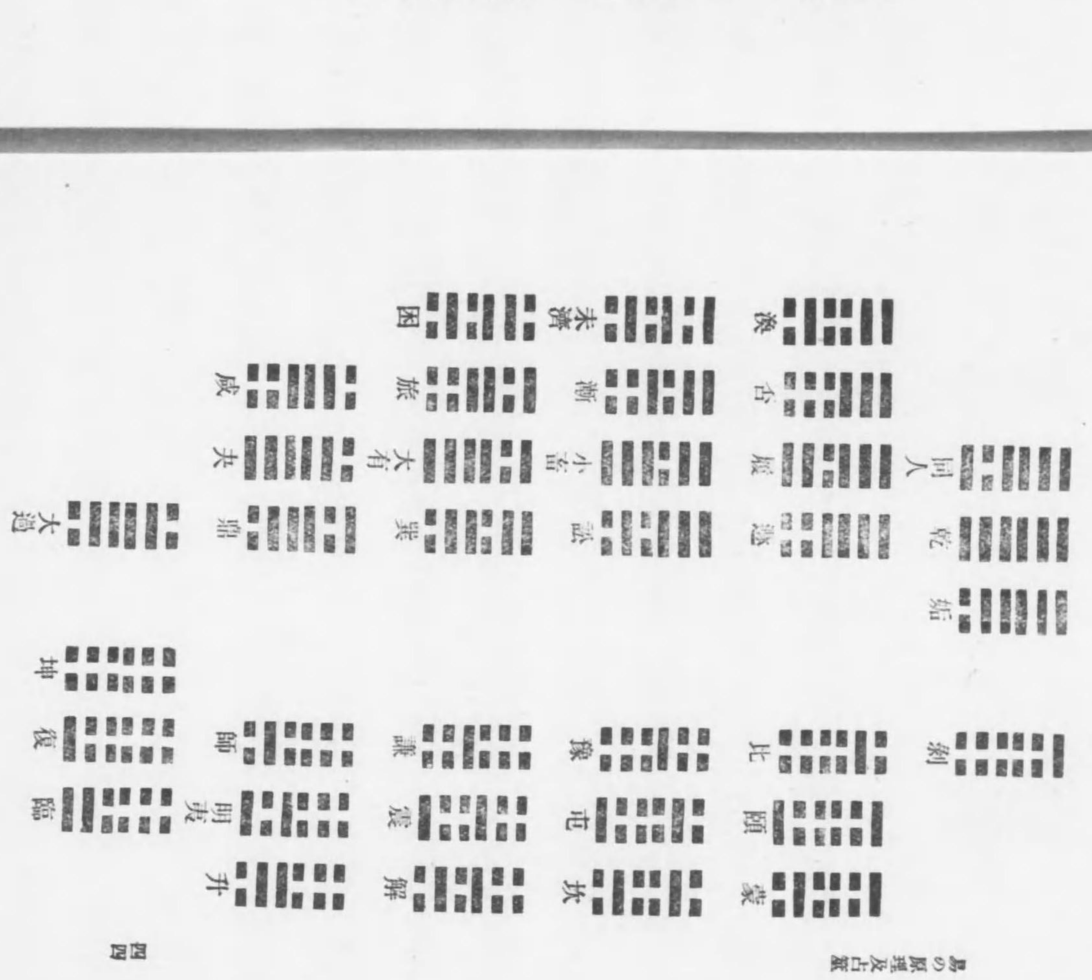
易は變化を示めす者なり。宇宙は絶へざる變化の有樣なり。其變化に一定の法則あり。之を陰陽にて示めさんとするは實に易の精神なり。去れば易は變化を以て生命となす者也。易の一書を見るに何れの點に於ても變化を尙ばざるとなし。䷀乾の六爻は何れも老陽なれば變じて陰とおらんとす。其の第一爻變すれば䷫垢第二爻變すれば䷠同人、第三爻變すれば䷍履、第四爻變すれば䷤小畜、第五爻變すれば䷍大有、第六爻變すれば䷪夬

とある。若し又二爻變三爻變四爻變にしても五爻變にしても他の種々の卦となるべし。乾の卦六爻其者に變化の意味ありとして見るは、是れ實に易哲學の注意すべき點なり。此に於てか一卦變じて六十四卦となるの說あり。今朱子の易學啓蒙中より其一二例を引用する事左の如し。

乾の六爻のみならず、他の卦の爻も亦皆老陽と見るなり。此れ易が變化を尙ぶより來りし所にして繫辭傳には乾の策二百一十有六、坤の策百四十有四とあり。即ち老陽老陰の數三十六、及び二十四（占策の章を見るべし）に六爻を乘せしものなり。




金
无妄
蠱
井
恒
噬嗑
蒙
觀
中孚
家人
離
革
既濟
隨
坎
艮
晉
大畜
睽
免
豐
解
蹇
萃
需
升
小過
大壯


同人
乾
姤
剝
渙
否
履
遯
比
頤
蒙
未濟
漸
小畜
訟
豫
屯
坎
困
旅
大有
巽
謙
震
解
咸
夬
鼎
師
明夷
升
大過
坤
復
臨

損　節　歸妹　泰

剝　比　豫　謙　師

屯　震　明夷　臨　坤　復

頤

易の經文に在りては陽を九と曰ひ、陰を六と曰ふ。卽ち初九、九二、九三、九四、九五、上九の如く、又初六、六二、六三、六四、六五、上六の如し。九や六は占筮にて出る數にして變ずる者、易は變を尙ぶが故に九、六を以て陰陽の代名詞とす。去れば何れの爻も皆變するものとして觀察すべし。例へば乾一卦に就て之を見るに初九變ずれば姤䷫となる。其下卦を巽となす。巽を入となし、隱となす。故に潛龍と曰ふと。各爻は變動するものと見て其辭を下せしとも解釋し得べし。河田孝成の周易新疏は其標本的なるものなり。三百八十四爻に就き此解釋法を應用せり。繫辭に「爻は天下の動に效ふ者なり」とあり。卽ち三百八十四爻其者に變動の意味ありとなし、且つ周公の繫けし爻辭其者も亦此意味に於て作られし者となすなり。

第十一節　爻と卦との關係

爻には位の當否あり。卦には象あり。德あり。社會的位置あり。承、乘、應、比、據の關係あり。而して卦は時を示めし、爻は位を示めす。時と稱するは一般に狀態(Status)を意味す。時勢の意味のみにはあらざるなり。今周易折中の言を假りて之を言はんか、左の如し。

消息盈虛、之を時と謂ふ。否泰剝復の類是れなり。又事を指して言ふ者あり。訟、師噬嗑、頤の類是れなり。又理を以て言ふ者あり。履、謙、咸、恒の類是れなり。又象を以て言ふ者あり。井、鼎の類是れなり。四者皆之を時と謂ふ。

王弼曰はく。

夫れ卦は時なり。爻は時の變に適ふ者なり。夫れ時に否泰あり。故に用に行藏あり。卦に小大あり。故に辭に險易あり。一時の制、反して用ふべし。一時の吉、反して凶なるべし。故に卦は反を以て對して爻亦皆變あり。

爻には吉凶あり。之れに應じて以て處世の法を立つべきことを言へるなり。此、

の時に當りて此の位に居る如何に行動すべきか、是れ六十四卦三百八十四爻の教ふる所なり。

第十二節　三百八十四爻の一般性質

三百八十四爻は六十四卦と關係するにあらざれば其の意味を窺ふこと能はず。此の時に當て、此の位に居る。如何に行動すべきか。是れ三百八十四爻の意味ある所なり。而して易の經文は易の作者の見たる此意味を發揮せる文章なり。故に三百八十四爻の意味は時と位とより打算せらるゝものたらざるべからず。而かも時その者に對する判斷は、周易の作者と後世人と必ずしも一致すること能はず。又同く後世人の間に於ても種々の議論あるべきなり。（八卦の性質參考）然るに周易の作者は兎に角作者自身の見たる所を以て是等に對して一種の意味を附せり。故に易を解するに當り、易經を許さゞるを得ざる以上は周易の見たる所を以て根本となさざるべからず。例へば天地否の一卦に就いても各人一樣に妥當なりとは思はざるべく、或は却つて之を以て天地其の處を得たりとなすものもあるべし。或は遯又は姤の名を與ふる者あるやも知るべからず。然るに之を以て天地否となすは易の作者の獨斷と見ざるべからず。假令獨斷なるにせよ、易の作者が之を否と定めたる以上は易經を通じて見たる易の思想系統に在りては天を上とし地を下とするは否の意味あるものとなさゞるべからず。

然るに他の一面より見れば六爻各々其の位置あり。之に從つて其の性質を異にす。初は凡て其の時（卦）の始めを意味し、又は未だ深くその時勢に關はらざることを意味す。一般に物、又は人の微なるを意味する者なり。二は既に天下の事に與かり居るものにして下卦の中なるが故に其の性質に於て正しきものとなす。三は下卦の上にして其の位高きが故に高ぶるの嫌ひありとす。陽之れに居る時は過剛となし、陰此れに居る時は万事度に過ぐるものとなす。故に多くは之を戒む。又事柄に於ては凡て中頃の意從て變せんとする意ありす。例へば泰（地天）は太平の意味ある卦なれども、太平は永續する者にあらざることを示めさんとして下より第三爻に於て、九三平の陂ならざるなく、往の復せざるなし、艱貞にして咎なし。其孚を恤ふること勿れ、食に干て福ありと謂へり。

四は陰位にして君に近き處、而も上卦の下にあり、故に陽此れに居る時は過剛の弊あることなしとし、又陰是れに居る時は柔に過ぐるものとなす。此くして乾の九四に於ては或躍在淵、无咎といひ、又坤の六四に於ては乃ち括囊、无咎无譽と謂へり。五は卽ち君主の位にして二と相ひ對して重要なる位置なり。其の吉凶は種々の條件によりて定まる。陽此れに居りて善なることもあり、惡も亦此れに準ず。六は時の終り又は極の意味あり、又賢人が時流の外に超然たる意味もあり。剝の上九に碩果不食、君子得輿、小人剝廬とある如き是れなり。六爻の位置より見たる性質は、大概斯の如し。易の例を取ることと一ならざるが故に、例外とすべきものも此れなきにあらず。然れども要するに以上を以て標準となすべし。

六爻の此の性質は尤も抽象的なるが、此の抽象的性質を卦の時に當て、篏め、而して後彼の三百八十四爻の具體的性質を生ずるものなり。易經の文字は皆此の綜合より出でたるものとなすべきあり。三百八十四爻の辭は卦の時と六爻の抽象的性質との又交點なり。此の時に當りて此の位に居る。如何に行動すべきか。是れ卽ち易の敎ふる處なり。故に六十四卦三百八十四爻の辭は六十四條三百八十四條の訓誡と見るべし。此れ等の訓誡は古代聖人の社會的經驗より得來れるものなり。

第三章　易の經典

第一節　易經の體裁及び作者

六十四卦三百八十四爻の意味を文字に書き著はしたるものが卽ち易經なり。其の外に孔子の作と稱せらるゝ十翼あり。此れ等をも併せて普通に易經といふ。去れば易經は上下經と十翼とより成る。上下經は彖と象との二種より成る。彖とは卦全體の意味を判斷したる語にして象とは各卦に就て其各一爻の意味を判斷したる語なり。左の一卦に就て之を見よ。

䷊　泰小往大來吉亨　（彖）（卦辭）

初九、拔茅茹以其彙征吉。　（象）（爻辭）

九二、包荒用馮河不遐遺朋亡得尙于中行。　（象）（同上）

九三、无平不陂、无往不復、艱貞无咎、勿恤其孚、于食有福。（象）（同上）
六四、翩翩不富、以其隣、不戒以孚。（象）（同上）
六五、帝乙歸妹、以祉元吉。（象）（同上）
上六、城復于隍、勿用師、自邑告命、貞吝。（象）（同上）

而して彖は文王の作、象は周公の作と稱す。十翼は左の如し。

上彖　上經の彖を解釋せる者
下彖　下經の彖を解釋せる者
上象　上經の象を解釋せる者
下象　下經の象を解釋せる者（但し象は獨り經の象のみならず各卦全體の意味をも解釋せり。）
上繫辭　一般に易の理を說明せる者
下繫辭　同上
文言　乾坤二卦の字句に就て其義を闡明せる者
說卦　一般に八卦の理を說明せる者
序卦　六十四卦の順序を述べたる者
雜卦　六十四卦の二卦づゝ對待するを述べたる者

而して十翼は孔子の作と稱せらる。（孔子世家）而して伏羲氏は卦を畫すと稱せらるゝと前述の如し。故に伏羲、文王、周公、孔子を指して易の四聖人となす。易經の作者に就て彼れ此れ議論するは恰も沙上に樓閣を築かんとするが如し。何んとなれば確實かる材料としては一も之れなく皆想像に外ならざればなり。但だ司馬遷以來此く傳ふるに外ならざるのみ。殊に伏羲氏は一人の名にはあらで部族の名なるべく（別項參考）十翼も亦一人の作にあらざるべし。（第九章參考）彖象を作りし者は果して文王周公なるか否かは不明なれども其孔子以前なることは疑ふ可らず。河田孝成の說參看の價値あり。（周易新號別錄上）

上經下經に別れしは何時の頃なるか明かならず。十翼に序卦あり、又繫辭に二篇の策萬有一千五百二十とある以上は其先秦時代よりなるを知るべし。呂東萊は文王周易を定めし時よりとなす。

第二節　六十四卦の順序

六十四卦は上經下經に分る。上經は乾坤を首にし坎離を尾にす。其順序は如何なる意味あるか。

第一、序卦傳に云はく

天地あつて然る後萬物生ず。天地の間に盈る者は唯萬物。故に之を受るに屯を以てす。屯とは盈るなり。屯とは物の始て生ずる也。物生ずれば必ず蒙る。故に之を受くるに蒙を以てす。蒙とは蒙なり。物の穉きなり。物の穉き養はざるべからざるなり。故に之を受くるに需を以てす。需とは飲食の道あり。飲食は必ず訟あり。故に之を受くるに訟を以てす。訟は必ず衆起るあり。故に之を受くるに師を以てす。師とは衆なり。衆は必ず比する所あり。故に之を受くるに比を以てす。比とは比なり。比すれば必ず畜る所あり。故に之を受くるに小畜を以てす。物畜へて然る後禮あり。故に之を受くるに履を以てす。履て而して泰なり。然る後安し。故に之を受くるに泰を以てす。泰とは通なり。物以て終に通ずべからず。故に之を受くるに否を以てす。物以て終に否すべからず。故に之を受くるに同人を以てす。人と同きものは物必ず歸す。故に之を受くるに大有を以てす。有大なるものは以て盈つ可からず。故に之を受くるに謙を以てす。有大にして而して能く謙す。必ず豫す。故に之れを受くるに豫を以てす。豫すれは必ず隨うとあり。故に之を受くるに隨を以てす。喜を以て人に隨うものは必ず事あり。故に之を受くるに蠱を以てす。蠱とは事なり。事ありて後大なる可し。故に之を受くるに臨を以てす。臨とは大なり。物大にして然る後觀る可し。故に之を受くるに觀を以てす。觀るべくして後合ふ所あり。故に之を受くるに噬嗑を以てす。嗑とは合なり。物以て苟も合ふ可からざるのみ。故に之を受くるに賁を以てす。賁とは飾あり。飾を致して然る後に亨る時は則ち盡く。故に之を受くるに剝を以てす。剝とは剝なり。物以て終に盡く可らず。剝上に窮れば下に反る。故に之を受くるに復を以てす。復する時は則ち妄あらず。故に之を受くるに无妄を以てす。无妄ありて然る後畜ふべし。故に之を受くるに大畜を以てす。物畜ひて然る後養ふ可し。故に之を受くるに頤を以てす。頤とは養あり。養はざる時は則ち動く可からず。故に之を受くるに大過を以てす。物以て終に過ぐべからず。故に之を受るに坎を以てす。坎とは陷な

り。陷れば必ず麗く所あり。故に之を受るに離を以てす。離とは麗なり。

天地ありて然る後萬物あり。萬物ありて然る後男女あり。男女ありて然る後夫婦あり。夫婦ありて然る後父子あり。父子ありて然る後君臣あり。君臣ありて然る後上下あり。上下ありて然る後禮義錯く所あり。夫婦の道は以て久しからざるべからざるなり。故に之を受くるに恒を以てす。恒とは久きなり。物以て久しく其所に居るべからず。故に之れを受くるに遯を以てす。遯とは退なり。物以て終に遯るべからず。故に之を受くるに大壯を以てす。物以て壯に終ふべからず。故に之を受くるに晉を以てす。晉とは進なり。進めば必ず傷ふ所あり。故に之を受くるに明夷を以てす。夷とは傷なり。外に傷る者は必ず其の家に反る。故に之を受くるに家人を以てす。家道窮れば必ず乖く。故に之を受くるに睽を以てす。睽とは乖なり。乖けば必ず難あり。故に之を受くるに蹇を以てす。蹇とは難なり。物以て難に終ふ可からず。故に之を受くるに解を以てす。解とは緩なり。緩めば必ず失ふ所あり。故に之を受くるに損を以てす。損して已まざれば必ず益す。故に之を受くるに益を以てす。益して已まざれば必ず決す。故に之を受くるに夬を以てす。夬とは決なり。決しては必ず遇ふ所あり。故に之を受くるに姤を以てす。姤とは遇なり。物相遇ふて後聚る。故に之を受くるに萃を以てす。萃とは聚なり。聚りて上る者を升と謂ふ。故に之を受くるに升を以てす。升つて已まざれば必ず困しむ。故に之を受くるに困を以てす。上に困しむ者は必ず下に反る。故に之を受くるに井を以てす。井道は革めざる可らず。故に之を受くるに革を以てす。物を革る者は鼎に若くは莫し。故に之を受くるに鼎を以てす。器を主る者は長子に若くは莫し。故に之を受くるに震を以てす。震とは動なり。物以て動に終ふ可からず之を止む。故に之を受くるに艮を以てす。艮とは止なり。物以て止に終ふ可からず。故に之を受くるに漸を以てす。漸とは進なり。進は必ず歸する所あり。故に之を受くるに歸妹を以てす。其の歸する所を得る者は必ず大なり。故に之を受くるに豐を以てす。豐とは大なり。大を窮る者は必ず其の居を失ふ。故に之を受くるに旅を以てす。旅して容る所无し。故に之を受くるに巽を以てす。巽とは入なり。入つて後之を說ぶ。故に之を受くるに兌を以てす。兌とは說なり。說で後之を

散す。故に之を受くるに渙を以てす渙とは離なり。物以て離に終ふ可からず。故に之を受くるに節を以てす。節して之を信ず。故に之を受くるに中孚を以てす。其信ある者は必ず之を行ふ。故に之を受くるに小過を以てす。物に過ることある者は必ず濟ふ。故に之を受くるに既濟を以てす、物窮むべからざるなり。故に之を受くるに未濟を以て終ふ。

乾坤を首にしたるは天地若くは父母を先きにしたる者と見るべきなり。既濟未濟を後にしたるは易は變を尙ぶが故なり。卽ち未濟は未だ濟まずと云ひて更に何等か變化の起ることを豫想す、此二條の意味は今日より見ても面白き處あり。程伊川曰はく

乾坤は天地の道、陰陽の本なり、故に上篇の首めとなす、坎離は陰陽の成質なり故に上篇の終りと爲す、咸恒は夫婦の道、生育の本なり。故に下篇の首と爲す、未濟は坎離の合するなり、既濟は坎離の交なり。合して交る時は則ち物を生ず。陰陽の成功なり。故に下篇の終と爲す。（程傳）

正義に曰はく。

乾坤は陰陽の本始、萬物の祖宗なり、故に上篇の始と爲すなり。離を日と爲し坎を月と爲すは日月の道、陰陽の經、萬物を始終する所以なり。故に坎離を以て上篇の終と爲すなり。咸恒は男女の始、夫婦の道なり。人倫の興る必ず夫婦に繫る。祖宗を奉承し、天地の主と爲る所以なり。故に下篇の始と爲すなり。既濟未濟を最終と爲す者は戒愼を明にして王道を全ふする所以なり。乃ち文王の定むる所なり。

李舜臣曰はく。

頤大過の後に於て坎離を以てす。蓋し剛柔の中を以て大過の弊を救ふなり。中孚小過の後に於て既濟未濟を以てす、亦剛柔の交にして中なる者を以て小過の弊を救ふなり。

序卦は尤も牽强の嫌ひあり、勿論六十四卦の順序は前の諸家の言に由りて見得べきか如く多少の意味あるとは疑ふ可らず。換言すれば當時に於て既に多少の意味を以て此く排列せられたることは殆んど疑ふ可らず。殊に所謂卦綜に於て然りとなす。（後節參看）然れども今日より見れば隨分牽强附會の處少からず。故に六

十四卦の順序には必ず一定不變の大眞理あるものとのみ思ふべからず。此くするは却て無益の業なるべし。序卦を其儘に信せんか、是れ亦可なり。信せざらんか、强いて其順序を附會す可らざるなり。而して著者は序卦を以て牽强附會の甚き者となし、孔子の作となさゞるなり。

第三節　卦綜と卦錯

卦綜は明の來知德の與へたる名稱にして六十四卦の順序に就て其の相隣りせる二卦の相互に反對し居るをいふ。毛奇齡(其兄の說と稱す)は之を名けて反易となせり。(仲氏易)例へば䷨隨の綜卦は䷐蠱にして䷋泰なる如し、彖は多く之に就て義を取る。隨の彖に曰はく

隨は剛來りて柔に下る、

と。而して蠱の彖に曰はく

蠱は剛上りて柔下る、

と。卽ち隨と蠱とは相綜せるものとして此く言ひたるなり。六十四卦中此例少からず、

次に明の來知德は卦を表と裏とより見て之を卦錯と名けたり。例へば䷁坤の卦錯は䷀乾、䷜坎の卦錯は䷝離なる如し。此れ各人自身に熟視すれば則ち明かなるべし。

六十四卦中䷁坤䷀乾䷜坎䷝離䷛頤䷽小過䷼中孚の八卦は綜するとなし。此れ亦顚倒するとなきをいふ。一見して則ち明かなるべきあり。綜錯等の文字は六ケ敷けれども其意は卽ち簡單なりとす。

又䷊泰䷋否䷾既濟䷿未濟䷵歸妹䷴漸䷐隨䷑蠱等の卦は錯もすべく、又綜もすべし。故に綜卦は五十六あり。二づゝ相ひ顚倒せるなるが故に其實は二十八卦。(來氏は卦綜卦錯の名を用ふれども後世の儒者必ずしも皆之れに由るにあらず。綜といふを錯といふこともあり。又は單に卦變といふこともあり。)伊藤善韶曰はく。

予は卽ち嘗て妄意す。六十四卦の序、乾より未濟に至るまで皆二卦反對相竝ん

で以て叙つ。彖に卦變を言ふ。皆兩卦反對の中自ら相往來するのみ。隨は蠱より來り、蠱は隨より來る。泰は否より來り。否は泰より來る。剛柔二爻或は內より外に往き、或は外より內に來る。卦毎に此に由つて義を取る。後、明の來知德の易解を閲す。適予が說と符す。之を卦綜と謂ふ。錯綜の義を取るなり。嗣いで曹學佺の可說、鄒德溥の易會を得。亦皆來註を取る。人の見る所或は偶相會す。固に古今彼此を分たざるあり。（周易經翼通解凡例）

來知德が綜錯の名稱を思ひ付きしは卽ち雜卦に由る。今雜卦の全文を引用すること左の如し。

乾は剛、坤は柔、比は樂み、師は憂ふ、臨觀の義或は與へ或は求む、屯は見れて其の居を失はず、蒙は雜つて著る、震は起、艮は止、損益は盛衰の始、大畜は時、无妄は災、萃は聚つて升は來らず、謙は輕くして豫は怠る。噬嗑は食、賁は无色、兌は見れて巽は伏す、隨は无故、蠱は則ち飾る。剝は爛、復は反、晉は晝、明夷は誅、井は通じて困は相遇ふ、咸は速、恒は久、渙は離、節は止、解は緩、蹇は難、睽は外、家人は內、否泰は其類に反る、大壯は則ち止り、遯は則ち退く、大有は衆、同人は親、革は故を去る。鼎は新を取る、小過は過る、中孚は信、豐は多故、親寡は旅、離は上つて坎は下る、小畜は寡、履は處らざるなり、需は進まざるなり、訟は親しまざるなり、大過は顚、姤は遇、柔剛に遇ふなり。漸は女歸つて男を待つて行くなり、願は正を養ふあり、旣濟は定るなり、歸妹は女の終りなり、末濟は男の窮るなり、夬は決、剛柔を決するなり、君子の道長じて小人の道憂ふるなり。（雜卦の文は解し難き所あれども必ずしも一々拘泥せず。但だ二卦の對立を知れば足れり。）

然れども雜卦に在りては大過以下相對せず、或は此順序を改めて前例の如くせんとするものもあれども（例へば蔡節齋の如し）如何にや本義に從て疑を存す。兎に角雜卦傳に由りて思ひつき得べきが如く六十四卦は二卦づゝ相ひ顚倒し居る樣に排列せられたるなり。

然らば某なる一對と他の一對と如何なる關係あるや。吾人を以て之を見るに二對づゝ顚倒する樣に列せしは純然機械的の進動にして深き意味あるにはあらず。從て一對と一對との連絡も必ずしも意味ある者と謂ふべからざるなり。唯だ六十四卦の排列に付ては諸家の謂ひしが如く、乾坤を首にして旣濟未濟を尾にすると、坎離を上篇の終りとし、咸恆を下篇の始めとなすと、又二卦づゝの顚倒

し居るとゝ、等は意識的に然かせられしものと謂ふべきのみ。今上下二篇の卦爻に關する統計表を示めさんに左の如し。

	乾	兌	離	震	巽	坎	艮	坤		
上篇	一三	四	六	七	四	八	七	一二	陽爻八六	陰爻九四
下篇	四	一二	一〇	九	一二	八	九	四	陽爻一〇六	陰爻九八

卽ち上篇には乾、坤多く、兌巽少し。下篇は之に反し、兌巽多く、乾坤少し、卽ち乾坤二卦を包含するものは上篇に多しとなす。

第四節　三易の文

一、意味　古代三易の名あり。『周禮』筮人三易を掌る。以つて九筮の名を辯ず、一に曰はく連山、二に曰はく歸藏、三に曰はく周易、九筮の名、一に曰はく筮更、二に曰はく筮咸、三に曰はく筮式、四に曰はく筮目、五に曰はく筮易、六に曰はく筮比、七に曰はく筮祠、八に曰はく筮參、九に曰はく筮環。以て吉凶を辯ず」と、三易の何なるやは後世之を知るを得ず。杜子春曰はく「連山は伏犧、歸藏は黃帝」と。鄭玄の『易贊』及び『易論』に曰はく、「夏に連山と曰ひ、殷に歸藏と曰ひ、周に周易と曰ふ」と。鄭玄又釋して云ふ「連山は山の雲を出すと連々として絶えざるに象る。歸藏は萬物其中に歸藏せざるなし。周易は易道、周普にして備はらざる所なきを言ふ」と。而して普通の傳說に據れば連山は艮を首にするが故に名あり。歸藏は坤を首にするが故に名あり。而して連山は夏の易、歸藏は殷の易なり。三易の說終に定め難し。『周易折中』に曰はく「鄭康成(鄭玄を指す)此釋ありと雖も、更に據る所の文なし。先儒此れに因りて遂に文質の義となす。皆繁にして用なし。今取らざる所。『世譜』等の群書を按ずるに神農一に連山氏と曰ひ、又列山氏と曰ふ。黃帝一に歸藏氏と曰ふ。旣に連山歸藏並びに代號なれば則ち周易に周を稱するは岐陽の地名を取れるあり。『毛詩』に周原膴々と云ふ者是れなり。又文王易を作るの時正さに羑里に在り、周德未だ興らず。猶是れ殷の世なり。故に周と題して殷に別つ、文王の演ずる所なるを以ての故に之を周易と謂ふ。猶周書周禮の如し。周と題して以て餘代に別つなりと。若し前說の如く、六十四卦艮を首にするか坤を首にするかに從て連山歸藏等の名ある者とすれば則ち周易は乾を首にするが故に又特別の名あるべき筈也。『折中』の

說是に近きが如し。

二、內容　連山歸藏が共に六十四卦なるは周禮に於て明か也。其餘は知るべからず。朱元昇『三易備考』に連山を說いて云ふ。連山に二篇あり、復より乾に至る迄を陽儀とし、姤より坤に至る迄を陰儀とす。其策万有一千五百二十と。又云はく長、分、消、翕は連山易の至精至變至神の理寓す。乾と坤と對す。乾の長は卽ち坤の消、乾の分は卽ち坤の翕、坤の長は卽ち乾の消、坤の分は卽ち乾の翕、兌と艮と對し離と坎と對し、震と巽と對す、餘五十六卦、兩々相對す。長、分、消、翕、悉く八卦に準ず、歸藏を說いて云ふ。歸藏易は六甲を以て六十四卦に配す。藏する所は五行の氣、用ふる所は五行の象なり。云云（玉函山房輯迭書）連山の遺爻、姤の初六「龍化于虵、或潛于窪、茲蘖之牙」が如き、中孚の初八「一人知女、尙可以去」が如き、歸藏の遺爻「瞿有瞿、有觚宵梁爲酒、尊于兩壺、兩羭飲之、三日、然後蘇、士有澤、我取其魚、鼎有黃耳、利取鯉、有鳧鴛鴦、有雁鸛爽、君子戒車、小人戒徒」が如き皆古雅誦すべきなり（同上）。その眞僞知る可からざれども今暫く記して以て參考に供す。顧炎武の『日知錄』に云はく）左傳僖十五韓に戰ふ。卜徒父之を筮して曰はく吉なり。其卦蠱に合ふ。曰はく千乘三去す、三去の

餘。其雄狐を獲と。成十六年鄢陵に戰ふ。曰はく南國蹙す。其の元王を射て厥目に中ると。此れ皆周易を用ひず、而して別に引據の辭あり。卽ち所謂三易の法あり」と。又一說となす。此れ等の逸文は蓋し連山歸藏の舊ならんか。

第五節　上下經の用字法

上下經に用ひられたる文字は多くは各卦の上下二卦又は互體、卦體、卦德、約象等より聯想せらるゝ所の者なり。今一例を擧げて以て之を示めさん。

䷂ 屯。元亨。利貞。勿用有攸往。利建侯。

來知德曰はく。險難前に在り。（卽ち上卦の坎）中爻は艮止（二四五にて、☶の象）往く攸あるに用ふる勿きの象。震は一君二民（一陽二陰の意）侯を建るの象。

初九。盤桓。利居貞。利建侯。

來知德曰はく。中爻艮は石の象なり。桓は大柱なり。震は陽にして木、桓の象なり。

中略　震を大塗となす。柱石、大塗の上に在り。震木を動かさんと欲し、而して艮止まつて動かず。柱石動かんと欲して動かざるの象あり。

六二。屯如。邅如。乘馬班如。匪寇。婚媾。女子貞。不字。十年乃字。

來知德曰はく。震は馬に於ては作足となす。班如の象なり。應爻を坎とおす。坎を盜となす。寇の象なり。（中略）變兌を少女とおす。（下より二爻、卽☱は兌と見るべし。）女子の象なり。（中略）中爻艮止。不の字の象なり。中爻坤土（二三四）土の數は十に成る。十の象なり。

六三。卽鹿。无虞。惟入于林中。君子幾。不如舍。往吝。

來知德曰はく。鹿當さに麓に作るべし。舊註亦麓に作る者あり。蓋し此卦の中爻、艮を山となす。山足を麓と曰ふ。三は卽ち六三中爻艮の足に居る。麓の象あり。虞とは虞人あり。三四を人の位となす。虞人の象なり。虞なきとは正應なきの象なり。震は巽に錯す。巽を入となす。入の象あり。上の艮（三四五）を木となし。下の震を竹となす。林中の象なり。（中略）坎は離に錯す。明なり。幾を見るの象なり。舍とは舍てゝ逐はざるなり。亦艮止の象なり。

六四。乘馬班如。求婚媾。往吉。无不利。

來知德曰はく。坎を馬となす。又馬の象あり。（中略）本爻變ずれば中爻（四五六）巽となる。卽ち長女なり。震を長男となす。婚媾の象なり。眞の婚媾にあらざるなり。賢を求めて以て難を濟ふ。此象あるなり。舊說。陰陽を求むるの理なしと。象を知らざる者と謂ふべし。

九五。屯其膏。小貞。吉。大貞。凶。

來知德曰はく。膏とは膏澤なり。坎の體。膏澤霑潤の象あるを以て故に膏と曰ふ。本卦の名は屯。故に膏を屯すといふ。

上六。乘馬班如。泣血漣如。

來知德曰はく。六爻皆馬を言ふは震坎皆馬たればなり。皆班如と言ふは屯難の時に當ればなり。坎を加憂となし。血卦となし。水となす。泣血漣如の象なり。才柔以て屯を濟ふに足らず。初を去ること最も遠し。又應與なし。故に此象あり。

此解釋に據れば屯の一卦六爻の文字の多くは皆上下二卦又は互體。錯卦等に關係ある者なり。果して然りとすれば周易上下經の文字使用法は誠に窮屈なる者と謂ふべし。尤も來知德は此流義の解釋に於て有名なる者也。他の學者も多少此流の解釋をなせども此の如く甚しからざるなり。日本の河田孝成は周易新疏

を著はし、三百八十四爻は老陽か又は老陰なるが故に必ず變ずべき者となし、變じたる者として意味を取り、因りて以て易の文字を說明せり。例へば乾卦の初九變じて柔となる時は下卦は巽となる。巽に入の象ある故に潛龍となす。又九二變ずる時は離となる、離に明の象ある故に見龍となすと。其他此に準ず。岡白駒周易解(寫本)を著はし、又此方法にて解釋せし者あり。

心理的に之を論ずれば八卦は各々種々の現象を聯想するが故に六爻卦を見る時は或は上卦に或は下卦に、或は互體に、或は卦體に、或は錯卦或は綜卦に或は卦德卦情に聯想したる文字を用ひんとするは當然のことに屬す。只易の作者が如何なる點迄此方法にて文字を下せしやは全く知ること能はず。來知德の如きは餘り穿鑿に過ぐるが如し。卦體とは卦の形體あり。朱子が大壯(天雷)の六五に於て卦體は兌に似たり。羊の象ありと云へるが如し。卽ち二爻づゝ併せて一爻とする時は ☱ の形に類するを謂ふ也。卦情とは何んぞや金士麒曰はく。卦中象を立つ、乾馬、坤牛、乾首、坤腹の類に拘はらざる者あり、卦情よりして象を立つるなり。乾は本と馬なれ共龍を言ふは乾道變化、龍は乃ち變化の物なるを以て故に龍を以て之を言ふか如し云云と(易義來源)乾卦の龍に付ては異說あり。或は曰はく初九は震の一陽に當る故に龍となすと(根本羽翼翁)余は金士麒の說を以て穩かなりとす。來氏曰はく。且つ此爻(初九)巽に變じ、震に錯すれば亦龍の象ありと。餘まり迂回するが如し。

第六節　易經は字書なりといふ說

八卦は其始め畫ありて文字なし。乾坤等の文字は後世に至りて附したる者なり。清の孫星衍曰はく。

十言の敎は易緯より出づ。伏犧の八卦は象ありて字なし。たゞ既に消息あれば已に重ねて六十四卦となせしを知るべし。(周易正解序說參看)

文字と卦畫と何れが先きに生せしや到底知り得ざる所なり。古傳說に據れば伏犧氏始めて八卦を作り、以て作字の源を開きたりといひ、或は黃帝の時、右史蒼頡始めて文字を作れりともいひ、或は蒼頡と左史沮誦との合作なりともいふ。(晉の衞恒の說)乾坤鑿度に八卦の形は文字なりとの說あり。乃ち

☰ 古文天字、

古文地字、
古風字、
古山字、
古坎字、
古火字、
古雷字、
古澤字、

各卦に就いて說明せる處あれども今皆之れを略せり。兎に角古代は此の種の文字を用ひしが、後之を以て易の卦となせしといふなり。乾卦の下に於て古文天の字、今乾卦となすとあり。(餘之れに準ず)宋の楊誠齋曰はく。

☰☷ は古の天地の字なり。爲に由りて之を知る。坎離に由りて之を知る。之を假すれば ☵☲ となり。之を立つれば水火となる。雷風山澤の字の如きも亦然り。故に漢書に坤の字は巛に作る。八字立て、而して聲畫勝て窮む可らず、豈特に鳥跡のみならんや。後世草書の天字は玄に作る。卽ち ☲☲ なり (誠齋易傳卷一)

八卦の畫形を以て文字なりとし、之を集めて以て一切の字をなすとなす。易を以て字書となす西人の見解の萌芽とも謂ふべきなりホン、ド、ラクーペリー氏は易を以て字書の類として曰はく。

易經の本文の批評的考究と其の或る部分を原始の形に變ずることによりて余は下の如く結論せざるを得ず。卽ち支那に於ける古代の斷片より成り而して聖典中有名にして最も難しき書(易經)の基礎は甚だ辭書に類す。然るに其の本來の意義は失はれ、後には書文等の說明に於ける變化により全く他の目的に用ひられき。かゝる變化と文字の變換とは明白のことなり。易經本來の表は所謂カルデアのシラベルに類し或は或處の如きは殆んど同一にして易經の作者は此等のシラバルを自らか或は傳說かによりて知り居たることを信ぜざるを得ず。而して此等シラバルの或る者が支那を開明に導けるバック族の首長によりて實際支那に持ち來たされしやも計られず。(Lacouperie, Western Origin of the early Chinese Civilization. P. 16.)

而して其の一例に曰はく。

☲☲ 离離。

䷝ 離。【利貞】【亨】【畜牝牛】【吉】【初九】履錯然。敬之。【无咎】【六二】黄離。【元吉】【九三】日昃之離。不鼓缶而歌。則大耋之嗟。【凶】【九四】突如其來如。焚如。死如。棄如。【六五】出涕沱若。戚嗟若。【吉】【上九】王用出征。有嘉。折首。獲匪其醜。【无咎】

即ち近代は種々の文字を作りしが古代には此れ等の文字なく「离」の一字にて種々の義を有せり。一々之を註せる者が易の經文なり。即ち易經一書は古書を讀むに必要なる字書なりと云ふなり。而して上文（）中に包含せしめし利貞亨吉初九、无咎元吉六二、九三、凶、九四、六五、上九等の文字は易本來の用を離れ、占筮の書となせし以後に附加せし者となすなり。其の論據は易の卦形は「バビロン」の楔文字に類し、此の文字より思ひ付きしとなすに在り。實際に於て此說多少の與味ありとす。即ち

一（易の文章は「謎」の如し。連絡を發見すると極めて難し。試みに左の一句を讀め

初九用夷于飛垂其翼君子于行三日不食有攸往主人有言。

此れ一の謎なり。故に寧ろ「言字」を集錄したるに過ぎざる者と見る、又一法なり。

（二）奇妙に重複なき樣、種々の字句を集めたり。乾以下を讀めば則ち其の然るを知らむ。此の点に於ても亦字書の如く觀せらる。

然れども他の方面より考ふるに（一）若し周易が字書なりしとすれば、其の字書は僅か六十四字を含む者となさゞる可からず。六十四字のみにては決して文を作ること能はず。（二）若し字書なりとせば「易」の名稱は何の意味もなきことになるべし。（三）殊に綴字法ならざる國にては卦形にては文字として不十分なり。若し易の八卦を積むこと「アルハベット」を積むが如くなれば可なり。然らずして之を二重にするのみなれば僅か六十四卦を得るに過ぎざればなり。（四）一字が此くの如く連絡なき義なれば決して文章を理解せしむる能はず。（五）周易の文章が此の如く連絡なきが如く見ゆるは卦德は種々の聯想を伴ひ此れ等の聯想を列擧し來るがためなり。（六）奇妙に重複なきも之れがためなり。（七）「バビロニア」の文字は楔形にして支那の ■ ■ は二種のみ也。故に「バビロニア」の楔形文字より思ひ付きしにせよ。

は全く異なりたる意味（即ち二原理の意味）を持ち來りし者と考ふるを得。況んや「バビロニア」にも陰陽二原理に相當するAnu Anatあるにあらずや。即ち二原理として之を「バビロニア」より借りたりとも解し得べし。且つ「バビロニア」にも亦八卦に類する「呪棍」あるにあらずや。即ち益〻此く解釋するの隱かなるを知る。(八)書經に龜從筮從の句あり。當時已に筮の行はれしを知る。筮は八卦又は六十四卦による。豈當時字書となす者あらむや。(九)上下經を字書とせば八卦を如何せん。文字なるか若し文字とすれば、支那文字は八字を重ねて成立せし者なり。支那文字の發達は決して然るとなし。

要するに易經は六十四卦三百八十四爻の意味を發揮せんとしたるものなり。而かも其文章は八卦の卦象卦德に因みて作られし者なれば自ら字書の如く見ゆるのみ。八卦に因める名稱を用ひしとが易經の根本的性質を知る上には必要なることとなり。互體約象なども皆八卦の象や德より思ひ付くとのみなり。從て易の文章は自由自在に書き列ねられしものにあらず。八卦の象や德に拘泥して以て作られし文章なり。八卦の象や德を十分に理解するにあらざれば易の文章は到底理解し難かるべきなり。

第七節　經典の權威

上下經は六十四卦と三百八十四爻との解釋なり。其の意義複雜にして之れを概括するは極めて難事に屬す。若し尋常の書物ならむには例へば人生觀といひ宇宙論といはんが如く、又或は政治論と言ひ、交際論といはんが如く、各一種の標準思想を標題として之れに應ずる文句を集めて之れより抽象し概括し、次第に積むで以て其系統をかずを得べし。然るに易の書たるや、此く自由に拔萃し來るを許さず。何んとなれば六十四卦は各時を示めし、各卦内の六爻は此の時に於てなすべき行動を示めしたるなる故、單に六爻の語のみを見て其の時即ち卦全體の意味を顧みざるときは全く易の精神を沒却するに至る。故に三百八十四爻の文章は通常の書物に於るが如く、自由に引用せらるべからず。若し引用せんとする時は卦全體の意味をも引用せざるべからず。恰も子を招かんとすれば親も共に來るが如し。六十四卦三百八十四爻の中には政治思想あり、道德思想あり、處世

思想あり、教育思想あり又何れに配當して宜きや分らぬ者もあり。今若し政治思想を發揮せんとする時は天子の位たる九五と六五との語を六十四卦より集め來るなれども、之れと共に六十四卦の語をも引用し來らざるを得ず。其の結果餘り亂雜に流れ、統一する能はざるに至る。各人試みに之れを行へ。必ず其の然るを覺へん。卽ち易の六十四卦に就いて之を見る時は一卦各、一個の全躰をなし、其の中の一爻を切り離すことを許さゞるなり。

易の文章は要するに處世上、道德上の訓戒なり。之れに習熟する時は遂には一切の事に應用して何等の礎碍をも感せざるに至るべきなり。唐の虞世南嘗て曰はく易を知らざるものは以て宰相となす可らずと。易を研究するに由りて一切の人情を知了するを謂ふなり。人情に古今なし。殊に易の作者は種々なる苦心を費やし、樣々なる經驗を積むで以て成功したるものあるべきが故に其の世態人情を說く所に於ては大に傾聽の價値あり。易の經文は茲に至りて大に尊重すべしとなす。徒らに古人の書なりとして之を排斥せんとするは易經を知らざるのみならず、一般に人生經驗の意味を理解せざるものなり。

易の十翼は彖、象、繫辭、(以上三者は各上下二篇に分る。併せて六篇)文言、說卦、序卦雜卦是れなり。史記の世家に云はく。

孔子晩にして易を喜む。序、彖、繫、象、說卦、文言あり。

と。此の文中序の字に就いては二種の讀み方あり。一は序は序卦の序なりとなすものにして、史記の正義是れなり。一は彖象繫辭說卦文言を序すと讀むもの是れなり。今前說に從ふ。雜卦を省けるは如何なる故にや明かならず。正義に據れば上彖は卦下の辭。下彖は爻下の辭とあり。又同く正義に據れば上象は卦下の辭、下象は爻下の辭とあり。普通の說と大に同からず。然れども上下經を分つに就いては乾鑿度に云はく。

孔子曰はく。陽は三、陰は四、位の正しきなり。故に易卦六十四、分て上下となす。而して陰陽に象るなり。夫れ陽道は純にして奇。故に上篇は三十。陽に象る所以なり。陰道は純ならずして偶。故に上篇は二十四。陰に法る所以なり。乾坤は陰陽の

第八節　十翼の文

根本。萬物の祖宗なり。上篇の始めとなすは之を尊ぶなり。離を日となす。坎を日となす。日月の道陰陽の經。萬物を終始する所以なり。故に坎離を以て上篇の終りとなすなり。咸恒なるものは男女の始め、夫婦の道なり。人道の興る。必ず夫婦よりす。祖宗を奉承して天地の主たる所以なり。故に下篇の始めとなすは之を貴ぶなり。既濟未濟を最終となすは戒慎を明かにして王道を存する所以なり

又曰はく。

泰は天地交通して陰陽事を用ふ。万物を長養するなり。否は天地交通せず、陰陽事を用ひず。万物の長ずるを止むるなり。上經は陽に象る。故に乾を以て首となし。坤を次ぎとなす。泰を先にして否を後にす。損なるものは陰事を用ひ澤、山を損して万物を損するなり。下損して以て其の上に事ふ。益なるものは陽事を用ひ、而して雷風、万物を益するなり。上自ら損し以て下を益す。下經は以て陰に法る。故に咸を以て始めとなし、恆を次となす。損を先きにして益を後にす。各其の類に順ふなり。

此れに由りて觀れば上下經に分つは極めて舊し。繫辭傳に云はく

二篇の策万有一千五百二十

と。易經の上下二經に分るゝや極めて古し。其の經の字を加へて上經下經となすは何人に始まるかを明かにせず。而して彖象等を分ちて各〻上下二篇となすは乃ち上經の彖を上彖となし。下經の彖を下彖となすと明かなりといふべし。而して象には一卦全体の意味を解せるものと一爻の象を解せるものとあるなり。或は前者を名づけて大象といひ。後者を名けて小象といふ。

十翼は固より上下經の後にあるべきものなり。今日傳はる所の易經は大概象象を上下經の間に挾みて以て之を解する樣にす。漢以後のことなり。之れに就いて後の易を論ずるもの曰はく「古易の面目全く失ふ」と。然れども吾人は此事を以て此く大伽裟にいふべきものにあらざるを信ず。如何となれば經と翼とを別行せしむれば其れにて辨ずるとにて殊更に複雜なることあるにあらざればなり。宋に至り朱子本義を著はし。復たび經傳を別行せしむ。現在の處にては或は朱子本を用ふる者あり。又或は混淆本を用ふるものあり。漢學先生は矢釜しく言ひ立つれども吾人易の思想を解せんとするものに取りては左程重要のことにあらず。

第九節　十翼非孔子之作

十翼は孔子の作なりといふは史記に始まる。然かも史記の當時にありては未だ雜卦あることなく、漢書藝文志に於て十篇とある以上は雜卦は蓋し其間の作なるべし。他の九篇が孔子の作なりやといふに吾人は最も大なる疑ひを有するものなり。其の證とする所種々あり。

一　雜卦が聖人の作にあらざることは史記に之なきによりて略ぼ明かなれども序卦の如きは其の内容に於て餘り牽强附會の嫌ひあり。此れ等を以て孔子の作となすは寧ろ孔子を誣ふるの盛なくむばあらず。（伊藤東涯讀易私說）

二　子貢曰はく夫子の文章は得て聞くべきも、夫子の性と天道とをいふは得て聞く可らざるなりと。若し十翼を以て孔子の作とかさば孔子の天道の說〻性說とは凡夫と雖も之を解し得べし。子貢にして之を理解し得ざることあらんや。是れ知る。孔子の時十翼なかりしことを。

三　子曰の二字が時々發見せらるゝは疑ふべく、殊に顏氏の子其れ庶幾いかなといひて己れの門人を以て聖經を解釋せんとするは殆んど想像し得べからざる處と爲す。（讀易私說）且つ孔子は哀公に向て顏回なるものありといへり。此れ禮なり。顏氏の子といふは禮にあらず。

四　孟子は孔子を尊信するものなり。十翼果して孔子の作ならば豈に一言の之れに及ぶものなからんや。

五　易は陰陽を以て根本となす、天の道を以て陰陽となし地の道を以て剛柔となし、人の道を以て仁義となし、兩々相對立せしむるは免るべからざる所なれども之を論語に參照する時は殆んど孔子の思想とは思はれず。易は易、孔子は孔子孔子は易には仁義を說けども自已は乃ち一個の仁の字のみを說くとなせるが如きことは非なるべし。若し易の原理として仁義の兩者あるならば孔子は必ず人の道を以て仁義の二者となせしなるべし。孔子をして易を信せしむれば恐くは此く仁と義となせしなるべし。

六　繫辭傳に精氣爲物、遊魂爲變、是故知鬼神情狀とあれども論語に子不語怪力亂神の說と矛盾するが如し。

七　歐陽修のいへるが如く十翼は繁胖なり。曰はく。前略其の說多しと雖も其の旨歸を要するに辭を繫け吉凶を明かにするに止まるのみ。一言にして足るべきなり。凡そ此の數說なるものは其の略なり。其の餘の辭は小く異なると雖も而れども大旨は則ち同じきもの以て擧るに勝ふ可らず。謂ふに其の說諸家より出でゝ而して昔の人雜へ取りて以て經を釋く。故に之を擇んで精ならざれば則ち怪むに足らざるなり。謂ふに其の說一人より出るとすれば則ち是れ繁衍叢脞の言なり。其れ遂に以て聖人の作となさば則ち又大ゐる繆りなり。孔子の文章は易と春秋と是れのみ。其の言愈々簡にして其義愈々深し。吾れ聖人の作繁衍叢脞の此の如きを知らざるなり。（童子問）

七　歐陽修のいへるが如く前後矛盾する所少からず。今其の一二例を擧げんか歐陽修曰はく。文言に曰はく。元なるものは善の長なり。亨なるものは嘉の會なり、利なるものは義の和なり。貞なるものは事の幹なり。是を乾の四德と謂ふと。又曰はく乾元ゐるものは始めて亨る者なり。利貞なるものは性情なりと。則ち又四德にあらず。此の二說が一人より出づると謂ふか。則ち殆んど人情にあらざるなり。繫辭に曰はく。河圖を出し洛書を出だし。聖人之に則ると。所謂圖は八卦の文なり。神馬之を負ふて河より出で以て伏羲に授くる者なり。蓋し八卦は人の爲す所にあらず。是れ天の降す所也と。又曰はく。包羲氏の天下に王たるや。仰げば則ち象を天に觀。俯して則ち法を地に觀。鳥獸の文と地の宜しきとを觀。近くは諸れを身に取り、遠くは諸れを物に取る。是に於て始めて八卦を作ると。然らば則ち八卦は是れ人の爲す所なり。河圖は與らず。斯の二說なるものは已に相ひ容るゝと能はず。而して說卦に又曰はく。昔者聖人の易を作るや、幽神明に贊せられて而して蓍を生じ、天を參にし、地を兩にして數を倚す。變を陰陽に觀て而して卦を立つと。則ち卦も又蓍より出づ。八卦の說是の如し。是れ果して何に從て出るや。此の三說一人より出ると謂ふか。則ち殆んど人情にあらざるなり。歐陽修の此れ等の論は實に味ひあり。伊藤東涯は此外に於て(一)繫辭は卜筮を尙び、夫子の雅言と異なるものあると。(二)子思孟子共に夫子易を贊すといはざると。(三)伏羲神農を稱するは、堯舜を祖述するの旨にあらざると。(四)卜筮義理の二端相ひ錯して矛盾なるものあると。(五)韓宣子魯に易象を見たりと稱すれば則ち易象は孔子の作にあらざると。(六)

乾の四德は穆姜の語に本づくと(七)敬義直方は聖人の語ならざると(八)繫辭傳に所謂尺蠖の屈する云々とは老子の旨なると(九)繫辭に所謂機事密ならざるは是れ後世の事なると等を擧げたり。

左傳襄公九年に曰はく。

史曰はく。是れを艮の隨に行く謂ふ。隨は其れ出るなり。君必ず速かに出でよと。姜が曰はく。亡し。是れ周易に於て曰はく。隨は元亨利貞咎なしと。元は、體の長なり。亨は、嘉の會なり。利は、義の和なり。貞は、事の幹なり。仁を體して以て人に長たるに足り、德を嘉みして以て禮に合するに足り、物を利して以て和するに足り、貞固以て事に幹たるに足る。然る故に誣ふ可らざるなり。是を以て隨と雖も咎なし。今我婦人にして亂に與る。固より下位に在り。而して仁あらざれば以て元と謂ふ可らず。國家を靖んせず。亨と謂ふ可らず。作して身を害すれば利と謂ふ可らず。位を捨てゝ姣す。貞と謂ふ可らず。四德のものあれば隨て咎なし。我皆之れなし。豈隨ならんや。我則ち惡なり。能く咎なからんや。必ず此に死なん。出るを得じ。

と。文言に曰はく。

元なるものは善の長なり。亨なるものは嘉の會なり。利なるものは義の和なり。貞なるものは事の幹なり。君子仁を體して以て人に長たるに足り、會を嘉みして以て禮に合するに足り、物を利して以て義に和するに足り、貞固以て事に幹たるに足る。君子此の四德のものを行ふ。故に乾元亨利貞と曰ふ。

と。前の穆姜の言と大同小異あり。歐陽修は此れを取りて文言は孔子の作にあらざるの一證となせり。伊藤東涯亦之れに賛す。其他の學者亦之れに賛するもの少からず。朱子曰はく。

古へ已に此の說あり。穆姜之を稱し、而して夫子も亦取ることあり。

と。實際此柚の語は當時一般に行はれたる者にして必ずしも穆姜の作にはあらざるべし。然れども元亨利貞の四字を以て四德とするは易の正解にあらず。故に文言を以て孔子の作となすは、恐らくは否なるべし。河田孝成は一種の折衷說をなして曰はく。

孝成左傳を考ふるに宜子易象と魯の春秋とを觀て曰く。周の禮は悉く魯に在

りと。夫れ魯は本春秋ありて孔子之を筆削す。而して後世、孔子春秋を作ると稱す。意ふに易の象も亦魯の有る所にして孔子之れを定むるなり。之を孔子の作と謂ふは亦猶春秋のごときか。但だ此篇大象を論ずるもの、實に先王の大範にして因りて以て象名を專らにすれば則ち宣子の觀る所は蓋し是れなり。其の書辭を釋するものは象と撰を同ふす。乃ち孔子の贊述せる所にして、魯の舊傳にあらざるなり。

と。孔子の見たる所の易象は今の象傳なり。此れ等を綜合して之を考ふれば十翼は、或は、孔子に先つものあり。或は、孔子に後るゝものあり。交章雄渾なるものあり。繁、胙にして、讀むに堪へざるものあり。牽、强附會にして、取るに足らざるものあり。前後矛盾するものあり。要するに一人の作にあらず。孔子の見たるものありとするも、其は極めて一小部分のみ、而かも亦孔子の筆に成るには、あらず。葉水心曰はく。（水心文集）

大抵浮屠の鋒鋭を抑ゑて、而して吾が有る所の道を示めさんと欲すること此くの如し。然るに十翼は孔子の作にあらざるを悟らざれば則ち道の本統尙晦し

と。宋代の哲學は十翼を以て根柢となす。然かも十翼孔子の作にあらざる以上は彼れ等は皆孔子の正統にあらざることを言へるものなり。然らば十翼は全く棄つべきかといふに歐陽修のいへるが如く易義を發揮せしものとして大に參考の價値あり。廢すべからざるなり。

第十節　彖象の別

十翼には彖と爻を對立せしむる所多し。曰はく。

彖なるものは象を言ふものなり。爻なるものは變を言ふものなり（上繫辭）

又曰はく。

易なるものは象なり。象なるものは像なり。彖なるものは材なり。爻なるものは天下の動に效ふものなり。此の故に吉凶生じて而して悔吝著るゝなり。（下繫辭）

此れによりて見れば象の字は單に卦象の意味に用ひらる、彖と爻とは相對稱せらる。爻辭のみを指して象といふの意は之を發見すること能はざるなり。而して下繫又曰はく。

八卦は象を以て告げ、爻象は情を以て言ふ。剛柔雜居して吉凶見るべし。

と。故に彖は卦に繫るの辭をいひ。爻は爻に係るの辭をいふ。而して彖を解するもの亦之を名けて彖といふ。是は唯だ古來よりの習慣にして別に意味あるにあらず。繫辭又曰はく。

知者其の彖辭を觀れば則ち思ひ半に過ぎん。

と。此に彖辭といへるは鄭注によれば爻辭なり。張惠言周易鄭氏義に曰はく。

鄭彖辭を以て爻辭となすは乾鑿度に曰はく。陽は七を以て陰は八を以て象となす。象は變の數なり。中略　貴氏皆當爻を以て義を斷じ變動を說かず。爻辭は本爻の義を說く故に之を彖辭と謂ふ此を以て之を言へば卦爻の辭皆名けて彖となす。又皆名けて象となす。其の卦爻の象に就いて而して之を象るを以て辭となす也。夫子卦辭の義大なるを以て既に彖を作り、復た象を作り、以て之を明かにす。爻の義は小なり。唯だ象を作るのみ。其れ然かり。但だ彖爻相ひ對するより見れば則ち彖は卦辭爻は爻辭なるべし。而して之を通じて象又は彖といふ彖先づ生ず。故に卦象より意味を解せしもの。及び爻辭を指して彖といふ。故に彖には大小の別あり。彖の如く卦にのみ限るにあらず。從來の學者が爻下の辭のみを以て象となすは恐くは非なるべし。本文も彖象にして之を解するもの亦彖象なれば則ち見るもの極めてまぎらはしきがために特に之を區別して傳の一字を附す。然れども其の何時にあるを詳かにせず。劉氏曰はく。

彖は斷なり。一卦の才を斷するなり〔集解〕

と。說文に據れば彖は豕の走るとなす。晉も義も斷となす。河田孝成曰はく。蓋し材用一路を言ひて而して變を言はざるを以て豕の斷決して走り。左右を顧みざるに譬ふと。（周易訓疏）既に彖なる以上は卦辭爻辭共に彖なるは明かなり。然らば傳の字を附せしは何時に始まるか。毛奇齡曰はく。

特に文王易を演せし時、凡そ卦下に於て繫る所の辭を原と彖辭と名づく。其の爻下に在るものは原と象辭と名づく。故に孔子の彖象は則ち皆傳の字を加へて之を別ち、之を彖傳象傳といふは魏晉以前に在れども何時なるを知らず。又傳の字を脫し去る。或は謂ふ韓康伯之を刪ると。按ずるに魏の高貴鄉公彖象經

に連らなるの語あり。則ち但だ彖象と稱す。已に傳の字なし。康伯の刪る所と謂ふは誤れり。但だ彖の字解し難し。傳に曰はく。材なりと。亦義なし。

但だ朱子が近世に至りて傳の字を附せしを以て近世に於る著明なる一時期とおすのみ。

王伯厚曰はく。昔し韓宣子魯に適き、易象を見る。是れ古人卦爻を以て統て之を名けて象と曰ふ。故に曰はく。易なるものは象なりと。其意深し。（惠徵君九經古義）

易象といふを以て卦爻の辭となすに付いて異論あるは別記の如くなれども兎に角、卦爻の辭共に之を象といふと見たるは卓見といふべきなり、

朱子發云ふ。古文周易上下二篇あり。孔子彖象繫辭文言說卦序卦雜卦を作り、別に十篇をなす。前漢費直傳古文周易彖象繫辭文言を以て上下經を解說すとある是れなり。費氏の易は馬融に至りて始めて傳を作る。融、鄭康成に傳ふ。康成始めて彖象を以て經文に連ぬ。所謂經文なるものは卦辭爻辭、通じて之を言ふなり。卽ち費の傳に所謂上下經なり。魏の王弼、爻文言を以て乾坤二卦に附す。故に康成よりして後、其の本、彖曰、象曰を加へ、王弼より後文言曰を加ふ。繫辭上下、說卦、序卦、雜卦に至りては則ち舊篇に仍る。魏の高貴鄉公博士淳于俊に問ふて曰はく。今彖象經文に連らならず、而して註に之を連らぬるは何ぞや。俊對へて曰はく。鄭康成彖象を經に合し學者に便せんと欲す。云云。則ち鄭の未だ易經を註せざるの前には彖象は經文に連らねざるなり。（易正義に云ふ。輔嗣の意以爲らく、彖なるものは本と經文を釋す。宜しく相ひ附近すべしと。故に爻の象辭を分ち、各當爻の下に附して之を言ふ。然らば則ち鄭氏象辭は未だ嘗て分たざるなり。（張惠言周易鄭氏義）

乃ち彖象を以て經文に連らねたるは鄭康成にして、文言を以て乾坤の下に列ねたるは王弼なり。正義によれば此れに就いても異論なき能はず、乃ち偶然の問題にして理論を以て決すべきにあらず。

第十一節　彖象の時代

卦爻の辭に歷史的の事實を擧るもの多し。卦辭に就いて之を曰はんか、屯の彖に曰はく。

屯。元亨。利貞。勿用有攸往。利建侯。

と、侯を建つるは卽ち封建制なり。封建制度は周に至つて始めて大に備はれるものなり。夏殷二代の如きは從來の習慣のまゝに氏族の長を保存せり。故に建侯の句は周一統以後のことに似たり。殊に初九の建て侯たるに利しといふもの是れなり。小畜の彖に曰はく。

小畜。亨。密雲不雨。自我西郊。

伊藤東涯曰はく。互體に西郊の象あり。岐周よりして言ふ。故に我が西郊と云ふと。文王自ら言へりとなすなり。若し我が西郊といふを以て岐周なりとすれば是れ個々の事實なり。此句は又小過の六五に見ふ。更らに轉じて象辭に付いて之を見む。泰の六五に曰はく。

帝乙歸妹。以祉。元吉。

帝乙は殷王なり。書の多士に曰はく。成湯より帝乙に至る迄明德恤祀あらざるなしと。帝乙に關することは不明瞭なれども後世學者の想像する所に據れば當時降嫁の禮特に盛んにして世の傳ふる所となるか。又或は尊貴を以て傲らざるが故に取りて以て象となすなり。何れにせよ。殷の事實なれば爻辭が周以後のものたるは疑ふべからざる所なり。朱子は之を以て帝乙其妹を嫁せしめんとせる時占して此爻を得たりとかせども其の說の取るに足らざるとは定說なり。隨の上六に曰はく。

上六は之を拘係す。乃ち從て之を維ぐ。王用て西山に亨す。

西山は岐山なり。周の地に在り。王は文王をいふとは先儒多く其說あり。（周易新疏參考）乃ち文王の例を引いて以て此爻の象を說明せるなり。明夷の六五に云はく。

六五。箕子之明夷。利貞。

箕子を引用せるは最も面白し。此れ亦事實を以て此爻の象を說明せるものなり。升の六四又曰はく。

六四。王用亨于岐山。吉无咎。

岐山は周の舊都にして王といふは文王なり。此れ亦文王のことを以て爻の象を解せるものなり。歸妹六五に曰はく。

六五。帝乙歸妹。其君之袂。

と。既濟の九三に曰はく。

九三。高宗代鬼方。三年克之。小人勿用。

高宗は殷王なり。九五に云はく。

九五。東隣殺牛。不如西隣之禴祭。實受其福。

と、先儒皆文王と紂との事に當るとなす。此くして爻辞は殷周の事實を示めして以て爻辞の制作をして歴史的年代の位置を占得せしむ。卦辞は少なけれども此れ亦多少歴史的位置を想像せしめざるにあらず。然れども其の人を詳かにせず。繫辞に云はく。

易の興るや。其れ殷の末世。周の盛德に當るか。文王と紂との事に當るか。是の故に其辞危し。

易の興るや、其れ中古に於けるか。易を作るものは其れ憂患あるか。

易の制作は當時に於て己に明かならず。之を文王に歸し周公に歸するも亦穩かならず。蓋し一種の産物として傳はり居りしものならん。

第四章　易の思想と易書

第一節　易の根柢

易は變化を中心とする一種の思想系統なり。其の必然的條件として卦畫を有す。卦畫は陰と陽となり。此の卦畫のために餘儀なくせられて八卦六十四卦の生成あり。八卦六十四卦は單に陰陽思想のみにて起り得べきにあらず。卦畫を積むの法あるにあらざれば見るべからず。八卦六十四卦なければ易は見る可からざるなり。故に易は變化を中心とする一種の思想系統を包含すると同時に八卦六十四卦に關係する意味も亦之を包含するものなり。

八卦の意味如何。六十四卦の意味如何。此れ等は固より變化を中心とし陰陽を根柢とするものなりと雖も陰陽思想其者とは別種のものといふべし。適確に言へば陰陽思想は易に特有のものにあらず。西洋にも之あり。一般に哲學として見るべきものなり。其の卦爻を生ずるに及びて始めて易の起るあるなり。吾人は陰陽思想が易の根本なるを信ずると同時に兩者を別ちて二となすの必要なるを

信ずる者なり。假令ひ卦辭爻辭なくとも六十四卦の象を見れば則ち自ら卦爻の性質を思ひ浮ぶことを得べきなり。但だ現在の卦辭爻辭と其の意を同ふするや否やは疑問なり。

第二節　卦辭爻辭

卦辭爻辭は本來六十四卦の意味を發揮したる者故六十四卦を見んとするものは必ず之れに據らざる可からずと雖も卦爻の辭は象を示すもの故象を見る範圍に於て之れに據るべきのみ。其文章を以て悉く易の根本思想となすべからず。例へば大有の上九に

天より之を祐く。吉にして利ならざるなし。

とあり。此一句は其爻に天より祐けらるゝの象あることを言へるものなり。然れ共此を以て易が其根柢に於て天を假定し居るものとなす可らず。卦象としては天あるも之を易哲學の系統中にあるものとなすべからず。又睽の上九に

鬼を一車に載す

とあるも、此れ亦卦象を言へるのみにて易の信仰として鬼を假定し居るにはあらざるなり。卦象は種々樣々なり。宇宙一切の事實なり。八卦六十四卦は宇宙一切の現象を網羅すと雖も、網羅するといふことが易の根本思想にして其中の何々を以て根本となすといふ点になると話しは全く別問題なり。天より之を祐くといふは其爻に此の意あるは疑ふ可らず。又當時此の爻辭を作りし周公其人の腦中に於ては天祐といふ一種の思想ありしならんも易が天を假定し天を以て信仰の對象とすとなす可らず。信仰は卽ち時代に從ふて種々に變遷するを免れず。然かも易が宇宙を網羅するといふ根柢は則ち變ずるとなし。

易が宇宙を網羅するは信仰にはあらず。理論なり。故に易には天の象のみならず。凡ての象あり。さりとて凡ての象を信ずるにはあらず。若し天を以て易の信仰となさば新たに易の信仰系統を作らざる可らず。是の故に卦爻の辭を讀むものは文字の末に拘泥することなく卦象を探るの助けとなすべきのみ。

第三節　十翼

十翼は易の根本思想を發揮せんと勉めたるものなり。故に易の根本を窺ふ上に於て參考となるものあるは固よりなれども、十翼は同一人の作にあらざるが故に各々其の意味を發揮せざる可らず。此くして彖の哲學あり。象の哲學あり。繫辭の哲學あり文言の哲學あり。(以下之れに準ず)是等を綜合して以て易の哲學が構成せられざるにはあらざれども別人の作たる以上は然かするを以て穩かなりとす。

十翼が正しく易を解せしものなるや否やは確かならざれども十翼を離れて易は知る可らず。恰も彖爻二辭を離れて卦爻の象を見出し得ざるが如し。去れば吾人が易を解するも亦彖爻二辭を通じ、十翼を通せざるを得ず。其中に於て易の根本思想と思はるゝ所と十翼特有の思想と思はるゝ所とを識別するを要するのみ。從て吾人が易の根本思想と十翼とを區別せんとすと雖も要するに吾人は十翼に於て易の思想の包含せられ居ることを信ずると同時に十翼の作者自身の思想又は少くとも時代思想の包含せられ居ることを信せざる能はざるなり。

第四節　易關係の思想

王弼の易を註するや、老子を以てし智旭の註するや禪を以てす。而して宋儒は一般に哲學思想を以てせり。同く之を天といふも、或は以て無なりともいふべく或は以て自性なりともいふべく、或は以て絶對なりとも言ふべく自己の見る處によりて如何樣にも解釋せられ得べし。說の岐るゝ所以なり。

十干十二支の說を附して以て易を釋せんとする者あり。又河圖洛書の說をなすものなり此れ等は何れも區別せられざる可らざる者なり、吾人は本篇に於て卦爻成立の由來と易書の構成とを論述せり、此れにて易の一般は理解せられたるべし。易哲學の一部は此處にて既に發表せられたれども主として易哲學成立の由來を說明するに勉めたるのみ、卽ち先づ陰陽思想の世界に共通なるを述べ、八卦六十四卦の成立に及び、然る處之れを解する所以の典籍卽ち上下經及び十翼に及べり、一言に約すれば易の意味を發揮したるものなり、故に近く易に關して之を解說するを免れざりき。第二編に於ては遙か易の根本思想を論せんとす。

第二編　易の哲學

第一章　陰陽論

第一節　陰陽と人事

陰陽の思想が各社會を通じて共通なると及び其の包含的なるとは既に之を述べたり。其の人事に於る意味の一般を述べんか。陰あれば陽あり、陽あれば陰あり。二者は必ず相ひ伴ふ、物窮れば必ず通ずるは易の根本なり。易は以爲らく、万事其の極と思はるゝ場合に立ち至れば更に通ずるの道ありと、是の故に治の極は卽ち乱となり、乱の極は乃ち治となる、幸あれば禍あり、禍あれば幸あり。苦あれば樂あり、樂あれば苦あり。陰陽常に相ひ伴ふ。古來興亡盛衰の跡を考ふるに一として然らざるなし、之を人事に考ふるに亦皆然らざるなし。

此の如きは易の根本として假定する所なり、陰陽相伴ふの思想は時間の内に

在るものあり、同時なるものあり、時間の内に在るものは治乱の相伴ふが如く、同時なるものは苦樂の相ひ半ばするが如し。故に苦中に樂を求め樂中に苦を求む。何れも陰陽相伴ふの思想にあらざるなし。

固より易は論理的に之を考へたるにはあらず。漠然經驗の上より此く言ひなしたるに外ならざれば精密に之を論ずれば了解し難き處少からず。例へば治の極とは何んぞや、此れより以上の太平かしといふ狀態なるべし、歷史に刑措いて用ひざるもの二十年といふが如き其の一例なるべきも、之を以て治の極といふは如何にや。甚だ疑ひなきと能はず、殊に治の極が乱を生ずといへるが如きは最も了解し得られざるとに屬す。之れと同く乱の極といふも亦實際之れと認め得べきものあるか、甚だ以て疑ひなきと能はざるなり。又乱の極が治となるといふも了解し得られざる所なり。治の極必ずしも乱にあらず、亂の極必ずしも治にあらず。去れば物窮れば必ず通ずといふは決して理窟に叶ひたるとにはあらず。但だ單に治の後に亂あり、亂の後に治ありといへるのみにして歷史的事實の上より言へるに過ぎず。理論的絕對的の價値あるにあらざるなり。

之れと同く、禍中に福あり、福中に禍ありといふも決して絶對的に然るにはあらずして多くの場合に於て然りといふべきのみ。

然るに易に在りては始めより陰陽の二原理を立つるが爲めに、一切万事を陰陽より觀察せんとする先入主となる的の傾向を有す。爲めに治亂興亡の跡を見るに一として陰陽あらざるなきが如く思はるゝなり。換言すれば陰陽を以て一切を判斷しつゝありて、一切の事實のまゝに判定せんとするが如きとは絶て之れあるとなきなり。此れ獨り易を學ぶ者のみならず、易の作者其人も一度陰陽思想を立てゝより悉く之れに由りて以て判斷し了らんとせるなり

第二節　陰陽と矛盾相對

事實に於ては此く漠然たるものあるにせよ、陰陽思想其者は反對若くは矛盾的相對を意味す。殊に矛盾的相對に於て其の意味を發見するものなれば、同時因果の思想が其中に包含せらる。此くして陰あれば陽あり、陽あれば、陰あり、兩者は必然的に相伴ふ者となすは易哲學乃至一般に支那思想を研究する上に於て最も注意すべきことに屬す。陰あれば陽あり、陽あれば陰ありといふ以上は陰は陽の原因となり、陽は陰の原因となることを意味する者なり。卽ち所謂同時因果なり。

若し此の思想を推演する時は禍あるが故に福あり、福あるが故に禍ありとなす。其れのみならず、一切の反對なる概念は皆因果の關係ありとせらゝなり。動は靜の原因、靜は動の原因ありとなす如き是れなり。此の思想は支那の思想界を司配し支那の傳說となれり。今其の一二例を引用せんとす。

第三節　易と老子

老子の書中には最も善く矛盾相對の思想を發見することを得。曰はく。

道の道とすべきは常道にあらず。名の名とすべきは常名にあらず。

と。此に常道常名といへるは絶對の道、絶對の名といふことなり。常は常住にして不變の意、時間空間を超越するの意、卽ち絶對を意味するなり。常道は卽ち絶對の道にして別に解し難きとはなけれども常名といふは如何かと思はるゝなり。然れども名は卽ち名にして物の體を指すものなれば、常名が常道と同一のものな

るや明かなりとす。而して道の道とすべきといふは、道を道として規定するの意なり。道と規定すれば道にあらざるものあり、道に非ざるものに對する道は卽ち比較的相對的の道にして絶對的の道にあらずといふなり。名に就いても亦同じ。故に又曰はく、

天下皆善の善たるを知る。是れ惡のみ。天下皆美の美たるを知る。是れ不美のみ。

と。美といふべきは不美に對するもの故、比較的相對的の美にして眞の美にあらず。眞の美にあらざる故に、之を不美のみといふなり。善の善たるを知るも此れは善と規定し得べきものなり。此の如きものは卽ち不善に對するものにして比較的相對的のものに屬し絶對の善にあらざるなり。絶對の善にあらざるが故に是れ不善のみといふ。通常人の限を以てすれば則ち天下皆見て以て善となす所のものは眞の善にして毫頭不善のあるべき筈なし。然るを老子獨り此くいふ所以のものは他なし。絶對の善絶對の美にあらざるとをいへる者にして老子の好尙する所は仁義の與らざる以前、何等の名稱の附すべきものなき時に存す。去れば其の論法が規定と超越、更に換言すれば矛盾相對超越の觀念にしてAあれば非Aあり、非AあればAありといふ一種の同時因果說に外ならず。卽ち陰陽思想より出でたるものとなさゞる可らず。曰はく

故に有無相生じ、難易相成り、長短相形はれ、高下相傾き、音聲相和し、前後相隨ふ。是を以て聖人は無爲の事に處し、不言の敎を行ふ。萬物作して辭せず、云云

是を以て聖人は其身を後にして而して身先だつ、其身を外にして而して身存せり。以て私なきを以てにあらずや。故に能く其の私を成す。

此れ亦陰陽反對の思想と、反對超越の思想とを含むや明かなり。之れと同意にて

曲れば卽ち全し、枉れば則ち直なり。窪なれば則ち盈つ、弊なれば則ち新なり。少ければ則ち得、多ければ則ち惑ふ。

といへり。又曰はく、

進道は退くが如く、上德は谷の如く、大白は辱はしきが如く、廣德は足らざるが如く、建德は偷かなるが如く、質眞は渝るが如く、大方には隅なく、大器は晩成す。大音は希聲す、大象は形ちなし、道は隱れて名なし、云云

大成は缺けたるが如く、其の用敝へず。大盈は冲しきが如く、其の用窮まらず。大

直は屈めるが如く、大巧は拙なる如く、大辯は拙なる如し。

無爲をなし。無事を事とし、無味を味ふ。是を以て聖人終に大を爲さず。故に能く其の大をなす。

此れ等は直接に絶對の意味を表はせるものなり。

重きは輕きの根たり、靜かなるは躁の君たり。

其の雄を知りて其の雌を守れば天下の谿となる。天下の谿となれば常德離れず。

此れ等は相對を超越せんとするにはあらず、寧ろ陰陽兩者の中に就いて重きを陰に置かんとするものなり。陰符經の思想を參考すれば則ち明かなり。

故に貴きは賤しきを以て本となし、高きは低きを以て基となす。是を以て侯王自ら孤寡不穀と稱す。此れ其の賤しきを以て本とするか。非か。

是を以て聖人は能く其大をなすなり。其の自ら大とせざるを以て故に能く其の大をなす。

將さに之を噏めんとする者は必ず固く之を張る。將さに之を弱くせんとするものは必ず固く之を强ふす。云云

道の常は爲すことなし。而かも爲さゞることなし。侯王若し能く守らば萬物將さに自ら化せんとす。

即ち聖人の大は絶對の大なり。絶對の善、絶對の効を收めんとするものは一時は損小する所なかる可らず。尺蠖の屈するは伸びんがためなる如く、大に爲すあらんとするものは尋常一樣の事にては不可なり。凡て此心得にて實行すべしといふなり。乃ち損と大利。損に對する利にあらず)との相ひ對する所に陰陽の概念を應用したるものなり。故に言葉の上にては奇矯に聞え、不可思議に聞ゆれども、其意味は乃ち異しきことなし。陰陽相對の思想、陰陽因果の思想は最も善く此に見はれ居るものといふべく、老子の根柢が易と合一し居るは吾人の信じて疑はざる所なり。

又一般に老子が權謀術數に流れ、變幻出沒測る可からざるが如きものあるは易の變化を尙ぶと相似たる所あり。此れがため古來老子を以て易に出るとなすものあり。吾人も亦老子を以て易の陰陽思想に負ふ所ありとなす。

第三節　易と莊子

老子既に易と根抵に於て一致する所あり。乃ち老子の徒、莊子が易の思想より出るものあるは異しむに足らざるなり。莊子は易の陰陽語を藉りて曰はく、

凡そ事若くは小若くは大、道あらずして以て懽成すること寡し。事若し成らざれば則ち必ず人道の患あらん。事若し成らば則ち必ず陰陽の患あらん。

と。當時陰陽の語は社會共通のものたりしなり。乃ち易の思想の當時に流行し人心を司配しつゝありしことを知るに足る。殊に矛盾超越の思想は最も多く之を莊子の書中に發見することを得。殊に齊物論一篇を然りとす。曰はく

彼是其偶を得るなき之を道極といふ。

と。即ち絶對は比較相對を超越するをいふなり。莊子はAと規定すれば非Aを生ず。兩者相對なり、絶對は即ちAにもあらず非Aにもあらざるものとなすなり。齊物論一篇の主意は實に此に在り。齊物論は乃ち物論を齊ふせんとの意にして是非といひ邪正といふ。皆五十歩百歩の論にして道にあらざることを證明せんとせるに外ならず。故に曰はく。

道は小成に隱れ、言は榮華に隱る。故に儒墨の是非あり。以て其の非とする所を是とし而して其の是とする所を非とす。

と。絶對より見れば是もなく非もなし。曰はく。

是れも亦彼れなり。彼れも亦是れなり。彼れも亦一是非なり。此れも亦一是非なり。果して且つ彼是あるかや果して且つ彼是なきかや。

と。其他此種の言甚だ多けれども此に之を畧す。易は陰陽をいふ。陰陽の間に同時因果を假定す。然れ共超越を說かず。易に太極あり。是れ兩儀を生ず、兩儀四象を生ず。云云といふことあれども太極は陰陽を超越する絶對の意味にはあらず。少くとも老莊の如き道にはあらざるなり。老莊は陰陽思想より出でて寧ろ之を活用せんとしたるものといふべし。老子に於て殊に其の甚しきを見るなり。

第四節　易と太極圖說

宋の周茂叔曰はく

無極にして太極、太極動いて陽を生じ、動くこと極まりて靜かなり、靜かなること極まりて復た動く。一動一靜互ひに其の根となり、陰に分れ陽に分れて兩儀立つ云云

此に動の極といひ靜の極といふは果して如何なる意か。殆んど理解すること能はず。動の極といふあらば其は果して如何なる狀態か。靜の極も亦同じく殆んど想像すること能はざるなり。人間ならば疲勞の極といふことなきにしもあらず。然れども此れとても程度問題なり。靜の極といふことにしても亦同じ。況して自然界に於いて動の極、靜の極などいふことのあるべき筈なし。一動一靜互ひに其の根となるといふも亦同じく吾人の想像し得ざる所に屬す。周子自身と雖も考一考すれば則ち必ず吾人と同感なりしならん。然るに嘗て之れに付いて考へたることなく、但だ古來習慣のまゝに此の文句を並べたるに過ぎざるなり。乃ち陰陽因果の論理は一種の社會的傳說となり、學者の腦髓を司配し、全然疑問の餘地なからしめたり。易の陰陽が如何に社會の傳說となりしか、學者が如何に支配せられしか、易の根本思想の如何に强かりしかを推すに足るべし。

第五節　易と陰符經

陰符經は蓋し漢代の作なり。僅かに四百餘言の小文章なれども陰陽の思想を發揮したる所に於ては之れに如くものなかるべし。大意は陰中陽、陽中陰を主張し、陰と陽とある中に就いて重きを陰に置かんとするものなり。

陰符經は道家の經典なり。道家は水火を以て二大根本となし、之を以て陰陽を代表せしむ。水火は卽ち坎離なり。坎☵は其形に於て既に陰中陽を示めし離☲は其の形に於て既に陽中陰を示めす。坎離兩者を以て中心となすなり。參同契に坎離匡廓とある是れなり。匡廓は卽ち包含の意なり。坎離が宇宙を包含することを言へるものにして獨り參同契や又は陰符經に限りたることにはあらず。所謂道家は皆之を以て中心となすなり。陰中陽は卽ち禍中の福にして逆境の中に順境の曙光を認め、衰退の中に挽回の機運を發見する如き是れなり。陽中陰は是れに反するもの、卽ち福中の禍にして、盛榮の間に衰退の徵候を見出し、順境の中に逆境の因子を識別するもの是れなり。然れども陰符經が陰陽の相對を理解するは

少しく老莊と異なるものあり。老莊は陰陽超越の意味を取りて其の根本となせしが陰符經は陰陽に付いて四種の意味を取れり。

(一) 陰の中に陽の種子あり、陽の中に陰の種子ありとなすもの(必ずしも原因にあらず必ずしも結果にあらず、卽ち因果關係にあらざるもの)

(二) 陰陽互に因果をなすもの。

(三) 陰陽を超越する絕對の思想あること。

(四) 陰陽兩者の概念に就いて陰に重きを置くこと。

一に就いては今述るを要せず。經に曰はく

生は死の根、死は生の根。恩は害より生じ害は恩より生ず。

と。此れ陰陽因果をなすの理を說きたるものなり。經に曰はく

天の恩なくして而して大恩生ず。迅雷烈風蠢然たらざるなし、

と。此れ卽ち老子流の思想にして恩なしといふは比較的相對的の恩を施さゞるをいふ。大恩生ずは卽ち絕對の恩の生ずるをいふなり。絕對の恩は卽ち大恩なり。

經に曰はく

天の道を觀、天の行を執れば盡くせり。天に五賊あり。之を見るものは昌ふ。

と五賊とは五行をいふなり。五行が相互に剋する所より名けて賊といふ。通常人の見る所は表面にして陽なり。經の見る所は裏面にして陰なり。是れ亦陰に重きを置きたるものと見るべきなり。又曰はく

天殺機を發し星を移し宿を易ふ、地殺機を發し龍蛇陸に起る、人殺機を發し天地反覆す。

此れ亦陰肅の氣の大効力あることを認めたるものなり。又經に天の至て私なるといへるも同く私の字を用いて以て陰に重きを置くことを示したるものあり。

易の陰陽が其の本來の意味に於ては自然界に於る現象の物体、性質、狀態、位置等盡く之を包含せざることなきは己に之を述べたり。然れども陰陽の思想は矛盾的反對の意味を含有するがため種々なる意味を伴ひ來れり。老子莊子の如き周子の如き何れも陰陽の概念を因果の方面より發揮したるものなり。而して陰符經はあらゆる方面より最も完全に之を發揮せんとしたるものなり。陰陽の思想は種々の意味に解釋せらる者ゝなるが以上は其の大略なり、易を解するもの數

十百家、何ぞ其れ限りあらんと雖も、而かも老子周子陰符經の如きは其の最なるものとして見ざる可らざるなり。

第六節　陰陽思想の應用

以上に於て陰陽思想が如何に廣く支那人心を司配せしかを知るべし。然れども以上述べたる處は決して易哲學全体にはあらず。所謂易の陰陽思想其者のみ。陰陽思想其者に付いて此の如く種々なる意味あることを明かにするにあらざれば易の哲學は遂に明かなると能はざなり。

而して陰陽思想は至る處に行はれ、一から十迄陰陽を以て標準とおさゞるなし。去れば陰陽より分れ出でたる格言の如きも亦少からず。例へば禍福は縁れる縄の如し。苦は樂の種、樂は苦の種といふが如き是れなり。陰陽思想が此く迄廣く行はるゝは、乃ち易の根本思想が獨り哲學上のみならず。社會一般に弘通せられつゝあるものとして見るべきなり。

然りと雖も吾人が本章述べし所は要するに殆んど文字に見はれざる所のもの而かも易の根本たる者なり。是れより以上更に一層易に近き所に就いて論述せんと欲す。

第二章　六十四卦の哲學

第一節　一卦の意味

卦は時を示めし、爻は位を示めすとは前編に於て述べたる所なり。六十四卦ある以上は卽ち六十四の時勢あるなり。古文に於て時といふ。今日の時間又は時勢の意味のみにはあらず。狀態、作用等の意味あり。而も六十四は何れも人事に關係するものとして見るべし。從て吾人は六十四を以て人生の各方面を代表するものとなさんとするなり。例へば水雷を屯となすも屯は人間生活の困難なることを意味するものといふべく、雷水を解とすもも亦人間生活に於て困難の解除せんとすなる者といふべきなり。人生には種々なる方面苦くは事柄なり。六十四は兎に角人生に關する何者かを示めすものと謂ふべきなり。

之を自然界の現象として解す、固より解し得られざるにあらず。八卦は自然現象の象なり。故に六十四卦何れも自然現象としての意味なきはなし。屯を雷雨交至るの象となし、雷水を雷雨至りて雨晴るゝの象となし、水山を水山上に在るの象となし地天を陰陽の氣交るの象となすが如き一々擧るを要せず。此く自然現象として觀察せられざるにあらざるも之れにては重要の意味を發見すること能はず。但だ單に人事に關するものとして觀察し、而る後大に其の意味を發見し得べきのみ。去れば六十四卦は要するに人生に關するものとして見るべく、六十四卦は人事の六十四の異方面を見たるものと謂ふべきなり。

第二節　六十四卦の人生觀

六十四卦の各一に就きて其意味を求むれば何れも時勢を示めし、各爻は其位を示めすと前述の如くなるが之れにては六十四の斷片的智識を得るのみにして綜合的に全體としての智識を得ること能はず。此に附いて余は數年前苦心して漸く六十四卦を以て人生の各方面を表はすものと見做し、更に之を十七に分ちて以て益々綜合的に理解することを得たり。因りて嘗て研經會に於て聊か卑見を開陳し、又比較的通俗的に丁酉倫理研究會に於て此の說を述べたることあり、丁酉倫理の分は多少本文と重複の處もあれども余が易に對する見地を明かならしめ、一面には易の一般をも明かならしむるために其儘之を收載せんとす。易の記述が餘り抽象に過ぎて了解し難きものあるを救濟するの効あるを信ずるものなり。

此の周易六十四卦の話は、全体餘りスペシャルであつて、興味が無いだろうと思ふけれども、易の專門の方面から見ると興味あることと自分は信じて居る。斯う云ふ意見は腦髓を破壞するやうな恐れがあつて隨分精神を刺激することゝ思ふ、

全体六十四卦の順序と云ふのは、周易に於て一定して居るが、此の順序が必ずしも學理的でないと云ふことは六十四卦を一目見れば能く分る。十翼の中の最後に序卦傳と云ふのがあつて、六十四卦は斯う云ふ道理の順序であると云つて書いてあるけれども、夫は全然牽强附會の說で聖人が書いたとは思はれない。夫は

兎に角六十四卦の排列夫れ自身に於て學理的でないと思ふ。所で六十四卦の順序は今の順序と取換へた方が宜からう、他の新らしい順序に排列せらるゝであろうと云ふ考へはどう云ふところから起つて來たかと云ふと、周易を哲學として抽象して見たいと云ふ研究の結果から出て來たのである。周易には上經、下經と、其他に十翼と云ふのがある。十翼は普通の文章であるからして其十翼各篇に付て哲學を抽象することは容易く出來る、例へば上彖、下彖、上象、下象、上繫辭、下繫辭、文言、說卦、序卦、雜卦、の哲學のやうな工合に、各篇に於て其哲學思想を抽象することが出來る、夫れに依て十翼全体に亘つて抽象すると云ふことは出來ないことでは無い。所が上經下經になるとどうも一つに纏めて哲學的系統として一種の思想を現はすことは出來ない。どう考へても上下經から哲學の系統を編出すと云ふことは困難である。上下經は六十四行列して長い間歷史的に、此の順序で排列されて居るから之を崩すとも出來ない、崩さないで考へて見るとどうかと云ふと言葉が餘り簡單で其上六十四卦もあるが如何にも種類が一樣でないから、六十四卦の方面に於て哲學を抽象することは出來ない。

次に何か之を西洋の哲學流に考へたならば六十四卦を解釋し得ることは出來まいか、其点に於て苦心して見たのである、どうかして六十四卦から哲學思想を抽象して見たい、一種の哲學を作つて見たいと考へたが善い考が出なかつたと云ふのは六十四卦は皆六爻から成つて居つて、一二三四五六と下から六本ある、一番始めが人民の位、次が士、次が大夫、次が公卿、次が天子、其次が無位の位地と云ふやうな譯で社會的の順序に當嵌つて居る。例へば乾の卦に就て言ふと『初九潛龍勿用』とあつて人民であるから意見を出したり何かする事はせぬ方が宜いと云ふ、第二は士のことが書いてある。龍が初めて田に出た所であるから『九二見龍在田利見大人』と書いてある。九三は乃ち大夫今で言ふと縣知事位の位置で段々貴顯に近い、夫れで『九三君子終日乾々夕陽若厲无咎』と書いてある、九四は宰相の位或は公卿の位であるから『九四或躍在淵无咎』と書いてある、九五は天子の位であるから『九五飛龍在天利見大人』次に『上九亢龍有悔』と書いてある。天子の次か無位の位置で夫れ〳〵社會的位置に當嵌めてある。其社會的位置に相當した言葉が書いてある。去ばれ崩して哲學思想を抽象することは困難である。

或場合には斯う云ふやうにやつて見た、一番下の人民はどう云ふことをやるべきか。云はゞ人民の處世訓とか道德訓とかいふ樣に考へて見た事がある。夫から士は如何樣にやるかと云ふことを下から二番目の爻辭を六十四合せて考へた事もある。三番目四番目のものも同く六十四の言葉を夫れ〳〵集めて來て大夫はどう云ふ位或は公卿はどう云ふ位と云ふやうに考へて見たこともあつた。其の次の五は天子の位であるから天子はどう云ふ行ひを爲すべきかと云ふことを矢張六十四合せて考へたこともある。或は在野の賢人は如何樣にすべきかと全体六ッに分けて考へて見たならば哲學思想を抽象することが出來まいかと思ふのである、併しさう云ふ工合にやると全く六十四卦の言葉を彼方からも此方からも集めて來るだけに止まる。而も夫れが六章だけと極つて來る、夫では餘り意味が淺薄で面白くないと思つたのである。

其處で今度は改めて考へて見るのに周易の六十四卦と云ふものは何を示して居るだらうか六十四卦の各種を考へると或は天地自然の現象に關係のあるものもある、又食物とか或は井と云ふやうな極些細な事に關係のあるものもある、或は單に太陽が昇るとか風が氷を解くと云ふやうな工合に性質若くは活動に關係のあるものもある。六十四といふと數は少ないやうだけれども、示して居る種類は甚だ多數である、ソコで此方面から考へたけれども矢張統一が出來惡い、併し周易の六十四卦を論ずる場合には折角昔しからの聖人が一卦は一卦として有する意味を持せて居つたのであるから、其積りで系統を作つて見なければ面白くないと考へて、自分は斯ふ云ふことを考へたのである。夫は六十四卦は今いふたやうな工合に種々の現象を示して居るけれども、何も人間社會に關係がある、直接間接に關係を持て居る、其關係とはどういふ方面かと云ふことを聯想したのである、例へば井があると井と云ふものは如何に人間社會に關係するかと云ふと人間を養ふと云ふ方に解釋する、或は鼎と云へば物体であるけれども矢張人間社會に關係する、ヒューマンライフの中の養ふと云ふ中に含まれて居る、或は竹の節と云ふやうな卦があるが矢張人間の節操と云ふやうに解釋される、其他太陽が昇るといふ卦は矢張人間が段々立身出世する意味に解釋される、夫れであるから六十四と云ふものは直接關係に皆ヒューマンライフの一方

面を示したものであると考へた之が最後の考へであつた。

然らば此考へに從つて六十四卦を排列したらば面白くなからうかと考へた、其の大体の意味をいふと斯う云ふことになる。ヒューマンライフと云ふべき各方面を分類するには如何樣にすべきか、之れがナカ〳〵問題であらうと思ふけれども兎に角周易六十四卦はヒューマンライフの各方面を書いたものである。其方面はどんなものであるか、分け方の精密であると精密でないとは別として兎に角六十四卦に依つて考へたらどうかと云ふと、人間の立身出世と云ふものを示した卦が隨分ある。又結婚を解釋した卦も隨分ある。旅行、又は朋友の義理を解釋したものもある。又物を贈る受ると云ふことを解釋したものもある。又困難若くは逆境に處することを解釋したるものもあり、或は順境に處することを書いたものもある。其他言はなくとも大概想像が付くと思ふ。けれどもさう云ふ工合にヒューマンライフの各方面を解釋したものと見ると六十四卦全体を考へても此の如き意味が出て來ると思ふのである。夫であるから更に斯う云ふやうに縮めて學理的にヒューマンライフと云ふものを分析する、其れが十になり或は二十になる。其處に持て行つて六十四卦を排列すると完全なる周易六十四卦の系統が立つと自分は考へた。ソコデスツカリ順序を直して分類したが其分類が果して精密であるかどうか疑問である。此の分け方は必ずしも一各人致することは出來まいと思ふ。夫が一つ困る点である。モウ一ツはさういふ學理的の分類の仕方で排列した所で、一卦で兩方に關係したものがある。此困難を許すとすれば今いふたやうな順序に直すことが出來る。夫れで先づ一段落である。

ソコで周易と云ふ書物は如何に利用すべきかと云ふ段になる。元來周易と云ふは元卜筮の書であるといふ人もあるが夫は別として、一種の處世上の訓戒として解釋する方が面白いかと思ふ。其卜筮を排除して全く處世訓道德訓として後に今學理的に排列されたものを應用することが出來る、どう云ふ工合に應用するかといふと自分が今度結婚しやうと思ふ。其時には今迄は卜ひで卦を出して周易をアテにしたがさうでなく結婚の處を開いて見て昔しの聖人は何といつて居つたか、夫れを參酌する、或ば戰をする時には戰さの卦を見ると戰さに對する心持が分かる。或は朋友と交際する場合にもさうである、矢張其處を開いて

見て交際のことを知ると云ふやうになる。斯樣な工合にすると周易といふ書物が唯ト筮といふ方面から效力があるのではなくして人々の實際生活の伴侶となるものである、所で其等の周易などをアテにするのは今日の人から見て羞かしきことかどうか、他の言葉で云ふと周易に夫れだけの價値があるかどうかと云ふ一段になる。夫は人々の見解で斯んなものはアテにならぬといつて終へば其迄であるが自分の考へでは大變アテになると思ふのである。併し周易の言葉を作つた人々は孰れも海に千年山に千年餘程敎の老けた人間で處世に就てば隨分精神を練つた人であると思ふ、文王とか周公とかゞ作つたか否やは別として社會に經驗のある人が書いたものに違ひない。社會に經驗のある人の言ふたことは極平々凡々の中に意味がある。さういふ所から考へると確かに周易を伴侶として相談相手として宜いと思ふのである。之は周易を最負目に見たやうな解釋であるが最負目ではない。福澤先生が獨立自尊といふことを云はれた、そんなことは難作もなく言はれるやうに思れるが其獨立自尊と云ふ言葉を初めて作るのが困難である。餘程世の中に熟れた人でなければ出來ないとと思ふ。であるから平々凡々の中に動かすべからざる格言がある。夫は學問ばかり發達したのでは學問上の理窟は旨くなるが平々凡々の中に廣大無邊の意味を發見すると云ふやうかことは出來ない。故に議論の上から云つても相談相手にすると云ふことは眞理のあることではないかと思ふ。けれども夫は人々の思ふ所に依てどうかと思はるゝのであるが自分ではそう考へて居る。之は第三段になる。夫から周易を何故に處世上道德上の訓戒として相談相手にする、自分の座右に置くときはどう云ふ心持を惹き起すかと云ふことを一言しなければならぬと思ふ。處世上の訓戒例へば朋友と交るとか或は旅行するといふ樣のことは之は古代とか今とか時代の變遷によつて變はるべき者ではない。元より朋友間の交際は細かいことになれば違つて居るが根本の心持は異なるやうなことはない。其根本の心持を修養するそれが周易の好い所ではないかと思ふ。例へば人と交はるに道德上の考へがなくて交つてはいかぬとか幾らか自分の腹の修養が出來て居つて交はる。さういふ考へがあつてやる方が宜いとか。或は又逆境に處したときは尙更のことであるがどう云ふ心持でやつたら宜いかといふやうな根本の心持を

作つて置くといふことに就ては確かに周易が一の助けになると思ふ。之は先づ第四段にあるのである。

夫から又最後に一つ周易からしても吾々が益を得る点は斯う云ふことにあると思ふ。逆境に處して泰然自若として居り、順境に處して必ずしも順境のまゝに喜ばない。さういふ精神狀態を養ふのが肝要な点ではないかと思ふのである。言ひ換れば人間の精神と云ふ者を通常の感情狀態より更に一段深くせしめて社會に處すると云ふやうな意味合になつて來る。だから愉快に無闇に騒ぎ廻ると云ふやうなことはしなくなつて來る。愉快に騒いだり或は直ちに哀んだりすることは或意味からいふと宜いことであるけれども矢張腹に耐へると云ふに至つては左樣でなく通常以上に進んで腹の置場を極めて置く方が宜いと思ふ。後世の道家は一般にさういふことをやつた。ツマリ吾々が周易の書物の中から認めたる實際上の價値は其点から云つて疑ふことは出來ない。之で第五段になる。先づ大体の要点はさういふ所に止るのである。

以上は余が講演の大要なり。余は嘗て某大學に於て易の政治思想を講義したることあり。乃ち六十四卦より九五六五の彖を引き來り之を解したるものなり。又易の處世思想を述べたることあり。乃ち六十四卦より初九、初六の爻辞を主として引用し來れるものなり。今より之を思へば支離の弊甚し。然るに、十七に分ちて之を論ぜしより始めて易の六十四卦を明かにするを得たり。然りと雖も此の如きは、決して六十四卦の各一の意味にはあらず。六十四の生存する所以の意味 raison d'être 也。此を解するにあらざれば六十四卦は離れて六十四となり、何等連絡を發見することを能はず。恰も一個の生物が生活力を失ひて支躰分裂するが如し。支躰の說明は六十四卦各一の說明なり。本章述る所は卽ち支躰の說明にはあらずして支躰を貫徹する所の根本原力卽ち生活力の說明なりとす。此点に於て本章の說明は實に陰陽に次いで根本的なるものと謂ふべきなり。

第三節　六十四卦の名稱

六十四卦の名稱は何時頃の作なりやは明かならず。周初に於て之れありしこと以外は確實ならず。六十四卦の名稱は何れの處より來りしか。卽ち如何なる方

法にて命名せられしか。今暫く之を考へんとす。彖傳は多く卦に名づくるの義を解せり。屯の彖に曰はく。

屯は剛柔始めて交りて難生ず、

即ち剛柔始めて交るは震の卦に付いていひ、難生ずるは坎の卦に就いていふなり。難生ずるが故に名けて屯といふとなり。又蒙の彖に曰はく。

蒙は山の下に險あり。險にして止まるは蒙

此れ亦卦德を以て卦名を解くものと見るべきかり。需の彖に曰はく。

需は須つなり。險前に在るなり。剛健にして陷らず。其の義困窮せず。

此れ亦卦德を以て卦名を釋するものと謂ふべし。其の他此類一々擧ぐるを要せず。然るに又卦體を以て卦名を解せるものあり。師の彖に曰はく。

師は衆なり。貞は正しきなり。能く衆を以て正しくす。以て王たるべし。

衆といふは卦象にもあらず、卦德にもあらず、卦體陰の衆きをいへるなり。又比の彖に曰はく。

比は吉なり。比は輔なり。下順從するなり。

此れも亦然り。下といふは下方にある四陰をいふものにして卦の形體より解したるものなり。又小畜の彖に

小畜は柔、位を得て而して上下之れに應ずるを小畜と曰ふ、

とあるも亦然り。凡て一爻に付いて柔と曰ひ剛と曰ふは皆卦全體の形體を觀察し、其中なる陰爻、又は陽爻に着目したるものなる故、之を卦體より解釋したるものといふなり。陰陽の爻數を主として立言したるものは皆卦體なり。臨の彖に

臨は剛浸くして長ず。

とある如きも正さに陽の盛長を指せる者なり。其の餘之れに準ず。今一々説明せず。又卦變を以ていふものあり。例へば隨䷐の彖に曰はく。

隨は剛來て柔に下る。

と。之れ蠱䷑と錯する所に付いていへる者なり。剛は蠱の上九をいふ。隨に來りて初九たり。故に來りて下るといふなり。彖は皆錯卦の卦變に就いて義を取る。故に同樣に

蠱は剛上りて柔下る

といふ。尙第一編錯卦の條を參考すべし。又或は單に卦の形よりいふものあり。卦體と卦形とは同じき樣なれども、前者は卦全體の形體をいひ、後者は卦の形の他の物象に似たるをいふなり。例へば鼎の彖に曰はく。

鼎は象なり。

と是れなり。鼎は卽ち形ちに象れるをいふなり。或は又卦變、卦德、卦象、卦體等を盡く採用し來りて以て之を解せんとしたるものあり。例へば恆䷟の彖に

恆は久しきなり。剛上りて柔下る。雷風相ひ與す。巽にして動く。剛柔皆應ずるは恒。

とある是れなり。剛の上りて柔の下るをいふは咸の卦より變じ來れる處をいふ。雷風相ひ與す(助くの意)といへるは卦象を以て言ふなり、巽にして動くは卦德なり。剛柔皆應ずるは各一爻に就いて言へるものにして卽ち卦體なり。此外或は卦德卦象を以てするあり。或は卦變卦德を以てするあり。今一々贅せず。但だ彖には卦名を釋せざるものあり。例へば頤䷚に「頤は貞吉とは正を養へば則ち吉なるなり云々」といへる如き是れなり。

要するに卦名の來る種々あり。卦象よりするものは例へば水雷を屯といふは屯は艱難の意味にして、雷雨交至るの象ありとなす如き是れなり。又山水を蒙となすは水の行いて山に逢ひ、進む所なくして止まるは卽ち彼の童蒙の何れの方面に向て發達するか分らざるに似たりとなすが如き是れなり。卦德は卽ち屯に於て震を動となし坎を陷るとなす。動いて險中に陷る。故に艱難の意ありとなす如き是れなり。屯の如きは卽ち卦德卦象の二方面より命名せられたる者といふべく、六十四卦中大部分は此等兩方面の意味を有するに似たり。或は又卦形よりするものあり。頤、噬嗑、節、鼎の如き是れなり。古來卦體、卦形を混同すれども余は之を區別することを以て一層易の眞意を得るに近しとなす也。又卦體を以ていふものは師、比、大過、剝の如き是れなり。されど此れ等も亦卦象、卦德より命名の意味を發見し得ざるにはあらず。例へば師は一陽五陰を卒ゆるの象ありと見たるが故に師となせども又地中に水あるは卽ち兵を農に寓するの意とも見るべく、又卦德內險にして外順なるは兵の道なりとも見るべきが如し。卦變に付いて命名したるものも亦然り。卦象、卦德より其の意味を發見し得られざるにあらず。例へ

ば隨は卦變蠱より來り、剛を以て柔に下る故に隨となすといふが如き最も明瞭なるものなり。然れども卦德(動いて說ぶ)なるが故に隨となす者とも見るべく、又卦象長男を以て少女に下り、雷澤中にあるが故に隨の意ありとも見るべし。卦象卦德は極めて廣義に解せられ得るものなるが故に此くは一切の重卦(乃ち六十四卦)に應用せらるゝなり。

科學的精密の意味に於て六十四卦の名稱の附せられたるとは吾人之を信ずること能はず。要するに一種の傳說として見るべきものなり。然るに六十四卦の名が既に作成せられし後は何人も之を以て金科玉條となし、之に由りて直ちに占はんとするものさへあるに至れり。吾人の見る所を以てすれば今茲に六十四卦の形ありて新たに之れに命名すとなさんか。十人十色の命名をなすなるべし。

䷀䷁䷂䷃䷄䷅䷆䷇䷈䷉䷊䷋䷌䷍䷎䷏䷐䷑䷒䷓䷔䷕䷖䷗䷘䷙䷚䷛䷜䷝䷞䷟䷠䷡䷢䷣䷤䷥䷦䷧䷨䷩䷪䷫䷬䷭䷮䷯䷰䷱䷲䷳䷴䷵䷶䷷䷸䷹䷺䷻䷼䷽䷾䷿に就いても䷀䷁䷂䷃䷄䷅䷆䷇䷈䷉䷊䷋䷌䷍䷎䷏䷐䷑䷒䷓䷔䷕䷖䷗䷘䷙䷚䷛䷜䷝䷞䷟䷠䷡䷢䷣䷤䷥䷦䷧䷨䷩䷪䷫䷬䷭䷮䷯䷰䷱䷲䷳䷴䷵䷶䷷䷸䷹䷺䷻䷼䷽䷾䷿に就いても決して易經の名稱と一致する者にあらざるべし。易の名稱を其儘に信ずるは乃ち其れ丈け遙か易に因はれたる者なり。易の根本を論ずる者は命名の因りて來る所に付いて古人聯想の如何なるものなりしやを心會するあらんのみ。

第四節　六十四卦の分類

余は六十四卦を十七に分類し乃ち人生の十七方面として之を觀察するとに由りて比較的に滿足するを得たり。十七とは何んぞや。今順次之を說明すべし。

一　處世

處世とは人間の社會に處する上の心得なり。社會に處するは社會の異なるに從ふて其方針を異にすべし。例へば亂世には隱れ、治世には出づといへるが如く其時に從ふて異なるべきものなり。其れのみならず、自己の位置の異あるに從ふても亦其の方針を異にすべきことは明かなる所なり。元來易の主とする所は此に在り。易全体が處世訓なることは今更ら故めて言ふ迄もなし。處世は乃ち人間生活なり。人間各方面の生活は直接に間接に社會と關係せざるものなし。

然るに同く處世の中に就いても戰爭とか、結婚とか、交際とか特別あるものあり。其れ等を取り除きて、先づ普通一般の場合と見るべきものを一括して茲に之を處世といふなり。但だ一卦六爻あるが故に其の中の一部は此れに屬し、一部は

彼れすといふが如きと少からず。從ふて之を處世又は其他の條下に配當するにしても何卦何々爻といはざるを得ざるものあり。固より主として處世に關係ありといふのみにして此以外の意味なしといふにはあらざるかり。

イ　謙

謙䷎　此卦は謙遜承順の意味あるものにして(其の一々の解釋は此に之を省く)其の彖に曰はく。

謙亨る。君子終りあり。

と。一卦六爻多く謙德の必要なるを說く。謙遜にも種類多し。大に謙するもの、謙の言に見はるゝもの、功勞ありて謙するもの、謙を發揮すべき場合、謙德の能く天下を得る所以、大に謙するの利等之れなり。一般に謙德の大に功ある所以を明かにしたるものなり。

ロ　賁䷕　此卦は賁卽ち飾りを意味するものにして地天泰の如く、陰陽相交るの象あり。賁は山下に火あり文明にして以て止る。古來之を以て天氣下降し地氣上騰し。四時行はれ百物生じ文章の見るべきものあるの意となす。乃ち社會に於て人は我が爲めにし吾は人のためにし相互に爲めにして以て、天下の太平を來たすべく、人文の大なるもの是れなり。乃ち人の其の文なる、須らく其の心をすべし。此れ賁の卦の意なり。今其の全文を引用すると左の如し。

賁亨小利有攸往、

賁は亨る小しく往くところ有に利す、

初九賁其趾舍車而徒、

初九其趾を賁る車を舍て徒す、

六二賁其須

六二其須を賁る、

九三賁如濡如永貞吉、

九三賁如濡如永貞吉なり、

六四賁如皤如白馬翰如匪寇婚媾、

六四賁如たり皤如たり白馬翰如たり寇するに匪んば婚媾せん、

六五賁于丘園束帛戔戔吝終吉、

六五丘園を賁り束帛戔々たり吝にして終に吉なり、

上六白賁咎なし。

上六白賁咎なし。

八 ䷖ 遯

此の卦は國運衰へ、君子漸く微にして只だ君臣相遇ふて、恢復を圖り、時勢の非なるに逢ふ。こは乃ち能く韜晦含藏するを明かにす。蓋し處世の道此れより大なるはなし。

遯亨小利貞

遯は亨る小しく貞なるに利あり。

初六遯尾厲勿用有攸往

初六尾に遯る厲し往攸有に用ゆること勿れ。

六二執之用黃牛之革莫之勝說

六二之を執るに黃牛の革を用ゆ之を勝て說こと莫し。

遯九三係遯 有疾厲畜臣妾吉

九三係て遯る疾有り厲し臣妾を畜ふ吉なり。

九四好遯君子吉小人否

九四好して遯る君子は吉なり小人は否らず。

九五嘉遯貞吉

九五嘉にして遯る貞にして吉なり。

上九肥遯无不利

上九肥遯す利ならざること无し。

二 ䷘ 无妄

此卦は下卦動き上卦剛、故に動いて剛健毫も僞りなしとす。故に无妄といふ。故に六爻多く无妄にして行くの道を說く。

无妄元亨利貞、其匪正有眚不利有攸往

无妄は元に亨る貞に利す其正しきに匪らざれば眚はひ有り往く攸有るに利あらず。

初九无妄往吉

初九无妄にして往けば吉なり。

六二　耕穫不菑畬則利有攸往

　六二耕穫せず菑畬せざれば則ち往く攸有るに利す。

六三无妄之災或繫之牛行人之得邑人之災

　六三无妄の災ひ或は之が牛を繫ぐ行人の得るは邑人の災なり。

九四可貞无咎

　九四貞なる可し咎无し。

九五无妄之疾勿藥有喜

　九五无妄の疾は藥すること勿ども喜び有り。

上九无妄行有眚无所利

　上九は无妄行て眚ひ有り利する所なし。

ホ　䷚　頤

此卦は其の形口に似たるを以て名あり。而して口は養ふ所以、故に人を養ひ、又は人に養はるゝ所以の道を說く。

頤貞吉觀頤自求口實

　頤は貞吉なり頤を觀て自から口實を求む。

初九舍爾靈龜觀我朶頤凶

　初九爾の靈龜を舍て我を觀て頤を朶るは凶なり。

六二顚頤拂經于丘頤征凶

　六二頤を顚す經に拂る丘に干いて頤なり征ば凶なり

六三拂頤貞凶十年勿用无所利

　六三頤に拂る貞凶なり十年用ゆること勿れ利する攸なし。

六四顚頤吉虎視耽々其欲逐々无咎

　六四頤を顚す吉なり、虎視耽々其欲逐々咎なし。

六五拂經居貞吉不可涉大川

　六五經に拂る貞に居れば吉なり大川を涉る可らず。

上九由頤厲吉利涉大川

　上九由て頤なふ厲きも吉なり大川を涉るに利あり。

へ ䷻ 節

此卦は其形竹の節に似たる故に名あり。而して多く節の人間に於るの義を説く。

節亨苦節不可貞

節は亨る。苦節は貞にすべからず。

初九不出戸庭无咎

初九戸庭を出ず咎なし。

九二不出門庭凶

九二門庭を出ず凶なり。

六三不節若則嗟若无咎

六三節若せざれば則ち嗟若す咎なし。

六四安節亨

六四安節す亨る。

九五甘節吉往有尚

九五甘節す吉なり往て尚ふこと有り。

上六苦節貞凶悔亡

上六苦節す貞なるも凶悔亡ぶ。

ト ䷛ 大過

此卦は四陽二陰、陽勝るが故に大過といふ。恰も棟の橈むが如き感あり。故にいふ。其勢盛んなれども巽順の德を以て悅ぶの意あり。故に六爻多く此意をいふ。

大過棟橈利有所往亨

大過は棟の橈むなり往く所有るに利す亨る。

初六藉用白茅无咎

初六藉くに白茅を用ゆ咎なし。

九二枯楊生梯老夫得其女妻无不利

九二枯楊梯を生ず老夫は其女妻を得て利せざることなし。

九三棟橈凶

九三棟の橈む凶なり。

九四棟隆吉有它吝

九四隆なり吉なり它有れば吝なり。

九五枯楊生華老婦得其士夫无咎无譽

九五枯楊生華を生ず老婦は其士夫を得咎もなく譽もなし。

上六過涉滅頂凶无咎

上六過て涉る頂きを滅す凶なり咎なし。

チ ䷨ 損

此卦は下を損して上を益するの意ありとす。故に多く處世の道を說く。

損有孚元吉无咎可貞利有攸往曷之用二簋可用享

損は孚有り元吉なり咎なし貞にすべし往く攸有るに利あり曷をか之を用いん二簋用て享す可し。

初九已事遠往无咎酌損之

初九事を已て遠やかに往ば咎无し酌で之を損す。

九二利貞征凶弗損益之

九二貞に利あり往ば凶なり損せずして之を益す。

六三三人行則損一人行則得其友

六三三人往ば則ち一人を損ず一人行ば則ち其友を得。

六四損其疾使遠有喜无咎

六四其疾を損ず遠かなり使ず喜び有咎无し。

六五或益之十朋之龜弗克違元吉

六五或は之を益す十朋之龜も違ふ能はず元吉

上九弗損益之无咎貞吉利有攸往得臣无家

上九損せずして之を益す咎なし貞にして吉なり往く攸有るに利す臣を得家无し

リ ䷩ 益

此卦は損の反對なるが故に名く。

益利有攸往利涉大川

益は往く攸有るに利あり大川を涉るに利あり。

初九利用爲大作元吉无咎

初九利用て大作を爲すに利あり元に吉なり咎无し。

六二或益之十朋之龜弗克違永貞吉王用亨于帝吉

六二或は之を益す十朋の龜も違ふ克はず永貞吉なり王用つて帝に亨す吉

六三益之用凶事无咎有孚中行告公用圭

六三之に益に凶事を用てす咎无し中行に孚有て公に告るに圭を用ふ。

六四中行告公從利用爲依遷國

六四中行公を告ぐ從つて用つて依ることを爲し國を遷すに利あり。

九五有孚惠心勿問元吉有孚惠我德

九五孚ありて惠心、問ふことなくして元吉、孚ありて我德を惠とす。

上九莫益之或擊之立勿恤凶

上九莫益之或擊之立勿恤凶之を益すことなく、或は之を擊つ、心を立ることなし凶、

又 ䷬ 萃

萃とは聚まるなり。先王祭祀を明かにし以て天下の人を集む。

萃亨王假有廟利見大人亨利貞用大牲吉利有攸往

萃は亨王る王有廟に假る大人を見るに利し大牲を用て吉、往く攸有るに利し。

初六有孚不終乃亂乃萃若號一握爲笑勿恤往无咎

初六孚有り終らず乃ち亂れ乃ち萃る若號ふときは一握笑を爲す恤ふこと勿れ往て咎无し。

六二引吉无咎孚乃利用禴

六二引て吉咎无し孚あれば乃ち禴を用るに利し。

六三萃如嗟如无所利往无咎小吝

六三萃如嗟如无所利往は咎无し小しく吝。

九四大吉无咎

九四大吉にして咎无し。

九五萃有位无咎匪孚元永貞悔亡

九五萃るに位有り咎无し孚あるに匪ず元永貞にて悔亡ぶ。

上六齎咨涕洟无咎

上六齎咨涕洟す、咎なし、

第五節　順　境

順境に處するの道は自ら逆境に處すると異なるものあり。

イ ䷊ 泰

泰は安しといふ意。卦象地氣上昇在天天氣下降し、天地相交り陰陽和合す。卦德內剛健にして外柔順。何れにして泰なる所以なり。小は陰三を指し、大は陽三を指す。小去り大來る故吉にして亨らざるとなし。筮者此の如き狀を呈すれば吉ならざるとなし。然れども長く此狀を維持するとは困難なり。故に此卦多くは變通處世の道を說く。

初九は微賤なれども天下泰平の時運に乘じて進まんとするもの、然れども獨りで進まず、同輩と共にせんとすると恰も茅を拔くときは根が次第に拔けて行くが如し。其の心掛善なり。故に立身出世の道にありても可なり。九二は剛中の者故、荒を包ぬるといふて荒れたり穢れたるものをも兼ぬるの度量あり。其上決斷の宜きと河を徒涉するが如し。又遐といふて遠くに居るものをも遺すとなく、人才を擧げ用ひ、明黨することなければ中正の行に合するを得。尙は合するといふことなり。九三は既に泰の卦の半になる故易は時勢の變を戒む。陂は傾くといふとなり。艱を知りて貞にし居れば咎なし。孚は期待するとなり。期待するとを憂へざるも必ず福祿あるべし。六四は陰にて上に居り柔順の人なり。故に退かんとす。之を形容して然かいふ。其鄰を以てすとは三陰皆四のために感化せらるゝなり。其の心は自ら通ずべし。六五は九二に信賴するもの、其狀帝乙の妹が諸侯に嫁して驕らざる如し。家の祭りをなして元吉を得るとなり。上六は泰平の終らんとするもの故戒めを述ぶ。隍とは城を作るために土を取りて出來たる堀をいふ。城が頹れて土が隍に返へる。命令天子より出でず人民諸侯より出づ。如何に正道を守るも凶なり。

泰小往大來吉亨

泰は小往いて大來る吉にして亨る。

初九拔茅茹以其彙征吉

初九茅を拔き茹す其彙を以てす、征けば吉。

九二包荒、用馮河、不遐遺、朋亡、得尙于中行

九二荒を包み、馮河を用ふ、遐遺せず、朋亡ぶ、中行に尙ふを得。

九三无平不陂、无往不復、艱貞无咎、勿憂其孚、于食有福

九三平の陂せざるなく、往の復らざるなし、艱貞咎なし、其孚を憂ふる勿れ、食に于て福有り。

六四翩々不富、以其鄰、不戒以孚

六四翩々として富まず、其鄰を以てす、戒めず、以て孚あり。

六五帝乙歸妹、以祉元吉

六五帝乙妹を歸ぐ、以て祉あり、元吉。

上六城復于隍、勿用師、自邑告命、貞吝

上六城隍に復す、師を用ふる勿れ、邑より告命す、貞なれども吝。

䷍ 大有

大有とは大を有するなり。大は陽を指す。此卦一陰五陽、陰之れが主たるの意あり。故に大を有すと云ふ。而して多く大有の時に處するの道を說く。

大有元亨

大有は元に亨る。

初九无交害、匪咎、艱則无咎

初九害に交ふるなし、咎匪し、艱なれば咎なし。

九二大車以載、有攸往、无咎

九二大車以て載す、往く所あるも咎無し。

九三公用亨于天子、小人弗克

九三公用て天子に亨く、小人は克はず。

九四匪其彭、无咎

九四其彭に匪ざれば咎なし。

六五厥孚交如威如吉

六五厥の孚交如す威如す吉なり。

上九自天祐之吉无不利

上九天より之を祐く吉にして利からざるなし。

䷏ 豫

此卦は一陽あれども柔順、他は皆陰、故に柔順の義あり。又內卦は順にして外卦

は動く、卽ち安樂の意あり。六爻多く安樂に處するの道を說く。

豫利建侯行師

豫は侯を建て師を行るに利し。

初六鳴豫凶

初六鳴豫す凶なり。

六二介于石、不終日、貞吉

六二石に介して日を終へず、貞なれば吉。

六三盱豫悔遲有悔

六三盱豫す、悔遲れば悔有り。

九四由豫、大有得、勿疑、朋盍簪

九四由豫す、大に得る。こと有り、疑ふ勿れ、朋盍簪す。

六五貞疾、恒不死

六五貞疾、恒なり、死せず。

上六冥豫、成有渝、无咎

上六冥豫す、成れどもは渝ること有り、咎なし。

解 ䷧

此卦は陷て動く、故に吹を解するの意ありとなす。又雷雨交々至る、故に解くの義ありとなす。

解利西南、无所往、其來復、吉有攸往、夙吉

解は西南に利あり、往く所なし、其來り復して吉なり、往く攸有ば夙に吉なり。

初六无咎

初六咎なし。

九二田獲三狐、得黃矢、貞吉

九二田して三狐を獲たり、黃矢を得、貞なれば吉なり。

六三負且乘、致寇至、貞吝

六三負ふて且つ乘る、寇の至を致す、貞なれば吝なり。

九四解而拇、朋至斯孚

九四而の拇を解けば朋至て斯に孚なり

六五君子維有解吉、有孚于小人

六五君子維れ解くこと有り、吉なり、小人に孚有り。

上六公用射隼于高墉之上、獲之无不利

上六公用に隼を高墉之上に射る、之を獲て、利せざることなし。

ホ ䷶ 豐

此卦は內明にして外動、雷あり。火あり。盛大の意あり。故に名づく。而して多く豐に居るの道を說く。

豐亨王假之、勿憂宜日中

豐は亨る、王之を假る、憂ふる勿れ、日中に宜し。

初九遇其配主、雖旬、无咎、往有尙

初九其配主に遇す、旬と雖も咎なし、往いて尙ぶこと有り。

六二豐其蔀、日中見斗、往得疑疾、有孚、發若吉

六二其の蔀を豐にす、日中斗を見る、往いて疑疾を得、孚有り、發若吉なり。

九三豐其沛、日中見沫、折其右肱、无咎

九三其沛を豐にし、日中沫を見る、其右肱を折る、咎なし。

九四豐其蔀、日中見斗、遇其夷主、吉

九四其の蔀を豐にす、日中斗を見る、其の夷主に遇ふ、吉なり。

六五來章有慶譽吉

六五章を來せば慶譽有り吉。

上六豐其屋、蔀其家、闚其戶、闃其无人、三歲不覿、凶

上六其屋を豐にし、其家を蔀し、其戶を闚ひ、闃として人なし、三歲覿せず、凶。

ヘ ䷾ 既濟

此卦は水、火上にあり、相濟す。故に名あり。

既濟亨、小利貞、初吉、後亂

既濟は亨る、小しく貞なるに利し、初吉にして後亂る。

初九曳其輪、濡其尾、无咎

初九其輪を曳いて其尾を濡ほす、咎なし

六二婦喪其茀、勿逐、七日得

六二婦其茀を喪ふ、逐ふ勿れ、七日にして得。

六三高宗伐鬼方、三年、克之、小人勿用

六三高宗鬼方を伐つ、三年にして之に克つ小人は用ふる勿れ。

六四繻有衣絪終日戒

六四繻に衣絪あり、終日戒む。

九五東隣殺牛、不如西隣之禴祭實受其福

九五東隣牛を殺すは西隣の禴祭して實に其福を受くるに如かず。

上六濡其首厲

上六其首を濡す、厲。

卜 ䷪ 夬

此卦は陽氣下より上りて將さに上の一陰を決せんとす。故に名あり。而して其の時勢は極めて盛んなるものとなす。

夬揚于王庭孚號有厲、告自邑、不利卽戎、利有攸往

夬は王庭に揚る、孚に號ぶ、厲きこと有り、邑より告ぐ、戎に卽くに利からず往く攸有るに利し。

初九壯于前趾、往不勝、爲咎

初九前趾に壯なり、往て勝たず咎と爲す。

九二惕號、莫夜有戎、勿恤

九二惕れて號ぶ、夜戎有ること多し、恤ること勿れ。

九三壯于頄、有凶、君子夬夬、獨行遇雨、若濡有溫、无咎

九三頄に壯なり、凶有り、君子夬々、獨行雨に遇ふ、无ふが若く溫ること有り、咎なし。

九四臀无膚、其行次且、牽羊悔亡、聞言不信

九四臀に膚なし、其行次且たり、羊を牽きて悔亡ぶ言を聞て信せず。

九五莧陸夬夬、中行无咎

九五莧陸夬々、中行咎なし。

上六无號、終有凶

上六號ぶことなし、終に凶有り。

チ ☱☱ 兌

此卦は上六共に兌、故に名あり。而して悅ぶ所以のことを說く。

兌亨、利貞

兌は亨る、貞に利あり。

初九和兌吉

初九和して兌ぶ吉なり。

九二孚兌、吉、悔亡

九二孚ありて兌す、吉なり、悔亡ぶ。

六三來兌凶

六三來り兌ぶ、凶なり。

九四商兌未寧、介疾有喜

九四兌こびを商りて寧からず、介疾は喜び有り。

九五孚于剝、有厲

九五剝に孚あり、厲き有り。

上六引兌

上六引て兌こぶ。

リ ☴☵☴☵ 渙

此卦は風あり、水あり渙然として氷釋するの感あり。故に名づく。而して多く渙然たるの意を說く。

渙亨、王假有廟、利涉大川、利貞

渙は亨る、王有廟に假る、大川を涉るに利あり、貞に利あり。

初六用拯、馬壯吉

初六用て拯ふ、馬壯なれば吉なり。

九二渙奔其机、悔亡

九二渙するに其机に奔る、悔亡ぶ。

六三渙其躬、无悔

六三其躬を渙す、悔なし。

六四渙其群、元吉、渙有丘、匪夷所思

六四其群を渙す、元に吉なり、渙して丘のごとき有り、夷の思ふ所に匪ず。

九五渙汗其大號、渙王居无咎

九五の時其大號を汗にす渙の時王居て咎なし。

上九渙其血去逖出、无咎

上九其血を渙す、去て逖げ出づ咎なし。

卜 ䷒ 臨

此卦は陽氣の將さに盛んならんとするの意、故に臨といふ。卽ち盛んならんとするに臨むの義なり。而して多く、將さに盛んならんとするの義を說く。

臨元亨利貞、至于八月有凶

臨は元に亨る、貞に利し、八月に至りて凶有り

初九咸臨、貞吉

初九咸臨す、貞なれば吉なり。

九二咸臨吉、无不利

九二咸じて臨む、吉なり利せざることなし。

六三甘臨、无攸利、既憂之、无咎

六三甘臨す、利する攸なし、既に之を憂ふ无なし。

六四至臨、无咎

六四至りて臨む、咎なし。

六五知臨、大君之宜、吉

六五知にして臨む、大君の宜しきなり、吉なり。

上六敦臨、吉无咎

上六は敦く臨む、吉にして咎なし。

第六節　愛撫

愛撫は卽ち人民を愛撫する所以なり。多く此れに關するの卦を列す。

イ ䷇ 比

五陰一陽に親む故に名あり。親は公ならざるべからず。六爻多く人と親比するの道を說く。眞心を以てすべく其人を擇ぶべし親むべきを親み或は公平に親む。

或は親むの道を終ふべし。

比吉、原筮、元永貞、无咎、不寧方來、後夫凶

比は吉、原筮して元永貞にして、咎なし、寧からざる方に來る、後るる夫は凶なり。

初六有孚比之、无咎、有孚盈缶、終來、有他吉

初六、孚有り、之に比す、咎なし、孚有り缶に盈つ、終に來り他の吉有り。

六二比之自內、貞吉

六二之を比す、內よりす貞吉。

六三比之匪人

六三之に比す、人に匪ず。

六四外比之、貞吉

六四外之に比す、貞吉。

九五顯比、王用三驅、失前禽、邑人不誡吉

九五顯に比す、王用て三たび驅つて前禽を失ふ、邑人誡めず、吉。

上六比之、无首、凶

上六之を比す、首なし、凶。

第七節　交際

交際の人に於る最も重んぜざる可らず。或は小人に逢ふともあり。或は婦人の來るに逢ふともあり。一に拘泥す可らず。而も身を處する最も愼まずんばあらず。

イ　䷐　隨

此卦は內動いて巽順なるが故に名あり。而して多く人に隨ふの利害可否如何を說く。

隨元亨利貞、无咎

隨は元亨、貞に利し、咎なし。

初九官有渝、貞吉、出門交、有功

初九官渝ることあり、貞なれば吉、門を出でゝ交はれば、功有り。

六二係小子、失丈夫

六二小子に係り、丈夫を失ふ。

六三係丈夫、失小子、隨有求得、利居貞

六三丈夫に係り小子を失ふ。隨て求むる有りて得、貞に居るに利し。

九四隨有獲、貞凶有孚、在道、以明、何咎

九四隨て獲ること有り、貞なれば凶、孚有り、道に在つて以て明、何の咎あらん。

九五孚于嘉、吉

九五嘉に孚あり、吉。

上六拘係之、乃從維之、王用亨于西山

上六拘係す、乃從つて之を維ぐ、王用つて西山に享す。

ロ ䷌ 同人

此卦は天の下に火あり。天は陽、火は炎上す。相ひ同ふするの義あり。故に名づく。而して多く交際の道をいふ。

同人脢野亨、利涉大川、利君子貞

同人野に脢てす、亨る、大川を涉るに利し、君子の貞に利し。

初九同人于門、无咎

初九同人門に干てす、咎なし。

六二同人于宗、吝

六二同人宗に干てす、吝なり。

九三伏干戎莽、升其高陵、三歲不興

九三戎に莽に伏す、其高陵に升る、三歲、興らず。

九四乘其墉、弗克攻吉

九四其墉に乘る、攻ること克はず、吉なり。

九五同人先號咷、而後笑、大師、克、相遇

九五同人先に號咷して而して後に笑ふ、大師克て相遇ふ。

上九同人于郊、无悔

上九同人郊に干てす、悔なし。

ハ ䷞ 咸

咸とは感なり。止まつて悅ぶ。感通の義あり。故に多く感通の義を說く。

咸亨、利貞、取女吉

咸は亨る、貞に利し、女を取りて吉なり。

初六咸其拇

初六其拇に咸す。

六二咸其腓、凶居吉

六二其腓に咸す。凶なり。居れば吉なり。

九三咸其股。執其隨、往吝。

九三其股に咸す、執て其れ隨ふ、往ば吝し。

九四貞吉、悔亡、憧々往來、朋從爾思

九四貞吉、悔亡ぶ、憧々往來、明爾の思に從ふ。

九五咸其脢、无悔

九五其脢に咸す、悔なし。

上六咸其輔頰舌

上六は其輔頰舌に咸す。

二 ䷫ 姤

此卦は一陰の下に長じ、次第に陽を犯すの象、最も戒めざる可らざるなり。假令ひ交際にあらざるも多く男女相ひ交るの道を說くなり。

姤女壯勿用取女

姤は女壯なり。女を取るに用ふる勿れ。

初六繫于金柅、貞吉、有攸往、見凶、羸豕孚蹢躅

初六金柅に繫ぐ、貞なれば吉、往く攸有れば凶を見る、羸豕の孚あり、蹢躅。

九二包有魚、无咎、不利賓

九二包に魚有り、咎なし、賓に利しからず。

九三臀无膚、其行次且、厲无大咎

九三臀に膚なし、其行次且す、厲けれども大咎なし。

九四包无魚起凶

九四包に魚なし、起れば凶なり。

九五以杞包瓜、含章、有隕自天

九五杞を以て瓜を包む、章を含む、隕ること有り天よりす。

上九姤其角、吝、无咎

上九姤其角、吝、咎なし。

第八節　敎育

敎育のたる大なり。先王の時制度備はらずと雖も而も猶敎育を重んずるは書語に明かなり。曰はく敎「胄子」と以て見るべきなり。今敎育に關するものを列擧す。

イ　䷃　蒙

蒙は蒙昧の意、卦象、山の下に水あり。水、山に向て流るれば行く處なし。卦德内坎にして、外止る、陷に止るの意あり。共に蒙と名くる所以なり。蒙昧は卽ち童蒙の如し。故に多くは童蒙敎育の道を說く。

蒙亨了匪我求童蒙、童蒙求我、初筮告、再三瀆、々則不告、利貞

蒙は亨る、我童蒙に求むるに匪ず、童蒙我に求む、初筮は告ぐ、再三すれば瀆るれば則ち告げず、貞に利し。

初六發蒙、利用刑人、用說桎梏、以往吝

初六蒙を發す、人を刑するに用るに利し、桎梏を說くに用ふる、以て往く、吝。

九二包蒙、吉納婦吉、子克家

九二蒙を包むは吉、婦を納るは吉、子家を克くす。

六三勿用取女、見金夫、不有躬、无攸利

六三女を取るに用ふる勿れ、金夫を見て躬を有たず、利する攸なし。

六四困蒙吝

六四蒙に困む、吝。

六五童蒙吉

六五童蒙、吉なり。

上九擊蒙不利爲寇、利禦寇

上九蒙を擊つ寇を爲すに利しからず、寇を禦ぐに利し。

第九節　家庭

家庭は支那の如き家族制度にありては最も重んずる所也。先王の時、今日所謂家族なるものなく、唯氏族あるのみなりしと雖も、家族の次第に發生せんとせしこと及び家族的意味の當時に存在し、親子兄弟の別ありしことは明かなり。

イ ䷑ 蠱

山下に風あり、風山に逢ふて亂るゝの象なり。即ち事ある所以なり。蠱は事ある亂るゝなり。而かも巽にして止まる。故に能く物を止む。家庭のことたる實に天下太平の基なり。故に聖人此卦に於て家庭のことを示すといふ。

蠱元亨利涉大川、先甲三日、後甲三日

蠱は元亨、大川を涉るに利し、甲に先づこと三日甲に後るゝこと三日。

初六幹父之蠱、有子考、无咎、厲終吉、

初六父之蠱を幹す、子有り考、咎なし、厲なれども終に吉。

九二幹母之蠱、不可貞

九二母の蠱を幹す、貞にす可からず。

九三幹父之蠱、小有悔、无大咎

九三父の蠱を幹す、小しく悔有り、大咎なし。

六四裕父之蠱、往見吝

六四父之蠱を裕く、往けば吝を見る。

六五幹父之蠱、用譽也

六五父の蠱を幹す、用て譽あり。

上九不事王侯、高尚其事

上九王侯に事へず、其事を高尚にす。

ロ ䷤ 家人

此卦は長女と中女との順を正ふするもの、最も家庭の意あり。

家人、利女貞

家人は女の貞に利あり。

初九閑有家、悔亡

初九は家有るを閑す。悔亡ぶ。

六二无攸遂、在中饋、貞吉

一六二遂る攸なし。中饋に在り、貞吉。

九三家人嗃々、悔厲吉、婦子嘻々、終吝

九三家人嗃々たり、悔ゆれば厲けれど吉なり婦子嘻々たり、終に吝なり。

六四富家大吉

六四家を富す。大に吉なり。

九五王假有家勿恤吉

九五王家有るを假る。恤ること勿れ。吉なり。

上九有孚威如終吉

上九孚あり、て威如すれば終に吉なり。

第十節　結婚

人生の大事、結婚より大なるはなし。古今東西一樣に之れならざるなし。婦を選らぶの要ある所以なり。結婚の條を擧ぐ。

イ　䷵　歸妹

卦たるや、少女を以て長男に從ふ。故に結婚の義あり。聖人此卦に於て結婚の義を示めさんとす。

歸妹征凶无攸利

歸妹征けば凶利する攸なし。

初九歸妹以娣、跛能履征吉

初九歸妹娣を以てす、跛能く履む。征けば吉。

九二眇能視利幽人之貞

九二眇能く視る。幽人の貞に利し。

六三歸妹以須反歸以娣

六三歸妹須を以てし、反歸娣を以てす。

九四歸妹愆期、遲歸有時

九四歸妹期を愆る、遲れ歸ぐ時有り。

六五帝乙歸妹、其君之袂不如其娣之袂良月幾望吉

六五帝乙妹を娶ぐ。其君の袂は其の娣の袂の良きに如かず、月望に幾し。吉。

上六女承筐无實士刲羊无血无攸利

上六女、筐を承けて實なく、士羊を刲て血なし利する所なし。

第十一節　旅　行

旅行のことたる支那と雖も多く之れあり。但だ其の方法の極めて不完全なるのみ。先王旅行の避く可らざるを以て但だ其の道を示めさんとす。

イ ䷷ 旅

此卦艮止つて、而して明かなり。其狀恰も旅して外に在り、明者を得て之れに依るが如し。故に名く、而して多く旅行の義を示めすといふ。

旅小亨旅貞吉

旅は小しく亨る旅は貞なれば吉

初六旅瑣々其所取災

初六旅瑣々として其の取る所災あり。

六二、旅卽次懷其資得童僕貞

六二旅は次に卽く。其の資を懷ひ、童僕の貞を得。

九三旅焚其次、喪其童僕貞厲

九三旅は其次を焚き、其の童僕を喪ふ、貞なれども厲し。

九四旅于處得其資斧我心不快

九四旅處に于す、其資斧を得て、我心快からず。

六五射雉一矢亡、終以譽命

六五雉を射て一矢亡ふ、終に以て譽命あり。

上九鳥焚其巢、旅人先笑後號咷、喪牛于易、凶

上九鳥其の巢を焚く、旅人先づ笑つて後號咷す、牛を易に喪ふ凶なり。

第十二節　牽　制

人の世に在るや、或は小人のために妨げられ、或は婦人のために制せらる其者小と雖も我に關すること極めて大なるものあり。先王吾人の牽制せらるゝものあるを見、之れに應ずる所以の道を示す。

イ ䷈ 小畜

陰は小なり。一陰五陽の中にあり。五陽一陰を見て爭ふ。乃ち却つて制やる所となる。小の畜ふる所以なり。

小畜亨密雲不雨自我西郊

小畜は亨る、密雲雨ふらず、我西郊よりす。

初九復自道何其咎吉

初九復ること道よりす、何ぞ其咎あらん吉。

九二牽復吉

九二牽いて復す。吉。

九三輿說輻、夫妻反目

九三輿輻を說く、夫妻目を反す。

六四有孚血去惕出无咎

六四孚有り血み去る惕れ出づ咎なし。

九五有孚攣如富以其隣

九五孚有り攣如す富其隣を以てす。

上九既雨既處尙德載婦貞厲月幾望君子征凶

上九既に雨ふり既に處る德を尙むで載す婦貞なれども厲し月望に幾し君子征ば凶

ハ ䷙ 大畜

內卦乾剛、而して外卦艮止、之を阻止せんとす。能く大を畜ふ故に名あり。而して廣く牽制の意を說く。

大畜利貞、不家食、吉、利涉大川。

大畜貞に利し家食せず、吉、大川を涉るに利し。

初九有厲利已

初九厲きこと有り、已むに利し。

九二輿說輹

九二輿は輹を說く。

九三良馬逐利、艱貞、日閑輿衛、利有攸往

九三良馬逐ふ艱貞に利し日々輿衛を閑にす、往く所あるに利し。

六四童牛之牿、元吉

六四童牛の牿、元吉。

六五豶豕之牙吉

六五豕の牙を豶す、吉。

上九何天之衢亨

上九何ぞ天の衢ある亨る。

第十三節　刑罪

五刑の屬三千罪は不孝より大なるはなし。先王の刑罰を重んずるや大也。三百八十四爻刑罰に言及するもの少からず。今その最なるものを擧ぐ。

イ　䷔ 噬嗑

噬嗑は嚙むなり。卦形上下二陽爻は口形に類し、中の一陽爻は食物の其中に在るに類す。故に名く。動いて明かなり。以て獄を斷ずべし。六爻多く獄を斷ずるの道を說くといふ。

噬嗑亨利用獄

噬嗑は亨る獄を用ふるに利し。

初九履校滅趾无咎

初九校を履し趾を滅す、咎なし。

六二噬膚滅鼻无咎

六二膚を噬み、鼻を滅す、咎なし。

六三噬腊遇毒小吝无咎

六三は腊肉を噬で、毒に遇ふ、小く吝し、咎なし。

九四噬乾肉、得金矢、利艱貞、吉

九四乾肉を噬み、金矢を得たり、艱貞に利し、吉なり。

六五噬乾肉、得黃金、貞厲、无咎

六五乾肉を噬で、黃金を得たり貞なれば厲けれども咎なし。

上九何校滅耳凶

上九校を何ふて耳を滅す、凶なり。

第十四節　戰爭

戰爭のことたる何れの時と雖もそれなきはよし。先王兵を農に寓し以て愼戒を寓す。卽ち戰爭に關するの卦を擧ぐ。

イ ䷆ 師

師は軍なり。卦象地中に水あり。兵を農に寓する所以なり。卦形、九二の陽五陰を率ひ將帥に似たるあり。共に師と名くる所以。而して多く軍のことを說く。

師貞、丈人、吉、无咎

師は貞丈人ならば吉にして、咎なし。

初六師出以律否臧凶

初六師出すに律を以てす、否らざれば臧きも凶。

九二在師、中吉、无咎、王三錫命

九二師に在りて、中吉、咎なし王三たび命を錫ふ。

六三師或輿尸、凶。

六三師或は尸を輿す、凶

六四師左次、无咎

六四師左次す、咎なし。

六五田有禽、利執言、无咎、長子帥師、弟子輿尸、貞凶

六五田に禽有り、言を執るに利し、咎なし、長子は師を帥ひ弟子は尸を輿す、貞なれども凶。

上六大君有命、開國承家、小人勿用

上六大君命有り、國を開き家を承く、小人は用ふる勿れ。

第十五節　訴訟

訴訟は避く可らざるのと天下の訴訟するもの堯の子に行かずして舜に行き、舜の子に行かずして禹に行く。訴への道最も愼まざる可らず。

イ ䷅ 訟

訟の卦たる上天下水、天は西に動き水は東に流る。相摩するの象あり、故に名く

而して全卦多く訟訟の道を說く。訟訟するものは九二の人なり。其心剛中にして孚あり。伸る能はずして惕る。然れども訟訟は中位にして止むべし。理あるを恃むで其事を終窮す可らず。九五の大人は剛正の人なる故に就て訟ふべきも危難あるが故に之を犯して進む可らず。「利見大人」「不利涉大川」と言ふ所以なり。

初六は柔にして下に在るもの。訟を永續することなし。故に其の始め少く言語の爭を免れざるも、終には吉なるを得。易の訟を好まざるを見るべし。九二は剛中の人なる故勢の上に抗す可らざるを知り、歸り來る也。邑人僅かに三百戶に過ぎざる如く己を處すること寡約なるが故に災ひなし。六三は陰柔にして不中正、輕舉妄動し易し。故に其素分に安じ、貞厲なるべきを諭す。或は王事に從ふことあるも、効を已れに歸すること勿れ。九四は剛を以て陰位に居る。柔順なる者。故に訟を已めて歸り、其天命に安んず。唯其訟ふる心を渝へて貞に安んずるを可とす。九五は陽剛中正。訴へを裁判するに適す。上九は剛の極なり。理あるが故に盤帶を賜はることあるも亦忽ち之を褫はるゝに至ることあり。

訟有孚、窒惕、中吉、終凶、利見大人不利涉大川

訟は孚有り、窒かり惕る中なれば吉、終れば凶、大人を見るに利し、大川を涉るに利しからず。

初六不永所事、小有言、終吉

初六事とする所を永ふせず、小しく言あり、終に吉。

九二不克訟、歸而逋、邑人三百戶、无眚、

九二訟を克くせず、歸て逋ぐ其邑人三百戶なれば眚なし。

六三食舊德、貞厲、終吉、或從王事、无成

六三舊德を食む、貞厲なれば終に吉、或は王事に從ふ、成すことなし。

九四不克訟、復卽命、渝安貞、吉

九四訟を克くせず、復て命に卽く渝て安貞なれば吉。

九五訟元吉

九五訟ふる元吉。

上九或錫之盤帶、終朝三褫之

上九或は之に盤帶を錫ふ、終朝三たび之を褫はる。

第十六節　逆境

逆境に處するは易の最も得意とする所、捲土重來は易の理想なり。逆境に處するの道を說くもの、易に甚だ多く、擧ぐる所以なり。

イ　䷂　屯

屯は音チュン「艱ム」と訓ず。卦象、水と雷、卽ち雷雨の象、又艱難の象。卦德、內は動、外は陷、動いて陷るとなす。共に艱むの象あり。故に屯と名く。而して多く艱難に處するの道を說く。震が下に居る故元に亨るの理あり。事業を斷行せよ。侯を建てゝ天下を治るに利しとなり。初九は困難の時に在りて微賤なりと雖も獨り陽剛の者、天下を救濟すべし。磐の如く桓(柱)の如きもの、侯となるべきものなり。六二は困難の時に當りて貞操の婦人たり。初九のために婚媾を强ひらるゝ貌あれども貞にして許嫁せず、遂に其の正應九五に合するを得。屯如はなやむと遭如は徘徊することゝ。班如は還ると。初九は寇するにあらず、婚媾せんとするなり。六三は女を以て陽の位に居る。不正のもの、困難の時に當り、輕擧妄動し易し。恰も虞(案內者)なくして山麓に入り、惟林中に入るのみなる如し。君子は幾を見て、早く斷念するに如かず。輕擧妄動すれば必ず利しからず。六四は困難の時に當り其分に安んず。下初九の正應あり。始めは乘馬班如たるとありと雖も遂に其應を得。九五は陽剛の天子なり。德澤を施さんとして屯むとあり。大に爲すは宜からず、小くなすは吉なり。貞とは事業をなすと。なり。上六は困難の時に當り其極に居る。泣血漣如たるが如きものあり。

屯元亨利貞勿用有攸往利建侯

屯は元亨、貞に利し、往く攸あるに用ふる勿れ、侯を建つるに利し。

初九磐桓利居貞利建侯

初九は磐桓す貞に居るに利し、侯を建つるに利し。

六二屯如邅如乘馬班如匪寇婚媾女子貞不字十年乃字

六二は屯如たり、邅如たり、乘馬は班如たり、寇するに匪ずして婚媾す、女子貞なれば字せず、十年にして乃ち字す。

六三卽鹿无虞惟入于林中君子幾不如舍往吝

六三は鹿に卽て虞なし、惟林中に入る君子幾す舍つるに如かず。往けば吝。

六四乘馬班如、求婚媾、往吉无不利

六四乘馬は班如たり、婚媾を求めて往く、吉にして利からざるなし。

九五屯其膏、小貞吉、大貞凶

九五其膏を屯す小く貞なれば吉、大に貞なれば凶

上六乘馬班如泣血漣如

上六は乘馬班如たり、泣血漣如たり。

䷋ 否

天地の氣相交通せず。萬物生せず。故に否と名く。否に處するの道を說く。人は萬物の靈長なり。故に人を以て萬物を代表せしむ。人にあらずは萬物の生生する時にあらざるをいふ。君子の道を行ふの時にあらず。大即ち陽行き去りて小即ち陰來る。初六は陰柔の性にて否の時に當る。三陰と進退を共にす。(泰の初九參考)去れど其分に安んずれば吉にして亨るを得るなり。六二は中正の人なれども諸陽のために包まれて、之れに承順するもの、小人の道なり。君子の身を置くべきにあらず。其人は否なれども其道は卽ち亨らざるとなきなり。六三は不中不正の者否に處するの道を失ふ。故に羞を包むといふ。九四は否の半に居る。否の漸く恢復せんとする時なり。故に天命ありといふ。其同類(疇)と共に福祉に逢ふべし。九五は陽剛の天子否を休むるものなり。大人の道なり。去れど小心翼々として人心を固結すると恰も苞桑の固結して動かすべからざるが如くなるべし。上九は否の極陽にして剛、否を傾くるの象あり。又將さに泰ならんとするの時なり。故に先きには否にして後には泰といふ。

否之匪人、不利君子貞、大往小來

否は之れ人に匪す、君子の貞に利しからず、大往き、小來る。

初六拔茅茹、以其彙、貞吉亨

初六芽を拔き茹す、其彙を以てす、貞なれば吉、亨る。

六二包承、小人吉、大人否亨

六二は包承す、小人は吉、大人は否にして、亨る。

六三包羞

六三羞を包む。

九四有命、无咎、疇離祉

九四命有り咎なし、疇は祉に離る。

九五休否、大人吉、其亡其亡繫于苞桑

九五否を休む、大人は吉、其れ亡びん其れ亡びんとして苞桑に繫がる、

上九傾否、先否後喜

上九否を傾く、先には否後には喜ぶ。

八 ䷖ 剝

剝は削去することにして卦體一陽上に在るのみ。陽は君子、而して削去せらる。削と名くる所以なり。小人多く、君子少し。往く所あるべからず。初六は諸陰增長の時に當りて未だ微なるもの、故に牀の足を削すといふ。禍微なりと雖も惡化せられ貞を滅すとなす。六二は削の次第に增長したるもの、故に辨(板を受くる横木)を削すとなす。貞の道を守ると能はず。凶なり。六三は獨り陽に應ずる故に聖人に親むの意あり。削の時と雖も咎なしとす。六四は削の愈々切なると膚を削するが如し。

凶とす。六五は王妃に見立てられたるもので他の四陰を以て宮女となし、王妃が此れ等を率ひて天子の寵を受けしむ。故に利からざるなしとす。上九は羣陰の盛んなる時に當りて獨り陽を以て上に居る。大なる果實の獨り食はれざる貌あり君子此位置にあれば羣陰(輿は衆)を統御するを得れども小人なれば共に削し了るべし。

削不利有攸往

削は往く攸あるに利しからず。

初六剝牀以足。蔑貞凶

初六は牀を剝くに足を以てす。貞を蔑す凶。

六二剝牀以辨、蔑凶

六二牀を剝くに辨を以てす、貞を蔑す凶。

六三剝之、无咎

六三之を剝く咎なし。

六四剝之、以膚凶

六四之を削くに膚を以てす凶。

六五貫魚以宮人寵无不利

六五貫魚に宮人の寵を以てす利しかちざるなし。

上九碩果不食君子得輿小人削廬

上九は碩果食はれず君子は輿を得小人は廬を削く。

二 ䷜ 坎

此卦上下共に坎、故に名あり。而して今艱難に處するの道を説く。

習坎有孚、維心亨、行有尚

習坎は孚有り、維れ心亨る行けば尚ふこと有り。

初六習坎入于穴凶

初六習坎穴に入る凶なり。

九二坎險、求小得

九二坎に險有り、求むること小しく得たり

六三來之坎々、險且枕入于穴、勿用

六三來之坎々たり、險且枕す穴に入る、用ゆること勿れ。

六四樽酒簋貳用缶、納約自牖、終无咎

六四樽酒簋あり貳に缶を用ゆ、約を納ること牖よりす、終に咎なし。

九五坎不盈祇既平、无咎

九五祇に盈たず既に平かなり、咎なし。

上六係用徽纆寘于叢棘、三歲不得凶

上六係ぐに徽纆を用て、叢棘に寘く、三歲得ず凶なり。

六 ䷣ 明夷

明夷は明傷るなり。卦象、離火、坤地の中に入る。故に名く。全卦多くは明傷るに處するの道を説く。

明夷利艱貞

明夷は艱貞に利し。

初九明夷于飛、雖其翼、君子于行三日不食、有攸往、主人有言

初九明夷る、于に飛で其翼を垂る、君子于に行て三日食せず、往く所あり、主人

言あり。

六二明夷々于左股、用拯馬壯、吉

六二明夷、左股に夷る、用て拯馬壯なり、吉。

九三明夷于南狩、得其大首、不可疾貞

九三明南狩に夷る。其大首を得、疾く貞にす可らず。

六四入于左腹、獲明夷之心于出門庭

六四左腹に入る、明夷の心を獲たり、門庭を出るに于てす。

六五箕子之明夷、利貞

六五箕子之明夷る。貞に利あり。

上六不明晦。初登于天。後入于地。

上六明ならずして晦し初は天に登り、後には地に入る。

䷥ 睽

乖離なり。卦象火上、澤下、火は炎上し澤は潤下す。乖離の意あり。故に名く。全卦多くは乖離の際に於る處世法を說く。

火は燥し、澤は濕ふ。上下相和せず、故に睽といふ。睽とは反くなり。故に多く睽に處するの道をいふ。

睽小事、吉

睽は小事に吉なり。

初九、悔亡、喪馬、勿逐、自復、見惡人、无咎

初九悔亡ぶ、馬を喪ふ、逐こと勿れ、自から復る、惡人を見れば咎なし。

九二遇主于巷、无咎

九二主に巷に遇ふ、咎なし。

六三見輿曳、其牛掣、其人天且劓、无初有終

六三輿曳を見る、其牛其人を掣す。天きられ且つ劓きらる。初めなくして終りあり。

九四睽孤、遇元夫、交孚、厲无咎

九四睽孤なり、元夫に遇ば交り孚あり、厲けれども咎なし。

六五悔亡、厥宗噬膚、何睽

六五悔亡ぶ、厥宗膚を噬む往けば何の咎あらん。

上九睽孤、見豕負塗、載鬼一車先張之弧後説之弧、匪寇婚媾往、吉雨則吉

上九て孤なり、豕の塗に負て鬼を載ること一車なるを見る、先には之が弧を張り後には之が弧を説く、寇するに匪ず、婚媾せん、往き雨に遇へば卽ち吉なり。

ト ䷦

蹇は難なり、足進む能はざる意なり、卦德外險にして內止る、險に遇ふて止る意あり、故に名く、全卦多くは蹇難のことを説く。

蹇利西南、不利東北、利見大人、貞吉

蹇は西南に利あり、東北に利あらず、大人を見るに利あり、貞にして吉なり。

初六往蹇、來譽

初六往けば蹇來れば譽あり。

六二王臣蹇々、匪躬之故

六二王臣蹇々たり、躬之故に匪ず。

九三往蹇、來反

九三往けば蹇み來れば反る。

六四往蹇來連

六四往けば蹇み、來れば連なる。

六五大蹇、朋來

六五大に蹇み、朋來る。

上六往明來、碩吉、利見大人

上六往けば蹇み、來れば碩なり、吉なり、大人を見るに咎あり。

チ ䷮ 困

困は窮躬の意なり、彖傳に據れば九二、九四、九五九に陰の爲めに蔽はるゝが故に困と名く、故に多く、困厄に處するの道を説く。

困、亨、貞、大人吉、无咎、有言、不信

困は亨る、貞、大人は吉なり、咎なし、言有り信ぜられず。

初六臀困株木、入于幽谷、三歲不覿

初六臀株木に困しむ、幽谷に入る、三歳覿ず。

九二困于酒食、朱紱方來、利用亨祀、征凶无咎

九二酒食に困しむ、朱紱方に來る、亨祀を用ゆるに利し、征ば凶、咎なし。

六三困于石、據于蒺藜、入于其宮、不見其妻、凶

六三石に困しみ、蒺藜に據る、其宮に入り、其妻を見ず、凶なり。

九四來徐々、困于金車、吝有終

九四來ること徐々たり、金車に困しむ、吝なれども終り有り。

九五劓刖、困于赤紱、乃徐有說、利用祭祀、

九五劓刖、赤紱に困しむ、乃ち徐やく說ぶこと有り、祭祀を用ゆるに利し。

上六困于葛藟于臲卼曰動悔、有悔、征吉

上六葛藟に臲卼に困しむ、曰に動て悔ゆ、悔ること有り、征けば吉なり。

リ　䷽　小過

小過は小なる者過るなり。二陽四陰、陰を小となす。故に名く。而して多く逆境に處するの道を說く。

小過亨、利貞、可小事、不可大事、飛鳥遺之音、不宜上、宜下、大吉

小過は亨る、貞に利あり、小事に可なり、大事に可ならず、飛鳥之が音を遺す、上るに宜しからず、下るに宜し、大吉なり。

初六飛鳥、以凶

初六飛鳥以て凶なり。

六二過其祖、遇其妣、不及其君、遇其臣、无咎

六二其祖を過ぎて其妣に遇ふ、其君に及ばず、其臣に遇ふ、咎なし。

九三弗遇防之、從或戕之、凶

九三之を防ぐに過ぎず、從て或は之を戕ふ、凶なり。

九四无咎、過遇之、往厲、必戒、勿用永貞

九四は咎なし、之に遇ふに過ぎず、往けば厲し、必ず戒めて永貞を用ふる勿れ。

九五密雲不雨、自我西郊、公弋取彼在穴、

九五密雲雨らず、我西郊よりす、公弋して彼の穴に在るを取る。

上六弗遇過之鳥飛離之凶是謂災眚

上六過はずして之に過る、飛鳥之に離る、凶なり、是を災眚と謂ふ。

又 ䷾ 未濟

未濟とは未だ用をなさゞるなり。火上に在りて水下に在り。上下交らず。用を濟さゞる所以なり。故に逆境となす。

未濟亨、小狐汔濟、濡其尾、无攸利

未濟は亨る、小狐汔んど濟る、其尾を濡す、利する攸なし。

初六濡其尾、吝

初六其尾を濡す、吝。

九二曳其輪、貞吉

九二其輪を曳く、貞なれば吉。

六三未濟征凶、利涉大川

六三未濟征けば凶、大川を涉るに利し。

九四貞吉、悔亡、震用伐鬼方、三年、有賞于大國

九四貞なれば吉、悔亡ぶ、震用つて鬼方を伐つ、三年大國に賞有り。

六五貞吉、无悔、君子之光、有孚、吉

六五貞なれば吉、悔なし、君子の光り孚あり吉。

上九有孚于飲酒、无咎、濡其首、有孚、失是

上九飲酒に孚有り、咎なし、其首を濡す孚有り是を失ふ。

第十七節　進退

進退は乃ち處世なり。然りと雖も又多少の異なる所あり。進むが是か退くか否か適として之を敎へるもの之を進退といふ、列する所以なり。

イ ䷀ 乾

此卦は上下共に乾故に乾と名く。卦の性質は最も宜し。故に元亨利貞と曰ふ。潛龍より以上飛龍に至る迄各其位に當りて其取るべき所の方針あり。然れども亢龍は則ち必す悔あるべき者。初九は潛龍の位置なり。未だ用ふべきの時にあらす。九二は大に見はる。恰も見龍の田に在るが如し。九五の大人を見て之を行ふに宜し。九三は其位置漸く高きが故に戒愼恐懼すべし。則ち危しと雖も咎なし。九三

善く此任に堪ふ。九四は剛を以て柔に居る、剛柔其宜きを得。故に活動すると其宜きを得。九五は剛中正の人君飛龍の天に在る如し。九二の大人を見て之を用ふるに利し。上九は陽の極、之を譬ふれば亢龍の悔ある如し、用九とは陽の德を應用するといふ意なり、陽即ち乾の德を應用せんとするものは群龍の首なきが如くすべしとなり陽に戒する所は其の亢ぶらずして謙遜するに在り。

乾元亨利貞

乾は元に亨る、貞に利し。

初九潛龍勿用

初九潛龍用ふる勿れ。

九二見龍在田、利見大人

九二見龍田に在り、大人を見るに利し、

九三君子終日乾々、夕惕若、厲无咎

九三君子終日乾々在り、夕まで惕若たれば厲けれども咎なし。

九四或躍在淵、无咎

九四或は躍つて淵に在るも咎なし。

九五飛龍在天、利見大人

九五飛龍天に在り、大人を見るに利し、

上九无龍有悔

上九は无龍悔あり。

用九見羣龍无首吉

用九は羣龍の首なきを見るなり。

䷁ 坤

此卦上下共に坤、故に名けて坤と曰ふ。坤は婦人の德なり。貞順是れなり。君子此德を體する者、須らく牝馬の貞順にして重きに堪ふるが如くなるべし。婦人は男子に伴ひ、臣は君に從ふべき者貞順に戒むる所は阿附に在り、朋黨に在り永く之を維持し得ざるに在り。先づ之を明かにす。坤は婦人の德なる故に易に在りては惡き意味ありとなし此惡き方面のみを觀察して以て坤卦の辭を爲せり。初六は實に始めての陰なり。之を戒むる切なる所以なり。六二は柔を以て陰に居り、且つ

中を得。坤の美德を遺憾なく發揮したる者六三は柔を以て陽位に居る。妄舉輕動の嫌ひあり。故に得て之を戒む。柔を以て陽位に居る。故に章を含むといふ。而して貞正にすべく、且つ王事に從ふて功あるも之を君主に歸するが如くすべきをいふ。六四は柔を以て陰位に居るもの。故に過柔の性。恰も囊口を括して咎譽の言ふべきなき如し。六五は柔を以て陽位に居るの君主。中に美德を含む恰も黃裳の美次第に外に見はるゝ如し。上六は陰にして高きに過ぐるもの、必ず陽と爭ふ。「龍戰于野」といふ所以。用六は易の陰を應用するを言ふ戒むる所は氷く貞を守るに在り。

坤元亨利牝馬之貞、君子有攸往、先迷後得主利西南得朋、東北喪朋安貞吉。

坤は元に亨る、牝馬の貞に利し、君子往く所有り、先づときは迷て後るゝときは主を得、西南朋を得、東北朋を喪ふに判し、貞に安んずれば吉。

初六履霜堅氷至

初六霜を履むで堅氷至る。

六二直方大不習无不利

六二直方大なり、習はずして利からざるなし。

六三含章、可貞、或從王事、无成有終

六三章を含んで貞にす可し、或は王事に從ふ、成すことなければ終り有り。

六四括囊、无咎无譽

六四囊を括す、咎なく譽なし。

六五黃裳元吉

六五黃裳元吉、

上六龍戰于野、其血玄黃

上六は龍野に戰ふ、其血玄黃なり。

用六利永貞

用六は永貞に利し。

八　履　☱☰

履は禮と訓ず。古音相通ずるなり。又履踐の意あり。卦象天上澤下、上下尊卑の分明かなり。禮の意あり。六三一陰を以て三陽の後に接す。其危きこと虎尾を履むに似

たり。故に言ふと然り。此卦多くは危地に於る實踐處世の道を說く。

初九は其集に安んじ居るが如し。此くの如くして往く時は咎なし。九二は剛中にして上に正應なし。其志獨行に在り。故に坦々の道を行くが如し。卽ち出人の貞なるものなり。六三は不中不正、輕舉妄動し易き者。恰も眇者の見んとして僅かに視、跛者の歩まんとして僅かに歩むが如し。其危きこと虎尾を履むに似たり。傷害せらるゝに至る。陰と雖も侮る可らざると武人の大名になる如し。而かも其終を保つ可らず。九四は謹むを知るの人。虎尾を履むが如く危しと雖も愬々として恐るゝことを知るが故に終に吉なるを得。九五は陽剛中正の君、而かも履の時に當るが故に果斷に過るの意あり。之を「夫履」と曰ふ。貞なれども厲き所以なり。

履虎尾、不咥人、亨

虎の尾を履む、人を咥はず、亨る。

初九、素履、往、无咎

初九素履す。往けば咎なし。

九二履道坦々、幽人貞吉

九二道を履む坦々たり、幽人貞なれば吉。

六三眇能視、跛能履、履虎尾、咥人凶、武人爲于大君

六三眇能く見、跛能く履む、虎の尾を履む、人を咥ふ、凶、武人大君と爲る

九四履虎尾、愬々、終吉

九四虎尾を履むこと愬々たり、終に吉。

九五夬貞、厲

九五夬して履む貞なれども厲し。

上九視履考祥、其旋元吉

上九履を視て祥を考ふ、其れ旋れば元吉なり。

䷭ 升

升は進なり。彖傳に據れば此を升と名けし所以は三陰上に升りしを以てなり。此卦多くは升進を主として處世の道を論す。九二と六五とを主として之を考ふるに九二は巽順の體に居りて六五の人君に逢ふ。恤ふると勿れ。大に進んで爲すあるべきなり。

初六は巽順の主體たり。躬に此德を體して以て上升せんとす。大に吉なる所以なり。九二は陽剛にして中に居る。心に孚あるもの。六五に仕ふる須らく儉朴を事とすべし。乃ち。咎なきを得るなり。九三は過剛の嫌あれども時や升なる故、升るに良き者。故に虛邑に升るの象あり。九四は陽を以て陰位に居る。順にして正きを得、而して天下之に歸するの象あり。恰も文主の岐山に享して周の盛大を致せしが如し。六五は其位正からず故に貞なれば吉なり。唯當さに九二の賢人の補助を得て完かるべし。恰も高きものゝ階に升るが如し。上六は陰を以て上の極に居る。進むを知つて退くを知らず。昏冥にして升るなり不可なりと雖も其の心を貞にして息まざる時は卽ち可なりと曰ふなり。

升元亨用見大人、勿恤、南征吉

升は元に亨る、大人を見るに用ふ、恤ふる勿れ、南征して吉なり。

初六允升大吉

初六允升す大吉なり。

九二孚乃利用禴、无咎

九二孚あり乃ち禴を用ふるに利し、咎なし。

九三升虛邑

九三は虛邑に升る。

六四王用亨于岐山、吉无咎

六四王用つて岐山に亨す、吉にして咎なし。

六五貞吉升階

六五貞なれば吉、階に升る。

上六冥升、利于不息之貞

上六冥升す、息まざる貞に利し。

木 ䷳ 艮

此卦上下共に艮。故に名けて艮と曰ふ。艮は止まる意。故に全卦人の方さに止まる所に付て其善惡を論ず。其背に艮て其身を獲ざるは其身を私せざるなり。其處に行て其人を見ざるは人我の見なきなり。此の如くして廓然大公、物來りて順應し、動て動くことなく、靜かにして靜かなることなし。初六は陰柔にして低きに止まる。

咎なき所以、只だ其永く然るべきを戒む。趾は最下を云ふ。六二は陰柔中正、九三の剛を承けて之に從ふ。九三は過剛の人、來り拯ふとなし。情意の相投せざる如何する能はず其心快からざるあり。恰も九三の爲す所に隨ふのみ。恰も腓の足に從て動くが如し。九三は過剛不中にして下の上に止まる。是れ自ら是とするもの、上下阻隔す。而して其心を篋するに至る。其限に艮まるとは腰に止まるの意、身體の中部を言ふなり。六四は柔を以て陰位に居る。其止る處に止る。咎なき所以なり。六五は其陽位に居るは悔あるべきが如くなれども柔中なるが故に悔亡ぶるを得艮に口の象あり故に艮其輔と曰ふ上九は陽剛を以て終りに居る。其止るや其處を得。艮るに敦しといふ所以なり。吉是れより大なるなし。

艮其背、不獲其身、行其庭、不見其人、无咎

其背に艮る、其身を獲ず其庭に行いて其人を見ず、咎なし。

初六艮其趾、无咎、利永貞

初六は其趾に艮る咎なし、永貞に利し。

六二艮其腓、不拯其隨、其心不快

六二其腓に艮る拯かならざれば其れ隨ふ、其心快からず。

九三艮其限、列其夤、厲、薰心

九三其限に艮る、其夤に列す、厲しければ心に薰ず。

六四艮其身、无咎

六四其身に艮る咎なし。

六五艮其輔、言有序、悔亡

六五其輔に艮る言に序あり、悔亡ぶ。

上九敦艮吉

上九は艮るに敦し、吉。

䷴ 漸

漸は進むの意、卦象長女少男の上に在り。漸を以て進むの意あり。卦德止まりて柔順なり。俄かに進まざる貌。故に漸と名け。人間進退の道を說けり。長女を以て少男の上に居る。正しき道なり。正しき道の女は嫁して吉を得。初六は進むの微なる者。故に于(水涯)に進むといふ。小子の如きものゝ進むと故危くして言葉の禍あさ

ども本來微なる故に咎なきを得。六二は中正の爻なり。故に鴻の磐に上り居るの感あり。中正の道を以て進むるが故に飲食を和樂するを得。衍々は樂む貌。九三は過剛不中の人、之を以て進む。其宜きを得ざるは固よりなり。鴻は水鳥なり。陸を行くは道にあらず。夫は外に征いて歸來せず。婦は孕んでも育することを知らざる如し。凶なる所以なり。去れど二過剛の一人故寇を禦ぐに宜しとなす。六四は柔順の人、進むこと少し。故に其位置は高くして鴻の木に止まりしが如くなるも桷(横平の枝)を得て安んずることもあるべし。九五は陽剛の君下二に應ず。三四のために阻まる。故に三歲孕まずといふ。去れど終に二五の正しきに應爻に勝つ能はず。吉なるを得。上九は陽剛を以て大に進めるもの、鴻の逵(雲井)に飛ぶの觀あり。聖人の其一身を善くするものなり。其羽を以て儀標となすべし。吉なる所以なり。

漸、女歸吉、利貞

漸は女歸いで吉なり、貞に利し。

初六鴻漸于干、小子厲有言、无咎

初六鴻于に漸す、小子厲くして言有るも咎なし。

六二鴻漸于磐飲食衎々、吉

六二鴻磐に漸す、飲食衎々たれば吉。

九三鴻漸于陸、夫征不復、婦孕不育、凶、利禦寇

九三鴻陸に漸す、夫征して復らず、婦孕どもば育まず、凶なり、寇を禦ぐに利し。

六四鴻漸于木、或得其桷、无咎

六四鴻木に漸す、或は其桷を得、咎なし。

九五鴻漸于陵、婦三歲不孕、終莫之勝、吉

九五鴻陵に漸す、婦三歲孕まず、終に之に勝る莫し、吉。

上九鴻漸于陸、其羽可用爲儀、吉

上九鴻陸に漸す、其羽用て儀と爲す可し、吉。

卜　䷼　**中孚**

此卦は中に二陰あり、己れを虛ふするの形あり。故に中孚といひ、以て中孚の以て人を感ずる所以を說く。

中孚豚魚吉利涉大川利貞

中孚は豚魚吉、大川を涉るに利し貞に利し。

初九虞吉、有他、不燕

初九虞なれば吉、他有れば燕せず。

九二鳴鶴在陰、其子和之、我有好爵、吾與爾靡之

九二鳴鶴陰に在り、其子之に和す、我に好爵有り、吾と爾と之を靡す。

六三得敵、或鼓或罷、或泣或歌

六三敵を得て或は鼓し、或は罷め、或は泣き、或は歌ふ。

六四幾望、馬匹亡无咎

六四望に幾し馬匹亡ぶれば咎なし。

九五有孚攣如、无咎

九五孚有り攣如たれば咎なし。

上九翰音登于天、貞凶

上九翰音天に登る、貞なれば凶。

チ ䷝ 離

上下共に離故に名あり。而して多く進退の理を説く。

離利貞亨畜牝牛吉

離は貞に利し亨る牝牛を畜ふ吉なり。

初九履錯然、敬之、无咎

初九履ること錯然たり、之を敬すれば咎なし。

六二黄離元吉

六二黄離元吉

九三日昃之離、不鼓缶而歌、則大耋之嗟、凶

九三日昃の離、缶を鼓して而して歌はざれば則ち大耋の嗟あらん、凶なり。

九四突如、其來如、焚如、死如、棄如

九四突如として其れ來如たり、焚如たり、死如たり、棄如たり。

六五出涕沱若、戚嗟若、吉

六五涕を出すこと沱如たり、戚むこと嗟如たれば吉なり。

上九王用出征、有嘉、折首獲匪其醜、无咎

上九王用つて出て征す、嘉こと有り、首を折て獲ること其醜に匪ば、咎なし。

第十八節　社會救濟

古代公德の進歩せざる時と雖も一般に他人に對する人情の存在せしことは疑ふ可らず。乃ち今之れに類する者を擧げて以て古人の思想の一般を見んと欲す。

イ　井

此卦は下を入となし、上を水となす。井の象なり。井は人を養ふ所以、故に多く人を養ふの義を取る。

井、改邑不改井、无喪、无得、往來井井、至、亦未繘井、羸其瓶、凶

井は邑を改め、井を改めざれば喪ふなく得るなし、往來井を井とし、訖んど至るも、亦未だ井を繘せず、其瓶を羸、凶なり。

初六井泥、不食、舊井无禽

初六井泥して食はず舊井に禽なし。

九二井、谷射鮒、甕敝漏

九二井谷、鮒を射る、甕敝れて漏る。

九三井渫不食、爲我心惻、可用汲、王明並受其福、

九三井渫して食はず、我心の惻を爲す、用て汲む可し、王明かに並び其福を受く、

六四井甃、无咎、

六四井甃咎なし、

九五井冽寒泉食、

九五井冽にして寒泉食ふ。

上六井收勿幕、有孚、元吉

上六井收めて幕するかなれ孚有れば元に吉なり。

ロ　革

此卦は上を澤となし下を火となす。上下互に相ひ克せんとす。革の意あり故に多く改革のことをいふ。

革巳日乃孚、元亨、利貞、悔亡

革已むる日孚あり。元に亨る、貞に利し悔亡ぶ

初九鞏用黄牛之革

初九鞏は黄牛の革を以てす。

六二已日乃革之、征吉、无咎

六二已る日乃ち之を革す征けば吉、咎なし。

九三征凶、貞厲、革言三就、有孚

九三征けば凶なり、貞なれば厲し、言を革する三就孚有り。

九四悔亡、有孚、改命吉

九四悔亡ぶ、命を改むるに孚有れば、吉。

九五大人虎變、未占有孚

九五大人は虎變す、未だ占はずして孚有り。

上六君子豹變、小人革面、征凶、居貞、吉

上六君子は豹變す、小人は面を革む、征けば凶、貞に居れば吉。

八 ䷱ 鼎

此卦は其形鼎に似たり、下一陰は足、中三陽は胴、五一陰は耳、上一陽は鈎に似たり。鼎は人を食ふ所以、故に多く養ふの意をいふ。

鼎元亨

鼎は元に亨る。

悔六、鼎顚趾、利出否、得妾以其子、无咎

初六鼎は趾を顚し、否を出すに利し、妾を得、其子を以てす、咎無し。

九二鼎有實、我仇有疾、不我能卽吉

九二鼎實あり、我仇疾有り、我に卽する能はず、吉。

九三鼎耳革、其行塞、雉膏不食、方雨、虧悔、終吉

九三鼎耳革る、其行塞る、雉膏あれども食はず、雨ふらんとして悔を虧く、終に吉。

九四鼎折足、覆公餗、其形渥、凶

鼎足を折り、公の餗を覆へす、其形渥たり、凶。

六五鼎黄耳金鉉、利貞

六五、鼎黄耳、金鉉、貞に利し

上九、鼎玉鉉、大吉、无不利

上九、鼎玉鉉、大吉利しからざるなし。

第十九節　努　力

努力の人生に於るや大なり。列する所以なり。

イ ䷢ 晉

火地上に見はるを晉となす。晉は進なり。進む所以の者、最も注意せざる可らず。

晉康侯、用錫馬、蕃庶、晝日三接

晉康侯用て馬を錫ふ、蕃庶なり、晝日に三たび接す。

初六、晉如、摧如、貞吉、罔孚、裕、无咎

初六晉如たり、摧如たり、貞なれば吉なり、孚とせらるゝこと罔し、裕なれば咎なし。

六二、晉如、愁如、貞吉、受茲介福于其王母

六二晉如たり、愁如たり、貞なれば吉なり、茲の介なる福を其王母に受く。

六三、衆允、悔亡

六三衆允にす、悔亡ふ。

九四、晉如、鼫鼠、貞厲

九四晉こと鼫鼠の如し、貞なれども厲し、

六五、悔亡、失得勿恤、往吉、无不利

六五悔亡、失得は恤ること勿れ、往ば吉なり利せざることなし。

上九、晉其角、維用伐邑、厲吉、无咎、貞吝

上九晉其角、維用て邑を伐ときは厲けれども吉、咎なし、貞なれば吝なり。

ロ ䷡ 大壯

陽漸く進む。其勢大壯となす。壯んなるに道あり。列する所以なり。

大壯利貞

大壯貞に利し。

初九、壯于趾、往凶、有孚

初九趾に壯なり、往けば凶なり、孚有り。

九二往吉

九二往吉。

九三小人用壯、君子用罔、貞厲、羝羊觸藩、羸其角

九三小人は壯を用ゆ、君子は罔を用ゆ、貞なれば厲し、羝羊藩に觸れて、其角を羸しむ。

九四貞吉、悔亡、藩亡、藩決、不羸、壯于大輿之輹

九四貞吉、悔亡ぶ、藩決て羸しまず、大輿の輹に壯なり。

六五喪羊于易、无悔

六五羊を易に喪ふ、悔なし。

上九羝羊觸藩、不能遂、无攸利、艱則吉

上九羝羊藩に觸れて、遂むこと能はず、利する攸なし、艱なれば則ち吉なり。

第二十節　修養

修養は處世の要諦なり。先王修養の法に於て最も力を盡くす。

イ ䷓ 觀

此卦は二陽上に在り四陰下に在り、四陰二陽を觀望す、故に多く觀の意をいふ。

列する所以なり。

觀盥而不薦、有孚顒若

觀は盥して而して薦せず、孚有りし顒若たり。

初六童觀、小人无咎、君子吝

初六童觀す、小人は咎なし、君子は吝なり。

六二闚觀、利女貞

六二闚觀す女の貞なるに利し。

六三觀我生、進退

六三我生を觀て進退す。

六四觀國之光、利用賓于王

六四之光を觀る王に賓たるに用ゆるに利し。

九五觀我生君子无咎

九五我生を觀る君子は咎なし。

上九觀其生君子无咎

上九其生を觀る君子は咎なし。

☳ 震

上下共に震故に名あり。咎爻震ふの意あり故に多く震動の意をいふ。

震亨震來虩々後笑言啞々震驚百里不喪匕鬯

震は亨る震來つて虩々たり後には笑言啞々たり震百里を驚かす匕鬯を喪はず。

初九震來虩々後笑言啞々吉

初九震來つて虩々たり後には笑言啞々たり吉。

六二震來厲億喪貝躋于九陵勿逐七日得

六二震來りて厲し貝を喪ふを億ふ九陵に躋る逐ふこと勿れ七日にして得ん。

六三震蘇々震行无眚

六三震蘇々たり震行けば眚なし。

九四震遂泥

九四震遂に泥す。

六五震往來厲億无喪有事

六五震往來すれば厲し事有るを喪ふ无し。

上六震索々視矍々征凶震不于其躬于其鄰无咎婚媾有言

上六震は索々として視矍々として征すれば凶震其躬に于てせず其隣に于てすれば咎无し婚媾には言有り。

☴ 巽

上下共に巽故に名あり。

巽小亨利有攸往利見大人

巽は小しく亨る往く所あるに利し大人を見るに利し。

初六進退利武人之貞

初六進退は武人の貞に利し。

九二巽在牀下、用史巫、紛若、吉、无咎

九二巽は牀下に在り史巫を用う紛若たり吉にして咎无し。

九三頻巽吝

九三頻りに巽す吝なり。

六四悔亡、田獲三品

六四悔亡ぶ、田して三品を獲。

九五貞吉、悔亡、无不利、无初有終、先庚三日、後庚三日、吉

九五貞なれば吉にして悔亡ぶ利からざる无し、初め无くして終り有り、庚に先つ三日、庚に後るゝ三日、吉なり。

上九巽在牀下、喪其資斧、貞凶

上九巽牀下に在り、其資斧を失ふ、貞なれども凶。

䷗ 復

復は恢復の意。一陽下に來復せるが故に名く。而して元氣恢復の意を說く。列する所以なり。

復、亨、出入有疾、朋來无咎、反復其道、七日來復、利有攸往

復は亨る、出入疾なし、朋來る、咎なし、反復其れ道す、七日にして來復す往く攸有るに利し。

初九、不遠復、无祇悔、元吉

初九遠からずして復る悔に祇ることなし、元吉なり。

六二休復、吉

六二休復す吉なり。

六三頻復、厲、无咎

六三頻に復る、厲きも咎なし。

六四中行、獨復

六四中行獨り復る。

六五敦復、无悔

六五敦復す、悔なし。

上六迷復、凶、有災眚、用行師、終有大敗、以其國君、凶、至于十年、不克征

上六復に迷ふ、凶、災眚有り、用て師を行る、終に大敗有り、其國君を以て凶、十年に至るも征することを克はず。

ホ ䷟ 恆

此卦巽にして動く、故に能く恆なるべしとなす。孔子曰はく、吾れ未だ恆あるものを見ずと、孟子曰はく恆心と、恒の大なるを見るべし。列する所以なり。

恒亨、无咎、利貞、利有攸往

恒亨る、咎なし、貞に利し、往く攸有るに利し。

初六、浚恒、貞凶、无攸利

初六恒に浚し、貞なれども凶なり、利する攸なし。

九二悔亡、

九二悔亡ぶ。

九三不恒其德、或承之羞、貞吝

九三其德を恒にせず、或は之が羞を承く、貞なれども吝。

九四田无禽

九四田に禽なし。

六五恒其德、貞、婦人吉、夫子凶

六五其德を恒にす、貞なり、婦人は吉なり、夫子は凶なり。

上六振恒凶

上六振て恒にす凶。

ヘ ䷄ 需

需は待つの意。卦象天上に水あり。雨ふらんとするの象。雨を待つの意あり。故に名く。而して多く期待の意を説く。内に陽剛の德を懷きて困難に逢ふ。孚あるもの故に大に亨るを得べし大川を涉るに利し。凡て大川を涉るは事業を敢行するをいふ。初九は猶困難に遠し。郊(野外曠遠の地)に需つの意あり。恒を用ひ妄動なきを要す。左すれば咎なしとなす。九二は少しく困難に近く、其の形沙に需つが如く、小く言語の禍ありと雖も終に吉なるを得。九三は愈近く而して過剛不中の人物、終に寇害の至るを致すとなり。六四は最も難に近きて血傷せらるゝが如しと雖も

柔順なるもの故其活路を發見するを得べしとなり。穴より出づといふ所以なり。
九五は陽剛の天子なれども時や需なり。故に酒食して何等なすなく以て時機の到來を待つべし。卽ち吉なるを得。上六は險難の極に居る故に穴に入るの象あり。殊に下三陽の進み來るあり。唯だ隱忍して之を敬し、僅かに其災を免るゝを得るのみ。

需有孚、光亨、貞吉、利涉大川
　需は孚有りて光り亨る貞吉なり。大川を涉るに利あり。
初九需于郊、利用恒、无咎
　初九郊に需つ恒を用ゆるに利あり、咎なし。
九二需于沙、小有言、終吉
　九二沙に需つ、少しく言有り、終に吉なり。
九三需于泥、致寇至
　九三泥に需つ寇の至るを致す。
六四需于血、出自穴
　六四血に需つ穴より出づ。
九五需于酒食、貞吉
　九五酒食に需つ、貞吉
上六入于穴、有不速客三人來、敬之、終吉
　上六穴に入る、速かざるの客三人來るあり、之を敬すれば終に吉なり。

第二十一節　六十四卦分類表

今列擧したる所を表示すれば左の如し。表の順序は必ずしも拘泥せず。

處世、謙、賁、遯、无妄、萃、頤、節、大過、損、益、
順境、夬、大有、豫、解、泰、豐、兌、漁、旣濟、臨、
愛撫　比
交際　同人、隨、咸、姤、
敎育　蒙
家庭　蠱、家人、

結婚　歸妹
旅行　旅
牽制　小畜、大畜
刑罰　噬嗑
戰爭　師
訴訟　訟
逆境　屯、否、剝、習坎、明夷、睽、蹇、困、小過、未濟、
進退　乾、坤、履、升、艮、漸、中孚、離、
社會救濟　井、革、鼎、
努力　晉、大壯、
修養　觀、震、復、巽、恒、需、

表の順序は必ずしも拘泥せず。以上列擧する所は余自身、意に滿たざる所少からず。何んとなれば卦辭と爻辭とは全然其の趣きを異にするものなり。例へば噬嗑の象は獄を析くをいへども、爻辭は之れに及ばざる如し。或は一卦の中種々の意義を包含し何れに屬せしめて可なるや明かならざるものあり。結婚のことは歸妹一卦に限るにあらず。他の卦の爻辭にも多く之を發見するを得るなり。乃ち余が分類の不完全なることは余自身之を認む。且つ處世と修養と如何に相ひ異なるか。易六十四卦三百八十四爻全體が既に處世にあらざるか、處世と修養と如何に區別すべきか。乃ち此等の疑問は何人の腦中にも多く起る所なるべく、而して余自身亦嘗て爻辭を卦辭より離して以て一種の分類をなせり。今列擧せる所と大同なりと雖も小異の寧ろ注意すべきものあり。乃ち左に列擧す。若し之を取りて以て前の分類を見る時は猶又其の不完全なるものあるを知るべし。

▲處世　謙、遯、賁、无妄、萃、上六頤、節、大過、損、益、上九鼎、離、初九六二九三
▲順境　泰、(時勢)大有、豫、解、益、夬、豐、兌、渙、既濟、
▲愛撫　比、臨、大畜、六五姤、九五　萃、九四九五　離、上九六五
▲交際　同人、隨、大畜、九三　咸、損、六三　姤、離、九四
▲教育　蒙
▲家庭　小畜、九三上九　蠱、剝、家人、漸、九三

▲結婚　蒙、九二九三　泰、六五　睽、上九　歸妹、姤、漸、
▲旅行　旅、
▲牽制　小畜、大畜、
▲刑罰　噬嗑、
▲戰爭　師、
▲訴訟　訟、
▲逆境　屯、需、否、剝、習坎、明夷、睽、蹇、困、小過、未濟、
▲進退　乾、坤、履、泰、初九九二　升、艮、漸、中孚、
▲社會教濟　井、革、鼎、六五上九
▲努力　晉、大壯、
▲修養　觀、震、復、巽、恒、升、六五　井、

余は分類の精緻ならんことを期せず。如何んとなれば六十四卦の性質として三百八十四爻との關係上、到底精緻なる分類を許すことなければなり。然りと雖も、六十四卦の意味を理解し、之をして一目瞭然たらしめんには、人生を其方面より觀察して、六十四卦を之れに配當するものとして解釋するの外なきなり。然らざれば六十四卦の意味は到底近世的に解釋せらるべからざるなり。分類の精密は期す可らず。但だ其の精神を取る可なり

第二十二節　易の文

易の經文の解し難きは第一編に於て述べたる如く、又本章引ける六十四卦を見れば明かなり。易の文章は如何樣にも解釋することを得るもの多し。例へば

貞凶
貞吉

などの句は至る處に發見せらるれど之を以て「貞なれば凶」と讀むべく貞なれども凶とも讀むべし。如何樣にも之を解釋し得べきもの少からず。又貞吉も同じく「貞なれば吉」とも「貞にして吉」とも讀むべし。之を一定せんとしても殆んど自己の見る所を以てするのみ。故に余は多く之れに拘泥せざるなり。又利の字も「利す」とも讀むべく「利し」とも讀むべし。何れにても文意に害なし。是れ亦拘泥せず。其他

初九は潛龍用ふる勿れ」といふか「初九潛龍用ふる勿れ」といふか、二者單に慣習の異なるにあるのみ。故に又拘泥せざるなり。要するに易の文章は極めて解し難く、且つ緩慢にして、多種多樣の意味をも發見するを得べきなり。殊に卦名の原因に就いては彖は多く剛柔來往を以て義を取れども其外に卦德と卦象とは大に參考とせざる可らざるなり。而して其名も亦決して之れ以外に附す可らざるにあらず。☲☴風火を家人と言ひながら☲☲を睽といふは義に於て一貫せざるなり。長女と中女との集合と中女と少女との集合、何の異なる所かある。易を說くものは易の道は變通自在端睨すべからざるものと稱すれども決して然るにはあらざるなり。其他卦名の因りて起る所、到底解釋す可らざるもの多し。但だ起りしなど思はるゝ點を發見すれば其れにて滿足せんのみ。

第二十三節　上下經の八卦數

上下經に於る八卦の數は左の如し。

上經

乾	一二	兌	四	雜	六
震	七	巽	四	坎	八
艮	七	坤	一二		

下經

乾	四	兌	一二	雜	一〇
震	九	巽	一二	坎	八
艮	九	坤	四		

上經に多きは乾坤にして下經に多きは兌巽なり。是れ亦多少の意味あるが如し。

陰陽の爻數を案ずるに

	上經	下經
陽にして陰位に居るもの	四三	五五
陰にして陽位に居るもの	四七	四九

但だ上經は三十卦、下經は三十四卦なる故に其差は一概に過大視すべからざるのみ。

第二十四節　經解

古來六十四卦を解釋したる者は皆各一卦に就て之が註釋を施すに他ならず、卽ち其文字を釋し其義を取り、以て其意を貫通せしめんとするに過ぎず、然るに其中に就て注意すべき點は左の如し。

一、一卦全體は卽ち時勢を示し、各一爻は其時勢に處する所以の位置又は人を言へるものなるが故に此意義を最も抽象的に示さゝるべからず。

二、然るに易の文は恰も謎の如く殆ど解釋すべからざるものあり、從て其前後の意味をして聯絡あらしめんには自ら牽强附會の跡あるを免れず。されば古來諸家の註釋も又自ら此等の標準に依りたるものにして、而して孰れも牽强附會の跡あるを免れず、然れども其中に就て特に特色ある所のものを擧げんか、左の如し。

一、明の來知德は卦綜を以て易の六十四卦は相ひ互に配列せられたるものなりとなせり、而して其各爻の辭を解するや各卦象に關係ありとなす、然かも卦象は變爻に由りて之を求めることとすらありて、徹頭徹尾周易の文字を以て卦象と關係ありとなすことに依りて、最も猛烈なる特色を有することは第一編に於て述べたるが如し。若し此說の如くなる時には、卽ち周易上下經六十四卦三百八十四爻に繫れる卦辭爻辭は皆卦象と關係あるものにして、從て六十四卦を擧ぐれば卽ち一切の辭は悉く之と聯關して生じ來ること恰も茅の根の次第に連續して離れざるが如し。此種の解釋は多少は如何なる學者と雖も皆悉く之を行へるなりと雖も然かも來知德に於て特に其特色を發揮すとなす。

二、日本の東岡、河田孝成は周易新疏を著はし三百八十四爻の辭を解するに當り一々卦變に依りて之を解釋せんとなせり今其一例を擧げんか

初九潛龍勿用

之を解して曰く

潛龍用ゆるなきは周公繫ぐる所の爻辭なり、天下の動に效ふ者なり、筮して

乾に遇ふ者唯初九を得其餘皆七なれば則ち乾姤に之く、下を巽となす、巽を入となし見ざるとなす、稱して而して隱れるとなす、龍は四靈の一なり剛にして最下にあり。而して隱入見ざるに之く、故に其象を潛龍となす人に於ては賢にして微下に隱るゝとなす云々、

卽ち初九を變するものとすれば、則ち龍となるが故に潛の意なり、卽ち潛龍の潛は卑となすなり、其「他九二の見龍田にあり」を解するも九二か變ずるものとすれば、卽ち下離となり、離に見の象あるが故に見龍となすと也、河田孝成氏は斯の如くして各三百八十四爻を解するに當り一々其爻が變化する時は、卽ち他の卦に之くものとして以て其意味を發見せんとす、亦一見識と云ふべきなり。

三、伊藤東涯は周易經翼通解を著はし、最も平易に六十四卦三百八十四爻の意味を發揮せり、他に何等の特色なしと雖も、其寧ろ通俗的なる所に於て其著書の見るべきあり、卽ち三百八十四爻の各一に就て其時勢に當て其位置に居る吉凶の悔吝の別るゝ所以を說明せり、之れ亦一見識なりと云はざるべからず。

四、周易述義は其通俗的なる所に於て亦其特色を見る、學問上に於ては特に言ふべきものあることなし。

五、岡白駒の周易解も亦河田孝成の新疏の如く變爻に就て意味を取る所あれど然かも其文字の上に於て多少の特色を發揮せるものなり、咸の初六を解するに曰く

咸は感なり、感は六爻皆應ず、故に感ずるなり、感に深淺なし、人身を以て喻を取る、渭ふ所近く之を身に取るなり、拇は足の大指なり、初六は咸の初にて感の名を成さず、拇に感ずるの象も、拇は感ずと雖も未だ移らざるなり、只志あるのみ、姤變じて離となる、止て而して下に麗く、動かざるものなり、吉凶は動に生ず未だ動かず故に吉凶を言はず

と、卽ち茲に麗の一字を下せるは初六の變せるものとして離の卦を見る、離の卦より思ひ付きたるものなり。

六、程傳は理を以て易を解し、最も流暢にして解し易しとなす、近世に於て一大特色あるものなり。

七、朱子の本義は、卽ち全く占筮の上より解釋したるものなり。故に程傳と共に對して以て其特色を見る。

王弼の易を解するや老子を以てすと云ふと雖も、然かも卦象に依りて能く其義を得たることは今言ふを須ひず、其他諸家の說は孰れも卦象より卦辭爻辭を解釋せんとする所に於ては卽ち大同小異なりと云ふべきなり。小異が則ち特に注意せられて學者研究の趣味を促しつゝある也、然るに吾人を以て之を見るに周易六十四卦三百八十四爻の辭を解釋するは殆ど先賢諸子の書に於て其蘊奧を盡すと云ふべきのみ、周易折中の如きは、殊に能く折中し得たりと言ふべきのみ、今の時に當りて六十四卦三百八十四爻の辭を解せんとする者は卽ち恐らくは此以上に出づる能はざるべし、然るに西洋哲學の發達せる今日に於て周易を解釋せんとする者は頗る短刀直入一目瞭然六十四卦を捉へて之を念頭に思ひ浮ばしめざるべからず、斯くせんとするには、卽ち六十四卦を以て人生の各方面を代表するものと見るの外なきのみ、則ち余が以上列擧せる所の如く余は余の分類法を以て、決して完全なりとするにあらず只余が易を解する爲に苦心せる結果分類の否むべからざることを知るに至りしのみ、周易六十四卦三百八十四爻の辭を解釋せるものは以上列擧せる如くに止まらんや、殆ど汗牛充棟も啻ならざるなり、然も六十四卦をして一目瞭然たらしめんが如きものは世に之あるが見ざるなり。此點に於ては余は聊か周易の眞義を解釋し得たりと信ずるものなり。易を解する者之を全體の上より見る能はずして、單に其一局部とり其意味を得しめんとする時は殆ど吾人の解すること能はざる所に屬す。近頃支那の某氏周易闡微を著はす、然かも之を以て中國最後の哲學となす、一切世界の學術を採り來つて以て之を易に關係あるものとなす、素より易に依りて多少の萌芽を發見し得べしと雖も斯の如きものは以て易を解する所以にあらざるなり。

第二十五節　王弼の易應用論

言者所以明象、得象而忘言。象者所以存意、得意而忘象。是故存言者非得象者也。存象者非得意者也。象生於意、而存象焉、則所存者乃非其象也。言生於象、而存言焉、則所存者乃非其言也。然則忘象者乃得意者也。忘言者乃得象者也。得意在忘象、得象

在忘言。

此れ王弼が易を深義に解釋したる者にして、要するに言象の外に於て易を一身に體し、應用礙碍なきことを期する者なり。歸する所は余が前章に於て述べし處の易の應用說に合致するに外ならず。

第二十六節　張孟劬の易論

余近頃張孟劬の史徵を讀みしに易の應用論中見るべき者あるに似たり。乃ち左に採錄して以て參考に供す。

再推之六十四卦。君子以飲食宴樂。則取諸需。君子以作事謀始。則取諸訟。類族辯物。則取諸同人。遏惡揚善。則取諸大有。損多益寡。則取諸謙。作樂崇德。則取諸豫。厚下安宅。則取諸剝。至日閉關。則取諸復。辯上下定民志。則取諸履。愼言語節飲食。則取諸頤。凡若此者。原始要終。無不有一定之準焉。故曰。易者象也。天下有其事。卽有其象。陰陽變動之理不測。世人所忽略者。聖人前知其吉凶。爲之思患而預防之。防之之道奈何。曰以柔濟剛。以弱勝强。以退左進而已。

後世儒者。苟能本孔子之意。以學易。安而不忘危。存而不忘亡。治而不忘亂。於吉之方來也。則增修其德。以應之。於凶之將萌也。則恐懼其德。以臨之。以之防躬。則樂天知命。而不憂焉。以之治國。則觀其會通以行其典禮焉。天人性命道德之奧。一以貫之。乃庶幾可以道濟天地矣。」

要するに易道は自然の法則なるか故に陰中に陽を見、陽中に陰を見、警戒して以て其業を墜すことをなからんことを期するものにして、諸家の見大概相一致すと謂ふべきなり。

第二十七節　六十四卦の占筮的解釋

吾人は六十四卦を解するに當り專ら處世道德を主とせり。然りと雖も易は占筮を以て本來の用となす。占筮の出來得る樣易を解釋するは又易解釋の一法たり。但だ周易の文は簡にして其要を得がたきのみ。是に於てか、或は六爻世應の說をなして以て之を補ふ。五行易は此れなり。又或は八卦に種々の象を附して以て之を解するものあり。今其の一般を述ぶること左の如し。

○一坎水

天時　雨雪　月　霜　露
地理　北方　江湖　溪澗　泉井　卑濕之地　溝瀆　池沼　凡有水處
人物　中男　江湖之人　舟人　防盜
人事　險陷　卑下　隨波入流
身體　耳　血
時序　冬十一月
靜物　水晶　水中物　鐵器　弓輪
動物　豕　魚
家宅　不安　住居ノ患　暗昧　盜難
屋舍　向北　近水　江樓　宅中濕　水閣
飲食　豕肉　酒　冷物　海味　羹湯　酸味　魚　多骨　帶血物　水中物
生產　有脊核物
難產有險　宜次胎　中男　辰戌丑未月　胎坐向北
求利　有財失　宜水邊財　有失陷ノ恐　宜魚鹽酒水利
交易　不利成交　有奸計恐　宜水邊交易　宜水魚類交易
謀望　不宜成望　不全成功　秋冬亦達望　心勞
墳墓　北方窪穴　水邊　濕地
數目　一六
方道　北方
色　黑
味　鹹酸

○二坤土

天時　天陰　霧氣　晦
地理　里鄉　田野　平地　西南　至靜地
人物　后母　老婦　農鄉人　樂人　大腹人
人事　吝嗇　順靜　柔懦　衆多

身體　腹　脾胃　肉
時序　辰戌丑未月　未申年月日時　五八十月日
靜物　方物　土中物　柔物　布帛絲綿　五穀　輿　釜　瓦器
動物　牛　百獸　牝馬
屋舍　西南向居　村舍　田舍　矮屋　倉庫
宅家　安穩　多陰氣　春占宅舍不安
食物　野味　牛肉　土生物　甘味　五穀　腹臟物　薯芋筝類
求名　西南ノ任　守成　司農ノ職　教官　成章　春占名虛
求利　有利　宜土中利　賤貨重物ノ利　土生物ノ利　安靜得利　布帛ノ利
　　多中ノ得利　春占無利
交易　利交易　宜田土交易　穀物布帛交易　春占不順
謀望　利求謀　鄉里求謀　宜靜中計策　或謀於婦人
天時　風

○三巽木

墳墓　西南地
數目　八五十
方道　西南
色　黃
味　甘味

○四震木

天時　雷
地理　東方　樹木　闤市　大塗　繁盛地　草竹
人物　長男　丈長
人事　震　振　起　動　怒　虛驚　皷譟　衆多　徵靜
身體　足　肝　髮　聲　音　筋
時序　春三月　卯年月日時
靜物　木竹草　木品　長物　舟楫　耒耜

動物　龍蛇　馬　飛魚
屋舍　東向居　山林　樓閣
家宅　宅中不時有驚　春占吉　秋占不利　動居
食物　蹄肉　山林野味　鮮肉　菓　酸味
求名　有名　東方ノ任　掌刑官　施號發令職
　　或闇市司貨ノ任
求利　山林竹木ノ財　宜東方　動處有財
交易　利於成交易　動而可成　木類ノ交　秋占凶
謀望　可望　求可　動中計策　秋占不遂
數目　四八三
方道　東方
色　青黃碧
味　酸味
求名　艱難　宜北方ノ任　江湖河泊ノ職　酒兼醋

地理　東南ノ地　草木茂秀ノ所　菜果花園　木菓
人物　長女　秀才　寡髮人
人事　不定　鼓舞　利商三倍　進退
身體　肱股　氣　風疾
時序　春夏ノ交　三五八ノ月日時　辰巳午未年月日時
靜物　木　香臭　繩絲　直物　長物　竹木　工巧器
動物　雞　禽類虫
屋舍　東南向居　寺觀樓閣　山林居
家屋　安穩利市　春占吉　秋占不安
食物　鷄肉　禽虫肉　蔬菓　酸味
求名　有名　文章風才技藝　木竹布帛職　秋占爲財
交易　可成　進退不一　交易ノ利倍
謀望　可起望　有才　可成　又可敗
出行　可行　有出行利　向東南可行　秋占不可行

墳墓　宜東南向　山林樹木中
數目　五三八
色　青　綠　白　碧
味　酸味

○五乾金

天時　天　水　冰　霰　雹　寒　冷
地理　西北　都市　大郡　占勝ノ地　高丘　古跡　開市
人物　君父　考人　官宦　大人　長者　名人　帥　門閥
人事　圓成　滑　剛健　武勇　果決　高名　多動　少靜
身體　首　骨　肺
時序　秋　九十月交　戌亥年月日時　五金年月日時
動物　馬　天鵞　獅　象　龍
靜物　金玉　寶珠　圓物　貴物　衣物　木果
剛物　冠　鏡　名刀　銀金　神佛飾物

屋舍　公廳　樓臺　堂　大厦　驛舍　西北向
家宅　秋占　宅興旺　夏占有禍　冬占冷落
食物　馬肉　大魚肉　乾燥物　名骨　辛辣物　珍味　諸物
生產　易產　秋占生貴子　坐西北向
交易　易成　寶玉金幣貴貨　夏占不利
名利　有玉金　公舍得財　高顯貴人財　秋吉　冬無財　夏損財
謀望　有成　初吉　半終吉　多空望　多謀　少遂
出行　西北　京師　遠行　歸順　夏占凶
官訟　健訟　空漠歸格
墳墓　西北高丘　寺社內
數目　一四九
方道　西北南
色　丈赤　玄
味　辛辣

○六兌金

天時　雨澤　新月　星
地理　澤　池　水際　飲地　廢井　崩破溯
人物　少女　妾　歌妓　伶人　譯人　巫師
人事　喜悅　口舌　讒毀　謗說　食飲
身體　舌　口　肺　痰　涎
時節　秋　八月　酉　金　年月日時　二四九數
靜物　銀　飾物　樂器　缺器　廢物　流通物
動物　羊　小獸　角獸　澤近
屋舍　西向　近澤　敗墻　壁宅　門戶破
家宅　不安　女人妨　口舌　秋占　喜悅
食物　羊物類肉　澤水物　河魚
婚姻　可成　秋占吉　少女婚　不利
產生　不利　損胎　成則生女　坐西向

名利　無利　財利上　口情起　秋占喜
交易　不利　紛議　爭競　西向交付ノ喜
謀望　難望　計策破　秋占喜
出行　不宜遠行　或損失
謁見　西方見　女人妨
官訟　爭訟未已　曲直決　損失　刑處　女論
墳墓　西處　高處ノ缺陷處　澤川ノ近傍
數目　二四九
色　白
味　辛辣

○七艮塊

天時　雲　霧　山　嵐
地理　山逕路　嵒山　山城　丘陵　墳墓
人物　少男　閑人　山中人　傲慢

人事　阻滯　守靜　進退不決　反背　止住　不見
身體　手指　骨　鼻　背　腰
時候　冬春交　十二月　丑刀十一年月日時　七　十
靜物　土石　瓜菓　塊　黃物　土中物　剛物　高物
動物　虎　狗　鼠　百禽　黔豚屬　四足
家宅　安全　諸事有阻　家人不睦
屋舍　東北向　山居　嵒石近　高覆屋　近路
食物　土中物　諸獸肉　墓　一寺畔　竹笋ノ如キ物
婚姻　阻隔　難成　自先來遲而成　小男婚　春占不利　鄉里中婚　實直家
交易　難成　有山林田土交易　春占有失
謀望　阻隔難成　進退迷
噴墓　東北塊嵒　山中穴　高石丘　寺內　近路
數目　五七十
色　黃

味　甘味

○八離火

天時　日　輝　電　虹　霞　半晴　半雨
地理　南方　乾亢地　爐冶所　文明地　地陽氣　學校地
人物　中女　文人　大腹人　胎婦　目疾人　美衣　學士
人事　文書　才學　法學士　證　類　目　心
時節　五月　午火年月日時　三　二　七
靜物　火　文書　甲冑　干戈　槁木　赤色物　外剛
動物　雉　龜　鯊　蟹　螺　蚌　大鳥
屋舍　南向　明窓　虛堂　長屋　文舍　公舍
食物　雉肉　燒炙物　熱肉
生產　易生　中女　冬占有失　坐南向
名利　有財　又東　巽　吉　文筆利

交易　可成　文書　株劵交易
數目　三　二　七
色　赤　紫　紅
味　苦

凡て略に從へり。余は六十四卦の解にも此種のものあることを解し、併せて卜筮家の參考に資せんとすること然り。所謂八卦の象に外ならざれども又以て六十四卦が無限の意味に解せらるゝを知るべし。

第三章　十翼の思想

第一節　記述法

吾人は十翼を以て同一人の作となさず。十翼の名稱は何人に始まりしか明からならず。然れども其の幾人なるや亦固より知るを得ず。伊藤東涯は左傳に

魯の昭公の二年晉の韓宣子魯に聘して易の象と魯の春秋とを見る。曰はく周公の德と周の王たる所以とを知る。

とあるを以て大象となす。然れども此の如きは餘まり推察に過ぎたり。易象は周公の爻辭とも解すべく、又は六十四卦其者の象とも解すべし。故に但だ文體と意味とより判ずべきのみ。固より精密に知る能はざるも乾坤二卦の彖と象とは雄渾にして古色蒼然、繫辭は清勁にして鋒芒露見す。文言は流暢にして敍事的なり。序卦は六十四卦の順序を論じたる者なれども牽强附會の一語は以て此の篇を蔽ふべし。其の他も亦各々當る所あり。是の故に吾人は十翼が幾人の手に成り

しやを斷言する能はざるも各篇別人の作として述ぶるを適當なりと信ず。況んや各篇六十四卦の注脚として六十四卦の異方面を見たるなるに於ておや。

第二節　彖の哲學

彖は六十四卦の各々に之れあり。彖は古注に據れば斷なり。一卦の吉凶を斷ずるなり。卽ち各卦の意味を斷定せるものなり。亦通じて之を彖といふ。故に各卦の解釋を附するときに附記するを以て適當とす。古來の說に據れば十翼は固上下經の後に在りしなれども費氏以來彖象文言を以て卦中に雜入せり。王氏又爻の彖辭を分ちて當爻の下に附す。註脚として見れば此くあるべき者なり。唯だ彖の中に特別に彖の哲學として目するに足る者あり。茲に之を述ぶ。

彖は乾元坤元の二元論(Dualism)なり。以爲らく萬物は二氣の和合によりて生す。乾元は積極的にして男性、坤元は消極的にして女性なりと。曰はく。

大なる哉乾元、萬物資て始む。乃ち天を統ぶ。

至れる哉坤元、萬物資て生す。乃ち順にして天を承く。

是れ男女の關係より思ひ付き之を天地に應用したる者なるべし。天地あれば則ち其の象あり。聖人之に則りて以て行動す。乾に付て曰はく。

大に終始を明かにし六位時に成る。時に六龍に乘じて以て天を御す。乾道變化、各性命を正し大和を保合して乃ち利貞。庶物に首出して萬國咸く寧し。

又坤に付て曰く。

至れる哉坤元、萬物資て生す。乃ち順にして天を承く。坤厚くして物を載す。德无疆に合ふ。含弘光大。品物咸亨。牝馬は地の類。地を行くと疆りなし。柔順利貞は君子の行ふ所。先つときは迷うて道を失ひ、後るるときは順にして常を得。西南朋を得、乃ち類と行く。東北朋を喪ふ。乃ち終に慶あり。安貞の吉は地の无疆に應ず。

乾は天なり。又龍なり。龍の天に在るや、一舉一動其の宜きに合す。聖人の處世亦此くの如く其の宜きに合はざるなきなり。而して天下由りて以て寧し。坤は厚くして物を載す。聖人之に則る。又坤は柔順の卦、故に聖人は之に則りて以て柔順の德を行ふ。坤は乾に從ふを以て道となす。

第三節　象の哲學

象は卽ち卦の象を言へる者。乾坤二卦の象は卽ち君子の天地に則るを言へる者。天の行くや日に數千萬里、終りて又始まり、循環端なし。未來永刼に亘りて渝ることなきなり。其の勢力の偉大なる、驚嘆すべきなり。君子は之に則り、自ら彊めて己まざるべし。曰はく。

天行健。君子以て自ら彊ひて息まず。

地は重くして厚く、萬物を包含して厭はず。君子は德を厚くして以て衆人を容るるの量なかる可らず。曰はく。

地勢坤。君子以て厚德物を載す。

第四節　繫辭の哲學

一。天地觀。繫辭は天地を以て不斷活働しつゝある者と觀察せり。卽ち一種の活動觀なり。曰はく。

天は尊く地は卑く乾坤定る。卑高以て陳ねて貴賤位す。動靜常あり、剛柔斷す。方は類を以て聚り、物は羣を以て分れ、吉凶生す。天に在りては象を成し地に在りては形を成して變化見はる。是の故に剛柔相摩し、八卦相盪し、之を鼓するに雷霆を以てし、之を潤すに風雨を以てす。日月運行、一寒一暑。

而して乾坤二氣によりて一切萬物を化生す。曰はく。

乾道は男を成し坤道は女を成す。乾は大始を知り、坤は成物を作す。乾は易を以て知り、坤は簡を以て能くす。易なるときは則ち知り易く、簡なるときは則ち從ひ易し。知り易きときは則ち親あり。從ひ易きときは則ち功あり。親あるときは則ち久しかるべく、功あるときは則ち大なるべし。久しかるべきときは則ち賢人の德。大なるべきときは則ち賢人の業。

卽ち一種の活動觀也。一草の生ずるも陰陽二氣の和合ならざるなく、一蟲の化するも亦陰陽二氣の和合ならざるなし。一切の現象皆二元氣の作用ならざるなきなり。

二。陰陽觀　以上述べたる如く二氣によりて化生せらるるは天地間の狀態也。

易は此れよりして其法則を抽象せんとする者。故に生々觀をなして曰はく。

生々之謂〻通。繫辭上傳第五章

而して如何なる場合に於ても、換言すれば其の大より見るも小より見るも陰の狀態と陽の狀態と轉顛相緣るとなすは其の根本原理たり。曰はく。

一陰一陽之謂〻道。同上

此法則は未來永刼に亘りて變ずることなきなり。故に未來永刼のことも亦以て知り得べしとなす。此れ占筮の根本思想なり。曰はく。

極〻數知〻來之謂〻占。同上

一現象は自然、現象にまれ、道德現象にまれ、皆陰陽の二方面を供へざるはなし。善とは陰陽の道に從ふに外ならず。性とは陰陽の道を體するに外ならず。故に曰はく、

繼〻之者善也。成〻之者性也。同上

而して陰陽兩者は廣大無邊にして一切の道德皆之を以て根本となす。仁者は其の方面より見て仁と謂ひ、知者は其の方面より見て知と謂ふ。百性は此道に由りながら其の然るを知らず。曰はく。

仁者は之を見て之を仁と謂ひ、知者は之を見て之を知と謂ひ、百性は日に用ひて知らず。故に君子の道鮮し。

此れ道の廣大なるをいへる者なり。

三。 大極論。支那古代には、一元氣あり。分れて陰陽となり、四時となり、八象となり。終に一切萬物となりしといふ信仰あり。一元氣の分るゝは己に不明なり。四時が陰陽なりと云ふも亦然り。然れども社會的遺傳の勢力は人心を司配し、疑を惹き起こさしむることなかりき。曰はく。

易に大極あり。是れ兩儀を生ず。兩儀四象を生ず。四象八卦を生ず。八卦吉凶を定め、吉凶大業を生ず。

生じたる後より見れば天地を以て最大の現象となし、四時を以て最著の現象となす。又曰はく。

天地の道は貞にして觀(しめ)す者なり。日月の道は貞にして明かなる者なり。天下の動は夫の一に貞なる者なり。

而して天地は猶ほ不斷生々しつゝある者。此れ天地の德にして聖人に在りては仁なり。曰はく。

天地の大德を生と曰ふ。聖人の大寶を位と曰ふ。何を以て位を守る。曰はく仁。何を以て人を聚むる。曰はく財。財を理し辭を正し民の非を爲すを禁ずるを義と曰ふ。

宇宙は陰陽の法則に由りて司配せられ、不斷生成し、而かも無意識的なり。曰はく。

之を仁に顯し之を用に藏し萬物を皷して聖人と憂を同じうせず。盛德大業至れる哉。

卽ち造化自然の狀態を形容したる者に外ならず。一種の倫理的宇宙論と謂ふべきなり。

四。倫理論　易の根本思想は陰陽と生々と是れなり。而して支那の倫理思想は天地に則るを以て一般とす。今易の文を見るに曰はく。

一陰一陽之を道と謂ふ。之を繼ぐ者は善也。之を成す者は性也。仁者は之を見て之を仁と謂ひ、知者は之を見て之を知と謂ひ、百姓は日に用ひて知らず。故に君子の道鮮し。之を仁に顯し之を用に藏し、萬物を皷して聖人と憂を同じうせず。盛德大業至れる哉。富有之を大業と謂ひ、日新之を盛德と謂ふ。生々之を易と謂ふ。象を成す之を乾と謂ひ、法を效す之を坤と謂ふ。數を極め來を知る之を占と謂ひ、變に通ずる之を事と謂ふ。陰陽測られざる之を神と謂ふ。

天地の大德を生と曰ふ。聖人の大寶を位と曰ふ。何を以て位を守る。曰はく仁。何を以て人を聚むる。曰はく財。財を理し辭を正し民の非を爲すを禁ずるを義と曰ふ。

是れ等の句に由りて見るときは天地の根本は生にして仁は之に則りし者、卽ち善、卽ち性となすべきが如し。隨て又一元の氣となすべき如し。宋の程明道は正さに此の解釋をなしたる者。明道に據れば一元氣あり、生々已むとなし、人に在りては性となり、德に在りては仁となり、善となるなり。又曰はく。

天地設位。而易行乎其中矣。成性存存。道義之門

此れ亦性と天地の道とを接近し、若くは關係ある者となすが如し。卽ち天地は

生を以てことなし。聖人は天地の氣を受けて生じ、其の性に於て生的なり。卽ち仁なり。其の天地に則るもの如何と言ふに。乾の德は易にして坤の德は簡なり。曰はく。

乾は易を以て知り坤は簡を以て能くす。易なるときは則ち知り易く簡なるときは則ち從ひ易し。知り易きときは則ち親あり。從ひ易きときは則ち功あり。親あるときは則ち久しかるべく功あるときは則ち大なるべし。久しかるべきときは則ち賢人の德、大なるべきときは則ち賢人の業、易簡にして天下の理を得。天下の理を得て位を其の中に成す。

夫れ乾は、天下の至健なり。德行恒に易にして以て險を知る。夫れ坤は天下の至順なり。德行恒に簡にして以て阻を知る。

次に聖人は一切を知り、適くとして宜からざるなきを述べて曰はく。

天地と相似たり。故に違はず。知萬物に周くして道天下を濟ふ、故に過ぎず。旁行して流れず。天を樂み命を知る。故に憂へず。仁に敦し。故に能く愛す。

又曰はく。

日往けば則ち月來り、月往けば則ち日來る。日月相推して明生ず。寒往けば則ち暑來り暑往けば則ち寒來る。寒暑相推して歲成る。往とは屈なり。來とは信なり。屈信相感じて利生る。

易は宇宙間に三種の法則ありとなす。曰はく。

易の書たるや廣大悉く備る。天道あり。人道あり。地道あり。三才を兼ねて之を兩にす故に六。六とは他に非ず、三才の道なり。

卽ち天地に陰陽剛柔ある如く人間社會には仁義の二ありて以て之を司配すとなす。なり。

五。神論　易は理論の上にて建設せられたる者、神を假定するは其の本意にあらず。若し之を假定すとするも單に消極的に假定せられたるに外ならず。其の作用は一も積極的なる者あるなき也。故に易は單に陰陽の變化測る可らざる所を名けて神と云ふとなせり。曰はく。

陰陽不測之謂神。

又曰はく。

故神无方、而易无體。

是れ又神の積極的作用を說けるにあらずして之を形容せるに外ならず。其の神の字を解して靈魂となす者は左の一節なり。曰はく。

精氣物と爲り、遊魂變を爲す。此の故に鬼神の情狀を知る。

人に氣と魂とあり、氣は鬼となり、魂は變化をなす、然れども一方に於て鬼神の字は甚だ輕く用ひらる。

子曰。知變化之道者其知神之所爲乎。

易无思也、寂然不動、感而遂通天下之故。非天下之至神。其孰能與於此。

夫易聖人所以極深而研幾也。故能通天下之志。唯幾也。故能成天下之務。唯神也。

故不疾而速。不行而至。

是故蓍之德。圓而神。

神以知來。以藏往。其孰能與於此哉。古之聰明叡知神武而不殺者夫。

是以明於天道。而察於民之故。是興神物以前民用。聖人以此齋戒。以神明其德夫。

利用出入。民咸用之。謂之神。

是故天生神物。聖人則之。

鼓之舞之。以盡神。

推而行之存乎通。神而明之存乎其人。

於是始作八卦。以通神明之德。以類萬物之情。

神而化之。使民宜之。

窮神知化德之盛也。

子曰知幾其神乎。

以通神明之德。

人謀鬼謀。百姓與能。

神を以て全知全能(omniscions, omnipotens)となす。然れども易の作者の神に對する態度は甚だ冷淡にして單に「神變不測」の如き形容詞として感じ、其れ以上の意味を發見せざるなり。以上の引用文を參考して以て其の然るを知るべし又天より之を祐くの句至る處にあれども天も亦輕き意味にして孔子が之を信ぜしと同一程度なるべし。

繫辞の作者が其腦中に全知全能なる神の觀念を有するとは云ふ迄もなし。然れども此れ繫辞の作者の腦中に在るものにして易の範圍にあらず。易は宇宙の神變不可思議なる變化を表象せんとする一種の思想系統なり。其現象が神に由りて司配せらるると否とは易の言はざる所に屬す。假令ひ神を假定するが如く思はるるも、此神の計畫(plan)を合理的に説明し悉くさんとするは易哲學本來の面目にして、繫辭に由りて之を知り得べし。其の不測之謂神といひ又變化の道を知る者は其れ神の爲す所を知るかといふ如き變化の道を知り得る者となし、同時に神の全計畫を知り得るものとなしたるなり。

此れ等は最も善く之を示めす者也、又鼓之舞之、以盡神といひ、此所以成變化而行鬼神也といへる如き何れも然らざるはなし、故に當時一般人乃至は易經の作者に至る迄宇宙に一大神のあるとは之を假定せしなるべきも神の計畫を合理的に説明し悉さんとするが抑も易なる一種の思想系統の目的なり、當時の人乃至は易經の作者の思想と易其者の思想系統とを混同するとなくんば易を解する所以に於て庶幾かるべきなり。

第五節　説卦の哲學

一　易賛　説卦は聖人の易を作れるは萬物の根柢を穿てるなるを説けり。天に在りては陰と陽、地に在りては柔と剛、人に在りては仁と義を取りて六爻を立てたり、此れ卽ち天地の根本的運命なり。説卦が命の字を用ふるは方さに此の意味に於てす。曰はく。

和順於道德、而理於義、窮理盡性、以至於命。

又曰はく。

昔聖人の易を作るや、將に以て性命の理に順はんとす、是を以て天の道を立つ、曰はく陰と陽と、地の道を立つ、曰はく柔と剛と、人の道を立つ、曰はく仁と義と、三才を兼ねて之を兩にす、故に易は六畫にして卦を成す、陰を分ち陽を分ち、迭に柔剛を用ゆ、故に易は六位にして章を成す。

二　自然論　天は萬物を覆ひ地は之を載す、山澤、雷風、水火其の間に活働す、曰く。

天地位を定め山澤氣を通ず、雷風相薄り水火相射はず、八卦相錯す。

雷以て之を動かし、風以て之を散し、雨以て之を潤し、日以て之を恒し、艮以て之を止め、兌以て之を說し、乾以て之を君とし、坤以て之を藏む。

又八卦の性質を說明し、其の能く變化を興し得る所以を說明して曰はく。

神とは萬物に妙にして言を爲す者なり、萬物を動かす者は雷より疾きは莫く萬物を撓す者は風より疾きは莫く萬物を燥す者は火より熯すは莫く、萬物を說す者は澤より說すは莫く、萬物を潤す者は水より潤すは莫く、萬物を終へ萬物を始る者は艮より盛なるは莫し。故に水火相逮び雷風相悖らず、山澤氣を通じて然る後、變化して既に萬物を爲す。

三　方位論　八卦四時に配すべく、又方位に配すべし、是を以て吾人の聯想は方位と四時とを混同することあり、卽ち東方は春なるを以て東方にて物は生ずとなすなり、此の如き聯想の混同にて說卦の一章は成れり、曰はく。

帝震に出で巽　齊ひ、離に相見れ、坤に致役し、兌に說言し、乾に戰し、坎に勞し、艮に成言す。萬物震に出づ、震は東方なり、巽に齊ふ、巽は東南なり、齊とは萬物の潔齊なるを言ふ、離とは明なり、萬物皆相見る、南方の卦なり、聖人南面して天下に聽く、明に嚮つて治む、蓋し諸を此に取るなり、坤とは地なり、萬物皆養を致す、故に曰はく坤に致役すと、兌は正秋なり、萬物の說ぶ所なり、故に曰はく兌に說言すと、乾に戰ふ、乾は西北の卦なり、水火相薄るを言ふ、坎とは水なり、非北方の卦なり、勞卦なり、萬物の歸する所、故に曰はく坎に勞すと、艮は東北の卦なり、萬物の終を成す所にして始を成す所也、故に曰く艮に成言すと、

第六節　文言の哲學

文言は元亨利貞の四字を以て四德となせり、是れ特別なる解なり、曰はく。

元は善の長なり、亨は嘉の會なり、利は義の和なり、貞は事の幹なり。

而して乾德を形容して剛健中正、純粹精なりとなせり、曰はく。大なる哉乾や剛健中正、純粹精なり。又大人を以て其の智德天地と同きなりとして曰はく。

夫れ大人は天地と其の德を合せ、日月と其の明を合せ、四時と其の序を合せ、鬼神と其の吉凶を合す。天に先つて天違はず、天に後れて天時を奉ず、天且つ違はず、而るを況んや人に於てをや、況んや鬼神に於てをや。

又君子の行爲を四分し學問寛仁の四となし、述べて曰はく。

君子學以て之を聚め、問以て之を辨へ、寛以て之に居り仁以て之を行ふ。

又忠信と誠と終を知るとを以て君子の必要條件となすを述べて曰はく。

君子德に進み業を修む。忠信は德に進む所以なり。辭を修めて其の誠を立つるは業に居る所以なり。至を知つて之に至る、與に幾すべきなり。終を知つて之を終ふ。與に義を存すべきなり。

又平生君子の標準となすべき所を述べて曰はく。

庸言之れ信じ、庸行之れ謹む、邪を閑て其の誠を存し、世に善くして伐らず、德博くして化す。

君子は其の進退を謹むべく、若し出づべからざるのときに於ては天命を知りて之に安んずべしとなす。卽ち初九潛龍勿用の句に付て曰はく。

子曰ふ、龍德にして隱るる者なり、世に易られず、名を成さず、世を遯れて悶ることなく、是とせられずして悶ることなし、樂むときは則ち之を行ひ、憂ふるときは則ち之を違る。確乎として其れ拔くべからざるは潛龍なり。

聖人起りて天下平かならざるなし。曰はく。

子曰ふ、同聲相應じ同氣相求む、水は濕に流れ火は燥に就く、雲は龍に從ひ風は虎に從ふ、聖人作つて萬物覩ゆ、天に本づく者は上を親み地に本づく者は下を親む、則ち各其の類に從ふなり。

上九は亢龍にして悔ひある者なり。若し夫れ聖人は獨り進退存亡を知りて其の機を失はず、曰はく。

其れ唯聖人か、進退存亡を知つて其の正を失はざる者は其れ唯だ聖人か。

又文言傳には因果應報の觀念あり、然かも其の原因は微より起るが故に宜しく之れを防ぐべしとなす。曰はく。

積善の家必ず餘慶あり、積不善の家必ず餘殃あり。臣其の君を弑し子其の父を弑す。一朝一夕の故に非ず。其の由つて來る所の者漸なり。之を辨じて早く辨せざるに由るなり。

繫辭傳中に之に似たる言あり、曰はく。

善積まざれば以て名を成すに足らず、惡積まざれば以て身を滅すに足らず。

小人は小善を以て益なしと爲して爲さず、小惡を以て傷れなしと爲して去らず、故に惡積んで掩ふべからず、罪大にして解くべからず。

此れ實に因果應報の思想にして支那の聖人は善惡共に微より起る所以に注意せり。

邵康節所謂伏犧八卦の圖は左の如し。

此れ先天の順序と、說卦第三章の句と及び自然の連想とに本づけるなり。說卦第三章に曰はく。

天地位を定む、山澤氣を通ず、雷風相薄る、水火相射はず、八卦相錯る、往を數ふる者は順、來を知る者は逆、是の故に易は逆數なり。雷以て之を動かす、風以て之を散す、雨以て之を潤ほす、日以て之を暄かす、艮以て之を止む、兌以て之を說ぶ、乾以て之を君とす、坤以て之を藏む。

之を以て伏羲氏となすは經世書觀物外篇下に在り、獨斷の見なり、文王の方位は左の如し。

是れ說卦傳中に示したる方位に本つく。說卦傳に曰はく。

萬物震に出づ、震は東方なり、巽に齊ふ、巽は東南なり。齊とは萬物の潔齊なるを言ふ、離とは明なり、萬物皆相見る、南方の卦なり、聖人南面して天下に聽く、明に嚮つて治む、蓋し諸を此に取るなり、坤とは地なり、萬物皆養を致す、故に曰はく坤に致役すと、兌は正秋なり、萬物の說ぶ所なり、故に曰はく兌に說言すと、乾に戰ふ、乾は西北の卦なり、陰陽相薄るを言ふなり、坎とは水なり、正北方の方なり、勞方なり、萬物の歸する所なり、故に曰はく艮に成言すと。

朱子は以て文王の方位となせども獨斷なり。此の方位に關し朱子の言ふ所は一も當らず。主觀的に連想の上より成るべく東洋的僻見を離れ冷かに之を考察するに東方は日の出る處として陽氣の存する如く、南方は日の中する處として

陽氣の極まる如く、而して西方は日の沒する處として陰氣の存する如く、北方は日の全く廻らざる處として陰氣の極まる所の如く感せらる。而して四方の中間（卽ち四維）は各前後兩性の調和の如く感せらる、日常の經驗に於て家の東南西北は各々上述の連想に該當す。東方は日出るも未だ甚だ温かならず、西方は日沒すと雖も猶甚だ寒からず、南と北とは其の極に當るなり。東より南、西、北を經て復東に還る、順次に變遷あるなり。此れ實に自然の聯想なり。北半球に住する者は皆然りと答へざるを得ず。

然るに陽極まれば則ち陰生じ、陰極まれば則ち陽生ず。故に此順次に於て陽の始めて生ずるは東にあらずして、而して東北なり。陰の始めて生ずるも亦西にあらずして、而して西南なり。卽ち圖に示す所の如し。

今八卦に於ても亦這般の順次ありや、爻の上にて考ふるに陽の極は乾☰なり、陰の極は坤☷なり、陽の始めて生ずるは震☳、陰の始めて萠するは巽☴なり、陰の中なるは離☲、陽の中なるは坎☵なり、陰の更に央なるは艮、陽の更に央なるは艮なり。之を方位に排すれば卽ち正さに所謂伏羲の方位なり、伏羲の方位は卦爻の上にては當れりとなすべし、次ぎに八卦の象に付て之を考ふるに的として其の位置に在りと云ふ可らず、天は何故に南方地は何故に北方なるか兌澤は寧ろ西方ならざるか、山は何故に西北方なるか、吾人の聯想を滿足することを能はざるなり。文王の八卦を見るに☰と☷とを對せず、☳と☴とを對せず、☲と☵とを對せず、☶と☱とを對せず、卦爻の上に於て明かに穩かならず。八象の上に付て考ふれば天を西北に置き地を東北に置くは何等の聯想をも伴はず、故に卦爻の上に於て伏羲の八卦は人情に近き者なり。其の他のものは何れも次第には眞理を去ること愈々遠し、然も元來易を說く者此の方位を用いたり、實際に合はざること甚しいかな。

第七節　八卦の象

說卦傳なる八卦の象は第一編に出づ。此外荀爽集解に列せられたる象あり。今便宜之れを附記せんとす。卽ち乾に於ては龍、直、衣、言、是れなり、地に於ては牝、迷、方、裳、雲、黃、帛、漿、是れなり、震に在りては玉、鶴、鼓れなり、巽に在つては楊、鶴是れなり坎に於ては宮、律、可、棟、叢棘、狐、桎梏是れなり、離に於ては牝是れなり、艮に在りては、虎、狐、是れなり、而して兌に在りては常是れなり、

此れ等の意味には解すべからざるものもあり、朱子すら尙「多く曉るべからざるものありと」言へり、又其中に就て曉り得るものあるにせよ、今日の思想界を滿足し得るが如き者にあらず、只だ歷史上の一種の產物として觀察せらるべきのみ、今一例を擧けて以て其然るを說明せん。巽の卦に「白」の象あり、其理如何といふに、河田孝成の說に據れば風吹きて塵を去りために潔白なるに取るなり、又「長」の象あるは同く風行くと遠きに取るなり、又高の象あるは風の性は高遠なると、又木生じて上るとに取るなり、此れ等の解釋は今日の人に取りては殆んど意味をなさゝるの感あるべし、又坎の卦「下首」の解釋に上柔なるが故に(☵上の爻陰なるを言ふ)首を下にして昂らず、水流れて下に向ふの象とあり、「薄蹄」の說明に下柔なるが故に(☳の下爻陰なるを言ふ)蹄薄くして厚からずとあり、「曳」の解釋には足曳いて步むと高からず、皆水流地を磨して行くの象とあり、善く之を味ふときは首肯すべきものなきにあらず、例へば水の地に磨して行くと人の足を曳いて行くと似たりと思はるゝ所あり、然れども之を以て滿足し得べきか、今日の人より見れば茶人が四疊半の座敷に於て蚊の飛び蠅の止るを見て句を作り得意を感ずるが如し、到底滿足すること能はざるべし、各卦の下なる種々の象の意味に付ては茲に說明するの必要なかるべし、詳かなることは河田孝成の周易新疎又は中村惕齋の筆記周易本義等を見るべし、胡炳文は通釋に於て八卦の象を分類し、「相對して象を取る者」「相反して象を取るもの」「相因りて象を取る者」など分類したるは易の作者が宇宙萬象を八卦に配當するに當り、如何なる方法に由りしかを說明するものなれども茲に論述することを略す。

占筮家は多く此れ等の象を取りて以て判斷の材料となす、故に之を批詳的に觀察する者は之を別とし易の範圍內に入りて占筮せんとするものは必ずや卦象に通せざる可らざるなり、

第八節　八卦の順序

前編に於て八卦の生成は爻を積むに在るを述べたり。八卦は如何なる順序に排列せらるべきやを言はず。此の順序は八卦が如何にして生成せられしや、生成の順序を以て定むるの外なきなり。生成の順序に關し、二說あり。

（一）繫辭傳易有「太極」。是生「兩儀」。兩儀生「四象」。四象生「八卦」。の句に據るる者。邵康節は伏羲氏の八卦を作る全く下より積みしとなす者にして其の著皇極經世書の卷頭に「伏羲始畫八卦圖」と題し示して曰はく。

乾 ☰　兌 ☱　離 ☲

震 ☳　巽 ☴　坎 ☵　艮 ☶　坤 ☷

乾、兌、離、震、巽、坎、艮、坤の順序なり。是れ最も自然的必然的にして先天的に知り得ら

るゝ者と觀察せるゝなり。邵康節曰はく。

先天學心法也。圖皆從中起。萬化萬事生於心也。（卦位圖宋元學案十）

又曰はく

萬物各有太極、兩儀、四象八卦之次。亦有古今之象。（外篇上）

而して之を以て畫前に易ある者となせり。程明道は之を名けて「加一倍の法」となせり。六十四卦の生成に就て邵子は四爻五爻六爻と積めりと爲し、程子は然らず。朱子は不知とす。

（二）　說卦傳の父母六子の說に本く者。卽ち先づ乾坤の二卦ありて次に震（長男）巽（長女）を生じ、又次に坎（中男）離（中女）を生じ、更に艮（少男）兌（少女）を生せしとなすなり。卽ち乾、坤、震巽、坎、離、艮、兌の順序なり。河田孝成の周易新疎是れなり。

何れの順序を撰むべきか。思想の上より看れば前者は簡單にして後者は複雜なり。易の作者が先づ☰と☷とを積み、而して後他の六者を生せしとなすは非なり。☳と☶とを手にし爻を積みて或ることを表はさんとする第一の進動は必ずや爻を感覺的に規則正く行ふに外ならず。先づ思想を弄するが如きはあり得べからざるなり。故に先天の圖は八卦の自然的順序を示し、後天の圖は父母六子の義を示す者として兩立せしむべきなり。邵伯温曰はく。

先君云。天地定位。乾與坤對也。山澤通氣。艮與兌對也。雷風相薄。震與巽對也。水火不相射。離與坎對也。此伏羲氏易也。乾卦初爻。於坤卦初得震。震爲長男。坤卦初爻。於乾卦初得巽。巽爲長女。乾卦二爻。於坤卦二得坎。坎爲中男。（中略）能生八卦。（皇極經世書）

邵康は兩者を退けざるなり。繫辭傳は後世の作なり。易の創作者の說を考ふるは唯だ自然の心理作用に據るべきのみ。

要するに八卦の順序は二あり。兩者を併用して矛楯するなきなり。

第九節　六十四卦貞悔生成の說

內卦を貞といひ、外卦を悔といふ。本卦を貞といひ、之卦を悔といふ。左傳に曰はく。蠱の貞は風、其悔は小と晉語に曰はく。貞は屯、悔は豫。悔とは變化の意なり。八卦の中の乾一卦を貞といふ時は此上に八悔卽ち八卦を積むを得べし。一貞八悔、而

して八卦を得。左の如し。

☰☰ 乾　☷☷ 坤
☰☷ 泰　☷☰ 否
☳☰ 大壯　☰☳ 大畜
☴☰ 小畜　☰☴ 需
☲☰ 大有　☰☲ 大畜
☱☰ 夬　☰☱ 夬

若し八貞なる時は六十四卦を得べし。周禮に經卦八、別六十四とある者是れなり。此れ六十四卦生成の方法なりしなるべし。但だ吾人は加一倍の法を取るが故に、乾兌離震巽坎艮坤の順序に從ひて以て排列せられたるを信ずる者なり。

第十節　之八に就て

左傳に之八といふことあり。其の文に曰はく

襄九年傳、穆姜東宮に薨ず、始往きて之を筮す。艮八に之くに遇ふ。☶☳☱☳☶☱史曰く是を艮隨に之くと謂ふ。☶☳☱☳☶☱隨は其れ出づる也、君必ず速に出づ。姜曰く、亡し是れ周易に於て、曰く隨は元に享る貞に利し、咎無し。元は善の長也。亨は嘉の會也。利は義の和なり。貞は事の幹也。仁を體し、以て人に長たるに足る。然り、固より誣ふべからざるなり。是以て隨と雖も、咎なし。今我婦人、亂に與り、固下位に在りて、不仁有り、元と謂ふ可らず。國家靖からず。亨と謂ふ可らず、作して身を害す、利と謂ふ可らず、位を捨てて姣す、貞と謂ふ可らず。四德有れば、隨て咎なし、我皆之無し、豈隨ならんや、我則ち惡を取る、能く咎無からんや、必ず此に死せん。出づるを得ざるなり。

と又晉語に云はく

重耳河に及び、董因公を河に迎ふ。公問ふて曰く、吾其れ濟らんか、對へて曰く、

臣之を筮し、秦䷀䷤䷲䷵䷷䷸䷽八に之くを得。曰く、是れ天地配享、小往大來と曰ふ。今之れに及ぶ、何ぞ濟らざるか之れ、有らん。

又曰はく。

晉の惠公卒す。秦伯、將に重耳を晉に納んとす。公子親しく之を筮して曰く、尙晉國を肖たん。貞屯䷂悔豫䷏を得、皆八也

と。之八に就ては諸說あり。前條の杜註に云はく。

艮下艮上艮、周禮太卜掌三易。然而雜用連山歸藏周易。二易皆以七八爲占。故言遇艮之八。

此說に據れば不變爻は六二の一爻あるのみ。六二は八にて出でし者。八は不變なり。連山歸藏の二易は不變を尙ぶが故に不變爻に就て占ふ。不變爻あるときは之を注意するがために特に之八と謂ふとなすなり。左傳の註又曰はく

陸粲云。劉禹錫董生の說を稱して曰く、蓍を揲るは、九と六と老となす。老、變爻となす。七と八と少と爲す。少定位と爲す。國語、晉ゑ子筮、貞屯悔豫皆八を得、變爻に非ざる故に之く所有るを曰はず、穆姜筮し、艮八に之くに遇ふ。史曰く、是艮隨に之くと謂ふ。夫れ艮隨に之く、唯二動かず。斯れ八に遇ふ。餘五位皆九六。故に反す。筮法少を以て卦主と爲す。若し定は五にして變一、卽ち宜しく某卦に之くと曰ふべし。觀、否に之き、師、臨に之くの類是なり。今變は五、定は一、宜しく少に從て占ふべし。艮の六二に曰く、其腓に艮る、其の隨を拯せず、其の心快からず、史此に遇ふを以て利あらずと爲す。故に變爻に從ひて占ふ。曰く、是れ艮隨に之くと謂ふ。苟以て予姜を說くのみ。而して、杜元凱以て三易を雜用す。故に八に遇ふの言有るは非なり。衡案。春秋內外傳に八を言ふ者三、一卽ち此れ艮隨に之く、五爻皆變す。唯六二變せず、筮法少を以て卦主と爲さば、則ち艮、八に之く、義知り易きなり。其二晉語に在り、曰く貞屯悔豫皆八を得るなり。蓋し、連山歸藏の法、遇卦を貞と曰ふ。貞、貞は、松貞、女の貞の如し、故に、不變と謂ふ。之卦を悔と曰ふ、悔は則ち改むる也。故に之卦を悔と曰ふ。屯豫に之く。初九九四六五皆變じ、六二六三上六皆變せず。是れ變せざる者皆八にして七無し。故に八と云ふ。韋昭內傳、蠱の貞は山其晦風に據りて云ふ。內を貞とし、外を悔とす。震屯に在れば貞とし、豫に在れば悔とす。八は震の兩陰爻を謂ふ。貞に在り、

悔に在り皆動かざれば則ち何んぞ獨り六二六三を遺さん。其說通ず可らず。

又曰く、泰八に之くを得、下文之を占ふ。曰く是を天地配享、小往大來と謂ふ。專ら泰象に依て、之を言へば則ち六爻皆變せず。然らば則ち唯陰少を得る耳ならず、陽亦少を得、泰卦三陰三陽、其數又同じ、必ず、八を言ふは、蓋し、陽動いて陰靜か也、動者の變、乃ち是れ其常、靜者の變、則ち其の性を失ふ、二易既に變せざる者を以て占ふ。尤も陰不變を貴ぶ。故に七と言はずして八と云ふか。

日知錄に曰はく

易に七八九六有りて爻但九六を繫るは、隅を擧ぐるの義なり。故に、其の例を乾坤二卦に發す。曰く用九、用六は其變を用うるなり。亦其の不變を用うる者有り。春秋傳穆姜、艮八に之くに遇ふ。皆語董因泰八に之くを得、是なり。今即ち艮を以て之を言ふ。二爻獨り變ずれば則ち六に之くと名づく。餘皆變じ二爻獨り變せざれば則ち八に之くと名づく。是れ知る乾坤亦用七用八の時有るを乾爻皆變じて初獨變せず。初七潛龍勿用可なり。爻皆變じ初獨り變せず。初八霜を履み堅氷至るると曰ふ可なり。變を占ふは其の常なり。不變を占ふは其の反なり。故に聖人を之九六を繫ぐ。歐陽永叔曰く、易の道は其の變を占ふ。故に其の占ふ所の者を以て爻と名づく、六爻皆九六と謂はざるなりと。之を得たり。

左國易一家言に曰はく。

其連山歸藏、七八を以て占を爲す。故に不變を主とす。周易九六を以て占を爲す。故に變を主とする也。今艮、隨に之くに由り之を言ふ。初四、五と六を得て變ず。此陰、陽に變ずるなり。三上と九を得て變ず、此陽、陰に變ずるなり。唯二、八を得て變せず。故に八に之くと曰ふ也蓋し、連歸の二易、七を得る者は、吉と爲し、八を得る者は凶と爲す。七八合得する者は、吉凶相半と爲す。夫れ七は少陽なり。陽の道たるや、開いて通ず爲す有るなり。是を以て吉と爲す。夫八は少陰なり。陰の道と爲るや、閉ぢて塞ぐ。爲す無きなり。是を以て凶と爲す。夫れト筮、固より四千九十六の變有りて、二易之を統べ、七を得、八を得、七八合得の三法を以す。以て天下の事を占ふ。之を周易に鑒み、其郁文の美に及ばず雖も、二易亦簡の占法なるかな。今艮二易書皆亡ぶ、其の詳考ふべからざるなり。今八に之くに遇ふ。其の八を得るは、此れ閉ぢて塞ぎ、爲すなきの凶と爲すなり。

又曰はく

蓋し泰八に之くは、之を艮八に之くに徵し、其の五爻皆變ず。唯一爻八を得るは變せざるなり。亦察すべし。按ずるに、泰八に之く者は、觀晉萃の三有るなり。

又曰はく

今夫れ貞屯晦豫。初め五は九を得て變ず四は六を得て變ず二三り上皆八を得て變せず、故に皆八と曰ふ。

八が不變爻に關係あるとは疑ふ可らず。艮䷳の隨䷐に之くを名けて之八と曰ふ。不變爻は六二の一爻あるのみにして三十二策にて出で、八なり。泰䷊の八に之くや何れの爻が不變なるやを知ると能はず。屯の豫に變せし如き場合にも亦「之八」といふ。艮の隨に變せし場合にも「之八」といふ。卽ち屯の豫に之きし時は六二、六三、上六皆八なり。故に皆八といふ。由是觀之。一爻不變の時にのみ「之八」といふにはあらで、陰爻の不變なるものに就ては其の數の二三なるを問はず。常に之八といふなり。然らば何故に之八といふかといふに、不變爻を以て筮せんとするに在るのみ。連山歸藏に於ては恐くは此種の筮法ありしなるべし。

第十一節　易の年代に就て

支那社會の中心的人種は漢人種なり。漢人種は固中央亞細亞の高原に住し、牧畜を以て業となし、水草を追うて轉移しつゝありき。諸侯を群牧と云ひ、政治を牧民と云ふは是れが爲めなり。黃河を下り其兩岸に上陸し茲に牛羊を棄てゝ以て耕作に從事するに至れり。支那古代に伏犧氏あり神農氏あるは卽ち此の時代の變遷を示めすものゝ如し。卽ち伏犧氏の犧の字は牛偏を有し、牛羊に關係あることを示す者なり。伏犧氏は中央亞細亞の高原に住して牧畜に從事し、神農氏は黃河の下流に住して耕作に從事しつゝありしなり。蓋し伏羲氏と云ひ、神農氏と云ふは、一人の名稱にあらず、部落の名稱なり。支那の古史に據るに伏羲氏と云ひ神農氏と云ひ、凡て何々氏と言ふもの、其作りし所の文明の種類甚だ多し。今其一二例を示めすと左の如し。

伏羲氏の國には

一、八卦六十四卦を作りしこと

二、文字を作りて結繩の政に代へしこと
三、甲曆を作りしこと
四、嫁娶の禮を制せしこと
五、二七弦の琴三六弦の瑟を作りしこと

神農氏の國には

一、耒耜を作り五穀を植ゑしこと
二、藥を作りしこと
三、日中に市をなせしこと

女媧氏の國には

一、笙簧を作りしこと
二、都良笒を制せしこと
三、五十弦の瑟を作り、後二十五絃に更めしこと

軒轅氏の國には

一、甲子を作りしこと

二、蓋子を作りしこと
三、算數を作りしこと
四、律呂を作りしこと
五、十二鐘を作りしこと
六、咸池の樂を作りしこと
七、星氣を占せしこと
八、冕を作り、玄衣黃裳を作り、五采を染めしこと
九、舟楫を作りしこと
十、宮室の制を作りしこと
十一、金刀を制し五幣を立てしこと
十二、民に蠶を敎へしこと
十三、州を分ちしこと

金天氏の國には

一、大涌の樂を作りしこと

高陽氏の國には

一、曆を作りしこと

二、承雲の樂を作りしこと

高辛氏の國には

一、九招の樂を作りしこと

等あり。自己の見る所を以つてすれは此等の文明は決して一人の力によりて出來得べきものにあらず。必ず多數の人の力を結合して以て作成したる者ならざる可らず。殊に藥劑に至りては多くの年月を費やし、多數の經驗を積み社會的產物として生じたるものならざるべからず。更に他の方面より考ふるに數千年前なる歷史上の事實は茫漠として知る能はざるに至る。其の際に當り最も克く後世に印象を止むる所のものは何んぞやと云ふに、英雄の勢力か、然らざれば團體の勢力なり支那古代に於て諸種の團體は相互に併立しつゝありき。卽ち此の時代に於ては英雄の勢力と言はんよりは寧ろ團體の勢力を以て影響多きものとなす。近く之を譬ふれば我國よりして、支那朝鮮の文明を觀察せんには單に如何

なる文明の發生せしかを知るのみにて、如何なる人の之れを作りしかを省みることなし。伏羲氏と云ひ神農氏と云へるが如きも此類ならん。卽ち團體の名稱にはあらざるか。此れ等の諸方面より總合して吾人は伏羲氏神農氏は共に是れ時代の代表的名稱なりとす。換言すれば牧畜時代ありしことを稱して、伏羲氏となし、此の時代に於て前述の如き諸種の文明を生じ又耕作時代なりしことを想像し之を神農氏と名け、此時代に於て前述の如き諸種の文明を生じ、從つて伏羲氏は單に時代を示し、神農氏も亦時代を示し居るものなるべし。

今易に關する普通の傳說によれば其製作は實に伏羲氏に在り、之を以て事實とすれば易は漢人種が中央亞細亞の高原に住居する時に作られたるものなり。ラクーペリーが、バビロニアより來りしと云ふ說も何分か取る所あるが如く思はる。

第十二節　天興神物

占筮の儀式は周の頃には一定し、王侯大夫士各々多少の差異を有せり。筮室あり、戸を南にす、筮案を室の中央に設け蓍を其の上に載せ南面に象る。筮席を其の東に設けて西面す、筮者案の南に就きて北面し、左手下韇を執り右手上韇を抽き上韇は之を其の儘案上に置き下韇は蓍を容れたる儘右へ還りて、筮席に就く。左手にて下韇より蓍を抽き右手に蓍を持して以て韇を擊つ。鄭玄の註に據れば之を擊て以て其の神を動かすなり命じて曰はく。

爾泰筮常あるを假る、今何々せん尚くは饗けよ

此の文に付ても、種々の形式あり、次ぎに之を述ぶべし。言ひ畢りて而して後蓍を措て用ひず、四十九策を手に信せて二分し分掛揲歸式の如し、三變の後過揲の策を四除し、以て爻の陰陽を定む。之を地に劃す。今日ニアリテハ爻ヲ置ク 十八變して六爻を得六　を得たる後一切の策を合し、左手にて之を下爻納め案前に就き北面して

上爻を復し以て筮を終ふ。今命の形式の種類を述ること左の如し。

爻の大筮常あるを假る。孝孫某某日丁亥用て歳事を皇祖伯某に薦む某の妃を以て某氏を配す。某の某を以て尸となす。尚くは饗けよ。

此れ大夫の禮なり又曰はく

孝孫某來日某を筮す。此の某の事を諏る。其の皇祖某子に通せよ。尚くは饗けよ。

此れ士の禮なり、孔成子周易を以て之を筮して曰はく尚くは衛國に享けて其の社稷に主たらん、左傳重耳晉國を有んことを筮して曰はく尚くは晉國を有たん

是れ等は簡單にして要を得たりと謂ふべし。或は曰はく

爾の泰筮常あるを假る。某官姓名今某事云云未だ可否を知らず。爰に疑ふ所を以て神に質す。吉凶得失唯だ有神尚くは明かに之を告げよ。

今特牲饋食禮士冠禮等に見ゆる者を舉げて以て參考に供す。必ずしも之に由るべしとなすにはあらざるなり。

士冠禮廟門に筮す。主人玄冠朝服。緇帶素衣位に門の東に即き。西面す。有司主人の服の如くし。位に西方に即き。東面北上す、筮と席と卦する所の者。具に西塾に饌

す。席を門中閑の西門の外に布き西面す。筮人筴を執り上筮を抽き之を兼執つて命を主人に受く。宰、右より少く、退き命を贊す。筮人許諾し右還して席に卽いて坐し、西面す。卦者左に在り筮を卒り、卦を書し執つて以て主人に示す。主人受けて之を反す。筮人還り東面し、旅占卒つて進んで吉を告ぐ。若し吉ならざれば、則ち遠日を筮すると初の儀の如し。筮席を徹し宗人事畢るを告ぐ。

特牲饋食の禮日を諏らず日を筮するに及んで主人端玄を冠し位に門外に卽き西面す。子姓兄弟主人の服の如くし、主人の南に立ち、西面北上す。有司群執事兄弟の服の如くし、東面北上す。門中閑西閑外に席す。筮人筮を西塾に取り、之を執り、東面して命を主人に受く。宰、主人の左より命を贊す。

命に曰はく孝孫某來日某を筮し此の某の事を諏り其皇祖某の子に適く尙くは饗けよ。筮者許諾し、還つて席に卽き西面して坐す。卦者左に在り筮を卒へ卦を寫し筮者執つて以て主人に示す。主人受け視て之を反す。筮者還つて東面す。占ひ卒り。主人に占を告げて曰はく

吉と

若し吉ならざれば則ち遠日を筮すると初の儀の如し。宗人事畢るを告ぐ。期に前つ三日の朝戸を筮する日を求るの儀の如し。

筮に命じて曰はく孝孫某此の某の事を諏り其の皇祖某子に適き某の某を筮して尸と爲す。尙くは饗けよと。

乃ち尸を宿す。主人戸の外門外に立つ。子姓兄弟主人の後に立ち、北面東上す。尸は主人の服の如し。門を出でゝ左し。西面す。主人辞す。皆東面北上す。主人再拜す。尸答拜す。宗人辞を擯する初の如し。卒りに曰はく子を筮して某尸と爲す。占に曰はく吉なり。敢て宿す。祝許諾し、命を致す。尸許諾す。主人再拜稽首す。尸入る。主人退く。

少牢饋食禮日は丁巳を用ひ、旬有一日を筮す。廟門の外に筮す。主人朝服して門東に西面す。史朝服して左に筮を執り、右に上韇を抽き兼ねて筮と與に之を執り、東面して命を主人に受く。

主人曰はく孝孫某來日丁亥用て歲事を皇祖伯某に爲め某の妃を以て某氏を配す。尙くは饗けよ。

史曰はく諾と。門西に西面し、下韇を抽き左に筮を執り右に韇を兼ね執り以て

筮を擊つ遂に命を述べて曰はく

爾の大筮常有るを假る。孝孫某來日丁亥用て歲事を皇祖伯某に爲め某の妃を以て某氏を配す尙くは饗けよ。

乃ち韇を釋き立てゝ筮す筮者左に在り。筮し卦木を以てす。筮を卒へ乃ち卦を木に書し、主人に示し。乃ち退いて占す。吉なれば則ち史筮を得、史卦と卦とを兼執つて以て主人に占を告げて曰はく

從ふと乃ち官戒宗人滌を命じ、宰命して酒を爲し、乃ち退く。若し吉ならざれば則ち遠日に及んで、又日を筮すると初の如し。

要するに筮儀の一條に於ては、何等今日に應用せらるべき眞理を發見せず、只だ古代禮儀の觀念の盛なりし時の一產物として見るべきのみ。這般の筮儀が存在せざるにせよ易の眞理が消滅し又は縮少するにはあらず。筮儀は歷史的蛇足に外ならざるなり。

第十三節　考變占

一、朱子の說

十八變の筮法に由りて六爻を得。然るに其の全体六爻皆變せざる場合あり、皆變ずる場合あり、一爻のみ變ずる場合あり、二爻以上變ずる場合あり。爻の變ずるは占筮と如何なる關係ありや、是れ本節の論せんとする所なり。朱子の啓蒙は其の說最も備はるが故に先づ之を述べ、而して後他說に及ぼんとす。朱子の說は左の如し。

一、六爻、其に變せざれば則ち本卦（卽ち今得たる卦なり）の彖の辭を以て占ふ。彖の辭とは卦の全体に就て文王の述べたりとせらるゝ所の者なり、而して內卦を以て貞となし、外卦を悔となす。玉齋の說に據れば大抵筮法、變爻あるときは本卦を以て貞となし、之卦を以て悔とす。變爻なきときは內卦を以て貞となし、外卦を悔となすなり。貞は現在の狀態に名け、悔は其の變じたる狀態に命ずるなり。（啓蒙卷上、末、卷通釋二、十三ヲ）

二、或る一爻變ずるのみなるときは本卦の變爻の辭を以て占ふ。

三、或る二爻變ずるときは本卦の二變爻の辭を以て占ふ。仍りて上爻を以て主となす、其の然る所以は朱子の說に據れば凡そ變は其の變の極まる所に付て見むことを要す。下を少となし、上を老となす。故に上を以て主となす也

四、或る三爻變ずるときは本卦及び之卦の彖の辭を以て占ふ。而して本卦を以て貞となし、之卦を悔となす。其の故何んぞや、通釋の說に據れば三爻變ずるときは變せざる爻と各々三爻にして六爻平分す。故に兩卦の彖辭を以て占ひ、本卦を以て貞となし、之卦を悔となすなり。其の三爻變ずれば則ち卦の數凡そ二十あり。其の排列の順序は朱子の啓蒙に據れば下の變ずる多き者を先づ列し下の變ずる多き者を後に列す。圖に就て見るべし。若し變卦が前の十卦の中の一なるときは兩卦の彖辭を以て占ふと雖も本卦を以て主となす。若し後の十卦の中にあるときは之卦を以て主となす。是れ其の故如何と云ふに、朱子の意を察するに左の如し、卽ち前の十卦は變するもの卦の下方にあり、變の始めなり。後の十卦は之に反し、變ずる者の卦上方にあり、變の終りなり。故に前十卦は主として未だ變せざる以前の本卦に就て占し、後の十卦は變卦を主とするなり。

五、四爻變ずるときは之卦の二つの不變爻を以て占ひ、下爻を以て主となす、是れに付ては朱子の解なし。敢て强解せず。但だ二爻變の場合と對照すれば則ち其の正反對なるを見るべし、二爻變は六爻の中變ずる者少し。四爻變は變ずる者多し、故に前の場合に於ては本卦に付て占ひ、後の場合に於ては之卦に付て占ふ。前の場合に於ては本卦の變爻の辭にて占ひ、後の場合に於ては之卦の不變爻の辭にて占ふ。又前の場合に於ては上爻を以て主となし、後の場合に於ては下爻を以て主となす。

六、五爻變ずれば之卦の不變爻を以て占ふ。此れに付ても前と同く一爻變の場合を參照すべし。强解せず。

七、六爻皆變ずる場合には乾坤は二用を以て占ふ。卽ち乾が坤に之くときは乾の用九の辭を用ひ、坤が乾に之くときは坤の用六の辭を用ふ。其の他の六十二卦に在りては之卦の彖辭を以て占ふ。按ずるに左傳昭公二十九年蔡墨

魏獻子に答へて曰はく、乾坤に之く、曰はく群龍の首无きを見る吉なりと。卽ち用九用六を用ふるは古代にありし如し。

朱子は更に附記して曰はく。

是に於て一卦は六十四卦に變ずべく、而して四千九十六卦は其の中に在り。(64×64=4096) 所謂「引て之を伸べ、類に觸れて之を長ずれば天下の能事畢る」もの豈信ならずや。今六十四卦の變を以て列して三十二圖となす。(各圖は之を下より見るときは更に他の一圖となる。故に三十二圖、卽ち六十四卦の變となるなり。)初卦を得る者(卽ち圖の上部の卦を得る者)は初めよりして終り、上よりして下なり。(其の變爻の漸次に然か動きつゝあるを云ふ。)末卦を得る者(卽ち圖の下部の卦を得る者)は終りよりして始め下よりし上なり。(其の變爻の然か動きつゝあるを云ふ)變が第三十二卦以前にある者(一爻、二爻、三爻變前十卦なる者の三種なり。)は本卦爻の辭にて占ひ、變が第三十二卦以後にある者は變卦爻の辭を以て占ふ。

凡そ卦爻の辭にて占するとするも、其の辭は甚だ僅少にして一切の事に應ずる能はず。例へば乾の初爻は「潛龍用ふる勿れ」とあるのみ。此れのみにして其の應用甚だ少し。

二、劉雲莊の說

然らば則ち如何せば可なるや。之に付て劉雲莊が曰はく。

筮法は卦爻の辭を以て占ふ。然るに其の辭の事と應ずる者は吉凶を判斷し得べし。又辭と事と應せざる者あり、此の時吉凶を決するは何に由るか。蓋し人、周易の辭の上にて會せんとする者は淺薄にして卦の象の上にて會せんとする者は深遠なり。伏羲氏の人に卜筮を敎ふるや、但だ卦あるのみ、文辭なし。其の過ふ所に隨ひ、之を「卦體」「卦象」「卦變」に求む。而して應せざる者なし。文王周公の辭は以て卦を明かにするなりと雖も然るに辭の該ぬる所、終に限りあり。故に時ありて而して應せず。必ずや左傳及び國語載する所の如く、「卦體」「卦象」「卦變」を以て占ひ、又互體を推し、始めて以て辭の及ばざる所を濟ふに足る。而して吉凶を前知すべし。易を讀む者察せざる可らざるなり。

前きに八卦の象に付て述べし所の如きは盡く之を應用し來りて以て占考に用ふべきなり。

三、太宰純の說

朱子の說は甚だ精密なり、然れども古代何れの時代に此の說ありしや。朱子自身も之を證明すること能はざるべし。朱子は單に自己の見識を立てしのみ。古代此の法ありしと謂ふにあらざるなり。朱子の說に對する太宰純の批評に曰はく。

晦菴、用九用六の辭に依りて推して六十四卦の占法を知り且つ之を春秋傳に考へて以て之れが法を立つ。明にして且つ備れりと謂ふべし。然れども其の中一二の猶ほ曉る可らざる者あり。曰はく、二爻變ずれば則ち本卦の二變爻の辭を以て占ふ。仍りて上爻を以て主となすと。此れ晦菴意を以て之を言ふなり。夫れ諸卦六爻其の辭同からず、吉凶も亦異なれり。若し變ずる所の二爻、一は吉にして一は凶ならば、則ち何れにか適從する所あらん。果して上爻を以て主となさば則ち下爻を如何せん。若し二爻を兼ね取らば則ち何を以て疑を決せん。此れ其の曉る可らざる者の一なり。曰はく、三爻變ずれば則ち本卦及び之卦の彖辭を占ひ、而して本卦を以て貞となし、之卦を悔となす。前十卦は貞を主とり、後十卦は悔を主ると。夫れ六爻皆變せざる者は本卦の彖辭を用ひ、六爻皆變ずる者は之卦の彖辭を用ふ。此れ當然の法なり。此の外彖辭を用ふることある可らず。一彖辭を兩用するは斷を爲す所以にあらざるなり。此れ其の曉る可らざる者二なり。程沙隨が引く所、貞は屯、悔は豫皆八なるもの。國語にありて本と曉る可らざること、之を闕て可なり。前十卦、後十卦の說も亦晦菴の意見、信ずるに足らざるなり。

曰はく。四爻變ずれば則ち之卦の二つの不變爻を以て占ふ。仍りて下爻を以て主となすと。此れ亦晦菴意を以て之を言ふのみ。二不變爻の一、吉にして一凶ならば則ち何れにか適從する所あらん。果して下爻を以て主となさば則ち上爻を如何せん。若し二爻を兼ね取らば則ち何を以て疑を決せん。且つ易は必ず其の變を占ふ。變ずる者を捨てゝ變せざる者を用ひて以て占ふも亦宜き所にあらざるなり。朝鮮の李退溪之を疑ふ。予も亦之を疑ふ。此れ其の曉る可らざる者三なり。

曰はく。五爻變ずれば則ち之卦の不變爻を以て占ふと。此れも亦晦菴意を以て之を言ふのみ。然れども予以爲らく、衆動くは則ち必ず一の不動の者あり

て之を主とる。今五爻變じて而して一爻變せざれば不變爻を以て占べし。一爻變じて本卦の變爻を以て占ふ。卽ち一爻變せざるのみなるときは之卦の不變爻を以て占ふべきなり。故に此の一例は晦庵の言に從ふを是となすべし。

此く批評し、去りて更に論じて曰はく。

注に春秋傳の艮の八に之くに遇ふを引く。若し下文の「史曰是謂艮之隨」なければ所謂艮の八に之くは何の卦たるを知る可らざるなり。杜注にも明解なし。凡左氏の記する所。當時筮者の言、當さに其の法あるべし、恐くは商瞿が傳ふる所の孔氏易是れのみ、後世其の法傳はらず。故に史傳を讀む者、能く其の義を曉るなし。晦庵專ら卦爻の辭を以て占を爲さんと欲す。然れども人事窮り無く。而して辭には局る所あり。何んぞ能く人事の變を盡くさん。故に筮者象を觀て以て占を爲すに如くはなし。而して辭に吉凶悔吝あり。以て斷を爲すべきのみ。納甲飛伏の若きに至りては其の起る所を知らずと雖も、蓋し鬼谷子の徒より傳はる。而して漢儒之を用ふ。今人之を用ふるも亦効を奏す。豈古法を以て之を斥くべけんや。夫れ易は廣し、大なり。故に近世の卜筮家附會するに雜家の言を以てし、猶ほ能く占斷す。況んや漢魏以來先哲の用ふる所なるをや。夫れ易の本は象數にあり、故に筮者當さに先づ象數を明かにし、次ぎに納甲飛伏、孤虛旺相を考へ、以て其の事を占ひ、然して後斷するに卦爻の辭を以てすべし。

其占筮を過信するが如きは固より一種の誤想に外ならずと雖も言辭以外に其占を求むるは注意するべき所なり。而して詳かに占法を示めして曰はく。

所謂六爻皆變せざる者は本卦の彖辭を取り、六爻皆變ずる者は之卦の彖辭を取り、一爻變ずる者は本卦の變爻の辭を取り、五爻變ずる者は之卦の不變爻の辭を取り、餘は卦爻の辭を取らず。（象數に由りて判斷せんとするなり。）

是を定法となす。今人、占法亡るの後に生れ、筮して以て疑を決せんと欲す。亦難からずや。故に予自ら揣らず。嘗て竊かに古人の遺法を考へ、以て一家の占法を立つ。庶くは人事の變を盡くすに庶からんことを。若し有識者責るに杜撰を以てせば亦逃るゝ所なしと云ふ。易道撥乱

要之。朱子の說に就て二爻三爻四爻變を削除し之に代ふるに象數を占ふの義を以てしたるなり。又太宰氏の說に據るも占法は已に全く亡びたるなり、

四、井上金峨の易學辨疑

井上金峨の易學辨疑は朱子と太宰氏との說を併せ評したる者なり。曰はく。

凡そ卦の六爻皆變せざれば則ち本卦の彖辭を以て占ひ、內卦を以て貞となし、外卦を悔となす、仲晦因りて「左傳孔成子筮して屯に遇ふ」を引く。誠に是なり。而して家語載する所を觀るに孔子筮して「賁」を得、則ち曰はく山下に火あるを之を賁と謂ふ。正色の卦にあらざるなりと、占辭にあらずと雖も而かも亦一卦に就て之を言ふや必ずしも彖辭を取らざるを見るべきのみ。

二爻變と四爻變との占法に付ては經傳に文なし、仲晦例を以て之を推す。是なりとす。惟だ二爻變は則ち本卦の二變爻の辭を以て占ひ、仍りて上爻を以て主となす。假りに上下の爻をして一は吉一は凶ならしめば何を以て疑を決せん。此れ後世の議を來す所以なり、余は則ち謂へらく、古人の占法、卦、爻の辭を取りて以て斷をなすと雖も亦或は卦の通體に就き、或は其の爻を互ひにし、以て詳かに其の義を論ず。左氏記する所以て觀るべし、古法既に滅し經に明證なし、且つ朱子に從ふも亦可、如し能く其の象數を觀、之を本之二卦に參へ、之を上下二變爻に考へ因りて以て、占斷を爲さば則ち一吉一凶ありと雖も亦傷まんや。

四爻變すれば則ち之卦の二不變爻を以て占ひ、仍りて下爻を以て主となす、德夫謂はく、易は必ず其の變を占ふ、變ずる者を捨てゝ不變の者を用ひて之を占ふは宜き所にあらざるなりと。夫れ五變爻のとき既に之卦の不變爻を以て占へば則ち四爻變のときの之卦の二不變爻を以て占ふも亦何んぞ怪まん。衆動けば則ち必ず一の不動の者あり之を主とると、德夫も亦意を以て之を言ふのみ、何んぞ獨り仲晦を罪せん。

又曰く

三爻變すれば則ち本卦及び之卦の彖辭を以て占ふ、國語に依りて斷をなす、仲晦の說是なり、德夫の之を辨ずるは誤りなり。而かも所謂「前十卦後十卦」なるものは則ち其の（朱子ヲ指ス）家言のみ固より信據するに足らざるなり。

德夫謂はく、二爻變三爻變四爻變は皆卦爻の辭を取らず、惟だ先づ象數を明かにし、次ぎに納甲飛伏、孤虛王相を考へ、以て其の事を占ひ、然る後斷ずるに卦爻の辭を以てすべしと、此れ其の意蓋だし仲睦が專ら卦爻の辭を以て占はんとするを非なりとなすなり。夫れ古人固より專ら卦爻の辭を取らず。一卦の通體に就きて其の象數を觀て以て占斷をなす、則ち此れ誠に以て定法となすべし、納甲飛伏孤虛王相の如き、原と術數に出づ、妄誕不經、漢儒往々此れを以て古書を讀む、誤りある所以なり、德夫が輩其の師說を奉し、自ら喜むで古を信じ、每に宋儒の穿鑿附會を譏り、而かも此れを取りて以て占法を立つ、何の故なるを知らず。且つ史傳載する所、記事の次、勢ひ及ばざるを得ず、故に備はる者あり、遺れる者あり、豈筮法のためにして之を發せんや、今徒らに其の備はる者を觀、而して之を遺れる者に推すを知らず、旁ら不經の說を取り、以て之を緣飾す、妄にあらざれば則ち愚、易を知らざる者と謂ふべし、悲いかな。

要之、古法亡びたる以上は、且らく朱子の說に從ふも可なりとす。而して前十卦後十卦の說の外は朱子に左袒したり、殊に太宰氏等が宋儒の說を排しながら獨り占法に於て此の法に據るを怪む。

五　龍山の說

一方に於て谷川龍山は甚だしく朱子の說を排せり、曰はく。

象爻の辭なるものは聖人其の象を觀て以て君子に敎ふるの辭にして常道を說けり、占事は權道にして其の卦に於るや常象なく其の占に於るや常義なし。唯だ窮理を察し、卦象に由りて其の吉凶を決す、故に占は其の卦象を主として象爻を用ふることなし、故に占事來を知ると云ひ、數を極めて來を知るこれを占と謂ふと云ひ、動けば則ち其の變を觀て其の占を玩ぶと云ふ、象爻を以て占することは大傳通篇一言一句もあることなし、知るべし占は不變變卦共に其の象によりて占するにあることを、夫れ天下の事物無窮なる故に占事も亦無盡なり、豈象辭六十四章、爻辭三百八十四章を以て天下の至錯を盡くすことあらんや、此れ大傳に象爻を以て占とすることを說きたまはざる所以なり、但だし象爻は常道にして占辭に非ることは別說あり、言長

ければ爰に畧す。考占（朱子作）に左國の占例を引て證すといへども左國は悉く「占者の意味ありて其の爻辭を引けるは唯だ其の占を徵するのみなり、故に其の占の爻辭に合はざる者は徵とせず。是の故に左傳屯の初九變を得て其の爻辭を用ひず、又蠱復不變の卦を得て其の彖辭を用ひず、此れ其の辭を主とせざること見るべし。考占の如きは占者の意味あることを知らず、唯だ彖爻を以て占辭となす、柱に膠するの說なり、其の詳かなることは左國易一家言に載せたれば爰に略す。（周易本筮指南　考變占辨說）

此の說に據れば古の筮法必ずしも彖爻の辭に據らざるなり、占に合ひし辭あるとき引きて以て徵となすに過ぎず、占は專ら「卦象」に據るべきのみ。

六、胡一桂の說

朱子の說は餘まり詳密にして且つ專ら彖爻の辭によりて占はんとするは頗る狹隘なるが故に支那に於ても早く諸家の疑ひを惹起せり、胡一桂が曰はく。

啓蒙の一爻變を觀るに畢萬が筮する所を引て之を證せり。今を以て之を觀れば未だ嘗て之卦を取らざるはあらず。且つ特に一爻を論ずるのみにあらず兼ねて眞悔の卦體を取る。是れ占筮法となすべきに似たり、陳の厲公子完の生を筮するを觀て尤も見るべきなり、二爻變に付ては陳摶宋の太祖のために占ひしとき、諸爻と卦體とをも參考せり、三爻變に付ては啓蒙は但だ本卦之卦の彖辭を以て占ふと云ふのみなれども晉侯屯豫の占ひを以て見れば則ち卦體を并せ考ふることと見るべきなり。

要之卦體并び他にの爻をも參考するは左傳の古法なりとなすなり。

七、周易折中の說

周易折中に曰はく。

朱子の三十二圖は其の次第最も詳密となす、而して後學の疑義二あり、一に曰はく筮法九六を用ひて七八を用ひず、今四爻五爻變は之卦の不變爻を以て占ふ、則ち是れ兼ねて七八を用ふるなり。如何、二に曰はく、周公未だ爻を繫けざるの先き、彖辭の用は周からざる所あり、三代の筮法既に盡く傳はらず、今惟だ經傳を以て據となして之を推せば則ち用九用六の說經文に明かなり、而かも七八を用ふる者は諸書に皆明文なし、惟だ杜預以爲く、夏商之を用

ふと、先儒已に其の非なるを摘せり。之を春秋内外傳に攻ふるに變と不變と變の多寡とを論ずるなく皆卦の體象と其の彖辭とを論ず。卽ち一爻變のときは、爻辭を以て占ふと雖も、而も亦た必ず先づ卦の體象と其の彖辭とを以て主となす。則ち古人の占法たる、未だ爻辭あらざりしときは彖辭のみを用ひしを知るなり。既に爻辭あるの後は則ち但だ專ら動く者を以て占ふ。而かも亦初めより彖辭を離れて以て斷せざるなり。惟其の一卦變じて六十四卦となるべきが故に之卦得卦の兩卦を參考して以て事物の理を盡くすべし。故に卦の變ある者は生卦（全體ノ一卦ノコト）を主として成爻を主とせず。爻の變せるときは專ら動けば則ち占あり、雜り動けば則ち占なし。是くの如くなれば則ち傳記の文皆合し、而して學者の疑ひ釋くべし。內外傳に八を得ると云ふ者に至りては一に曰はく、泰八に之くと。則ち變せざる者なり。一に曰はく、貞は屯悔は豫皆八と。則ち三爻變ずる者なり。一に曰はく、艮八に之くと、艮隨に之くとなす。則ち五爻變せるなり。諸儒八を以て不動の爻となす。之を文意に攻ふるに未だ符協せざるに似たり。蓋だし三占は變數不同と雖も然かも皆專動の爻なければ則ち其の卦を用ふるとなす。卦は一なり。卦は八を以て成る。故に八を以て卦の標識とす。猶爻は九六を以て成るが故に九六を以て爻の標識となす。如きなり。朱子の圖を見る者は更らに須らく左傳國語諸書を以て互ひに相ひ參攻すべし。

八、江永の說

而して河洛精蘊の著者も前二說を引用し、之に左袒したり。先づ朱子の卦變三十二圖を排し、更に謂て曰はく。

變卦の序條理精密と雖も卦を占ふの時、取り用ふる所なきに似たり。爻變する者あれば本卦を貞となし、之卦を悔となす。前きに言ふ。（朱子ナリ）三爻變の卦二十あり。前十卦は貞を主とし、後十卦は悔を主とす。前十卦は初爻變せざる者なり、後十卦は初爻皆變ずる者なり。占者豈必ず此れを以て圖を按じ、其の主たると主たらざるとを定めんや、朱子の意是を以て定めて占例となし、占者をして疑惑する所なからしめんと欲す。然れども易道は其の變を尙ぶ。占者は時に隨て變通せざる可らず。或は分ち或は合し、或は取り、或は含つ、或は

専ら主とし、或は旁及す。例を以て求む可らず。如し例に拘はらば恐くは辭に滯泥あり、未だ必ずしも鬼神と其の吉凶を合せず。胡氏の言、占法を補ふべし。折中論の尤も精なる。學者の二疑を釋くべし。

畢竟するに河洛精蘊の著者は又曰はく。

今擲錢の卦、五爻變ずる者に遇へば、或は獨靜の爻に應じ、或は亦盡く然らず。著卦例を以て定め難し。其の爻辭の事と合する者を視て之を用ふべし如し。合せざれば二卦の體象或は互卦と之卦との象辭を占ふ可なり。象辭を占ふ者も亦體象と互卦とを兼ぬべきなり。

九、結論

吾人は此れ以上の引用を以て必要とせず。歸する所は古占法を知らんとするには左傳國語の筮を以て標準とないすべしと謂ふに在り。然れども之を標準とないすと人々同からず。要するに周易折中を以て其の中庸を得たる者となすべし。此說に據れば、凡て占筮は卦象卦體と彖辭とを以て參考すべしとなり。

第四章　易の應用

第一節　相談對手

凡そ人は何事をなすにも相談相手なかる可らず。己れ獨りの考へにてなしたることは往々にして後悔することあり。而して相談對手となるものは老人なるを宜しとす。老人は世故を經由して常識が發達し居ればなり。常識の發達といふことが最も必要なり。此點に於て余は易を以て一種の相談對手となすを好む。易の作者は其の當時にありては比較的に世故に長けたるものなるべく易經其者は人生各種の方面を網羅して能く人情を穿てるものあり。故に易經を以て相談對手となすべしとは余が宿論なり。其方法如何といふに余が分類せるが如き順序に從て六十四卦を排列し、之を一冊に纏め置くなり。今結婚に就いて疑ふ所あれば結婚に關する部分を開き、前後參照して以て其の意見を定む。其他類推すべし。然かする時は占筮を用ふることなく、直ちに其の所を披き得るなり。固より平生

熟讀し、之を腦中に收め置けば一々披き見るの要なし。然れども相談對手とするといふ點は乃ち一なり、若し別に一室を築きて之を易室と名け、金裝せる易經(而かも余が排列せる)一冊を卓上に乘せ何か事ある毎に入りて之を問ふが如きは要するに好事者のことにして一概に贊成すべきにあらず。然れども亦害もなきなり。

兎に角此の如く易を使用するは最も妥當なる見解なるべし、易は人情を描けるものなれば人情を知了することを勉むるは第一必要事なり。卽ち之を以て老人と見做し、常識家と見做し、一切事に對し、最も正直なる意味に於る相談對手となすなり。王充論衡に曰はく、

子路孔子に問ふて曰はく、猪肩羊膊も以て兆を得べし。蒿葦藁茅も以て數を得べし、何んぞ必ずしも蓍龜を以てせん、孔子曰く、然らず、蓋し其名を取るなり、夫れ蓍の言たるや舊なり、龜の言たるや舊なり、孤疑の事を明かにするには當さに耆舊に問ふべきなりと、此れに由りて之を言へば蓍は神なるにあらず、龜は靈なるにあらず、蓋し其名を取りて未だ必ずしも實あらざるなり。

（卜筮篇）

乃ち王充は蓍と龜との音より推して其の老人を意味すとなす也。孤疑する時は老人に問ふて質すが如く、老人の代りに卜筮に問ふて以て之を決すべしとなすなり。

易の文章は要するに處世上、道德上の訓戒なり。之れに習熟する時は遂には一切の事に應用して何等の礙碍をも感ぜざるに至るべきなり、唐の虞世南嘗て曰はく易を知ざるものは以て宰相となす可らずと易を研究することに由りて一切の人情を知了するを謂ふなり、人情に古今なし、殊に易の作者は種々なる苦心を費やし、樣々なる經驗を積むで以て成功したるものなるべきが故に其の世態人情を說く所に於ては大に傾聽の價値あり、易の經文は茲に至りて大に尊重すべしとなす。

第二節　倫理的唯心論

陸象山は心卽理を立てゝ以て根本となし、此理は卽ち易理となし易理の宇宙

に遍滿し居る所以を明かにせり、曰はく。

此理は宇宙に塞がる、誰れか能く之を逃れん、之れに順へば則ち吉、之れに逆へば則ち凶、其の象蔽せらるゝ者は則ち昏愚となり、通徹せらるゝものは則ち明智となる、昏愚なるものは其の理を見ず、故に多く逆て以て凶を致す、明智のものは其の理を見る、故に能く順にして以て吉を致す。(易說)

卽ち易理を明かにし、理に順ふて生活する時は幸福を得、逆る時は不幸に陷るとなすなり、參同契の說に似たるものあり、然れども其の絕對唯心論的に易理を解釋したる點は最も注意すべしとなす、象山又曰はく。

易を說くもの謂ふ、陽は尊くして陰は賤しく、剛は明かにして柔は暗しと是れ固より然り、今晉の卦たる上の離の六五の一陰明の主たり、下の坤三陰を以て離明に順從す、是を以て吉を致す、二陽爻反て皆善ならず、蓋し離の明たる所以のものは是の理を明かにすればなり、坤の三陰能く其の明に順從す、宜しく其れ吉にして利ならざるなかるべし、此を以て理を明かにし、理に順つて善なれば則ち其の盡く然らざるものは亦宜しく、其れ盡く善ならざるべきなり。此理を明かにせずして、而して爻畫名言の末に泥むは豈與に易を言ふべけんや、陽貴く陰賤く、剛明かに、柔暗きの說、時あつて泥む可らざるなり。

然れども象山の所謂理なるものは宇宙一切の理を包括するなれども主として倫理を指せることは象山哲學の全系統に於て明かなり。易の理、易の道を解するもの然り、故に曰はく、

易の書たるや、遠かる可らず、其の道たるや屢々遷る。中略小心翼々、道は須臾も離る可ざるなり。五典天秩、五禮天秩、洪範九疇、帝用て禹に錫ふ。傳へて箕子に在り。

と。象山の如き倫理學者の目には殆んど人倫道德のみが映じ來り、他のものは殆んど之を忘却せんとす。然れども兎に角絕對的唯心論の立脚地より易を解釋せる者と見ざる可らざるなり。

第三節　政治思想

易を學問的に實地に應用するも亦應用の一なり。乃ち政治に付いて其一例を示めさん、其の餘、處世、交際亦推して知るべし、第一編と比較し六十四卦の分類を考ふべき也。

政治は人君の爲す所、故に易に在りては第五を以て政治の中心となす。隨て政治思想を見んとする者は須らく此の爻に於てすべし。

先づ人君に必要なる德は陽剛正か、柔順にして賢人に聽くか、又は試意を以て賢人を求むるかなり、周易に於ては之を標準として以て言を立つ。

人君は天下の萬民を親み、明かに標準を立てゝ之れが避就を示めし、來る者は之を撫し、去る者は問はず、私恩小惠を以て陰かに天下の人心を結ぶ可らず、比の九五に曰はく。

顯かに比す。王用て三驅して前禽を失ふ。邑人誡めずして吉なり。

咸の九五に云はく、

其の晦に感ず。咎なし。

又恒の六五に云はく

其の德を恒にす。貞なり。婦人は吉。夫子は凶。

其の行動皆私なきを要す、遯の九五に云はく、

嘉遯す。貞吉

人民の訴を裁判する、亦陽剛中正の君にして而して後善くすとなすべきのみ。

訟の九五に云はく、

訟ふる元吉。

然れ共易に於て最も老子に似たる者は大畜の六五なり、曰はく。

豕の牙を獪す吉。

豕の牙を損して害をなさざらしむるが如く、此の爻柔に在りて要領を得て能く之を御するなり、其人を刑するや、又但だ要を得べきのみ、故に噬嗑の六五に云はく。

乾肉を噬み黃金を得、貞厲にして咎なし。

以上諸爻共に六五なり、六五は陰にして柔、卽ち柔を以て萬機の中心たるなり。然り而して人主は萬民の中樞となり、之を養ふの中心たらずんばあらず、井の

九五に云はく。

井洌して寒泉食ふ。

井は人を養ふの具、故に以つて譬ふるなり、然りと雖も人君は日に德を研き身を修めざる可らず、大學に曰はく、新德と、而して易に於ても亦之を述べて革の九五に曰ばく

大人は虎變す、未だ占はずして孚あり。

虎は大人の象あり故に適用す、大人上に在りて其の德を新にす。人々皆之を信ずるなり、隨て人主は萬民の法とする所、自ら之を心得ざる可らず。觀の九五に云はく。

我が生を觀、君子は咎無し。

觀は陽、上にありて諸陰下にあるの象なり、故に然か云ふ。

人主賢臣を得て泰然として上にある、猶ほ鼎の動かざるに似たり、鼎の六五に云はく。

鼎黃耳金鉉。貞に利し。

此の爻柔と雖も文治の中心たり、故に人君の其の輔佐を得て其の德あるに喩ふるなり。

人主は命令を出す者、須らく公明正大を以て之を行ふべし。下或は應せざる者あるも遂に能く奉戴せられん、渙の九五に云はく。

渙のとき其大號を汗にす渙のとき王居て咎无し。

汗は出でゝ反らず、號令一たび出でゝ反らざるに喩ふるなり、而して巽の九五乃ち曰はく。

貞にして吉、悔亡ぶ、利あらざること无し、初め无くして終り有り、庚に先つこと三日、庚に後るること三日。吉なり。

人主に惡む所は其の獨斷的なるにあり、故に履の九五に曰はく。

夬て履む。貞なれども厲。

殊に幼君にありては輔佐を要す、故に蒙の六五に云はく。

童蒙吉なり。

而して師は人君の大事、故に已むを得ずして之を行ふべし、師の六五に曰はく。

田に禽有り言を執るに利し、咎无し、長子は師を帥ひ弟子は尸を輿す。貞なれども凶。

一般に言へば賢臣に任ずるを以て可となす、易之を說く者甚だ多し。

隨の九五に曰く

嘉に孚あり吉。

蠱の六五に曰く

父の蠱を幹す。用て譽あるなり。

臨の六五に曰く

知臨す大君の宜き吉なり。

无妄の九五に曰く

无妄の疾藥すること勿くして喜あり。

睽の六五に曰く

悔亡ぶ厥宗膚を噬む往て何の咎あらん。

塞の九五に曰く

大に塞む朋來る。

解の六五に曰く

君子維解くことあり吉。小人に孚有り。

損の六五に曰く

或は之を益す、十朋の龜も違ふこと克はざるなり、元吉。

益の九五に曰く

孚有て惠心、問ふこと勿くして元吉、孚有て、我德を惠とす。

萃の九五に曰く

萃るに位有り咎なし。孚あるに匪ず、元永貞にして悔亡ぶ。

升の六五に曰く

貞吉階に升る。

漸の九五に曰く

鴻陵に漸む。婦三歲孕まず終に之に勝つこと莫し。吉。

豐の六五に曰く

章を來せば慶譽あつて吉。

未濟の六五に曰く

貞ければ吉にして悔なし君子の光り孚有り。吉。

大有の六五に曰く

厥の孚交如す威如す吉。

家人の九五に曰く

王家を有つに假る。恤ふこと勿くして吉。

賁の六五に曰く

丘園を賁る。束帛戔戔。吝。けれども終に吉。

旅の六五に曰く

雉を射て一矢亡ふ。終に以て譽命あり。

小畜の九五に曰く

孚有り攣如す富其鄰を以てす。

賢臣の始めより來れるあり、或は中途にして阻められ、而して後來る者あり、君の剛なるあり、柔なるあり、時に塞あり、升あり、而も賢を得るは最も必要條件たるなり。縱ひ之を得ざるも中心惕々たれば則ち之を得べきなり。爻に在りて必ずしも應爻たる否とを問はざるなり、中孚は誠あるがために九五にして九二の賢を得、曰はく。

孚有り攣如す咎なし。

姤の九五に曰く

杞を以て瓜を包む。章を含めば隕ること有り、天よりす。

然りと雖も賢人を得ずと雖も時勢善なれば則ち幸にして免るゝ者あり、此れ他なし。復の六五に曰く

敦復す悔なし。

晋の六五に曰く

悔亡ぶ失得恤ふこと勿し。往は吉にして利からざるなし。

大壯の六五に曰く

羊を易に喪ふ。悔なし。

然りと雖も厄の來る測る可らず、物壯んなれば必ず衰ふ、是に於て易は乾坤二卦を以て全篇の首となし、陰陽二氣の和合によりて一切現象は起るとなし、之に擬するに六十二卦を以てす。而して兩者の調和を得たる者を水火既濟䷾となし、既濟は其の儘にて存續する理あらずとなし、之れに次ぐに火水未濟䷿を以てし而して既濟の九五に於て述べて曰はく。

既濟の九五に曰く

東鄰牛を殺す西鄰の禴祭して實に其の福を受くるに如かず。

是故に君主常に愼戒せざる可らず、

否の九五に曰く

否を休む、大人は吉、其れ亡びん其れ亡んとして苞桑に繫る。

離の六五に曰く

沱若す、戚嗟若す、吉。

時勢困難なるも君主剛健なれば則ち能く之を救ふべきの理あり、屯の九五に曰く

其膏を屯す、少く貞なれば吉、大に貞なれば凶。

坎の九五に曰く

坎盈たずして既に平なるに祇る、咎なし。

其の甚しきは困の九五の如き者あり、時勢の困難殆んど極に達し、而も終に能く輔佐を得て漸く之を挽回する者なり。困の九五に曰く

劓られ、刖られ、赤に困む、乃ち除にして悅びあり。用て祭祀するに利し。

時勢宜からず而して君主陰柔なる者は殆んど善くすべきの理あらざるなり。

小過の六五に曰く

密雲雨ふらず、我が西郊よりす公弋して彼の穴に在るを取る。

豫の六五に曰く

貞にして疾す、恒に死せず。

其の甚しきは則ち人主にして人に養はるゝ者あり。頤の六五に曰く

經に拂る、貞に居れば吉、大川を涉る可らず。

人主は其の一擧一動を愼まざる可らず。況んや、小人多きの時に於てをや、

艮の六五に曰く

其の輔に艮る、言に序有り、悔亡ぶ。

若し其れ時勢善にして人君亦賢なる時は必ず又樂みの道なかる可らず。易に在りて需は「まつ」の卦。節は節あるの卦なり。而して人主は共に以て和樂するを得るなり、節の六五に曰く

甘節す吉、往けば尚ぶこと有り。

需の九五に曰く

酒食に需つ貞にして吉。

然り而して人君の性を分て、剛と柔との二となすときは其の理想となすべき者二あり、乾坤是れなり、乾の九五に曰はく。

飛龍天に有り大人を見るに利し。

坤の六五に云はく。

黄裳元吉。

即ち剛と柔にして剛の德の中に備なるものと是れなり。

繫辭傳に曰はく

結繩を作りて罔罟を爲し、以て佃し、以て漁す。蓋し之を離に取る。包犧氏沒して神農氏作る、木を斲て耜となし、木を揉んで耒となす。耒耨の利以て天下を敎ふ。蓋し之を益に取る。日中市をなして天下の民を致し、天下の貨を聚め、交易して退き各其所を得。蓋し之を噬嗑に取る。

乃ち易の卦象より種々なる物質的並びに精神的文明を思ひ付きしとなすなり。然れども此れ單に易の卦象に於て之を發見すといふのみにして、易より發見せしといふは事實にあらざるなり。又曰はく、

木を切て舟となし、木を剡づつて楫となし、舟楫の利、以て通せざるを濟す。遠きを致して以て天下を利す。蓋し之を渙に取る。牛に服し馬に乘じ、重きを引き遠きを致して以て天下を利す。蓋し之を隨に取る。重門擊柝、以て暴客を待つ。蓋し之を豫に取る。

第四節　易の有形的應用

此れ亦同斷なり。豫を解して悅豫の義となし。悅豫せんがために重門擊柝を置きしとなす如き何等事實に當ることなし。如何となれば重門擊柝は悅豫を得んためには相違なきも易の豫の卦より出でしにあらざればなり。殊に、

上古は結繩して而して治む。後世の聖人之れに易ふるに書契を以てす。百官以て治まり、萬民以て安す。蓋し之を夬に取る、

といへるが如き、明決の意味より文字を思ひ付きしとなすなれ共此れ亦易の卦象より文字を作りし者となす可らず。凡そ此類易の卦象より、其れ等を作りしにはあらずして、其れ等現象成立の後に於て直接に間接に易の六十四卦と關係ありといふに他ならざるなり。今後六十四卦を應用して以て新文明や新發見をなせと言はゞ易の作者と雖も恐くは以て不能事となさん。乃ち繫辭傳の如く易を物品發明に應用するは寧ろ愚なりと雖も、而も六十四卦の意味が隨所に發見せらるといふことは易の廣大無限なることを示めし、精神的活動に易を應用して興味あるものなり。

第五節　陰符經

上篇

觀天之道。執天之行盡矣。天有五賊。見之者昌五。賊在心。施行於天。宇宙在乎手。萬化生乎身。天性人也。人心機也。立天之道以定人也。天發殺機。移星易宿。地發殺機。龍蛇起陸。人發殺機。天地反覆。天人合發。萬化定基。性有巧拙。可以伏藏。九竅之邪。在乎三要。可以動靜。火生於木。禍發必剋。姦生於國。時動必潰。知之修鍊謂之聖人

中篇

天生天殺。道之理也。天地萬物之盜。萬物人之盜。人萬物之盜。三盜既宜。三才既安。故曰食其時。百骸理。動其機萬化安。人知其神而神。不知不神而所以神。日月有數。大小有定。聖功生焉。神明出焉。其盜機也。天下莫能見。莫能知。君子得之。固躬。小人得之。輕命。

下篇

瞽者善聽。聾者善視。絕利一源。用師十倍。三返晝夜。用師萬倍。心生於物。死於物。機在目。天之無恩。而大恩生。迅雷烈風。莫不蠢然。至樂性餘。至靜性廉。天之至私。用之至公。禽之

制在氣生者死之根。死者生之根。恩生於害。害生於恩。愚人以天地文理聖。我以時物文理哲。人以愚虞聖。我以不愚虞聖。人以奇期聖。我以不奇期聖。沉水入火。自取滅亡。自然之道靜。故天地萬物生。天地之道浸。故陰陽勝、陰陽相推。而變化順矣。聖人知自然之道不可違。因而制之。至靜之道。律曆所不能契。爰有奇器。是生萬象。八卦甲子。神機鬼藏。陰陽相勝之術。昭昭乎進於象矣。

僅か四百四十四字の簡單なる文章なれども、古來道家の金科玉條として最も有名なる者なり。今暫く其文の講義をすべし。陰符經と云ふ意味は陰は暗也、默也とありて見ること能はず、又知ること能はずと云ふ意味なり、符は符號或は契合と云ふことにして、自然に天地の理に符合し居ると云ふ意味なり。他の言葉にて言へば造化の理に默契することなり。天と人とが合一になりしと云ふ意味なり。されば陰符經の四百四十四字の趣意は人間造化の理を得て其儘實行することを主としたるものなり。

〔上篇〕すべて人間の學問は天の道を觀察して、天の行の如くなりさへすればそれにて十分なり。天人合一の意味は、既に此の冒頭の二句に於て包含さる。天には水火木金土あり。是等は五行相剋の說に從ふときは、互に相殺するものなり。故に水は火を殺し火は木を殺し、金は木を殺し、木は土を殺す。されば爰に五賊と云ふ。陰符經は元來人の見逃すが如き所、或は人の見能はざる所に於て機微の眞理を發見せんとするものなれば、其詞の使ひ方も亦一種特別なり。通常ならば五賊などゝは云はず。然るを爰には特に五賊と云ふ。同じく五行は互に相賊すと云ふことを見るは、卽ち天地の理を見るなり。從て之を見しものは榮ゆとなり。人間は水火木金土の五行より成り居るが故に、五行に應じ仁義禮智信なる五箇の道德を存す。仁義て智信は心中にあり、發して人間の行爲となる。されば宇宙の眞理なる所の五行は自己の心にあり、自己の行は卽ち五行を表はすものなるを以て、宇宙の理は我手の中にあり、萬の變化は自己の身より生ずと云ふことを得。一體天の附與したる所の性質は人の人たる所以なり。人の人たる所以のものは卽ち天の道なり。然るに人の心は必ずしも天理に從ふことを得ず。言はゞ機みにして、或は善にも働き、或は惡にも働くものなり。斯の如く善惡何れとも定まらざるものなれば、之を機なりと言ふなり。其人の心を制するに天の道を標準とするなり。之に合

するやうにすることを名づけて人を定むと云ふ。蓋し天地間の現象を觀察するに陰あれば陽あり、陽あれば陰あり。陰と陽とが原因となり結果となり居るものなり。陰符經は之を面白く觀察して、不幸は幸の原因となり、殺すは生の原因となり、逆境は幸福の原因なりと云ふが如くに、人の目に見えざる所より說き起して面白く之を說明せり。天發殺機と云ひて所謂陰の氣を起して之が爲めに天の變化起る。移星易宿とは、卽ち之を形容したる詞なり。天地間の現象は陽なくしては起らずと云ひ其實陰なくしては起らざるものなれども、陰に重きを置きて之を說明したるなり。又地球上の現象にても、同じく陰に因りて起り來る故に、地發殺機、龍蛇起陸と云へり。之と同樣なる譯にて人も亦天地自然の理に從ひ、殊に陰は陽の源となることを心得、之に從ひて活動するときには、天地其儘の眞理を心中に含むが故に人發殺機、天地反覆と云へり。天も人も合發して同じく陰陽の理に從ひ活動する所より、一切宇宙間に起來する變化あり。人間の性質には巧なるもあり、拙なるもあり。人各一樣にあらざれども若し天地自然の道理に從ひ實行し努むる時は、拙劣なる性質を以て之を伏藏せしむることを得。凡て人の世の中に生活するに當りて最も心を亂すものは、九竅なり。二目、二耳、二鼻一口、大小便の各一是なり。是等の九竅ありて人心と外物と交涉あり。是等のものなかりせば人の精神は平安なるべきなり。八竅の中にても殊に深く精神上に影響し易きは、耳目口なり。耳に於て面白き聲を聞くが爲に心はそれに傾く、目に於て能く美麗なる色を見るが爲に心は之に傾く、口に於て能く味を知るが爲に心は之に傾く。斯の如く耳目口の三者は最も人の心を傾かしめ易し。從ふて是等の竅を塞ぎ人心を定むるが如きは精神修養の第一義なり。而も絕對的に之を塞ぐ譯には行かず。耳目口の三者をして、之を動かさんとするときは動かし、靜かならしめんとするときは靜かならしむる如く物の爲に動かされず、我心に從ひて動くやう爲すこと肝要なりとて、卽ち可「以動靜」と云へり。陰符經を始め道家の理想は內視反聽と云ふ。言はゞ心身の平安は如何にしても自己の眼中を視る如くにし、又耳中にて聽く如くにて居らば精神は靜まり來る。斯の如く內視反聽の四字は道家修養の一工夫なり。

之を摘言すれば、陰陽の理に於て、陰は陽の源となり、陽は陰の源となる、禍は幸

の源となり、幸は禍の源となれども、幸必ずしも永續せず、禍必ずしも永續せず、互に相原因となると同時に相滅せんとする所のものなり。實に陰陽の理は奇なるものと謂ふべし。火は木より生ずれ共、火激しくなる時は木を消滅するものなり。惡人國内より生ずるものなれ共、時節來れば國家を破壞するに至る。斯の如き理を知りて能く精神を修むる者は聖人なり。卽ち陰陽消長の理を靜觀するが陰符經の趣意なり。

『中篇』凡そ天道は陰と陽とにて陽は生ずることを掌り陰は殺すことを掌る、天の中には生ずる道と殺す道とありて一は生じ、一は殺し行くものなるが、自然の道理にして天地萬物、人と三者に就き之を考へ見るに、天地は萬物を生ずるものなれ共、亦萬物を殺すものなり。是天地は萬物に取りて盜賊たる所以にして又萬物は人の耳目を動かして其心を失はしむるものなれは萬物は人に取りて盜賊と云ふ可し。然るに人も亦萬物を食して始めて成長するものなるが故に、人も萬物に取りては盜賊なり。斯の如く天地、萬物、人は互に盜賊となり合ひ居るも、此三盜は各活動し、天地人三者は是に依りて成立するなり。盜賊なる詞は惡しけれ共、意味には差支ひなきものなり。此故に其時を失はず、食物を得る時は身體皆理む可し。又其機を見て能く働く時は、一切の變化は安く行はる。是れ實に宇宙の機微なる所なるが、一切の人は唯其不可思議の表に見ゆる所を知り、表に見えざる所に不可思議のあるを知らず、太陽或は月の運轉するに一定の法則あり。又大なるもの、小なるもの各一定の分量あり。而して天地萬物の結果現はれ來り、神變不可思議なる作用現れ來る。然るに其萬物の相互に影響し合ふ所の機微なる所卽ち機む所は天下の人能く見知することを得ず。君子は斯の如き機微なる所の道理を得て、自己の身體を固む。小人は斯の如き道理を知れば却つて自己の一命を輕んずにる至るなり。

〔下篇〕盲目なる者は耳聰明にして、聾者は目聰明なり、自己の精神の一方を塞ぐ時は、必ず他方面に於て其の勢力を發揮することを得る故に人は精神を外に向はしめて以て之を消耗するが如きことなきが肝要なり。導引の術卽ち道家の術を行ふよりも十倍の効力あり、若し其術に從ひて實行し三晝夜間も繼續する時は終に導引の術を實行するより萬倍の効力あるべし。凡そ人心は外物を見る所

より生じ來りて、外物消滅するとともに消滅するものなり。心と外物とは相對し居るものなるが、そは何れの所より來るかと云へば目より來るなり。目は前述したる三要の一にして、殊に重要なるものなり人は目を塞ぎて見えざる如くする時は自ら精神の紊亂せらるるとなし。天は恩なきが如くなれども、其實一切の萬物はそれに依りて生ずる故に、大恩ある理なり。迅雷烈風も天の爲に起る。此點より考ふるに、人の至つて樂しき性は綽々として餘裕あるものにて又至つて靜かなる性質は自ら廉なるものなり。卽ち心を用ひずして自ら神妙不可思議なることを得て、通常の人よりも一段深く執心する時に於て起り來る。天は至つて私なるものなれ共、又一面より見れば至つて公平なるものなり。其然る所以のものは何ぞや、卽ち禽之制として、天が一切萬物を作り、或は之を用ふる所の要點は一氣にあり。一氣は卽ち陰陽のある處なり。陰陽は反對の性質にて互に原因となり結果となる。生ずるとは死の原因死とは生ずるの原因なり。同樣に恩は人を害ふ所より生ず草木は冬に至りて害される故、來年又生ずることを得、害は恩より生ず。卽ち草木の殺さるゝは生ぜらるゝがために起り來る。斯の如き不可思議の道理は之れを想像することすら困難なるが故に、愚なる人は其表面に表はれたる天地の文理を以て不可思議となす、卽ち聖となす。然れども我は時物の文理を以て哲となす、人以愚虞聖とて、聖人は愚なる者と云へるは相當の理ある說の如くなれども、自己の見る所にては聖人は愚ならぬ者也。又人々は聖人は奇なることをなすものと思へども、自己は聖人は奇ならざることをなすものと思ふ。水に沈み火に入りて自ら滅亡を取るが如く、人は天地造化の道を究めざるが故に終には自己より禍を招くが如きことあるなり。

一體陰符經の趣意とする所は道なるが故に靜かに觀察する方に重きを置く。宋の周茂叔の說にも靜を主とせるが、道家は凡て其の如くにて動と靜とあれば靜を中心として之れより動を見るなり。去れば自然の道は靜かなり故に、天地萬物生ずと述べたり天地の道は自然に水の浸入するが如く行はるゝ故に陰と陽とが互に相待ち居るものなり。陰と陽とは互に相推して而して變化行はる。聖人知自然之道不可違。自然の道其儘に因りて之を制御す。但靜なる所の道は律曆も契し能はざる所なり、言はゞ奇器なり。其道より一切萬象の生じ來るあり。易の八

卦、十干、又神機鬼藏、陰陽相勝の技術に至りても、皆此理を基礎として行はるゝものなるが、其等は目に見ゆる所のもの以上にして、目に見ゆる所を以て之を觀察せんとするも到底出來得ざることなり。

【總評】以上は陰符經全體の意味なり、本文は極めて簡單にして、適當に其意味の如何なるものなるやは知り難き所あれども、先づ大體は斯の如きものなるべし。今其二三の要點を擧んに、凡て世の中に處するに當りては、何ごとに依らず心を靜かにするを肝要とす。心を靜かにして以て物の道理を觀察するなり。此心得は周易需の卦の六四、上六に於ても見ることを得。又九二に於ても見ることを得。根本に於て周易と一致する所あり。又莊子の養生主の中に示しあることにても之を見るを得べし、次に凡ての物事は形の上に於て之を見す、其裏面より之を見るを要するなり。凡て物事を深く觀察する時は、幸を見ても必ずしも喜ぶことをせず、禍を見ても必ずしも悲むことをせざるなり、其等の點は非常に興味ある所なりとす。されば陰符經一篇を讀む時は如何なる困難に逢ふも靜かに捲土重來の勢を挽回し得べきなり。

第六節　萬物數の說

數は易に於ては屢々言ふ所なり。之を中心として處世する時は宇宙を見ることと恰も階段の如くなるべく、規則正しく行はれ、宇宙は恰も階段の復雜せるが如く觀察せらるべし。此點に於て易の哲學とピュタゴラス派の哲學も能く相似たる所あり。易哲學の講究者は恰も宇宙を掌中に收めたるが如き感あるべし。故に暫く易の此點に就いて考察し、其ピュタゴラスと異なる所を擧げんとす。尙前章易とピュタゴラス哲學とを參照すべし。只だ彼れに在りては兩派を精密に比較せんことを期し、此れに在りては數として宇宙を見る上に付いての差を述べんとす。要はピュタゴラスは本體學的に數的に觀察し、易は但だ數を標準として見たりといふに他ならざるなり。

易を說くものは多く一切萬物は皆數に由りて司配せらるとなすを以て普通とす。若し果して然りとすれば易はピュタゴラスの哲學と大に似たる所あり。今一應易の數を述べざる可らず。凡そ一面を執へて以て其の全般を蔽はんとする

は如何なる方面に於ても大なる過失を釀成する者なり。易は數なりといふも亦此くの如し。易に六十四卦あり。數に由りて生ずるにあらず。五十策に由りて六爻卦を得る所を見れば數より六十四卦を生ずる如くなれども六十四卦本來の意義に溯りて考ふれば則ち陰陽兩者を積聚せる結果に外ならず。決して數より生せるものと見る可らざるなり。且つ彖辭象辭の如き何れも處世上道德上の方針を敎へたるものにして、數にはあらず。然らば則ち易を以て數なりといふは何れに本づくかといふに五十策を中心として、九六七八等の數が卦爻と關係する所大なるが爲めのみ。殊に繫辭傳に云はく

天數五、地數五。五位相得、而各有合。天數二十有五、地數三十。凡天地之數五十有五。此所以成變化而行鬼神也。乾之策二百一十有六、坤之策百四十有四。凡三百有六十、當期之日。二篇之策萬有一千五百二十、當萬物之數也。

此の一一五二〇なる數は六十四卦に付いて、陽爻二百十六、各爻は九なりとし、陰爻一百四十四、各爻六なりとす。合して一一五二〇なりとするなり。

$$216 \times 9 + 144 \times 6 = 11520$$

然れども此數を萬物の數に當るとなすの根據は何處にありや。今日の思想にては到底理解すること能はざる所に屬す。易に在りては乃ち六十四卦を以て一切萬有を總括せんとし、而かも、六十四卦三百八十四爻に於て九六、合して一一五二〇なる數を發見し得るが故に此くはいふなるべし。

萬物の數が一萬一千五百二十といふは甚だ疑はしき見解なりと謂ふべし。今假りに萬物の數を以て然りとなすといふも、數の間に何等か或る關係を發見したるにもあらず。但だ萬物の總數然りといふに外ならざるなり。又卦變の法により、一卦變じて六十四卦となるべし。而して各六十四卦各萬有一千五百二十の數を具へ、上下經六十四を乘ずれば則ち七十三萬七千二百八十となる。之を以て萬物委曲の數なりとも見られざるにあらず。此種の數的思想を取りて之をピュタゴラスに比すれば則ち實に大に異なるものあり。ピュタゴラス派は數を以て萬物の本性となし又模範となすアリストテレース氏の書に據ればピュタゴラス派に關する二個の句あり。一を

萬物の原因は數なり。

となす。此れ本性の意なり。他を

萬物は數のミムネーシンなり。

となす。卽ち寫眞の意なり。アリストテレース氏は之を以て矛盾する者にあらずとなす。然れども細かに之を味ふときは *arxa* 原因と *μιμησαν* 寫眞と自ら其の意味を異にせざるを得ず。少くともツェラー氏の言へる如くピュタゴラス派に於ては形式と實質との區別を發見する能はず (Die Philosophie der Griechen) 數其者は抽象的の概念にして實在せる者にあらず。然るに若し「一」なる數を沈思熟考すれば遂に思想の麻痺を來たし「一」其者が實在するが如くに思ふなり。是れを以て數を指して本性となし實質となす。數は物體其者と異なるがために物體を以て數の寫眞となす。乃ち數と物體とを結合せしめ又離別せしむる間に於て彷徨しつゝありしなり。由是觀之。數の觀念は思想錯誤又は思想麻痺の結果に外ならず。其の何れなりやは今强ひて之を論ずるの要なけれども兎に角ピュタゴラス派は數を以て萬物の本躰となし萬物の關係を以て數的なりとなせるは明かなりとす。卽ちピュタゴラス派は少くとも哲學的數的に宇宙を觀念したるもの、殊に其の一切萬物を以て數の寫眞となせる所は最も注意すべし。之を數の哲學といふも決して差支なきなり。易も同じく「萬物の數に當る」なりといひ「易は逆數なり」といひて、數を主とする如くなれども、單に著を數ふることのみを指せるに外ならず。哲學的に一種の意味を發見せるにもあらず。又數を以て萬物の本躰となすにもあらざれば、數の敎儀のピュタゴラスと大に異なるものあるは最も明白なりとす。

第五章　易と他の哲學系統

第一節　易と各種の思想

易なる思想系統は上下經と十翼とを通じて窺ふべきのみ。卽ち吾人は上下經と十翼とを通じて見たる易の思想系統を知り得るのみ。此の思想系統は必ずしも易の原始的なる者にあらざるべし。然れども吾人の知り得る最古なるものは單に此れに外ならず。十翼は孔子の作にあらずとするも上下經の思想と矛盾せざるのみならず。之を發揮して以て餘蘊なきものなること、及び上下經以外の思

想的要素を包含せざることとは之を許さゝるを得ず。故に易の思想系統を述べんとするものは上下經と十翼とに據らざるを得ず。後世諸種の思想ありて何れも易の思想なりと稱すれども、其の果して然るや否やを批判するも亦上下經十翼に合するや否やを以てせざる可らず。若し之に合せざる者ならば縱ひ全然易の思想にあらずといふ可らずとするも、少くとも古易にあらずと謂ふべきなり。況んや後世附會の說多きに於てをや。

吾人は上下經十翼の思想を發揮するに勉むる者。後世易の範圍と見做さるゝ者にして其實然らざる者甚だ多し。或は易を弄ぶに過ぎたる者あり。吾人は此種の思想の或る者に就て其の如何に易と直接又は間接の關係あるやを述べんと欲するなり。

第二節　易と五行說

五行と易とは相關するが如くなれども其實は全く無關係なり。何故かと云ふに、上下經十翼に於て未だ嘗て五行と言ふ事なければなり。然れども五行は何れも自然界の現象なれば易の陰陽に由りて包括せられずと謂ふことなし。故に此方面に於て五行も易の思想に關係ありと謂ふべし。然れども此れ五行なるが故に易に關係あるにあらず。又方位に就て考ふるに五行は東西南北と中とに配當せらる。八卦は四方四維に配當せられ、中といふことなし。八卦の方位と五行の方位とは一部契合する所ありと謂ふべきのみ。五行の意味は五行として始めて明かなり。之を析いて八卦に配當するは出來き得べきにせよ、單に然かなし得べしと云ふに止まり、他に何等の意味もなし。去れば五行少くとも五行哲學は八卦と關係なき者と謂ふべし。五行哲學は五行の方面より自然界を觀察し、八卦は其方面より觀察せるものなり。兩者共に觀察の方面を別にす。強て其一致する所を求むれば

一、五行に相生相剋の性あり。相生は木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は更に木を生ずるものにして循環端なし。相剋は水は火を、火は金を、金は木を、木は土を、土は又更に水を剋するものにして是れ亦循環端なし。相生と相克とは自然に行はれ居る者にして卽ち陰陽二性の流行に外ならざる

なり。

二、五行哲學に據れば自然界の現象は皆五行の和合ならざるなし、易の哲學に據れば自然界の現象は何れも八卦の性質を有せざるはなきなり。卽ち約を以て自然界を觀察せんとするは相似たりと謂ふべし。

若し全體より言へば五行も亦自然界の現象として陰陽の範圍内なるものなり。然れども易は其の水たり、火たり、將た又他の各三者たるを知り、五行たるを知らざるなり。換言すれば五行哲學は易の範圍にあらざるなり。

然れども易を以て人事を占せんとするものは五行の如き人生と深き關係あるものを捨て置くこと能はず。之を易の中に援用し來らんと勉めたり。五行は直接に十干に關係し、間接に十二支に關係あるがために五行、干支は合して一團をなし、以て易の哲學を助けたり。五行易といふもの是れなり。漢の京房に始まる。此れ又一種の易にして特別なる研究を要する者なり。今其圖一二を示めさん。

八卦ヲ五行ニ分屬ス

乾　兌（金）　離（火）　震　巽（木）　坎（水）　艮　坤（土）

六十四卦ヲ五行ニ分屬ス。

乾、姤、遯、否、
觀、剝、晉、大有。

コレヲ乾宮ノ八卦ト云皆金ニ屬ス

兌、困、萃、咸、
蹇、謙、小過。歸妹。

コレヲ兌宮ノ八卦ト云皆金ニ屬ス

離、旅、鼎、未濟、
蒙、渙、訟、同人。

コレヲ離宮ノ八卦ト云皆火ニ屬ス

震、豫、解、恒、
升、井、大過。隨。

コレヲ震宮ノ八卦ト云皆木ニ屬ス

巽、小畜。家人。益。

无妄。噬嗑。頤、蠱。

コレヲ巽宮ノ八卦ト云皆木ニ屬ス

艮。賁。大畜。損。

睽。履。中孚。漸。

コレヲ艮宮ノ八卦ト云皆土ニ屬ス

坤、復、臨、泰、

大壯。夬、需、比。

コレヲ坤宮ノ八卦ト云皆土ニ屬ス

五行生克

木生火　火生土　土生金　金生水　水生木

水克火　木克土　火克金　土克水　金克木

幹合

甲ト己ト合　乙ト庚ト合　丙ト辛ト合　丁ト壬ト合　戊ト癸ト合

スベテ合トハ合ヒ聚リテ親シキ意ナリ

支合　亦六合トモ云

子ト丑ト合　寅ト亥ト合　卯ト戌ト合　辰ト酉ト合　巳ト申ト合

午ト未ト合

六冲　亦六衝トモ云

子ト午ト冲　丑ト未ト冲　寅ト申ト冲　卯ト酉ト冲　辰ト戌ト冲

巳ト亥ト冲

然れども此種の配列は易本來の意味にあらず。五行說の流行と共に之を易に附會したるものなることは何人も直ちに想到する所なるべし。

第三節　易と干支及び人相

蠱䷑の卦彖辭に先甲三日後甲三日の語あり。卽ち周易の彖辭が作成せられし當時に於て甲子を以て日を數ふるの習慣ありしを知るに足る。甲子は草木陰陽消長自然の狀態を分段して說明せるものに外ならず。易は固より陰陽消長の理を說明したるものなる故、兩者一致する所あるは固よりなり。然れども易

は八卦六十四卦を通じて宇宙を見たるもの、干支は單に一年の陰陽消長を示めせるのみ。故に五行よりも一層親密なる關係あるは固よりなり。干支を月日に應用し、今日は何の日なりやといふて干支の性が時日に附着し居るが如く思ふは迷信なるべし。從て此迷信の上に易の六十四卦を應用し來るが如きは一種の說には相違なきも易を解する所以にあらず。易は干支が陰陽消長の理を說明する範圍に於て其の己れに一致するものあるを許せども其以上は之を許さざるなり。六十四卦を一年に配當する如きは全く干支の思想に由りて影響せられたるものにして易の思想にあらざる。なり。

賣卜者は手相人相などを見るが故に易と人相と何か關係でもある樣に思はるれども其實兩者は何の關係もなく、更めて此に辨ずる必要もなき程なり。只だ一言簡單に之を述べんか。人相は各個人の容貌論なり。易は容貌を見ても陰陽の方面よりするのみ。立身するとか出精するとか、又は金儲があるなどといふ方面より見るにはあらず。兩者全く別の者なり。

第四節　十干十二支の說明

邵康節は易を論ずること最も詳密にして六十四卦を氣節に配當せり。參同契の意も亦此に在り。

十干十二支の信仰は殆ど社會的普遍的にして之を知らざる者なし。殊に十二支の如きは漢音にてシ(子)チウ(丑)イン(寅)ボウ(卯)など讀む者は殆んどなく鼠牛虎兎と讀むを以て通例とす。而して人性にしても寅生は强く子生は些事に拘泥するなどと信ぜらる。此十二支を動物に配當するは支那の古代にありしことにて日本に輸入せられたる者なり。そは文政年間に上梓せられたる石井光致の和漢曆原考と名づくる一小冊子に經めあれば之を紹介すべし。

元來干支は黃帝に始まりし者なりとは支那の傳說なれども固より確實ならず。「天撓造」甲子」は極めて疑はしきとなり。十干を「エト」と云へるは「兄弟」にて木の兄木の弟、火の兄、火の弟と云へることなり。餘は木火土金水の順序に合して知るべし。

甲　〔史記律書〕甲者、言萬物剖符甲而出也。草木の未だ生出せず、甲を被むり居るもの將に出でんとするの象。

乙　〔律書〕言萬物生軋々也。草木土を軋り出るなり。

丙　〔律書〕言陽明著明故曰丙。陽氣次第にあらわれ、明かになるの義。

丁　〔律書〕丁者言萬物之丁壯也、故曰丁。枝葉の盛んなる義。

戊　〔月令註〕戊之言、茂也、萬物枝葉皆盛茂。草木の茂る義。

己　〔釋名〕己紀也、皆有定形可記識也。萬物土より出でゝ形をなすの義。

庚　〔律書〕庚者言陰氣庚萬物、故曰庚。冷氣加はり萬物かはり行く義。

辛　〔律書〕辛者言萬物之辛生、故曰辛。〔釋名〕辛新也、初新者、皆收成也。八月に至り物悉く新になる義。

壬　〔律書〕壬之爲言任也。言陽氣任養萬物於下也。明年生出すべき草木を土中に養ふ義。

癸　〔律書〕癸之爲言揆也。言萬物可揆度也。故曰癸。土中に在る草木の陽氣を待ちて推し量り生出せんと催すを揆と云ふ。

次ぎに十二支に動物を配當せる起原は未だ明かならざるものあれども其古代に存在せしことのみは之を知ることを得。此れにて略ぼ十二支の日本に輸入せられたるものなることを知るべし。

子（ネ）　〔律書〕子者滋也。萬物滋於下也。䷗復ノ卦。十一月に當る。易說卦に艮爲鼠。艮東北之卦也。萬物之所成終而所成始也。故曰成言乎艮と。亥の月に終を成して子の月に始を成す。是子を鼠と云の證なり。

丑（チウ）　〔律書〕丑紐也。言陽氣在上未降。萬物厄紐未敢出、䷒臨の卦、十二月に當る。丑を牛と云ふは禮の月令に季冬月。出土中、送空氣と。其證を見るべし。

寅（イン）　〔律書〕萬物始生。螾然也。故曰寅。䷊泰ノ卦。一月に當る。左傳襄公七年に度寅慶虎の名あり。以て寅を虎となすの古きを證すべし。

卯（バウ）　〔律書〕卯之爲言茂也。言萬物茂也。䷡大壯ノ卦。二月に當る。酉陽雜俎に月中有兎。乃卯之屬也と藝林伐山に日中有金雞乃酉屬也。月中有玉兎乃卯之屬也。と

辰（シン）　〔律書〕辰者言萬物之蜃也。䷪夬ノ卦。陽氣盛にして萬物茂生したる上

に辰の時に至て萬物益伸て餘あるなり。辰を龍と云ふは易說卦に震爲龍と是なり。

巳（律書）巳者言陽氣之已盡也。䷀乾ノ卦四月に當る。說文に四月陽氣已出。陰氣已藏。萬物見成文章。故巳爲蛇象形。徐曰。巳主蛇象。蛇之變化有文章也と。言は蛇の文章みごとに見るゝに因りて四月萬物見に文章を成すにあてゝ蛇の象を寫て巳の字をなすなり。巳を蛇と讀は是なり。

午（律書）午者陰陽交。故曰午。（釋名）午忤也陰氣從下上與陽相忤逆也。䷫姤ノ卦。五月に當る。韻會に馬屬午。晉姓司馬因改司馬官爲典午と云。字彙に馬生於午。禀火氣而生と云。（王氏困學紀聞）吉日庚午既差我馬（詩小雅吉日之章）午を馬とするの徵なるべし。

未（律書）未者言萬物皆成有滋味也。䷠遯ノ卦。六月に當る。陰氣六月に至て長。陽氣を助て萬物の熟するの時にて陰陽よく相群居するの意なり。故に未を羊となす。陸佃曰。羊性善群と。

申（律書）申者言陰用事。申賊萬物。（釋名）申身也。物皆成其體。各申束之。使備成也と。

䷋否ノ卦。七月に當る。七月の時陰氣體を成を用て。萬物のまさに賊べきものはなほも嚴傷賊なり。陸佃曰。猿之德靜以緩。猴之德躁以囂とこれ猿を陽となし。猴を陰となし。陰を用て嚴賊の意。躁して囂をもつて申を猴と云にや。

酉（律書）酉者萬物之老也。（淮南子）酉者飽也。䷓觀ノ卦。八月に當る。八月陰氣長して上の申を助る故に。陽衰萬物老て死に觸んとするなり。老て死するは物よく齊の理なり。易の說卦に齊乎巽。東南也。また巽爲雞と。酉を雞と云の徵なり。

戌（律書）戌者言萬物盡滅。故曰滅。䷖剝ノ卦。九月に當る。月令に九月之時。豺祭獸。因候配之。狼形相似。說文云豺狼屬也云々。豺和訓ヤマイヌと訓す。戌を狗と云の證なり。

亥（律書）亥者關也。言陽氣藏於下。故該也。孟康曰。關藏塞也。陰雜陽氣。藏塞爲萬物作種也。䷁坤卦十月に當る。易の說卦坎は陷也。坎爲豕と。純陰にして地上に陽なくして地下に陽陷ゆる。坎を豕となすと。また呂氏春秋孟冬紀

食黍與蟻と。

以上の解は明了ならざる所もあれ共支那古代に於て十二支と動物とを關係せしめしこと明かなり。私かに思ふに、十干十二支は本來陰陽消長の理を述べたる者なるが一般人民に其名を覺えしめんが爲め動物にあてはめ、之を記憶せしめしならむ。恰も盛岡市にて發行する繪ごよみの如く文字を知らざるものに分らしめんためなるべし。動物に當つるに付いては陰陽消長の狀態に直接間接因緣あるものを撰らみしならむ其は兎も角、易は六十四卦なり。干支は十又は十二なり。數に於ても能く調和し得ざる所あり。但だ、

先庚三日後庚三日

とある。此れ易に干支をいふなれども單に時日に就いていへる耳。干支其者に哲學的意味を附加せるにはあらず。卽ち單に何日より何日迄といへる丈のことにして其れ以外に何等意味あるにはあらざるなり。

第四節　易と老莊哲學

老子の書中陰陽に就いて言ふものあり曰はく。

道生一。一生二。二生三。三生萬物。萬物負陰而抱陽。冲氣以爲和。人所惡。唯孤寡不穀。而王公以爲稱。故物或損之而益。或益之而損。人之所教。我亦教之。（下略「第四十二章」）

と。而して老子は矛盾相對の概念を用ふるが故に全體として陰陽の思想に關係ありと謂ふべし。試みに其一二句を引用せん。

枉則直。窪則盈。敝則新。少則得。多則惑。是以聖人抱一。爲天下式。不自見故明。不自是故彰。不自伐故有功。不自矜故長。夫惟不爭。故天下莫能與之爭。古之所謂曲則全者。豈虛言哉。誠全而歸之。（第二十二章）柔勝剛。弱勝强。魚不可脫於淵。國之利器。不可以示人。（第三十六章）

天之道。其猶張弓乎。高者抑之。下者舉之。有餘者損之。不足者補之。天之道。損有餘而補不足。人之道則不然。（第七十七章）

是れ易の謙卦の主旨乃至一般に易意と合致す。謙卦彖傳に曰はく。

天道下濟而光明。地道卑而上行。天道虧盈而益謙。地道變盈而流謙。

と。又豐卦彖傳に曰はく。

豐大也。明以動故豐。王假之。尚大也。勿憂宜日中。宜照天下也。日中則昃。月盈則食。天地盈虛。與時消息。而況於人乎。況於鬼神乎。

と。更に損卦彖傳に曰はく。

損。損下益上。其道上行。

此れ等の主意は正さに老子の謙虛に合する者なり。去れば古來、易、老一致の說をなし、又は老子は易に出づとなすもの學者其人に乏からず。漢の嚴遵(道德指歸論)太田晴軒(老子全解)字佐美惠(王註老子論)等是れなり。漢書藝文志に曰はく。

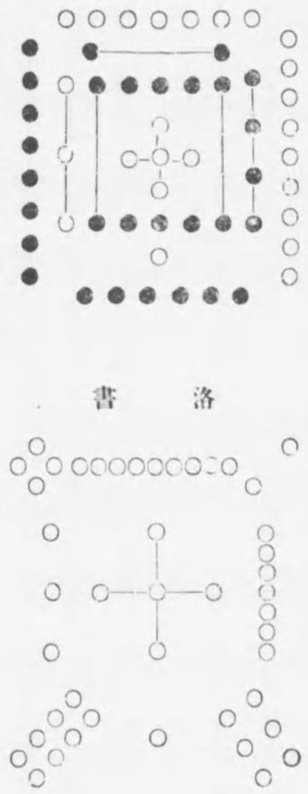
道家者流蓋出於史官、歷記成敗存亡禍福古今之道、然後知秉要執本。清虛以自守。卑弱以自持。此君人南面之術也。合於堯之克讓。易之嗛嗛。一謙而四益。此其所長也。及放者爲之。則欲絕去禮樂。棄仁義。曰。獨任清虛可以爲治。

此れ道家を以て古今の成敗存亡の跡を觀察し、清虛謙讓の能く身を保つに足るを以て、之を以て其の主義綱領となせるものとなすなり。猶陰符經の部參考すべし。

第五節　易と河圖洛書

一　形狀

今日河圖洛書として傳へられたるものを云さんに左の如し。



二　河圖洛書と易との關係、

繫辭に曰はく河圖を出し、洛書を出し、聖人之れに則ると、此の一句あるが爲めに後世の儒者多くは、易は河圖に則りて以て作られたりとなす。孔安國曰はく、河圖は、伏羲氏天下に王たるの時、龍馬河に出づ、故に其文に則りて以て八卦を畫す

と。洛書は禹、水を治むるの時、神龜文を負て背に列す、數あり九に至る。禹、遂に因りて之を次で以て九類をなす云云と。漢の劉歆曰はく、伏犧氏天に繼で王たり。河圖を受けて而して之を畫す。八卦是れなり。禹、洪水を治めて洛書を錫ふ、則りて而して之を陳ぶ。九疇是れなり。河圖洛書は經緯を相なし。八卦九章は表裏を相なすと、

此等の學者は何れも河圖に則りて以て八卦を作れりとなす。此れ實に易の十翼の作られし頃より漢を通じ、宋に至り傳はり來れる所の傳說なり。されば馬融、王肅、姚信の如き有名なる學者も皆此の說に贊し、伏犧氏河圖を得て而して後易を作れりとなす。

然るに河圖の何たるやは後世之を詳にする能はず。案ずるに、周の成王の顧命に河圖と天球とは列して東序に在りとある以上は其者現に存在して、周の時に傳はりしこと疑ふべからず。孔子も亦鳳鳥至らず、河圖を出さずと言ひしが故に、河圖なる傳說の當時に存在せしこと疑ふべからず。然れども孔子の時、果して河圖なるものありしや、否や、又孔子自身に之を見しや否や、明かならず。孔子の時には河圖、鳳鳥、麒麟等は聖王の瑞相なりとして信ぜられし者の如し。孔子は嘗て麒麟を見たることなく又鳳鳥を見たることなかるべし。唯だその聖王の瑞として言ひ傳へられしが爲めに鳳鳥至らずと說きしのみ。又河圖を見しことなきも亦同じく言ひ傳へられしが爲め河圖を出さずと說かれしなるべし。

然り而して今日傳はる所の河圖洛書は、宋の初め河南の道士、陳摶に出づ。陳摶は卽ち陳希夷、陳圖南、麻衣道者等の別名を有する者。陳摶之を周子(周茂叔)に傳へ、(太極圖參考)遂に朱子に至り盛に發揮せられたり。漢の頃學者河圖の何者たるを云ふことなく而して遙か下りて唐宋の間に至り、俄かに其者ありといふは、吾人の信じ得べからざる所に屬す。唯六朝の頃、北魏の關朗の言として朱子の引用せる所のものに曰はく、河圖の文七は前、六は後、八は左、九は右、洛書の文、九は前、一は後、二は左、七は右、四は前の左、二は前の右、八は後の左、六は後の右なりと。

若し果して然りとせば關朗の時已に今の河圖洛書なるものありしが如し。此れ未だ考ふべからざる所に屬す。兎に角漢代の學者一人も河圖の何たるを知らざる以上は、關朗の徒之を知れりとするも、此れ單に道士等の傳ふる所に屬し、儒者の研究するが如き公正の者にあらざしりなるべし。

易は河圖にのみ則りて作られしにあらず。河圖に則りて以て易を作るといへるは繫辭を以て初めとなす。繫辭に曰はく、

此故に天神物を生じ聖人之に則る。天地變化聖人之に效ふ。天象を垂れて吉凶を見す、聖人之に象る。河圖を出し、洛書を出し、聖人之に則る。

故に河圖にのみ則りて以て易を作りしにあらず。卽ち神物、變化吉凶、洛書等何れも皆則る所ありしなり。而して河圖は其中の一のみ。而かも其の文勢に據れば必ずしも有力なるものにあらず。且つ繫辭傳の他の部分に由れば明に天地間の現象に則りて作られしものなり。其文に曰はく、

古伏犧氏の天下に王たるや、仰いでは則ち象を天に觀、伏しては則ち法を地に覽、鳥獸の文と地の宜しきとを見、近くは之を身に取り、遠くは之を物に取る。茲に於て始めて八卦を作り以て神明の德に通じ以て萬物の情を類す（繫辭下傳第二章）

されば易は、一面には天地自然の現象に則ると云ひ、一面には河圖洛書に則ると云ふ。宗の歐陽修の言へるが如く誠に矛盾するが如し。然るに尙進で之を考ふるに前文河圖を出し洛書を出し聖人之に則ると言へるは、聖人の則りし者は種々ある中に於て僅かに一部の事なる故に必ずしも之を以て矛盾すとなすべからず。論じて茲に至れば吾人は易は天地自然の現象に則りて作られたるものにして河圖洛書に則りて作られしものにあらざることを斷せざるべからず。河圖洛書は單に一部のことにして易を作るための一參考たりしに外ならず。之を以て唯一の根據となし、深き廣き關係あるものゝ如く思ふは全く後世のことに屬す。然らば圖書と易と如何なる關係かある。圖書より易が思ひ付かれしとすれば如何なる點が動機となりしか。吾人の今日の智識にては此の如き圖書より易を思ひ付くこと能はざると同時に、古人が如何にして思ひ付きしかを想像すること能はざるなり。强ひて之を求むれば數に奇偶の別あることを注意せしめ、陰陽觀念を起さしめしといふべきなれども此れよりかも自然の現象の方が遙かに好都合なるべし。江永の河洛精蘊の如きは先づ河圖洛書ある者と見做し、易學の思想を以て易に關係ある樣解せしに外ならず。吾人は今日の圖書を以て深き意味あるものにあらずとなす。

第六節　易とピュタゴラス哲學との異同

一　比較の方法

凡二物を比較するには共通の基礎なかるべからず。而かも其れは確實にして明白ならざるべからず。然らざれば比較の目的を達する能はざるのみならず。其結果は甚だ不正確の者たるを免れず。世のピュタゴラス哲學を說く者或は曰はく易に似たりと。而して易を說く者も亦曰はく。ピュタゴラス哲學に酷似せりと。蓋しピュタゴラス哲學の主とする所は數の敎義に在り。而して易の十翼亦多く「一二三」等の數を列擧するを以てなり。是に於て余は此異同を研究せんとするの動機を興し。着手するに及び、疑問は愈々繼起し研究の範圍は益々濶く、殆と望洋の嘆を發せり。然れども畧々其の要綱を把捉するを得たり。

兩種の哲學を比較するに當り大困難の途に當るは兩種の哲學の範圍の不明瞭なること是なり。ピュタゴラス著はす所なし。其思想を見るは實に後人の書に據る。後人の稱してピュタゴラスの說と爲す者にして而して其實は門下の說なる者あり。或はピュタゴラス派の學者の著作として傳はる者にして實は後人の假託に出づる者あり。ピュタゴラス其人の說とピュタゴラス派の說とは異なる所あるが如し。今比較せんとするに當り。ピュタゴラス其人の說を取るべきか或はピュタゴラス派の說を取るべきか。若し兩者が判然區別せられ居る者ならんには孰れを撰むも可なりと雖も然らざる以上は此岐疑を興さゞるを得ざるなり。殊に易の哲學との權衡に於て然りとす。易の哲學を見るには二經と十翼とに據るか。十翼は同一人の手に出でたる者にあらず。隨て相互の間に解釋を異にせる者あり。殊に宋儒の十翼を解するに至りては一種特別なりと謂はざるべからず。然かも世稱して易の思想然りと爲す。然らば易の思想を看るべき者は果して何なるか。

若しピュタゴラス派全體を取る時は易全體を取らざるべからず。然るに若しピュタゴラス其人のみを取らんとする時は易に於ては何を取るべきか。何人と雖ども精密に答ふること能はざるなり。論じて茲に至れば兩者の範圍は各其全體ならざるべからず。而して先づ根本的なる者を比較し、次に枝葉的なる者に移るべきなり。

ロ　兩種哲學の著作

ピュタゴラス派の書籍はムラキウス氏の希臘哲學輯逸書中に收めらる。其の大略左の如し。

一、フィロラオス
二、ヒッポダモス、トゥーリヨス幸福論　Ἱππόδαμου Θουρίου ἐκ Του περὶ εὐδαιμονίας.
三、ヲイルュファモス　生活論　περὶ Βίου.
五、ヒッパルヒョス　安心論
四、テアゲース　道德論
六、メトーポス　道德論
七、クライニヲス　信心論
八、クリトーン　謹愼幸福論
九、ポーロスロイカイノス　正義論
一〇、ディヲス　美論
一一、ブリュメーン　經濟論
一二、カリクラティグ、ラコーン　家族幸福論
一三、ペムペロス　兩親論
一四、ペリクティヲネーヌ　智識論
一五、同婦德論
一六、フィンチアス　婦人謹愼論
一七、ティマイオス、ロクロス　世界精神及自然論
一八、ソーティヲーン　遺編
一九、モデラトス　遺編
二〇、ブーテーロス　數論
二一、アレサロイカノス　人性論
二二、アリスタイオース　遺編
二三、カイキリオス
二四、ディドーモス　哲學系統論

二五、ディオドーロス
二六、オィルュリス
二七、ミローン　物性論
二八、スキュティノス　物性論
二九　オナトス　神論
三〇、アルク、マイオーン
三一、テアノス
三二、セクストス
三三、アルヒュトス　遺編

是等の書の或者は後世の僞造に出づ。且つピュタゴラス派に屬せざる者すらあり。然れども何れも短編にして一通り希臘文を知れるものには讀み易きの書なり。且つ下に羅甸文にて飜譯を附せり。希臘古代の哲學を研究するものに取りては唯一の資料たり。恰も唐土の玉函山房輯逸書の如き者なり。

フィロラオスの說はピュタゴラスに近しと稱せらるれども其或る者はフィロラオス其人の言にあらずして後世の假託に出づ。ティマイオス、ロクロス、アルヒュースの如き、近世の研究に據れば皆僞作なり。オケロス、ロイカイノスの一切論もピュタゴラス一派の書にあらずと云ふ。是れ等は判然したるものなり。然れども斯く判斷し難きもの多し。

是に於てかピュタゴラスの說を見んとする者はアリストテレースを以て準的と爲す。然れども氏も亦以てピュタゴラス其人の說と爲さず。其學派の說とのみなすなり(アリストテレース形而上學)

次に易の經典如何と云ふに

一　上下經
二　十翼(彖、象、繫辭、文言、說卦、雜卦、序卦)
三　乾鑿度
四　諸儒の論註(易緯は之を除く)

一二三の三種に付て根本思想あり。技葉的後世的思想あり。先づ兩哲學の根本思

想を比較せんとす。根本思想の範圍は比較的のことなるが故に其最も根本的なるものより順次に枝葉的なるものに移らん。

根本思想の比較

其一　本體學的立脚地

兩哲學は共に本體學的立脚地の上に立つ者なり。其の共通基礎の上に於て如何に相ひ異同するかと云ふに易は二元氣を以て本性となす、而してピュタゴラス派は數(αριθμοι)を以て本體となす。是れ根本的の差なり。

ピュタゴラスの數は其の內容の如何に關せず哲學上の數の意味を脫することを能はず。然るに易の一元氣は決して數の意味を帶びず。故に兩哲學は本體學上の根本原理に於て全く相異なると謂ふべきなり。

次ぎに兩根本原理の內容に就て異同如何を見むにピュタゴラスの數は現象の本性(Wesen)なると同時に摸範(Vorbild)なり。然るに易の二元氣は現象の實質を構成する者なり。此の點に於ても亦兩者相ひ異なりとなす。

次ぎにピュタゴラス派は右の次第により易哲學よりも一層本體學的なりと謂ふことを得べし。換言すれば近世哲學に所謂本體の意味に近似せりと謂ふべし。殊にピュタゴラスは一といふことに重きを置き、一元論の意味もあれども、易は二元論なり。一元論の意味もあれども寧ろ二元論を以て當れりとす。

其二　宇宙論

宇宙論の點に於て天地開闢說は易の最も得意とする所なり。陰陽二種の氣あり、四時を生じ、天地山澤風雷水火の八象を生じ、一切現象を生ず。是れ不可解の所なりと雖も、社會の傳說として存せる者なり。寧ろ支那に普通の說といふべきなり。繫辭傳之を述べて曰く

是故易有太極。是生兩儀。兩儀生四象。四象生八卦。八卦定吉凶。吉凶生大業。(上第

是れ一元論なれども、後世の說なるべし。殊に太極といふのみにて如何なるものか何等の內容を有たしめず。殊に言語上の統一を主としたるものなり。然るにピュタゴラス派は全く天地開闢の說を欠けり。是れ亦兩哲學の相ひ異なる所なり。ピュタゴラス派は一を以て根本原理となす。故に宇宙を靜的に觀察せり。數は宇宙

現象の順序を規制する原理たり。本來ピュタゴラス派が數を唱導するはルゥイス氏の證明せしが如く思想の錯誤なり。一物體の色彩硬軟は之を變せしむべきも其の一たるは卽ち變せしむ可らざるなり。一物體を等分し更に分々するも片々一個なる特徴を存し此の特徴たるや渝ることなきなり。二個の物あり。是れ一個と一個との關係なり。二は卽ち一と一との關係なり。三個の物體あり。亦一個三の關係なり。三は卽ち一の二と重なりたる者に外ならず。以上皆同じ。然かも二個は其れ自身に於ては又一なり。三個も亦同じ。是の故に一なる數は根本にして一切の數を包含する者而して一切の現象は皆數的關係にある者なりとなり。ヒロラヲス曰はく。

Kai panta ga man ta gignoskomena arithmon echonti

卽ち一切萬物は數に因りて干係せられ居るとなすなり。然かも又曰はく。

卽ち「一」によりて萬物の干係は成立し居るとなすなり。

易の現象の區別に對する說如何と云ふは易は其の陰陽の思想より進み物象にまれ進動にまれ、皆陰陽によりて司配せらるゝ者となせり。卽ち日月あり、寒暑あり、晝夜あり、男女あり、君臣あり、禍福ある如き是れ也。斯く陰陽相對の思想はピュタゴラス派に於ても亦之を發見すれども、ピュタゴラス派に取りては寧ろ枝葉的のことに屬す。尙後に至りて之を述ぶべし。兎に角易は一切現象は陰陽によりて司配せられ居る者となすなり。繫辭傳に云はく。

一陰一陽之謂道。

要之、一は數によりて宇宙の法則を見むとし一は陰陽によりて之を見むとす。是兩哲學の相異なる所なりと謂はざる可らず。

又次ぎに易に在りては宇宙間の自然現象に就て天地山澤風雷水火の八者を以て根本となし、然も此八者は易哲學の最重要點なりとす。八者を累ねて六十四卦となし、以て人生を解せんとす。八卦なくんば易見る可らず。此の中心より上に溯り陰陽太極の思想を發見すべく下に降りて六十四卦三百八十四爻の思想を發見すべきなり。

翻てピュタゴラス派の哲學を見るに數は一切現象の本性にして、一切現象の規

則也。天文より音樂に至る迄皆然らざるなし。ピュタゴラス派は數の觀念より一切を說明せんとす。此の點に於ても兩哲學は相ひ異なりとなさゞる可らず。

易に於ては太極は一元氣にして客觀的に假定せられし者なり。是れ易の敎義にして思想錯誤より來りし者にあらず。此の一元氣は徹頭徹尾形而下なりや。是れ大疑問なり。若し形而下とすれば大極生兩儀、兩儀生四象と言へるときの四象は何物を指すか兩儀は何物を指すか。又形而下ならざる可らず。四象は宋の邵康節の說に據れば水火土石なり。今暫く之を措く。兩儀の陰陽たるに至りては疑ふ者なし。陰陽果して形而下なるか、一陰一陽にあらざるなく、一大極にあらざるなし。然らば大極は必ずしも形而下にあらず。必ずしも抽象的にあらず。不確實なりと謂はざる可らず。支那日本に於て氣なる者は形而上にあらず。形而下にもあらず。一種不確定の意味に於て用ひられ居れども、古人は嘗て之を疑ふ者あらず。社會的傳說之をして然らしめしなり。邦俗に云はく、人の氣が殘ると、又云はく草木は天地の氣より生ずと、是れなり。易の根本假定たる太極陰陽も之れと同一なる者なり。

要之兩哲學は共に其の根本思想に於て不確實なり。是れ古代研究の到らざることと術語の欠乏せしことの致す所なり。

終りに臨むで一言すべきは數の觀念なり。易は數なりとは易を解せざるものの言なり。易に付て數を言ふの必要なし。然るにピュタゴラス哲學に於ては始めより數を言はざる可らず。是れ又相ひ異なる點の一となすべきなり。然のみならず易の陰陽兩畫は便利のためにせる符號にして之を廢し陰陽の文字を以て之に代ふるを得べきなり。例へば ☰ の代りに陽陽陽と言ひ ☷ の代りに陰陽陰と云ふべきが如き是れなり。

以上の諸點に於て兩哲學は然かく相ひ異なるも又他の一方に於ては酷似せる者あり。宛然相ひ藉用すべき如き感あらしむ。

第七節　淘宮術

淘宮術は横山丸三翁の創造せし處なり。其說易と關する所少なし。然れども一應讀者の誤解を防がんため、此に述べんと欲す。淘宮術は十二支を以て根本となす。卽ち十二支を動物に配當し併せて、其の陰陽消長の意味を取り、之を以て人生に應用し、人性を決定し、精神を修養せんとするなり。先づ十二支の性質を論ずるものを引用せんに左の如し。

一、子　滋

其形　小さく

其色　薄く淡し

其心　至て吝嗇にして恥多し

其病　筋つまる濕氣强くく中風なり福祿多く官薄し

此氣は福祿充滿するの氣也諸願成就門入婚禮店開き轉居旅行掛合始め吉なり船祭は宜しからず。

二、ケ結　△　丑

其形　大きく

其色　黑し

其心　守るを至て堅固なり。

其病　隔症瘧毒胸にたゝへずる病深し。

福祿薄し。この氣は萬物中道にとどこほり上へ發せず下へ通せず然れ共破れなし婚禮は吉なり水邊よろしからず。

三、ヱ演　○　寅

其形　頭少さく丈細く高し黑し。

其色　黑し。

其心　猛き氣あり又威す氣あり。

其病　手足の筋つまる（其他略す以下倣之）

四、ホ豐　○　卯

其形　大きくして肉滿る。

其色　青し。
其心　豊かにして又靜かなり。
其病　足重く水氣あり。

五、フ奮　●　辰

其形　大きく肉少なく筋骨高し。
其色　青し。
其心　外へ發して怒氣强し但し長命なり。
其病　筋つまる濕毒眼病又亂心あり余。官福祿破ゐ。

六、ト止　○　己

其形　小さくして至て美麗なり。
其色　黄なり。
其心　嫉妒深し。
其病　勞症鬱癪(うつせき)あり其外無病。

七、コ合　△　午

其形　大きく肉滿る。
其色　赤し。
其心　あいし易くして亦はなれ安し。賬なるを好む。

八、ロ老　△　未

其形　小さく。
其色　白し。
其心　叮嚀にして曲ることを好まず奇麗好なり。又一藝に達するの氣あり。
其病　勞症鬱積逆上頭痛有り福祿薄し。
この氣は門入旅行婚禮は吉なり。

九、クワ緩

其形　大きく肉あり。
其色　薄赤し。
其心　世話事を好で辛苦絶へず又衆人と和せず。
其病　眼病逆上耳聾難產あり。

一〇　ダ　墮　△　酉

其形　小さく。
其色　白し。
其心　智惠深くして人を謀る貴き事大なる事を好んで身を破る。然れ共諸藝に達すること器用なり。音聲清し。
其病　逆上惡血腫物眼病難產あり。

一一、レ　煉　●　戌

其形　小さく。
其色　光澤なくして白し。
其心　内へ怒る氣强くして凝る故意地惡し然れ共義を保つ自分勝手にして長命なり。
其病　せむし眼病惡血又亂心あり官福祿破る。

一二、ジ　實　△　亥

其形　大きく中肉なり。
其色　黄なり。
其心　脇ひら見ず一途なり。
其病　腰より以下水氣を貯ふ故に腰冷へ足痛み引つる事あり。

其の性質を論ずるものは何れも動物の性質、形狀に關係ありと謂ふべきなり。其の福祿の多少、諸願の成否をいふが如きは信憑するに足らざるなり。而して人間の生れたる日月年を以て小輪・中輪・大輪と言ひ、各、十二支の何れかに當るなり。人性を以て三者の綜合となすなり。是れ以上ば淘宮術其者の範圍内に入るが故に今述べず。要するに易と直接に關係することなく但だ、陰陽思想に於て間接に關係すといふべきのみなり。

第八節　星占術

星占術は西洋に於て多く行はるゝものなり。日月の運行、五星の轉移等より以て人生の凡百方面を決定せんとするものなり。隈本有尙氏の天文に依る運命豫想術に云はく。

疾病には主として日の座相を考へざる可からず、若し月が種々なる曜一惡座相に依りて犯され、毫も他曜の好座相に依りて援を受くることなきときは、健康は不定にして、往々病感の犯す所たらむ、月若し好座相を保ち、毫も犯さるる所なくば健康は好く固定して各種の疾病を免れむ。

本間に關してなすべき必要なる考察は、既に日及び體質に關して述べたる所に同じ、但し日に代へて月を用ふべきのみ、何となれば、日は人間の生々の儀を管理するなるに、月は機能の力を管理す、日は生得又は遺傳の病感を表示するなるに、月は生後の原因に依りて起る所のものを表示すればなり、之と同樣に、日は身體に必隨する病感を表示するなるに、月は之に偶發する所のものを表示す。（第三章）

トレメ曰く。

水星は理性的魂の主宰者にして月は動物的魂の主宰者たり惟ふに其の意義たる水星は心性の能力（知性）に干與し月は腦の機能に干與すとの謂なること疑ふ可からず、心性の資質中には特に人間に屬するものと又人間及他の動物に共通なるものとあり、後者は月の管理に屬し理性は主として水星の管理に屬す、是故に本人の心的賦性及氣禀の判斷を爲すには月及水星の位地と座相とを考へざる可らず。（第四章）

余は此簡單なる引用を以て滿足し、但だ讀者をして星占術の易と異なるものを暗示せしむるに止めんとす。支那に七曜の說あり。史記天官書に詳かなり。其一說を錄せんに左の如し。

日月の行を察して以て歲星の順逆を揆る。曰はく東方の木は春を主る。日は甲乙。義失するものは罰歲星に出づ。歲星の贏縮は其の舍を以て國に命く。在る所の國は伐つ可らず。以て人を罰すべし。其の趨舍して前むを贏と曰ふ退舍するを輸と曰ふ。贏する時は其の國兵ありて復せず、輸する時は其の國憂へありて將亡ぶ。國傾き敗る。其の在る所には五星皆從て而して一舍に聚る。其の下の國は義を以て天下を致すべし。云云

此れ以上引用の必要あらざるべく、要するに天文と人間との關係を主とするものにして、易と直接の關係あることなきなり。但だ史記天官書の說も日月五星の

狀態に由て以て歳の豐凶其他をトせんとするは明かなり。

第九節　易と佛敎

智旭周易禪解を著はし、禪を以て易を解す。猶ほ王弼の老子を以て易を解せるが如し。又一見解なり。然れども佛敎と易との關係を求むるはピュタゴラスとの比較以上に於て何等關係なきものを强ひて比較するの誹りを免れず。故に吾人は一般に之を比較することを止む。但だ佛家の書中に疑はしきものを取りて以て之を辨ず。卽ち禪家所謂正偏五位の說是れのみ。元來五の字は佛家に於て多く用うる所。曰はく

- 五智
  - 大圓鏡智
  - 平等性智
  - 妙觀察智
  - 出所住智
  - 如來淸淨體智
- 大氣五位
- 小氣五位
  - 資位
  - 加行位
  - 見道位
  - 修道位
  - 三學位
- 無心五位
  - 腔眠
  - 回絶
  - 無想定
  - 無心定
  - 滅呑定

而かも皆其の相互關聯をいふ。今五位も亦眞如と修養とを五方面より觀察したるものなり。偏正五位說の釋にいはく。

夫れ五位なるものは當さに先づ正偏は是れ何の義なるやを解し而して以て其中自ら回互等の宗ある「こと」を知るべし。正とは他なし。唯一切諸法畢竟解脫して分別の解する能はざる所なるを以てなり。凡そ言辭の相性皆非にして本來不動の住位なり。是故に不動の位を假りて以て用て正と名づく。偏とは亦別なし。唯諸法畢竟解脫の「性相」「生」「佛」「迷」「悟」等の法、逢ふ所皆是れなり。是故に傍位を假りて以て用て偏と名づく。蓋し一究竟に於て此の二法あり。諸法の常に寂なるを言へば則ち一切盡く正なり。常寂の諸法を言へば則ち一

切盡く偏なり。是れ則ち靈源支派互に主賓たるの關鎖なり。

正偏の二字は則ち究竟の所に付いて見る方面を異にすといふべきのみ。偏正五位とは正中偏、偏中至、正中來、偏中正、兼中到をいふ。

一、正中偏　卽ち本體界其の儘をいふなり。

二、偏中正　本體を變化より見ていふの名なり。

三、正中來　修業の工夫にして無念無想の域に達し、然る處精神をして靜かに萬象を顯現せしむるをいふ。

四、偏中至　現象界に居りて能く、無差別平等の域に遊ぶをいふ。

五、兼中來　正偏を兼ねて自らの心が其儘本體界に會致するをいふ。

洞山禪師の頌に曰はく。

正中偏ー三更初夜月明前。莫怪相逢不相識。隱々猶懷舊日妍。

偏中正ー失曉老婆逢古鏡。分明賣面別無眞。休更迷頭還認影。

正中來ー無中有路隔塵埃。但能不觸當今諱。也勝前朝斷舌才。

偏中至ー兩刃交鋒不用避。好手猶如火裏蓮。宛然自有冲天氣。

兼中到ー不墮有無誰敢和。人々盡欲出常流。折合還歸炭裏塵。

此の如き偏正五位說は達磨十一代の法孫洞山禪師の作と稱せらる。禪家に於いては最も珍重する所なり。而かも易と關係あるにあらず。單に易の卦形を假りたりといふに別ならざるなり。乃ち䷊の卦形に付いて說明するのみ。卽ち六爻にありては內外、各々三爻とす。三の中を以て正となす。上下を偏となす。陽爻の陽位に居るを正とし、陰爻の陰位に居るを正とす。之れに反する時は偏たり。離の六爻は乃ち初二三皆正にして四五六皆偏なり。六二は正中なり。六五は中なれども偏なり。

第十節　易と近世哲學

周子の太極圖說が易と關係するは第一編に於て述べたる如し。易の思想は支那一切の哲學を通じて殆んど影響せざるなく、乃至一般に支那の哲學者は之を以て其の根本思想となしたるものなり。漢代班固の白虎通の如き。既に陰陽によりて。人性の限らるゝことを述べたり。其他今一々擧げず。只一般に陰陽思想の根

本的なるものを擧げんがため、之を茲に張横渠の陰陽論を示めさんとす。

張子は一元なる氣を假定し、其の中に清濁の二部を區別し、是を以て陰陽となせり。而も陰陽に付ては從來の思想を應用し、陰は靜かにして、陽は動き、陰は凝集的にして、陽は發散的のものとなせり。而して、宇宙の現象は、皆陰陽兩者の結果ならざるはなし。乃ち周易の陰陽兩者を以て、一切萬物を説明せるが如く、天地もまた陰陽二氣の作れる處なり。其の言に曰はく、地は純陰にして內に凝集す。天は浮陽外に運施して極まらざるものなり。日月五星、天に逆らつて立てり。幷に地に包まるゝものなり。地は氣中にあり、天に隨つて左遷すと雖も、其の繫く處の晨象、是れに隨つて遲れは、卽ち却て移り徙りて、右する、なりと。之れ卽ち天も動き、地も動くとなるの說にして、天地共に動くの說なり、而かも其作用は、實に陰陽二氣の作用によるものなり。又地球上二氣の絕へず昇降しつゝある事を說明し、氣に昇降あり、日に脩短あり、地は凝集不散のものなりと雖も、然るに二氣は其の間に昇降し、相從つて止まざるものと云へり。

晝夜寒暑海水潮汐の如きは、皆陰陽二氣の作用するに、外ならずと爲すなり。又雨雷の如きも、陰陽二氣の作用に依つて起るものなり。曰はく、陽の性は發散す。陰集まれば、陽必ず發散す。陽が陰の爲めに累はるゝ時は、卽ち飄揚として雪となつて降る。陰陽の爲めに碍らるゝ時は、相持して雨となつて降る。布するは、陰陽の爲めに驅られて斂聚して、未だ散せざるものにして、凡そ陰氣凝集して、陽內にあるもの出づる事を得ざれば、奪擊して雷霆となる。

是れ等は一二の例なるも、他の一切現象も、亦皆是れと同樣の作用に依つて起り來るものなり。陰陽論の要旨は卽ち茲に存す。易の陰陽思想が次第に淘冶せられたるは實に此の如し。邵子の如きは陰陽の說明に於ては最も詳かなり。則ち陰陽、四象、八卦を以て宇宙の法則となせる如き、或は揚慈湖已易の如き何れも易のみを以て自己の哲學となせるものなり。廣く易を解する者は易を以て唯一の哲學となし、他に眞理の求むべきものなしとするは此れにて明かなり。此れに就いては猶吾人の來年を期して出版すべき東洋哲學大全に就いて參考せらるべし。

第六節　八卦六七八九の數

唐の僧一行は乾を以て九となし、坤を以て六となし、震坎艮を以て七となし、巽離兌を以て八となせり。此れ乾三を得るには第一表の如くにして過揲三十六を得、坤は第二表の如くにして過揲二十四を得、其餘は過揲二十八にして少陽三十二にして少陰なればなり。(易纂)

第一變五
第二變四
第三變四　乾

第一變九
第二變八
第三變八　坤

其意は三變にして老陽老陰少陰少陰を決し得るが故に、八卦に老少の別ある以上は三變の數卽ち六七八九にて表はし得べしとなすにあり。

易の說を論ずるに當ては自然の理に訴へざるを得ざる者なり、古文の徵すべき者あれば之によるは當然のことなれども然らざる時は之を理論に訴ふるも亦拒む可らざる者あり。朱子が自己の掛扐說を主張せし如き、全く想像に出づ。而して來知德が卦象を論ずるも、之を腦臆に取る者少しとなさず。

第三編　占筮論

第一章　占筮法

第一節　緒論

順序より言へば擘頭第一に占筮の原理を述べて然る後占筮の方法に及ぶべきなれども初學の解し易からんことを欲し、先づ其方法を述べ、然る後其原理に及ばんと欲す。恰も先づ事實を示めして而して後に之が說明を試みんとするが如し。初學者は先づ親ら筮竹を手にして此方法に習練し、然る後占筮の原理を知らんことに努むべきなり。古へより占筮の存在せしことは書經に龜從筮從の文あるを以て見るべきなり。其の方法の書物に見はれたる者は繫辭傳を以て最古とす。上繫第九章に曰はく。

大衍の數五十、其の用四十有九、分つて二と爲し以て兩に象る。一を掛けて以て參に象る。之を揲るに四を以てし、以て四時に象る。奇を扐に歸して以て閏に象

る。五歳再閏。故に再扐して而して後掛く。天の數五、地の數五。五位相得て各合ふとあり。天の數二十有五、地の數三十、凡そ天地の數五十有五。此れ以て變化をなして鬼神を行る所以なり。乾の策二百一十有六、坤の策百四十有四。凡て三百有六十。期の日に當る。二篇の策萬有一千五百二十。萬物の數に當る。是の故に四營して易を成し、十有八變して卦を成し、八卦して小成す。引いて之を伸べ、類に觸れて之を長す。天下の能事畢る。道を顯かにし德行を神にす。是の故に與に酬酢すべく與に鬼神を祐くべし。

後世占筮の法を說く者は皆之を以て準據となす。此の文によれば筮法は四時閏等を計算し、過去の曆數の進路を追ひ以て未來の現象に至らんとする者あるを見るべきなり。

掛とは初めに掛けし一本をいふ。奇は四つづゝ數へて餘りしものをいふ。掛は常に一なれども奇の數には四種類あり。揲扐說といふは掛扐の數を計算して卦を出すをいふ。過揲說とは四つづゝ數へしものを計算して卦を出すをいふ。此れ等兩說は占筮に於ては最も根本的なる者なり。自ら筮竹を取りて試むることを要す。

先づ五十策を取り其の一を抽き出だし措て用ひず。餘れる四十九策を平分し右方の一策を抽き出して之を左方の別所に掛け置き、左右兩方のものと其一策と三者相ひ鼎立せしむ。而して左方の者を四策づゝ數へ去り、之を其の儘別所に置き、餘れる者卽ち本文に所謂奇を更に別の所に置く。若し餘れる者なきときは最後の四を以て奇と見做す。次ぎに右方の者を四策づゝ數へ去り、之を別の所に置き、餘れる者卽ち本文に所謂「奇」を更に別の所に置くこと前の如し。以上別の所に置ける者と及び初め五十の中より取りし一策とを合せ、左右合せて五ヶ所なり。而して四づゝ數へて餘れる者は閏に象るとなす。此くして二分し、一を掛け、左右の者を四揲し、奇を扐に歸す。此れ「十有八變而成卦」と言へる中の其の第一變なり。此れより後此の同一方法を費やすこと三遍にして一爻を得るか、六遍にて一爻を得るか、又は掛扐にて爻を見るか、過揲にて爻を見るかに從て種々の說を生ず。

第二節　過揲說

此の方法は漢唐諸儒及び邵康節の用ひし所にして四策づゝ數へ去りし者を以て正策とし、此れに由りて卦を出す者をいふなり。一變の後、正策、卽ち過揲四づゝ

數へ去られたる者の數は四十四か又は四十なり。更に之を平分し、右方の一策を抽き出して左方別所に置く。之を掛といふ。更に左手の策を四づゝ揲へ去り。餘れる者之を奇と曰ふ。又別所に置く。更に右方の策を四づゝ揲へ去り餘れる者を別所に置く。之を第一變となす。一變の後左右の策(四づゝ數へしもの)を合せ、同じく二分し、右方の一を掛け左方を四揲し、更に右方を四揲す。而して第二變を了る。二變の後左右の策を合し、同じ方法にて第三變を了す。三變を終へたる後に其の正策卽ち過揲の策を數ふれば三十六か三十二か二十八か二十四なり。之にて一爻を定む。其の方法、左の如し。

36＝4×9＝9 老陽 ▬▬。後變じて ▬ ▬となる。

32＝4×8＝8 少陰 ▬ ▬

28＝4×7＝7 少陽 ▬▬

24＝4×9＝6 老陰 ▬ ▬。後變じて ▬▬ となる。

老陽老陰少陽少陰等の區別は全く數に本ける者なり。奇數を陽とし、偶數を陰となす。奇數の最も大なる者は九、故に老陽となす。老いたる者は變ず。物壯んなれば則ち衰ふ。易の根本思想なり。然らば偶數も八を以て老陰となすべきが如くなれども易にありては則ち六を以て老陰となす。其故如何といふに凡そ占筮にては九八七六の四つより外には餘まらざる故、此れ等の數に付て思考し、陽は進むを主とし陰は退くを主とするとの理由に由り、六を以て老陰と見做すに至れるなり。然れども亦他の一面より見れば三十六を得る時は卦扐四四にして三奇なり。二十四を得る時は卦扐八八にして三偶なり。乃ち老陽老陰とおすの妥當なるを覺ゆ。（象山說參考）象山又或人の說を引いて曰はく。六七八九を四象となす。卽ち是れ老陽少陽老陰少陰なり。四者一體なり。七八を裏となす陰陽の分は裏より始まる。故に七を少陽となし、八を少陰となす。六九を表となす。裏は常に少く、表は常に老ふ。故に六を老陰となし、九を老陽となすと。要するに陰陽は相互對待するものなりといふ思想を以て其の根柢となすと明かなり。宋の郭雍曰はく。

天一地二天三地四天五、此れ天地の生數なり。一三五を合して九なり。天の數なり。天は本と乾なり。故に乾に九と稱す。二四を合して六なり。地の數なり。地は本と坤なり。故に六と稱す。此れ六爻を列するの後、聖人九六と稱する所以の者な

り云云

此說に據れば一二三四五より九六を得たるなり。然れども此れにては老と變、との意味なし。故に今は前說に從ふ。老陽が變じて陰となり、老陰が變じて陽となることは卦を得たる後に必要なり。

此くして第一爻を得たり。三變にして之を得たり。第二爻以下又各々三變を經て之を得。此くして六爻を得るには十八變を費さざる可らず。六爻共に老陽なる場合あり。六爻共に老陰なる場合あり。是れ等二場合にありては六爻皆變ず。六爻共に少陰なる場合あり。六爻共に少陽なる場合あり、六爻、少陽と少陰とのみより成り、老陽若くは老陰を交へざる場合あり。此れ等三場合にありては變爻なしとす。老陽老陰ある場合には始めに得たる卦を得卦又は遇卦又は本卦と名づけ、老陽老陰の變爻したる卦を之卦又は變卦と名づく。之卦とは之く卦の義也。例へば始めて得たる者は䷀にして其の初爻が老陽なりしとすれば則ち變じて䷫となる。前者を得卦と謂ひ、後者を之卦と謂ふなり。

第三節　卦扐說

是れ朱子陸象山等の唱ふる所にして其の法朱子の易學啓蒙に備はる。（象山全集卷二十一に參看すべし）四十九策を平分し、之を左右兩手に持す。右手に一策を取り、之を左手小指の間に挾み、左手の策を四揲し、其の餘れる者を左手第四指の間に挾み、又右の策を四揲し、其の餘れる者を左手第三指の間に挾む。小指の間に挾みし者を扐となす。第一變の後掛扐の數合せて五ならざれば則ち九なり。

第一變にて得たる掛扐を除き、四揲し、去られたる左右の策を手に取り分掛揲歸すると第一變の如し。得る所の掛扐の數は四ならざれば八なり。之を第二變となす。

第二變の後四揲せられたる策を合せて分掛揲歸すると前の如くす。掛扐の數は第二變と同く四ならざれば則ち八なり三變にて得たる掛扐によりて以て一爻を定む。ること左の如し。

五……奇數。五を奇となすにあらず、四を含むと一回なるが故に奇となす。
四……奇數。四を奇となすにあらず、四を含むと一回なるが故に奇となす。
八……偶數。八を偶となすにあらず、四を含むと二回なるが故に偶とす。
九……偶數。九を偶となすにあらず、四を含むと二回あるが故に偶とす。

朱子は五と九とは左手の小指の間に掛けし一策を除き。之を四にて除し。五は一を得るが故に奇とし、九は二を得るが故に偶となすとなしかから四と八とに付ては[掛]の一策を除くことを言はざるは聊か物足らぬ感あれども要するに五、四、八、九、の數が四を含むと一回なるか二回なるかを以て主とすべきかり。而して

三奇　三變共に奇なるものは老陽とし
三偶　三變共に偶なるものは老陰とし
一奇　二偶　少陽とし
一偶　二奇　少陰とす

陸象山曰はく、三奇なるものは四四四なり。三偶なるものは八八八なり。此れ老陰老陽なり。即ち乾坤の象なり。故に二あるべからず。若し少陰少陽なれば則ち各三變あり。此れ天子の象なり云云爲連叔廣書)

此くして十有八變して六爻をなす。掛扐を取るも過揲を取るも結果は同一なり。即ち掛扐にて老陽を得る場合は過揲にても亦老陽を得。掛扐にて少陽を得る場合は過揲にても亦少陽を得。其外之れに準ず。若し過揲三十六なるときは掛扐は[第一變五、第二變四、第三變四]にして、過揲二十四なるときは掛扐は[第一變九第二變四第三變四]又は[第一變五、第二變八、第三變四]にして過揲二十八なるときは掛扐は[第一變九、第二變八、第三變四]又は[第一變九、第二變四、第三變八]又は[第一變五、第二變八、第三變四]なればなり。之を表示すると左の如し。

四十九策　揲蓍策　掛扐　第一變　第二變　第三變

49 − 36 ＝ 13 ＝ $5_{奇}$ ＋ $4_{奇}$ ＋ $4_{奇}$ ＝ 三奇
49 − 24 ＝ 25 ＝ $9_{偶}$ ＋ $8_{偶}$ ＋ $8_{偶}$ ＝ 三偶
49 − 32 ＝ 17 ＝ $5_{奇}$ ＋ $4_{奇}$ ＋ $8_{偶}$ ＝ 二奇一偶
＝ $5_{奇}$ ＋ $8_{偶}$ ＋ $4_{奇}$ ＝ 二奇一偶

＝9陽＋4奇＋4奇＝1奇＝1陽
49－28＝21＝5奇＋8偶＋8偶＝1奇＝1陽
＝9陽＋8偶＋4奇＝1奇＝1陽
＝9陽＋4奇＋8偶＝1奇＝1陽

此の表を見るに第一變は五と九とのみにして、第二第三兩變は、四と八とのみなり此れ最も注意せざる可らず。此くして掛扐說と過揲說と其の結果は則ち一なり。

第四節　三十六變說

繫辭の文に十有八變而成卦。八卦而小成とあり。此の文勢によれば十有八變にて成る者は八卦にして此れにて小成すとなすべきが如し。此れ三十六變說の起る所以なり。三爻八卦が十有八變にて成る以上は六爻を得るには三十六變を經ざる可らずとなすに在り。毛西河曰はく。

故に卽ち大衍を以て之を究言すれば陽の數は九にして之に乘ずるに揲四の數を以てす。四九三十六。此れ陽爻の策なり。乾に六陽あれば則ち二百一十六策に當る。陰數六にして之れに乘ずるに揲四の數を以てすれば四六二十四。此れ陰爻の策なり。坤に六陰あれば則ち當さに一百四十四策あるべし。則ち祇だ此れ大衍五十にして乾坤所得の策を合し、以て三百六十日一期の數に當るべし。上下二經六十四卦三百八十四爻、陰陽相半ばし、得る所万有一千五百二十の策、以て万物の數に當るべし。而して皆四揲に於て之を求む。是れ四營して易儀已に成り。十八變（三六八變）十して內卦又成る內卦の小成を以て而して引き伸ばし、類推し、以て重卦の大成に及ぶ。其の道を顯かにし、其の德行を神にし神明と相酬酢する所以のもの卽ち一大衍にして天下の能事已に是れに盡くるなり。

此れに由りて見れば十八變にして成る者は八卦の小成の卦なりとなすなり、然れども重卦を得る所以の法は則ち明かならず。根本羽嶽亦之を執る。其の著は す所周易復古筮法に據り、其の法を述ぶれば左の如し。

先づ一策を除去し、手に信せて四十九策を中分し、之を左右の兩大刻に置き、右手を以て右方の一策を取り、之を掛けて用ひず。次ぎに左手を以て左方の策を取

り、之を四揲す。餘策を右方の第一の小刻に置き、初め掛けし所の一を以て此の扐に合す。而して過揲の策を左の大刻に還へし、右の大刻に置ける策を取り、又之を四揲す。余れる扐策を取り之を右に置く所の第一の小刻に置き、初めに置きし者と合す。過揲の策は之を右の大刻に還へす。之を一變となす。

左右兩大刻にある策を合し、又之を分掛揲歸すること第一變の如く。掛扐は之を右なる第二の小刻に置く、同じ方法にて六變迄之を遂行し、其都度、掛扐を順次第三以下の小刻に置く。

而して爻を立つるには掛扐に由る。其の法左の如し。卽ち先づ八、十二、十六なる三數に注意するを要す。

4 × 2 ＝ 8 (偶)　兩地の陰「二」は「象兩」の兩なり。
4 × 3 ＝ 12(奇)　三天の陽「三」は「象三」の三なり。
4 × 4 ＝ 16(偶)　四時の陰「四」は「揲之以四」の四なり。

九、十三、十七等の數は四を含むと各〻二回、三回、四回なるに從て定む、翁の此く陰陽を定むるは二、四の偶數は陰、三の奇數は陽となすに外ならざるなり。兎に角之を以て根本となす。今六變の掛扐を按じ、第一變と第四變、第二變と第五變、第三變と第六變とを比し、各〻兩者を合するときは三つの積數を得。

三共奇……三天の陽　(陽爻を立つ)
三共偶……兩地の陰　(陰爻を立つ)
一奇、二偶……三天兩地の陽　(陽爻を立つ)
一偶、二奇……三天兩地の陰　(陰爻を立つ)
三皆「四季」……四時の陰　(陰爻を立つ)
二偶、一「四季」……三天四時相錯るの陰　(陰爻を立つ)
一奇、二「四季」……三天四時相錯るの陽　(陽爻を立つ)
一奇、一偶＋「四季」……三天兩地四時相錯るの陽　(陽爻を立つ)
一偶、二「四季」……兩地四時相錯るの陰　(陰爻を立つ)

然るに此の法に由るときは老陰老陽の別なき故、一卦を得るも其の儘變爻あることなし。如何して變爻を得るかと云ふに、六變によりて一爻を立つるの法を反覆するかり、假りに三十六變の筮法によりて一の六爻卦を得たりとせんに、更

に六變を行ひて一爻を得。其の爻が前に得たる卦の初爻と同爻なるときは（例へば陽と陰の如し）變爻を得ず。苦し異爻を得るときは變爻とす。又同爻なりしときは更に六變を行ひ、第二爻と合せ見る。又同爻なりしときは更に六變を行ひ第三爻と照し見るなり、以上之に準ず。

例へば三十六變によりて咸䷞を得たりと假定せん。更に六變法によりて陽爻を得たるときは革䷰とす。若し陰爻なりしならば更に六變法を行ひ、陽爻を得れば大過䷛とす。若し陰爻なりしならんには更に六變法を行ひ、陰爻を得れば萃䷬とす、若し陽爻なりしからんには更に六變法を行ふ、而して陽を得、又次ぎにも陽を得、最後に陰を得れば此れ變爻なき者として已むなり。此の方法は極めて復雜なり。且つ變爻を求むる所に於て老陽老陰の理に據らざるは甚しく人爲的なるの感あり。

第五節　四十八策說

四十八策說は古來よりの說にあらず、又多くの學者によりて承認せられたるものにもあらず、吾人は唯だ四十九策以外の數にても占筮をなし得ることと、實際此數を用ひて占筮しつゝある者あることとを示めさんとして此に之を述るのみ。掛扐說に據れば五は奇、九は偶なり、而かも一を除いて之を四除するなり。朱子の說を讀む者は皆此点に疑を挾むべきも四十八策掛扐說にては此の事なきなり。如何となれば後文に詳論せる處によりて知り得べきが如く四十八策にありては掛扐は常に四か八にして、五又は九といふことなければなり。

四十八策を用ふる者日本眞勢中州の門人、谷川龍山あり。其の著「周易本筮指南」に備はる。此の著は龍山が其の師中州の遺意なりとして祖述したる者なり。其說に據れば易の繫辭に「其用四十有九」とあるは「其用四十有八」の誤りなり。固小篆にて書かれたりしが、小篆にありては八と九と其形克く相ひ似たり。故に之を隷書にする時誤りて四十九となし了りしなりと。龍山は五證を擧げて四十八策說を主張せり。左の如し。(一)朱子の說に據れば初變の掛扐は五ならざれば九なり、五は奇、九は偶なり。而して五奇を得る形に三あり。九偶を得る形は一のみ。此の形に付ては一般の筮法に於る左右兩方の策を四揲し、余まれる所の策數を見るべし。此

く掛扐の生ずる場合の異なるは神を盡くす所以にあらず。四十八策にては初變に奇の生ずる形二、偶の生ずる形も亦二あり。(二)四十九策の筮法に據れば初變に五、九を得。然るに四策は一年にして奇、八策は二年にして偶なり。五は奇にもあらず、又九は偶にもあらず。得る所の五九は奇怪なる者なり。然るに四十八策法に據れば初變に於ても四、八を得。(三)四十八策を以てすれば初二三の三變を通じて掛扐は四、八なり。四十九策にては初變五、九にして、二三の兩變四、八あり。此く掛扐異なれば繫辭傳の文に單に「再扐而後掛」と云はず、何等か掛扐の異なることを示めす文句あるべき筈なり。之れなきは掛扐の三變を通じて異ならざるがためなり。四)又四時に象ると言ひ、閏に象ると言ひ、三百六十、期の日に當ると言ふ、四時、閏月、一年を擧げながら十二月を擧げざるは四十八策を四分すれば十二となり、十二月其者を表はし居ればなり。四十九策にては一策多く、十二月に配す可らず。(五)四十八策にては掛扐は太陽が三奇四、四四、にして十二策、太陰は三隅八、八、八、にして二十四策、少陽は一奇二偶四、八、八、にして二十策、少陰は一偶二奇八、四、四、にして十六策となる。四十九策にては過揲は同きも掛扐は太陽十三策、大陰二十五策、少陽二十一策、少陰十七策となり。各一策づゝを餘ます。以上の五證あるが故に四十九策は四十八策の誤なること歴然たりと。

四十八策を用ひんとする龍山の筮法も分掛揲歸の法に於ては四十九策と全く相同じ。龍山に據れば奇は零數にあらず、奇數なり。或は一、或は二、或は三、或は四なり。「再扐而後掛」とは刻の第一、第二に置く所の策を奇の數に合するを謂ふなり。第一變より第二變第三變を了し、爻の陰陽を定む。四十八策法にては掛扐は三變ともに四か八なり。四を奇とし八を偶とす。故に

第三變　第二變　第一變

四	四	四	太陽　以て乾に象るべし
八	八	八	太陰　以て坤に象るべし
八	四	四	少陰　以て兌に象るべし
四	四	四	同　以て離に象るべし
四	八	四	同　以て巽に象るべし
八	八	四	少陽　以て震に象るべし

八　四　八　同　以て坎に象るべし
四　八　八　同　以て艮に象るべし

此く一爻の出でし意味を明かにし、之を八卦に配するは陸象山に於てすら其の説あり。支那にありて目珍しからざるものなり

第六節　第二第三不掛説

宋の郭雍(郭雍父は兼山、伊川の弟子、雍其父の學を受けて易に詳かなり。著卦辨疑、余未だ見ず。暫く易學啓蒙欄外注に據る)著はす所著卦辨疑に據れば第一變は掛くれども第二變以下は掛けずとなす。且つ横渠の言を引き「再扐而後掛」とは三變一爻をなせし後に更らに掛くるの意にして第二變にて掛くるの意にあらずとなせり。然れども朱子は之を駁し、横渠の言にあらずとし、且つ繫辭傳の文義に叶はずとなす。朱子の説にては「再扐而後掛」とは第二變に掛くるを意味するなり。

此く第二第三の兩變は掛けざるも結果は同一に歸す。第二變を行ふ時の策數は四十か四十四なり。之を二分して四揲し、餘れる處は左に四三二一、右に四三二一の四場合を出でず。然るに左右合して四か又は八より外餘まるを得ず。何んとなれば四十又は四十四より四、八を減せしときは殘數は之を四分するを得れども其の餘の五一と三　六二と四　七三と四　を減ずるも四分する能はざればなり。故に今右方の一策を掛けしときは四揲の後餘れる者と此の一策を加ふれば五四三二の四場合なり。左方の策を四揲して餘れる者は恰も四又は八を作る樣に三五に應じ四に應じ　又は二二に應じ　一三に應じ　ならざる可らず。若し又一を掛けずとすれば餘まる所は四三二一にして從て左より餘まる所は四四に應じ　二二に應じ　ならざる可らず。此くして掛くるも掛けざるも結果は同一に歸するなり。

第七節　五十策の所原(一)

然らば五十なる數は何に本づくか、諸説あり今其一二を引用せん。

イ八卦の數に本づくとなす者　崔憬曰はく、

參天とは三に從つて始め、數に順つて五七九に至り、一を取らざるを謂ふ。兩地とは二に從つて、起り數に逆つて十八六に至り四を取らざるを謂ふ。此れ天地

に因りて上を致し以て八卦に配して其の數を取るなり。艮を少陽と爲す。其の數三、坎を中陽と爲す。其の數五、震を長陽と爲す。其の數七、乾を老陽と爲す。其の數九、兌を少陰となす。其の數十。巽を長陰と爲す。其の數二。離を中陰と爲す。其の數八、坤を老陰と爲す。其の數六。八卦の數總て五十あり。故に大衍の數五十と云ふ天數一地數四を取らざるは此數は卦の外、大衍管せざる所かゝばなり。(周易集解)

卽ち三五七九を以て各艮、坎震、乾に當るとなし。二、十、八、六を以て各兌、離、巽、坤に當るとなす(易は逆數なりと云ふを以て陰を數ふるには十、八、六を以てせるなり)其れ等の數を合して以て五十となるとなす。又一說なりと雖も、陰に付て逆に數ふるとき二より起りて十に至り、而して後逆となると、及び四を除いて數へざるが如きは內含的に批評するも亦牽强附會の跡を免れざるなり。

□河圖洛書に本くとおす者。　朱子は河圖洛書に本づき、說をなして曰はく、

河圖洛書之中數皆五。衍之。而各極其數。以至於十。則合爲五十矣。

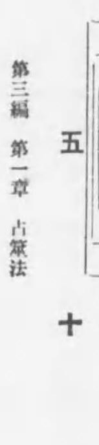
と、卽ち河圖洛書の中數たる五に付き五の各一(五の各一とは五は一一一一一なり。其の各一をいふなり)に付き一二三四より衍じて十に至らしむるときは「十」を得る者五、卽ち五十なりとなすなり。(易學啓蒙下)

朱子は又河圖の積數五十五なれども其の中央にある五を虛ふすれば則ち五十となるとなせり。曰はく、

河圖積數五十五。其五十者。皆因五而後得。獨五爲五十所因。而自無所因。故虛之。則俱爲五十。

と。此の句中にある「皆因五而後得」とは六は五と一、七は五と二、八は五と三、九は五と四、十は五と五、故に全體を合すれば五十五なれども單位の五を減じて五十となるとなすなり。朱子又曰はく、

又五十五之中。其四十者分爲陰陽老少之數。而其五與十者無所爲。則又以五乘十以十乘五。而亦皆爲五十矣。



「五」と「十」とは繫ぐ所なし。此れ等の二數を乘ずれば十箇の五卽ち五十、又は五箇の十卽ち五十となる。何れにしても五十を得るなり。朱子又曰はく。

洛書積數四十五。而其四十者。散布於外。而分陰陽老少之數。唯五居中。而無所爲。則亦自含五數。而幷爲五十矣。

と。此れ等の說を讀むときは何人も牽强附會の感を禁ずると能はざるべし。且つ朱子は又五十策は天地の總數五十五より水火木金土の數五を除き、四十九策は更に天一を除きし者となせり。曰はく、

大衍之數五十云者。以天地之數五十有五。除出金木水火土五數幷天一。便用四十九。

と。此の說は尤も分曉なり。朱子又曰はく。

大衍之數五十。而蓍一根百莖。可當大衍之數者二。故揲蓍之法。取五十莖。爲一握。置其一不用。

此の句に據れば蓍は百莖なるが故に其の半を取りて五十となせしとおすの意ある如し。要之、朱子は種々なる方面より大衍の數五十の由りて來りし所を說かんとせり。然れども河圖洛書其の他に於て五十の數を發見し五十は天地自然の數なりとなすに勉めたるのみ。周易禪解は朱子の第二說を以て五十の所原となせり。郝經曰はく。

大衍者。衍河圖之數。卽說卦所謂參天兩地而倚數也。一三五七九爲天。二四六八十爲地。伏羲旣衍天數二十五地數三十。爲圖。復取圖數。相倚而大衍之。一倚二爲三。二倚三爲五。三倚四爲七。四倚五爲九。五倚六爲十一。六倚七爲十三。七倚八爲十五。八倚九爲十七。九倚十爲十九。左右各三五七九而十一居中。共爲九位。左五位。包五十在內。通計九十有九。除十爲陰偶不用。惟用九位之奇。共四十有九。五十缺一。自然虛一之象。圖詳于後。此大衍之數。蓍策所以生也。

即ち何れも河圖に本づきて以て五十を定めんとするなり。太宰春臺も亦河圖を信じ「天地の數五處に位す。五位各々天地の數十を具す。卽ち陰陽を具へ居るが故に之を衍すれば「五十」となる」となせり。而して之れに對し河圖の數の一より數へて十に至るは小衍の數なりとなせり。曰はく。

竊謂。河圖之數。始於一。終於十。是爲小衍。天地之數。位於五處。五位各具天地之數。陰

陽之義也。故五十爲大衍。不容更有異義。

而して朱子が洛書に據りて五十を說かんとするを以て牽合の甚しきものとなせり。朱子を駁するは善けれども五位各々天地の數を具すとなすは穩かからず。伊藤善韶の說に異なるは其の河圖の數に由りて說を立つるに在り。

八天地の數を衍すとなす者　伊藤善韶は天の數五と地の數五と各々相合す。而して五個を得。各個を衍して一より十に至らしむるときは五十となる。大衍の數五十なりと。曰はく。

數は一に始つて十に終ふ。天の數五、地の數五。五位相得て各合ふことあり。之を衍して十に極まる。故に大衍の數五十なり。

仲氏易に云はく。其數五十は卽ち下文天地の數五十五なり。祇五十と言ふは蓍數五十なればなり。且つ亦天地生成の數五十に止まるを以てなり。

谷川龍山は參天兩地（說卦傳中の語）の語に本き天地の數を以て五となし。五の各一を衍じて十に至らしめ、五個の十卽ち五十を得るとなせり。曰はく。

蓋し天數三地數二。天地の數合して五となる。其の故何ぞや。天は陽なり。陽の理體は圓なり。圓なるものは徑一にして圍三なり。地は陰なり。陰の理體は方なり。方なるものは上下二にして前後左右四なり。天數は一三と對し地數は二四と對す。然るに天數其の一を取らずして三を取るものは陽は進む事を主る。故に一を取らずして之を取る。地數其の四を取らずして二を取るものは陰は退くことを主る。故に四を取らずして二を取る。是れ理數なり。夫れ天地は廣大にして數を測ること難し。故に聖人其の理體に由りて理數を取れり。天三地二にして數を立つ。是れ天地の生數なり。天地の生數合して五。其の五の生數に於て一各十に大衍して五十となる。故に知る五は天地の生數にして五十は天地の成數なることを。

此の說最も精透なれども參天兩地を解して直ちに天數三地數二となすは穩かならず。何んとなれば參天の參は數の「三」にあらずして天の形は圓く、圓き者は圍三なりとなす者にして卽ち形の三を指すなり。又地の二と云ふは地の形は方にして圍は四なり。四を二分して二となすとなすものにして是れ亦形の二を指すなればなり。若し天數地數を云ふときは天の數五、地の數五とありて背て三と

二とをいふとなし。參天兩地は全く形に付て言へるなると明なり。卽ち形に付て言ふ時は天は陽の數三に當り、地は陰の數二に當るを言へる者なり。

二 雜說　(イ)京房の說　季彥平曰く、京房謂ふ、十日十二辰、二十八宿凡五十。其の一用ひざるは天の生氣將さに虛を以て實を來さんと欲せんとすと。(讀易瑣記に據る)(ロ)馬季長の說、此の說に據れば、太極(一)兩儀(二)日月(二)四時(四)五行(五)十二月(十二)二十四氣(二十四)を加へて得たるものなり。曰はく。

易有太極。謂北辰也。太極生兩儀。兩儀生日月。日月生四時。四時生五行。五行生十二月。十二月生二十四氣。北辰居位不動。其餘四十九。轉運而用也。(同上)

以上二說共に數に於ては的として五十を得れども穩かならず。(ハ)荀爽の說。卦とに六爻あり。八を乘ずれば六八、四十八。之に乾坤二卦を加へて五十を得ると。曰はく。

卦各有六爻。六八四十八。加乾坤二用。凡五十。初九潛龍勿用。故用四十有九。(同上)

甚だしく附會の跡を覺ゆ。(ニ)鄭康成の說。　天地の數五十五なれども六爻の數を除き、四十九を用ふと。曰はく。

天地之數五十有五。其六以象六畫之數。故減之用四十九。(同上)

是れ亦牽合の甚だしきを覺ゆ。是れ等の諸說に由りて五十策の所原に付いて各人見る所を異にするを知るべし。易の作者は何に由りて五十を立てしや。吾人は十翼に由りて之を推すより外其道なきを信ずるものなり。然るに繫辭傳には大衍之數五十云々とありて同章に「天の數五、地の數五、五位相ひ得て各々合ふことあり。天の數二十有五、地の數三十。凡そ天地の數五十有五。此れ以て變化をなして鬼神を行る所以なり」との句あるより見れば天地の總數五十五より導き來らざる說は十翼の意に反するものとなさゞるべからず。

第八節　五十策の所原(二)

大衍とは如何なる意なるや。衍は「のぶる」なりとは普通の說にして之に付きては諸家異說なし。但だ「のぶる」者の何んぞやに付ては諸說あり。太宰春臺曰はく

衍。敷衍也。既有大衍之數。則當亦有小衍之數。(易道撥亂明著策)

と。則ち大に敷衍したる數の意なりとなす。然れども大衍に對し小衍ありとなす

は相對の觀念に拘泥したるの嫌ひあり。井上金峨曰はく。

大衍之數五十。其在經。不知何所指。而言其用四十九。則明其言蓍以爲大衍也。衍敷也。易道以太極爲本。是故有兩儀四象八卦。以生六十四卦。視一爻變否。而占萬事吉凶。言不敷衍之大乎。易學辨疑明著策

と。大衍は蓍を意味すとなす。蓍によりて爻を出だし。以て萬事を占ふ、即ち蓍は大極兩儀四象に象り、八卦より六十四卦を出だし、以て萬事に敷衍せらるゝなり。故に大衍と云ふとなす也。文章の上より見れば穩かなれども其用の句あるより大衍は卽ち蓍を指すとなすは餘り形式に流れたるの嫌ひあり。大衍の代りに蓍の字を應用すれば此の一章は「蓍の數五十にして其の用四十九云々」となり。而して其の意味は蓍は以て大に廣く人事に敷衍せらるゝ爻を作る者と云ふことゝなるなり。換言すれば大に敷衍する所以の器五十ありと云ふことなり。然れども多數の學者が一より十迄の數を衍ずの意となすことは前述の如し。啓蒙時喬の註に曰はく。

之を大衍と謂ふ者は加倍の意。魏の莊渠が曰はく。寬平なるなり。又引くなり。引て長ずるなり。蓋だし水を以て行に双ふ。水の寬平の地に流るゝ如し。引て長ずるなり。即ち加倍の意。

加倍とは猶ほ增長と云ふが如し。以上の諸家の說に由りて見れば衍は敷衍の義なると疑ふ可らず。日本語にて「をこなふ」と讀ませ、又はのぶるをすなどと讀まれども「のぶる」と讀むを以て最も可なりとなす。

然らば「大衍の數」なる句は大に「のべられたる數」と云ふことなるが、此れにては五十五より五十を導けりとなすを得ず。吾人は五十五より五十を得たりとなすが故に五十を以て大にのべられたる數となすを得ず。五十を以て大に衍ぶる所以の數となさゞるを得ざるなり。卽ち引いて之を伸べ類に觸れて之を長ずる所以の根本の數五十たるなり。

第九節　五十策の所原(三)

然らば大に敷衍する所以の數五十五策は天地の總數五十五と如何なる關係がある。進んで之を述べんと欲す。

元來天地の總數五十五と云ふは今日の思想より見れば何等の意味もなし。天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十の十を合せて五十五となるといふも何等の意味をも發見することゝ能はざるなり。天地は天文地理の範圍なり。有形の範圍なり。數は抽象的の概念なり。一二三四等は奇と偶とのみ。天地と關する所なし。然るを奇數は天の數偶數は地の數と定め之を加へたるにせよ五十五は單に五十五に外ならず。天地と相ひ當る所なし。然るを古の人一たび之を唱へてより後世の人毫も疑ひを挾まず。天地の總數五十五を以て普通のことゝなせり。夢は如何に明白かりしも畢竟夢たるを免れず。妄想は如何に判然たるも畢竟妄想たるを免れず。「天地の總數五十五と云ふ說も畢竟一種の傳說にして今日より見れば何等の眞理をも包含せざるなり。然るに後の學者其儘之を心に描き明々白々の公理となし毫も疑を挾まざりしは全く社會的傳說の勢力に外ならずと謂はざる可らず。衆口金を溶かし曹參の母は機を斷ず。多數人の言ふ所は之を信じて疑はざるは人の情かなり。

五十五は天地の總數なり。此の數より五十は如何にして出でしや、十翼之を言はず。後世の人理を以て之を推す。說の岐るゝ所以なり。河圖の何にあるやは之を知るに由なし。啓蒙の卷端に載する所の河圖の信ずるに足らざること既に定說なり。故に河圖に據る說は全く之を排せざる可らず。論じて此に至れば前に擧げたる諸說の中にて五十五より五を減ずるの說を取らざる可らず。然るに是れ等の諸說に付て吟味するに何れも牽强の甚きを覺ふ。五行を減じて五十とかし、六爻を減じて四十九となすと言ふが如き窮屈と謂ふべきなり。且つ古代の理論に照らすも亦穩かならざる者あり。何とかれば五行を引き、餘れる五十本に付きて太極を除き、兩儀に象り四時に象るとかすは前後顚倒の嫌ひあればかり。

羽嶽は筮法は曆に則るを以て曆より之を說明せり。其の說に據れば一年三百六十五日四分の一。五日四分の一を取り三百六十を以て一年となす。天地の數五十五。曆に則るが故に五を減せざる可らず。則ち五十となる。而して四分の一も亦筮策に在りては一となし五十より一を取り四十九策を用ふるなりと。此の說分明なれども三百六十五より五を取るために五十五より五をとるとなすは比例の觀念に於て穩かならざるなり。

惠徽君曰はく天地の數五十有五、五十なり。而して五を虛とす。注に云はく、大衍の數は卽ち天地の數、天地の數は五十有五。而して大衍の數五十とは明堂月令に曰はく春は其數八、夏は其數七、秋は其數九、冬は其數六、中央土は其數五、一水、二火三木、四金、五土、水火木金は土を得て而して成る。故に一二三四は五を得て六七八九となる。土の生數五、成數五。五五、十となる。故に地十あり。故に太元に曰はく。一六を水とす、二七を火となし、三八を木となし、四九を金となし、五五を土となす。天地の數五十有五。而して五は地中に在り。故に大衍の數五十。五を虛となすなりと。然れども亦遂に明かならざるなり。今繫辭の文を案ずるに通本には

大衍之數五十。其用四十有九。分而爲二。以象兩。掛一以象三。揲之以四。以象四時。歸奇於扐。以象閏。五歲再閏。故再扐而後掛。天數五。地數五。五位相得。而各有合。天數二十有五。地數三十。凡天地之數五十有五。此所以成變化。而行鬼神也。乾之策二百一十有六。坤之策百四十有四。凡三百有六十。當期之日。下略

とあり。朱子の本義は此の順序を變じ。天數五。地數五云々より、大衍之數五十に及び、而して乾之策云々に及べり。眞勢中州は說卦傳の「昔者聖人之作易也。祐贊於神明。而生蓍。參天兩地。而倚數。觀變於陰陽。而立卦。發揮於剛柔。而生爻。和順於道德。而理義。窮理盡性。以至於命。」の句を取り來りて大衍之數五十の前に置けり。然れども此れ「大衍之數五十」を神妙にせんとするより出でたることに外ならず。文理貫通の上より言へば必ずしも說卦傳の此句を引用するを要せず。朱子の書は同章內の前後を顚倒し論理一貫せしめし者なり。繫辭の意は天地の總數は五十五なれども敷衍する所以の數は五十なりとなすに在り。

吾人は茲に至り、占筮法の作者の心的狀態を考へざる可らず。占筮法の作者は豫め易の哲學に準據せし故、太極兩儀四象八卦に則るの意ありしこと疑ふ可らず。然れども又四時にて一年を測度せんとするの思想ありしことも亦疑ふ可らず。殊に又五十五の數ある以上は何等か數多きものを捕へ來るも亦自然といふべきなり。之を蓍となす。蓍の總數を以て五十五となすは極めて自然なり。元來今の筮法が無造作的に出來たる者と思ふは誤りなり。如何なる聖人と雖も直ちに「五十」を定め四揲を定めしとは思はれざるなり。必ずや多年の經驗を經て以て茲に至らざる可からず。又五十策の所原を定むる前に五十策以外の數が爻を定む

るに足るが如き結果を生ずるや否やを吟味せざる可からず。固より爻を定むるは人爲的なるが故に如何なる方法にても可なるべしと雖も易の思想乃至人間の理性に最も適合したる者たるを要す。吾人は先づ五十策以外の數に付て之を吟味せんと欲す。

第一〇節　五十策の所原(四)

天地の總數五十五なる觀念より五十策の起りしことは吾人の信じて疑はざる所なり。或は之を疑ふて曰ふ者あるべし。繫辭の作者は五十五と五十と關係あるが如く述べ居れども筮法の作者は果たして五十五より五十を演繹せしや否や是れ知る可らざる所なりと。是れ何等の論據なき疑問にして此に論ずる價値なしとす。

筮法の生ずる始めに於て先づ作者の腦中に映せし所の者は未來を豫見し得べきこと未來を豫見するは天文に於て其類を發見するが故に之に倣ふべきこと等の觀念なるべし。易は陰陽の兩者を假定し、天地剖判四時流行而して後八象を生ずとあるが故に天地の數五十五に由りて之を示さんとするも亦自然の結果なり。

大體の思想は確定せるにせよ。一を除くべきや二を除くべきや、或は全く除かずして可なるべきや、又手に任せて二分せし後右方の一策を取るべきか、又は二策以上幾策を取るべきか、四揲するには左右の策を合してなすべきか、四揲の代りに他の方法なきか、凡そ此れ等の疑問は經驗の始めに於て起りし所の者なるべし。

今の筮法に於ては一爻を得るに三變を要す。然れども一變にて得る所の掛扐は五ならざれば九。過揲は四十四ならざれば四十。之を四分し十一と十とを得。以て陰陽を定む可らざるにあらず。卦變を求めんとならば一卦六爻成立の後更に筮して以て陰陽の爻を積むこと六。前後に得たる兩六爻卦を比較し異なれる者を以て變爻と見做し得べからざるにあらず。此くしても猶卦爻を得べし。豈必ずしも三變に據らんや。

六七八九の數が今日傳來の筮法によりて起れるとは疑ふ可らず。老陽老陰少

陰少陽の思想は之れありしにせよ之に六七八九の數を適用することが筮法に據るにあらず、して起れることとは思はれず。換言すれば今の筮法を作りて後六七八九の四數を得たり。因りて之を陰陽老少に適用し、以て今の筮法を定めたる者にして始めより老陽は九、老陰は六、少陽は七、少陰は八なる思想ありしにあらざるべし。老陽老陰少陽少陰の四者あり、偶々五十策によりて六七八九の四數を得たり。因りて兩者を配合し、今の筮法を定めたるものなるべし。

第一一節　五十策の所原(五)

今筮法の發明せられし迄に經由せりと思はるゝ諸種の經驗を左に錄し、以て今の筮法の最も完備せる者なることを示めさん。

先づ五十五策を取り手に任せて二分するは最も始めに起れる思想なるべし。各々之を四揲すれば左に二右に一、或は右に二、左に一、合せて三を餘す。然らざれば左に四、右に三、又は右に四、左に三、合せて七を餘ます。乃ち三か七なり。其の過揲は

三……五十二
七……四十八

之を四除し、「十三」と「十二」とを得。是れにても尙ほ陰陽を定むべきなり。次ぎに五十五策を取り、手に信せて二分すること前の如く右或は左の一策を取りて之を別處に置き、以て三となし、左右兩方の策を四揲するも其の結果は前の場合と異なるなく、而して以て陰陽を定むべきなり。

是れ等の場合に於ては「五十五」策全體を以て太極となしたる也。太極分れて陰陽とかる。之に象らんとするときは五十五策を二分すべきのみ。其の中の一策を取りて太極に象るが如きことある可らず。故に第一法は最も始めに試みられたる者なるべし。第二法は唯天地人三才に象るの差あるのみ。

過揲を取るか掛扐を取るかは暫く之を後の問題とするも又如上の掛扐併びに過揲は以て陰陽を定むるに足るとするも其の數たるや。

三　五十二　十三
七　四十八　十二

三と七とは陽の數のみ「十三」と「十二」とは天數一三五七九地數二四六八十の中にあらず。易の哲學思想を滿足すべき者にあらず。今「十三」「十二」を變じて天數地數の內の者とせんには「三」と「七」とを增加せざる可らず。之れがためには三又は七を得たるとき之を取り除き除れる者を二分し四揲するにあるのみ。然るときは左の結果を得。

四十八　一二
四十四　一一
四十

猶ほ不可なり。更に過揲の策を合すれば、四十、四十四、四十八の三場合あり。二分四揲するときは左の結果を得

三十二　八
三十六　九
四十　十
四十四　十一

第二變以下四揲せる餘りは四か八の二種なれども過揲を四除したる結果は以上の如くして猶ほ面白からず。因りて更に之を二分し四揲すれは其の結果は

二十四　六
二十八　七
三十二　八
三十六　九
四十　十

更に二分四揲するときは、其の結果左の如し。

十六　四
二十　五
二十四　六
二十八　七
三十二　八
三十六　九

更に之を繼續すれば「三四五六七八」となる。陰陽を定め得ざるにあらず。然れども此れにて陰陽を定むる時は第一變にて陰陽を定むるの捷徑たるに如かず。故に此の如き經驗は再たびせらるゝの機會なきなり。

若し一策を掛けて三才に象れば其の結果は右に同きを以て之を贅せず。

五十五策は多きに過ぎて面白からざれらば次ぎの經驗は五十五策を減殺するに在るのみ。之を減殺するにも五十四、五十三、五十二、又は五十等となすは常識を滿足せしむる所以にあらず。直ちに五十策となすは最も自然の順序なるべし。

今五十策を取り之を二分し四揲するときはその結果左の如し。

殘り、	過揲	四除
二	四八	一三
六	四四	一二

更に四十八又は四十四を二分し四揲するときは（今は掛けざれども而かも云ふ）扐は四又は八なれども過揲は「三十六」「四十」「四十四」の三場合を得。即ち四除するときは「九」「十」「十一」なり。更に二分四揲するときは掛扐は同く四又は八なれども過揲は「四十」「三十六」「三十二」「二十八」即ち四除するときは「十」「九」「八」「七」となる。此れ又以て陰陽を定むるに足れども第一變にて定むるの捷徑たるに如かざるなり。故に此の如き經驗は再たびせらる可らざるなり。

五十五にして不可なりとすれば何策を用ふべきか。今五十策中の一を除き、四十九策を用ひ、單に二分四揲せんか。則ち左の結果を得。

掛扐	過揲	四除
五	四四	一一

第二變

掛扐	過揲	四除
四	四〇	一〇
八	三六	九

第三變過揲四〇かるときは

掛扐	過揲	四除
四	三六	九

八　三二　八

過揲三十六なるときは

掛扐　過揲　四除

四　三二　八

八　二八　七

なり。若し五十策の中一策を取り、二分し、通常の法の如くするときは

第一變

掛扐　過揲　四除

五　四四　一

九　四〇　一〇

第二變

(一)過揲四十四のとき

掛扐　過揲　四除

四　四〇　一〇

八　三六　九

(二)過揲四十のとき

掛扐　過揲　四除

四　三六　九

八　三二　八

第三度

(一)過揲四十のとき　掛扐　過揲　四除

四　三六　(九)

八　三二　(八)

(二)過揲三十六のとき　四　三二　(八)

八　二八　(七)

(三)過揲三十二のとき　四　二八　(七)

八　二四　(六)

此れ三變にて而かも六七八九の四數を得たり。經驗の結果遂に此の方法が一

般に使用せらるゝに至れり。

以上は唯だ筮法の作者が經驗したりと思はるゝ處の一二を想像したるのみ。吾人の觀る所を以てすれば五十五策を以て筮するは易の本義なり。然れども此れにては好結果を得ざるため減じて五十策となし。猶好結果を得ざるため更に一を減じて四十九策を用ひたり。一を減ずるは便利のためのみ。故に先づ敷衍する所以の數五十と定め其の用四十有九となせり。一を除くは太極に象るにあらず。故に二、三、四等は兩、參、四時に象ると明言しながら一を除くに付ては何等の明言なきなり。明言なきにあらず、明言すべからざるなり。

然らば何故に大衍の數四十有九とせざるやと云ふに四十九は端數にして五十の規則正きに如かざればなり。卽ち四十九と云ふよりは五十と云ふ方が形式上宜きがためなり。

古來の五十策に關する諸說は皆窮屈なり。吾人を以て之を見るに筮法の製作は一朝一夕の業にあらず。多年多數人經驗の結果なり。聖人が一時に作りし者となすは思想發達の順序を知らざるの說なり。聖人を尊ぶに過ぎて聖人苦心のある所を知らざるの說なり。今假りに從來の說を名けて合理說と謂ひ、余が說を名けて經驗說と謂ひ、以て稱呼に便せんとす。

合理說、經驗說何れも臆說なり。但だ吾人の見る所を以てすれば經驗說が事實に近きのみ。經驗說に據れば五十五策を用ふるは本義なれども便宜五十策を用ひ且つ其の一を減じて四十九策を用ふ。減ぜられたる一は便宜上除かれたるのみにして太極に象れるにあらざるなり。

第一二節　過揲と掛扐と何れを取るべきか

爻を定むるに掛扐を以てすると過揲を以てするとの別あること前に述べたる如し。漢唐の諸儒は專ら過揲に據る。掛扐を用ふるものは朱子なり。朱子は何故に掛扐を用ひしか。朱子曰はく。

而るを況んや掛扐の數は乃ち七八九六の原、過揲の數は乃ち七八九六の委にして其勢又輕重の同からざる者あるをや。而して或る者乃ち掛扐を廢置して獨り過揲の數を以て斷となさんと欲す。則ち是れ本を捨てゝ末を取り約を去

りて以て煩に就かんとす、而して其不可なるを知らざるかり。豈誤らずや。易學啓蒙

朱子が掛之を以て七八九六の原となす所以は如何と云ふに其の説次ぎの如し。老陽の掛扐は十三より初掛の一を除き十二を得。十二を四除すれば三を得。三を三除すれば、一を得。三は卽ち一が三あるなり。然るに一は奇數にして圓に象る。圓は圍み三なり。故に前の三の各一皆三を含むとすれば積むで九となる。卽ち十二は九の原たるなり。

之と同く、少陰の掛扐十七より初掛の一を除けば十六を得。四除すれば四を得。此の四は「一」「一」「一」「一」と分析するを得。一は奇にして圓に象ること前述の如し。圍み三。故に「一」「一」は六を含む。二は偶にして方に象る。方は四邊なれども其の半數を以て陰の數となす。卽ち二なり。故に「二」は二を含む。前後合して八を得。故に十六は八の原たるなり。

之と同く、少陽の掛扐二十一より初掛の一を除けば二十を得。四除すれば五を得。五は「二」「二」「二」「二」「一」の三者に分析するを得。前に述べたる方圓の理に由りて其の數を積めば七を得。故に二十は七の原たるなり。

之と同く、少陽の掛扐二十一より初掛の一を除けば二十を得。四除すれば五を得。五は「二」「二」「二」「二」「一」の三者に分析するを得。前に述べたる方圓の理に由りて其の數を積めば七を得。故に二十は七の原たるなり。

之と同く、少陽の掛扐二十一より初掛の一を除けば二十を得。四除すれば五を得。五は「二」「二」「二」「二」「一」の三者に分析するを得。前に述べたる方圓の理に由りて其の數を積めば七を得。故に二十は七の原たるなり。

之と同く、老陰の掛扐二十五より初掛の一を除くときは二十四となる。四除すれば六を得。六は「二」「二」「二」「二」の三者に分析するを得。前に述べたる方圓の理に本き、其の數を積めば則ち六を得。卽ち二十四は六の原たるかり。

以上を總括して言へば中衆はに於て

太陽は一第一位に居りて九を含むの數

少陰は二第二位に居りて八を含むの數

少陽は三第三位に居りて七を含むの數

老陰は四第四位に居りて六を含むの數

なり。「掛扐より初掛の一を除くこと」「四除すること」「三個に分析すること」「方圓の理を應用すること」此の四條は掛扐より九八七六の數を導く所以なり。

而して朱子が「過揲の數は乃ち七八九六の委なり」と言へる所以如何んと云ふに過揲の策は單に之を四除し、而して九八七六を得。陰陽方圓の理に本かず、其の意味輕きを以てなり。

朱子の掛扐説に付て疑を起さんか。第一、掛扐より初掛の一のみを除き、二變三變の一を除かざるは何故ぞや。十二、十六及び二十四の如き四の倍數を目掛けて此く偏僻せるにあらざるか。第二、初掛の一を除き得たる結果を四除するは易に在りては可なり。然れども四除せし結果を三に分析するは人爲的の甚きを覺ゆ。之に方圓の理を應用するも亦人爲的に過ぐるの嫌ひあり。

今易の經文に據りて之を見むに、乾の策二百一十有六、坤の策百四十有四の言あり。是れ老陽の過揲三十六に六爻を乘じ老陰の過揲二十四に六爻を乘せし結果なり。則ち易に在りて爻を言ふは過揲の策を以てす。過揲の策に據りて爻を定むるにあらざるよりは易に此の言あるべからざるなり。

純粹理論の上より之を推すも、筮せんとする現象は如何に多くの歳月を經過せしや。是れ筮の四時を數ふる所以なり。四時を數へ、更に之を數へて以て其の現象に至らんとす。某の現象は或る歳月を經過せる結果なり。是れ筮の根本に横はる所の思想なり。掛扐は單に餘れる數のみ。閏は四時内に在る者。四時をさへ數ふれば閏は其中に豫想せらるゝ者。由是觀之掛扐を取らんとするは筮の根本思想を解せざるものなり。

第十三節　三十六變説を排す

三十六變説に於る六變の掛扐及び過揲左の如し。第一變の掛扐は五か九第二變以下は四か八かなり。故に五の場合と九の場合とを分ちて表示すれば左の如し。

〔一〕第一變五なるとき

第一變	第二變	第三變	第四變	第五變	第六變	計	過揲
五	八	八	八	八	八	四五	四
五	八	八	八	八	八	四一	八
五	八	八	八	四	四	三七	一二

五　八　八　四　四　三三　一六
五　八　四　四　四　二九　二〇
五　四　四　四　四　二五　二四

〔二〕第一變九なるとき

九　八　八　八　八　四九　〇
九　八　八　八　四　四五　四
九　八　八　八　四　四一　八
九　八　八　四　四　三七　一二
九　八　四　四　四　三二　一六
九　四　四　四　四　二九　二〇

是れなり。三十六變說に於て先づ疑ふべきは第一變より第五變に至る迄に「九」「八」「八」「八」「八」となり、殘餘する所の策卽ち過揲が僅か八なる場合なり。此れを左右に分ちて右方の一策を掛くるときは右方か左方か何れか一度又は右方左方兩方共に一度も之を四揲するに及ばずして盡く其儘掛扐となる。一度も四揲すると能はざるは四時なくして閏を生ずと云ふに同じ。

若し又三十六變說を取るときは乾の策二百一十有六、坤の策百四十有四を說明すること能はず。

三十六變說に據れば過揲の數は「〇」「四」「八」「十二」「十六」「二十」「二十四」の七種を生ず。陰陽老少を定むるには不適當なり。故に勢ひ掛扐を取らざるを得ず。然るに前節に述べたる理に由り、掛扐說は用ふ可らざるものなり。以上の理由に由り余は三十六變說を排せんとす。

元來三十六變說は「十有八變而成卦。八卦而小成」とある句を連續して讀み「成卦」の卦は八卦なりとなせるより起りし者なり。然れども此の句は必ずしも然か解するを要せず、左の如くにも解するを得べし。本文は

乾之策二百一十有六。坤之策百四十有四。凡三百六十。當期之日。二編之策、萬有一千五百二十。當萬物之數也。是故四營而成易。十有八變而成卦。八卦而小成。引而伸之。觸類而長之。天下之能事畢矣。

とあり。二篇之策萬有一千五百二十迄は六爻の卦に付て言へるなり。而して直ち

に是故云々と連續す。卽ち十有八變して六十四卦をあすとなすこと明かなり。六爻の卦は大成の卦なり。然れども其れ以前に於て三爻の卦を得。是れ小成なり。八卦は小成なれども其の意味深長なる故特に之を注意せるのみ。谷川龍山は之を解して曰はく。

此れ文章の補挿法にして此の一句無くしては八卦の義闕略す。其の筮法の前章大極兩儀卦一再扐再掛の一變より四營三變十八變七十二營と其の文勢六畫卦と成り、終に及んで其の間に八卦を入るべき地なく、八卦を說くの違なき故に此に至つて此の八卦を補挿して以て小成の義を說きたまふ。聖筆の嚴密なることを見つべし。蓋し八卦にして三才立つ。義象畫家備はり、八卦成つて造化の蘊を察するに足れり、故に小成すと示したまへり。

吾人は此解を以て當れりとなす。讀者須らく全體より見て始めて穩かなる見解を得べし。單に一部に拘泥して全體の不調和を來たさゞるを要す。

第十四節　四十八策說を排す

四十八策說の論據は主觀的なり。卽ち四十九策よりは四十八策の方が理論上宜しと云ふに止まる。其の客觀的の証明に至りては繫辭傳四十九策とあるは筆寫の誤りなるべしと云ふに止まる。四十九策を取るときは第一變の掛扐は五か九にして第二變第三變は四か八なり。然るに四十八策を取るときは第一變の掛扐も亦四か八なり。若し掛扐を取らんとするときは四十八策說を以て是なりとす。卽ち四は四除すれば一にして奇、八は四除すれば二にして偶なり。奇偶を定むるに當り最も便利なり。而して朱子の說の如く第一變の掛扐のみより一を減ずるの不合理を除き得べし。故に掛扐說を取る以上は四十八策を取るを以て穩かなりとす。然るに掛扐說の取るべからざることは第六節に於て述べたる如し。若し過揲說を取るときは掛扐の如何に關係するとなし。四十八策と四十九策と何れにても同きなり。四十九策は古來の定說なり。四十八策說の論據は四十九策說を排するに足らず。果して然りとすれば吾人は四十九策說を以て易の傳說に叶ふ最も普通の說として之を承認せざる可らざるなり。只だ谷川龍山の言に殷の時は四十八策を用ひしとあれども此れ亦極めて疑はしきことなり。

第十五節　占筮無用説

此くして余は四十九策過揲十八變法を以て古法となし、而かも、五十策乃至筮法は實に經驗に本づきて作られしものとなすなり。之れに付いて注意すべきは平田篤胤翁の説なり。翁の易に關する説は長けれども參考のため茲に之を掲ぐることにせん。

○或人問ふ。四十有九策、十有八變の筮法は、古來よりの法にて、人により聊の異儀こそ有れ、總て僞法なりと。捨たる人は有こと無し。然るを前に此は、絶へて筮し得まじき筮法なりと云へるは、何等の説有りて言へる事ぞ。答ふ、其謂ゆる古法は、眞の古法に非ず。姫昌が新法なること、四十九策を用ふるにて、更に論ひ無き事なり。

そは既に引たる、通志玉海などに載せる古説に、歸藏用四十五策、周易用四十九策と有にて知べし。

斯て其古説中に、以象三などの字を攙入し、再扐而後卦と云ふは、重卦法を示せる語なるを、左右兩策を揲へし奇を指間に狹める後に、挂る義に翻案し掛に作り、一爻三變のいと勞煩しき擬筮法を作り、且下文に、十有八變而成卦ちう僞文をさへに攙入せり。

この僞筮法の揲蓍する儀は、漢儒以來の註釋どもに普く出て、互に少かの異同はあれど、皆人の知れる事なれば、委くは云はず。

然るに其筮法はも、四十九策を以て、其法の如く行ふに、過不及の數出來て、眞筮を得がたき物なり。其は此筮法に從事せる人ながら、眞勢達富と云る人の説に、夫蓍を揲へて得る所の策、四を奇とし、八を偶とす。然るに四十九策にては、初變に、左手の策を揲へて一を得れば、必ず右の策より三を得て、掛一の策と三合して、五策の奇數と成る。

これ奇數を得るの一なり。○今云挂一の策とは、かの僞文の掛一以象三と有るに依りて、右手の一策を、小指間に狹めるを云へり。下これに效ふべし。

或は二を得れば、必ず右の策より二を得て、掛一の策と三合して五策の奇と成る。

これ奇數を得るの二なり。

或は二を得れば、必ず右の策より二を得て、掛一の策と三合して、五策の奇と成る。

これ奇數を得るの二なり。

或は三を得れば、必ず右の策より一を得て、掛一の策と三合して、五策の奇數と成る。

これ奇數を得るの三なり。

さて四を得れば、必ず右の策より、四を得て、掛一の策と三合して、始めて九策の偶數と成る。

○今云上には四を奇とし、八を偶とすと云つゝ、此には五策を奇と云ひ、九策を偶と云ることは、舊く四十九策を用ひて、其奇偶を斷はる說等の中にも朱熹が說に、一變所餘之策、左一則右必三、左二則右亦二、左三則右必一、左四則右亦四、通掛一之策、不五則九、五以一其四、而爲奇、九以兩其四、而爲偶、奇者三、偶者一也、と有るに當りて云へる說なり。

是奇數と成るもの三、偶數と成るもの一、此は奇偶三增倍の扁倚なり。豈これを公正の立法と云むやと云へるにて知るべし。

そは信に此說の如く、扁倚なるが故に、試みに蓍を執りて、四象の過不及を驗

するに、奇數の出ること甚多く、偶數の出ること、十中の三に在りて三奇の老陽、二奇一偶の少陰おの〳〵二十反出る中に二偶一奇の少陽の出ること、十反に過ず。三偶の老陰出ること、僅に一二反なり。是を以て、乾卦の出ること常に多く、坤卦の出ること甚希なり。然れば其所屬の卦々の出るにも、過不及あること、推て知るべし。古今の易學者流、この議なきは論ふに足らず。四十九策と定めし姬昌は更なり。此を傳へたる孔丘氏も、此に心著ざりしは、何ちう事ぞも。

然るに此人、四十九策の非を辨へたる說は宜なれど、又別に、九は八の誤字なりと言ふ說を立て、其言に、四十八策の用數にては、初變に、左策を揲へて一を得れば、必ず右の策より二を得て、掛一の策と三合して、四策の奇數と成る。

これ奇數を得るの一なり。

或は二を得れば、必ず右の策より一を得て、掛一の策と三合して、四策の奇數と成る。

これ奇數を得るの二なり。

或は三を得れば、必ず右の策より四を得て、掛一の策と三合して、八策の偶數と

成る。

これ偶數を得るの一なり。

或は四を得れば、右の策より三を得て、掛一の策と三合して、八策の偶數となる。

これ偶數を得るの二なり。

是奇數と成る者二偶數と成るもの二なれば、奇偶等分にして、十有八變中に隻半の冗策なく、毫髮の支吾なく、眞に至正の筮法なりと云へり。

こは前説と共に、其門人松井暉星と云ふ人の著せる、象變辭占と云ふ物に見えたり。

此は古今の易學者流の説等の中には、卓越たる説なれど、仍十有八變の先入、其固疾と成りて、彼四字の攙入は更なり、掛字は卦字の僞字なる事をも辨へず、別にかく臆説を工夫して、本の煩勞なる筮法に從つゝ、無證にこの新説をなも立たりける。

其は此本書に、四十八策の本據を云る説に、古傳云とて、夏には三十八策を用ひ、殷には四十八策を用ふと、四十八策は勿論也、三十六策にても筮すべし。獨

四十九策にては、斷然として筮すべからずと言へり。然れど四十八策の事は、古書に絶て證文有ことなし。然れば此は上に引たる通志、及び玉海などに、四十五策と有る由を、途にきゝて聞誤れるか、或は杜撰かの二つを出す。然れば こそ古傳云とて、書名をば擧ざりけれ。其道に取りては、無上の重き事なるに、然る臆斷をしも爲べき事かは。

偖しか新説を立つゝも、其筮法の勞煩しく、且迂遠にして、急卒の事に施用し難き事をば、自知せるが故に、十八變の筮を立る長き間には、自然に神氣一致せず、惑亂妄想の發する事あれば、其代りに用ふる由にて、圓子とて、表裏に初二三四五上の字を刻み、朱と藍とを刺たるを十八箇作り、そを擲て、本卦及び之卦を索むる擧をしも、吾も用ひ、門人らにも、傳へてぞ有ける。此は必かの擲錢、また靈棋などの法よりや思ひ著けむ。

其圓子と云もの、或人その傳を受たるを、密に見たる事あり、然して彼擲錢法の類をば、甚く斥けて、大切至極の天命を請ひ、鬼神を驚かし奉る事に、兒戲玩具に等しき所爲にて、不敬侮慢の至なり。不敬無禮なる時は、鬼神感格せず。感

格せざれば、其卦應せず。何の用をか爲さむ。聖人是が爲にこそ、蓍筮の法をば立給へれ、其他種々の設卦法ありと言へども、都て取るに足らずと。門人その遺說を記せるは、何なる事にか予を以て是を視れば、圓子は更なり。十有八變の筮法も兒戲に等くこそ思はるれ。然れど、此達富、及び其門人暉星ばかり、易眼を具し、稽疑判斷の法をも辨へ知たる人はまた無くなむ。

又是に就て按ふに、近く寶曆の世頃に、平澤常矩と云る人あり。此人の言に、擊辭傳なる十八變の筮法を、孔子の言と爲れど、看來るに、變營數次にして、俄頃辨じ難く、急卒の際いと便利ならず。且註語錯亂して、聖人の全文に非ず。疑はしき者なり。次に揲錢法、心易法、また取捨なくば有べからず。今や年來これを試みて、其一定據るに足ざる事を悟る故に、古法を斟酌して、自己の發明を加へ、別に一家の法を立つ。惟易の活法に契ひ、應驗の過なきに賴る。世の易學者、或は予を扣きて蜂起すとも、是に答ふるに詞を以てせず。直に著を立て、其應驗を示さむと言へり。

此は其著せる、卜筮經驗と云ふ物に見えたり。十有八變の筮法を看破せる、見識の高きこと、古今に類なく、是また易學者流中の、一偉人にぞ有りける。

斯て其筮法に、五十蓍を執り、其一策を取て、格の中刻に置て、虛一に象どり、四十九策を、手に信せて中分して二ッと爲し、右の一分を、格の右の大刻に置き、其中の一策を取りて、左の小指間に掛け、左手の一分を右手を以て、四々四々と揲へ、八除して其奇策一を乾とし、二を兌とし、餘は之に效ひて、是を上卦とし、再總數を合せて、前式の如く、其奇策を見て下卦とし、其變爻を取るには、復綜合して、三々三々と揲へ、六除して奇策の數を以て、初より上爻までの六位に當て、一爻變を作れり。是世に謂ゆる略筮法なり。

此は其著はせる卜筮蒙筯と云ものに出せり。然して其卜筮經驗には、初二三のみを變ずと、返す〳〵論へり。松井暉星が此の筮法を破れる說に、是變爻法にては、一生涯に幾千萬筮を爲すと雖ども、一卦として、不變の卦に遇ふこと無く、かつ固より易道は、變化を尙む事なる故に、二爻變もあり、又は三爻四爻五爻もあり、六爻皆變の卦もありて、是易の變易交易たる所以なり。然るに此略筮にては、卦ごとに必ず一爻變に局れる法なるを以て、不變の卦と、二爻以上の變と云ふ者は、絕て有ことなし。按ふに此は彼邦にて、感動象數易法の取

扱ひは、一爻變の法なりけるを、譌りて擲錢法に轉じ、其を我邦に傳へしを、著筮に移し轉じて、彼八除の法と爲たるなり。されば是感動易の遺法なればなり。尋でまた一人有りて、其法に據りて、下卦より先に卦を設くる法に爲たるが、卽今の俗筮式なりと言へるは、實に然る事の論ひなりかし。

抑是徒の然る筮法どもは、凡て觀易の眼高らず。姬昌が僞文に欺かれて、其を批正參考する事を知らず。强ひて努めて荷ひ出せる愚法等にて、太昊神聖の古面目には都て契はぬ事なれば、一切に掃除して行ひ用ふる事なかれ。○再問ふ。十八變の筮法實に僞法ならば、古くも史蘇君平が如き、筮聖の出べくも非ず。然るに渠等が如く、萬變に應接せる易者の出たるは如何ぞや。予乃答むと欲するに、傍に生田篤道あり。頻みて汝この答せよと言へば、篤道云く、師は右の如く筮法の古式を論はれ在ど、また恒に我等に誨へ給へる說有れど、筮儀は、然しも泥むまじき謂あり。然るは三千年に近く、眞式は泯沒せる故に、謂ゆる十有八變の僞筮及び擲錢を始め、諸般の筮儀起れるが、其を用ふる倫、各々その占判の奇中正應して、史蘇辛廖と相並ぶべき徒も、和漢古今に少からぬは、必しも筮儀の眞僞に依りて、占判に淑慝あるに非ず。幽に神命の祐助を賜はるが故に、偶に正應あるなり。

然も有らば、前件々のごと、師の考記せられし擧はいかにと言ふに、彼告朔の餼羊にも類すべき、其眞式のほの見ゆるを、古神易を論ひ顯はすと爲ては、筮儀は然しも泥むべきに非ずとて、默止あるべきに非ざればなり。

其由いかにと言ふに、誰にまれ、此道に心を潭め、力を竭し熟く習慣せる人は、此道を始め給へる、太昊氏一號扶桑太帝、また竝に立て事成し給へる、泰一小子一號東華大神、及び天・地・雷・風・水・火・山・澤の八神、また天神・地祇・列仙諸靈の降臨照鑒おはしぼば、誠意だに道に當らば、占判に正應有むこと何か疑はむ。

今擧たる諸神の名、及びその功德などの事は、師の著書あまたに、說辨へられしを見て知るべし。

抑さる至聖の人は、腹中既に一部の易有りて、四千九百六變の卦も、我丹田方寸の間に繫辭すれば、其耳目に觸れ、其思慮に感ずる所、すべて天下の故に通じて、一として爻を生じ卦を立べからぬ物なく、疾がずして速に、行ずして至れば、何ぞも

筮儀に拘はるに足らむ。實には機に臨み變に應じて、環觀活用する中に、筮法の眞式は具はる事なり。

但し己篤道はも、唯に此道の一隅を聞き此文の一班を窺へる耳こそ有れ。然る位域はしも、九天の上を仰ぎ、九淵の下に臨むが如くなれど、今より後習慣年を踰へ、積熟功を經たらむに、今の仰ぎ窺ふ物やゝ卑く、今の望み觀る物、やゝ淺からぬ事を、負氣無れど庶幾ひて、傍聞を憚らず。かくは言擧なすになも。

扨師の上に委しく辨へ給へる如く、天地の間に活とし活き、生とし生る物の盡く、各々一生本命の卦あり。年々の卦あり、節々の卦あり、細に推し、精く求むる時は、一日一時一刻の卦さへに、具足備して、造次も離れず。顚沛も去らず。脗合密著して、火に燥あり。水に濕有る如く、皆その性命と成る事は、卽て天極に坐す太祖參神の、賦與し給ふ所にして、是ぞ謂ゆる天命なる。

この三神の由來、及び天命の本義は、我が師の諸書によりて、始めて玄の又玄、妙の又妙なる、旨の著明に成れること、今は人も普ねく知れるが如し。

然れば常に能く此天命を知りて、其時處位に卽て、また能く其天命を奉じて之に率ひ、之に據て、宜て悖逆、乖違せざる者を成人と云ひ、其否ざる者を小人と云ふ。是を以て大に爲こと有り。行ふ事有るに非ざれば、著を操へ爻を畫して、問筮すゝ事を用ひずして、之を我が天命に求むれば、稽疑の方備はり定り、尙占の道虧る事なく、儼然として違ふべからず。確乎として拔べからず。爭でか爲る事あり。行ふ事ある毎に、問筮して以て、眞正の德を喪ひ、晦吝の咎を招がむや。此は世の周易學者、および日家者流などの、能く知る所に非ざるなり。

此れ平田氏の三易由來記に存する所、言極めて明瞭にして、又德川時代に於る易者の一般狀態を知り得るを以て茲に之を揭げしのみ。

第十六節　筮法の價値

占筮は人情なり。古今東西一樣に之れあり。但だ其法一ならず。日本の太卜亦其一なり。而して星占の法西洋古代より存し、今日に至りて盛んなり。（第三編占筮論參照）而して支那の古代に於いて、占法に三種あり。一を龜卜となし、二を占筮となし、三を夢占となす。周禮に此れ等三者を列擧せり。其の文を拔萃すれば左の如し。

〔大卜〕三兆の法を掌る。一に曰く、玉兆、二に曰く、屋兆、三に曰く、原兆。其經兆の體皆百有二十。其頰皆千有二百。三易の法を掌る。一に曰く、連山、二に曰く、歸藏、三に曰はく周易。其經卦皆八。其別皆六十有四。三夢の法を掌る。一に曰く、致夢、二に曰く、解夢、三に曰く、咸夢。其の經運十、其別九十と。(註に曰く、兆とは龜を灼きて火を發し、其形占ふべきあり。其の象玉、瓦、原の壂罅に似たり。是れを用て名く。)

本筮は大傳の意なり。故に本章之を述ぶ。中筮略筮の如きは易本來の思想にあらず。故に之を茲に述べずといふ。周易十八變の筮法果して天地の眞理に合するか。吾人今日の思想に於ては之を批評するを要せざるべく、而して之れが內含的の批評を試むるも亦必ずしも有用の事にあちず。中筮略筮に從ふと雖も亦必ずしも不可なるにあらざるなり。

第十七節　筮法は何に象るか

易の大傳に云はく。

大衍の數五十、其の用四十有九。分つて二と爲し以て兩に象る。一を掛けて以て三に象る。之を揲るに四を以てして以て四時に象る。奇を扐に歸して以て閏に象る。五歲再閏故に再扐して後掛く

此れ筮法象る所ある也。此に注意すべき要素五あり。曰はく、五十より一策を除くこと。曰はく、以て兩に象るとなすこと。曰はく、以て三に象るとなすこと。曰はく、四揲以て四時に象るとなすこと。曰はく、奇を扐に歸して以て閏に象るとなすこと。是れなり。今一々之を吟味せんとす。但だ第四と第五とは最も明白なるが故に贅せず。其の餘の三者に就て述べんとす。

(一)　一策を除くこと　一策を除くに付ては古來皆以て太極に象るとなす。王弼曰はく。

天地の數を演ず。賴む所の者は五十なり。其用四十九なれば則ち其一用ひざ

るなり。用にあらず。而して「用」之を以て通ず。數にあらず。而して「數」之を以て成す。る。斯し易の大極なり。四十有九は數の極なり。夫れ「无」以て明かにする无かる可らず、必ず有に因る。故に常に有物の極に於て必ず其の由る所の宗を明かにするなり。周易古註卷七。七牧

是れ「一」を以て大極となし、又老子の「無」となし、此の「無」は四十有九策によりて其の用を運轉すと「なすなり。一を以て太極となすに其外于實崔顥皆然らざるなし。朱子も亦以て太極に象るとなし、而して其當用の策、凡そ四十有九。蓋し兩儀の體具はりて未だ分れざるの象なり」と言ふ。啓蒙下　朱子の哲學に在りては太極は理にして形而上なり。隨て萬物々普遍なり。一策の除くは卽ち此の太極に象るとなすなり。而して四十有九は陰陽二氣の未だ分れざるの象なり。智旭の周易禪解に云はく。

蓍を揲ふるの時に及び、又五十數の中に於て其一を存して用ひず。以て用中の體を表す。亦无用の用は本體の太極と實に二あるにあらざることを表す。夫れ體より用を起すは卽ち不變隨緣の義也。用中の體は卽ち隨緣不變の義なり。卷八。十六枚

是れ「一」を以て太極となし、「無用の用」「用の體」となす。佛教思想より解したる者なり。

又易學啓蒙通釋の註に左の句あり。朱子の說を明かにするに足る者あり。曰はく。

趙彥肅の易解四十九莖を以て握りて未だ分れず、太極の象となさんと欲す。朱子之に答へて曰はく。恐くは未だ穩當ならず。蓋し太極は形而上なる者なり。兩三四五は形而下なる者なり。若し四十九策を合し之を命じて太極の象と曰ふ可ければ則ち兩三四五も亦合して之を命じて太極の體と曰ふ可し。蓋し太極は陰陽五行に外ならずと雖も而かも亦陰陽五行を雜へず。其の握りて未だ分れざる者を以て太極に象るとなすの病なきに如かざるなりと。

是に由りて觀れば朱子は一を以て太極に象るとなすなり。而かも之に付て客觀的の論據あるにあらず、單に之の說を以て穩當なりとなすに外ならざるを見るなり朱子又曰はく。

天一を虛ふす。故に四十九策を用ふ。

又曰はく。

參天兩地は便ち是れ天一を虛し去り、只だ天參を用ひて地二に對するのみ

是れに由れば一は天「一」に象れるなり。而して啓蒙通釋の作者胡方平は則ち曰はく

愚謂ふ。一を太極となす。一を虛ふするは太陽の存せざるなきを見る所以其の用ひざるは用の原齡たる所以。

是れ又太極を以て在らざるなく「一」を以て之に象るとなすなり。京房曰はく。

其の一用ひざるは天の生氣將さに虛を以て實を來たさんとす。故に四十九を用ふ。

是れに由れば一は「天の生氣」なり馬季長云はく。

易に太極あり。北辰を謂ふなり。太極兩儀を生ず。兩儀日月を生ず。日月四時を生ず。四時五行を生ず。五行十二月を生ず。十二月二十四氣を生ず。北辰位に居りて動かず。其の餘四十九。轉運して用ふるなり。

是れに由れば一は太極卽ち北辰に象れるなり。荀爽曰はく。

卦各々六爻あり。六八四十八。乾坤二を加ふ。用凡そ五十。初九潛龍勿用故に四十有九を用ふ。

是れに由れば一は初九潛龍勿用（乾ノ卦初九ノ辭）に本けるなり。然れども筮法は遠く其の以前の發明に係る。縱ひ初九潛龍勿用の意味を取るとするも一を除くは初九に象れりとするは殆んど其の可を見ざるなり。谷川龍山曰はく。

蓋し大衍五十より其の四十八策を取つて二策を置いて用ひざるものは則ち天地の體に象るなり。然れば大衍五十なるものは體にして其の用四十有八なり。經文に其の體五十の辭なしといへども其の用と云へば其の體五十なること亦知るべし。論語に禮之用和爲貴と云ひて禮の體は嚴なることを言はざるが如し。古文に往々此の格あり。これを省畧文と云ふなり。其の四十八を合して一とし、以て大極に象り分つて二とし兩儀に象る。然るに其の分而爲二以象兩と云ひて合而爲一以象大極と云はざるものは是れ亦省略文法なり。然れば則ち四十八を合して一とし大極に象り分つて二とし兩儀に

象る。是れ大極分れて兩儀となるを以てなり。然るに大衍本義の條に五十は大衍の全數にして大極の體數なることを云ひ今亦四十八策を合して復大極に象ると云へるものは何ぞや。夫れ四十八策は大衍の用數なれば則ち大極に於ても用數とすべきなれども、大衍は數に由つて名づけ大極は象數を兼ねて言ふの名にして天地の間象數にもるゝものなき故に天地の象數を統べて大極と云ふ。分つてこれを言へば人人箇箇に大極あり、人人箇箇に天地あり。萬物皆然るゆゑに其の義廣く其の言大なり。但し大極は天地を一にし三歳を統ぶるの象なれば、其の大衍五十を合して固より大極と名づけ其の用數の初變四十八策を合して亦大極と名づく。二變三變に至り或は四十四策或は四十策或は三十六策といへども左右の策を合して一とするは皆大極の義なり。唯一變にかゝるに非ず。故に大極は天地を一にし三極を合する名にして道の淵源理の根基なれば策を合して筮事を問ふなり。大傳に此所を天下の至神と説きたまへり。一を除きて大極とすること其の義當らず。此の説は四十九策を用ゆる誤より附會するものなり。又二變三變たりといへども其の分合の法は固より大極兩儀に象る故に別に説なし其の法は初變と同じければなり。此に由つて觀れば唯策を合一にするを大極と云ひ分つて兩儀とし一の掛して三才とし揲ふるに四を以て四時に象ることは三變皆同義なれば何ぞ大極のみを疑はんや。是れ合而爲一以象大極の文なきものは其の省略文なることを知らずして大極に區々の説あるものは聖筆の文法を曉らず筮法に通せざるものなり。

是れに由れば二策は「天地の體」に象れるなり而して五十策は大極四十八策も亦大極乃至四十四策四十策三十六策等左右を合したるときにも太極の名稱を應用すべきなり。崔憬曰はく。其用四十有九は長陽七々の數に法るなり。六十四卦既に長陰八々の數に法る。故に四十九策は則ち長陽七々の數に法る。云云一を含いて用ひざるは太極に象り虚にして用ひざるなり。(周易集解)

諸家の説皆其意を以て言ふのみ。典據あるにはあらず。蓋し此等の諸家は「一」を以て象る所ありとなり。果して然らば大傳は何が故に象る所を言はざるや。諸家の説は私智を以て大傳に蛇足を加ふるの類にあらざるか。大傳に兩に象ると

言ひ、三に象ると云ひ、四時に象ると言ひ、而して一を除くに付ては何等言ふ所なし。則ち諸家の說たる大傳以上に出でゝ之に蛇足を加ふるものと言ふも決して過言にあらざるなり。經驗說より之を見るに一策を除くは何等象る所あるにあらず。單に便宜のためのみ。是れ大傳の言はざる所以なり。

要之、五十策より、一を減ずるは全く己むを得ざるに出づる者にして象れる所あるにあらず。四十九は分れて兩儀となる。是の點より觀察すれば四十九策其者が太極に外ならざるなり。「其用四十有九」と言へるは太極の用を言へるにあらず、五十策の中に付て用ふる所を言へるなり。故に「其用四十有九」と言へばとて「其體五十」と言ふにあらざるなり。又易の作者は其の用四十九と言へるときは此れ太極なりとの思想がありしや否や知る可らず。但だ分れて兩儀となる所より推測すれば太極たりと言ふに外ならず。然れども繫辭傳に「易有太極、是生兩儀」の句あるより見れば此の推測は蓋し穩當なる者なり。

(二)　兩に象ると　「分けて二となす」は兩に象るなり。卽ち天地なり。左は天、右は地なりと云ふことに於ても諸說皆一致す。兩は或は陰陽とも解し得べし。然れども後に三に象るとあり。三は三才なりとせば兩を以て天地となすを穩かなりとす。參天兩儀の參と兩とにはあらざるなり。繫辭傳中の「易有太極、是生兩儀、兩儀生四象、四象生八卦」に於ては兩儀は陰陽兩者なり。天地は八卦の中に包含せらる。筮法は之れと異なり。先づ天地を生じ、「三才」を生じ、四時を生ずるなり。筮法は大體に於て天地の進動を模倣するのみ。

(三)　三に象ると。　兩を以て天地となす者は三を以て三才となさざるなし。一策を掛るは左手よりするものあり、(河田孝成の如き是れなり。)右手よりするものを普通とす。吾人の觀る處にては左手を天となし右手を地となすは筮法の作者其人の思想なりしや否や知る可らず。但だ手の運動より言へば左が根本たる故、左手を天となすが穩かなる如く思はるゝのみ。而して右の一策を取るも亦手の順序なり。左の一策を取るより便なること實際に照らして明かなるべし。左を天、右を地と定めたる後は理論上地の一策を取りて人に象るとなす方穩かなれども理論よりは手の順序が先づ此の筮法を作りしなるべし。

兩と參とは天地と三才となること殆んど定說なり。根本羽嶽翁は異說を立て、兩

は兩地、三は三天の意なりとなせり。曰はく。

兩に象るとは兩地に象るなり。說卦傳に曰はく參天兩地數に倚ると。舊註以て兩儀に象ると爲すは非なり。三とは三天に象るなり。舊註以て三才に象ると爲すは非なり。

然れども先づ地に象り、後に天に象ること穩かならず。翁の解釋は餘り文字に拘泥したる者なり。今取らず。

要之。四十九策を分ちて二となし、以て天地に象り、更に一策を掛けて以て三才に象り之を四揲して以て四時に象る。

第十八節　筮の器

筮に用ふる器數あり。一に曰はく蓍。二に曰はく算木。三に曰はく韇。四に曰はく小刻。五に曰はく筮。是れなり。此の中に就て最も必要なるは蓍なり。蓍筮二字別なり。蓍は音「し」筮は音「ぜい」通本の繫辭傳を始とし易に關する一切の書物は皆此の字を用ふ。字書も亦此の字を以て易器の名とし、筮字を脫す。其の蓍の字を載せ、且つ以て易器となすは六書精藴あるのみ。筮、策の字皆竹を冠らす則ち占筮するに竹を用ひしこと知るべし。故に筮の字を以て正しとなすべし。然れども筮の書古書に見へず。恐くは信ず可らざらん。故に今は筮の字に從ふ。說文に天子は九尺、諸侯は七尺、大夫は五尺、士は三尺とあり。是れ周の禮なり。九尺は今日の日本の尺にすれば、六尺餘なり。史記龜策傳に云はく。

天下和平にして王道得て、蓍の莖長さ丈あり。其の叢生、百莖に滿つ。下に神龜ありて之を守り、上に雲氣ありて之を覆ふ。

詩に澄彼苞蓍とあり。說文には蒿屬とあり。卽ち蓍の字は古來蒿の種類とせられしものなり。周の禮は吾人之を用ふるに及ばず。故に策の長さは各人の思ひ思ひに任かすべし。日本にて德川時代の俗間に用ひしは九寸なり。

算木。周の代未だ今日の算木なし。儀禮の文によりて明かなり。曰はく。

卦者左に在り。坐し。卦、木を以てす。筮を率へ。乃ち卦を木に書す。

鄭玄註に曰はく。

卦は史の屬なり。卦木を以てする者は一爻毎に地に畫して以て之を識るす。

六爻備はれば板に書す。史受けて以て主人に示めす。

卽ち卦爻を木板に書せしなり。未だ算木なる者なし。其の之れあるは何れの時代なるや、を詳かにせず。

卦。繫辭傳に「一を掛」とあり。朱子は一策を小指に掛くることなりとす。羽嶽翁は掛けて用ひざるの義とす何れにせよ、掛は掛くることなり。天子の策は九尺卽ち指間に掛くるを得ず。恐くは小刻の器ありしなるべし。

扐。扐に就ても亦諸說あり。朱子は挾勒の義、左手の第三指と第四指との間に挾さむ義なりとす。伊藤善韶亦之に從ふ。郝敬の說に據れば零數を扐と曰ふ。仂扐同じ正數の外に零する所の數なり。禮記王制に「祭りは數の仂を用ひ、喪は三年の仂を用ふ」とあり。故に古零數を言て扐となせしを見るべし。羽嶽翁は此の說に從ふ。谷川龍山は二刻を有する器の名とす。

今按ずるに大傳の「歸奇於扐」の句、奇は何を意味するや、其の說の分るゝに從ふて扐に對する說も亦二に分る。奇は虞注に據れば、掛くる所の一策なり。果して然りとすれば其の一策を指間に挾むとなすは何等の意味もなきこと故、勢ひ此の一を零數に合することとなさゝるを得ず。若し「奇」を以て四揲の餘の零數となさば、之を指間に挾むとなすべく、或は之を器に歸するとなすべし。吾人の觀る所を以てすれば奇は四揲の餘の零數なりとなすを穩かなりとす。之を判斷するは文勢に據るの外なし。且つ扐を零數とし、奇を一策となす說に從ふときは一策と零とを合したる者が閏に象ることとなる。然るに一策は本、人に象りし者なり。故に此の方面より見るも此の說穩かならざるなり。且つ奇を一策とするときは扐は左の扐なりや、右の扐なりや。一方の扐にのみ、之を合し他方の扐に合せざるは穩かならざるにあらずや。且つ「五歲再閏。故再扐而後掛」とあり再扐は左右の零數なり。左右二の零數を以て再閏に象る。一の扐を以て一の閏に象ること明かなり。一策を合すること甚だ謂はれなきなり。故に吾人は奇を以て四揲の零數となす。然らば扐は指間なるか器なるか。「歸奇於扐」の扐は名詞にして「再扐」の扐は動詞なり。扐は零數を置く作用なるべし。隨て零數を置く所を指して扐と云ふなるべし。零數を置くは小刻ある枕木なり。掛も之と同く一を掛くることなり。隨て一を掛くる所をも指して掛と言ふなり。扐掛共に策のみを指すこともあるなり。掛扐共に

「作用」「場所」等の意味をも包含せり。仍は數なれども扐は數にはあらず。二字全く別なり。

韇　蓍を藏するの器を名けて韇となす。儀禮によれば韇には上下あり。相ひ合して蓍を中に藏む。龍山の說に據れば其の形圓筒にして竹筒を厭ふ。黃楊或に櫻にて作る。

案　案は單に案なり。

以上述べたる諸器の制度は先天の理論に由りて此く定まり居るにあらず、易の思想と關する所少し。故に各人の隨意に之を作り得べきなり。

蓍室　易大全筮儀の條に曰く。地の潔處を擇むで蓍室を作る。戶を南にし、牀を室の中央に置くと。凡そ筮は心を專一にし天人感應を期せんとす。是れ支那一般の思想なるが故に潔處を擇むで蓍室を造るは最も此の思想に適合したる者なり。

是を以て天の道を明かにして民の故を察す。是れ神物を興して以て民用に前つ。聖人此を以て齋戒して以て其の德を神明にす。（繫辭傳）

聖人其の心を齋戒し、以て鬼神に接するを言ふなり。

第二章　占驗論

第一節　占驗法一般

占筮は其象を得て以て未來を知るを得るとは易に關する古來の定說なり。余は別項に於て述べしが如く易を以て一種の處世的道德的の訓戒となし、平素之を弄ばんとする者なれども古來占筮のために用らるゝ者なれば其の一般を述べて以て易が如何なる邊迄人の想像力を逞しうせしむるかを示めさんとするなり。

占驗は周易の文字丈にては出來難し。何んとなれば周易の文は極めて簡單にして要領を得難ければなり。且つ此文に由りて占はんとするも、結婚を占ふて師の卦を得ることあるべく、臣を占ふて君の爻の動くことあるべし。故に周易の本文丈にて一つの事柄を占はんか、極めて心細き限りなるべし。世には此種の經驗を嘗めたる人もあるべし。故に占驗せんとする時は勢周易の本文以外の方法に由ら

ざる可らず。

其方法如何となす。他なし、得卦と之卦とに就て、各、上卦と下卦とを比較しあらゆる聯想を呼び起し、之を其事柄に照らして判斷する外なきなり。慣るゝに從ふて巧者になる者なり。然れば占驗するには卦の性質を熟知せざる可らず。八卦の各一につきては固より重卦の全體より之を八卦に見立てると(例へば䷀䷁䷂䷃䷄䷅䷆䷇風地觀を䷓となし䷐䷲䷵䷸䷼風澤中孚を䷼となす如し)互體を見ると等に熟するを要す。判斷は何れにも決し得べき樣なれども易にて占ふ以上は易の性質を呑み込み其上各自任意の判斷をなすは已むを得ぬことなるが、易の性質を呑み込まず、僅かに八卦の象を知る位にて判斷する時は何んとなく可笑く感せらるべし。占はんと思ふ人は成るべく多く易の事柄を知了するを要す。蓍を用ゐて卦を得たる時にも數多の聯想が其卦に付いて起り來るを要するなり。

左の一法の如きは占驗の際種々の聯想を引き興し、判斷の材料を與ふるものとして極めて興味あるものなり。例へば䷅䷆䷇䷸䷼澤火革の一卦に付て初九が少陽にて出で而も其掛扐初が九、二が四、三が八にて出る時は坎䷜と觀察し、又革の六二が少陰にて掛扐初が五、二が四、三が八にて出るときは兌䷹三二初と觀察す。若し九三が掛扐、初が五、二が八、三が八にて出る時は震䷲三二初と觀察するなり。其餘類推すべし。故に一卦六爻が各一卦の意味を有すと見るなり。此く見る時は一爻には重大なる意味が包含せらる。占筮には此法を以て最も重要なる者となすべし。

第二節　占驗諸例

今谷川龍山の占驗諸例の中二三を摘錄して以て所謂筮者が易に於て如何なる心的進動をなすやを述べんとす。

此條占事ノ的中シテ象意ノ確實ナルモノヲ擧テ以テ同志ニ告グ。學者此占ヲ以テ萬事ニ活用スルヰハ其占事ニ於テ思半ニ過ン。○甲戌七月十六日ニ翌十七日十八兩日ノ晴雨ヲ筮ス。十七日ニ晉ノ觀ニ之ヲ得。十八日ニ困ノ萃ニ之ヲ得。占ニ曰。晉ハ日地上ニ升リテ萬國ヲ照スノ象、觀ハ風地上ヲ行ノ象ナレバ十七日ハ晴天ニテ午後ヨリ風アラン。又困ハ水澤下ニ漏トノ象。萃ハ地上ニ止水アルノ象ナレバ十八日ハ大雨ナラント云フ。

悉ク中ス○丙辰ノ年豐内チ筮シテ訟ノ不變チ得タリ。爻卦ハ䷲震々々兌震兌ナリ。占レ之曰。正月ヨリ六月迄ハ雨多カラン。亦七月ヨリ十二月マデハ晴多カラン。爻卦ヲ見レバ東國ハ豐年ナラン。西國ハ雨多ニメ内作ナルベシ。卦象ト爻卦米ハ始安クシテ半ヨリ上ルベシト云フ。果シテ中ス○同米價ノ高低チ筮シテ臨ノ夬ニ之チ得。占曰。臨ハ地下ニ澤ノアル象ニシテ始安キ意ナリ。夬ハ臨ノ内卦ノ兌易位ニシテ天上ニ升ルノ象ナレバ七月ニ至テ大ニ上ルベシ。然レドモ兌ハ止水タレドモ潤下ノ性ニシテ久ク天ニ止ルモノニ非ズ。必再易位シテ訟トナリ、易位生捕ハ籠天ヨリ下ルノ意アレバ七月ニ天井直數出テ、夫ヨリ安ク往來高下アルベシト云ニ中ス。乾兌トモニ秋ニ取ル且直數甲子二月或ル邸ニ堀貫ノ井チ造ラントス。水出ルヤ否チ筮シテ復ノ震ニ之チ得タリ。占之曰。初爻チ石トス。此石マデ鐵棒通テ後又中段ニ石出來テ震爲雷始ノ棒却テ中段ニテ止リ下ヘハ通ラヌ象ナリ。故ニ水出マジト云フニ中ス。○或下含チ求ムルノ吉内チ問フ。筮シテ家人ノ中孚ニ之チ得タリ。占之曰。家人ハ家ノ卦、中孚ハ彼我相向テ信アルノ象ナレバ求メテ吉ナリト云フ。遂ニ求メテ吉ナリ。以上ハ余並ニ同門ノ占チ記スノ占ハ先生ト記シテ門人ノ占ト別ツ下之ニ倣ヘ家○榮田氏運氣ノ吉内チ筮シテ大畜ノ益ニ之チ得。先生占レ之曰。吉ナリ。大畜ハヌクハフルナリ。益ハサカフルナリ。乾ハ健ナリ。震ハ動ナリ。乾震トナル、健ニシテ動クノ義ナリ。艮ハ篤實ナリ。巽ハ

遜從ナリ。艮巽トナル。篤實ニシテ遜フノ象ナリ。大畜ハ止ナリ。益ハ惠ナリ。大畜ノ益ニ之。驕チ止メテ人ヲ惠ムノ意アリ。故ニ内剛健ニシテ能勤メ、外篤實ニシテ能遜フ。是以驕ヲ止メテ人チ惠ム時ハ必昌ン也○且夫乾ハ金ナリ。玉ナリ。艮ハ止ナリ。大畜ハ衆ナリ。蘊ナリ。養ナリ。震ハ動ナリ。巽ハ遜ナリ。益ハ增ナリ。大畜ノ益ニ之ハ此財チ集メ、實チ蘊ミ、人ヲ養ヒ、業チ增スノ卦ナリ。吉孰カコレヨリ大ナラン。其必蕃昌セン。後果シテ其言ノ如シ國此語司空季子ノ占辭ニ倣フモト○先生泉州貝塚ニ遊歴ノ時。或醫師ノ息旅亭ニ來テ身ノ漢文ナリ今其意ヲ取テ和解ス

吉内チ問フ。コレチ筮シテ乾ノ不變ヲ得。占レ之曰。善子ハ人ト不和ナル意アリ。親ニ從ハザル意アリ。驕意アリ。亢意アリ。遠行ノ意アリ。皆乾且前年瘡毒ヲ病タルコアラン。醫生ガ曰。象ノ然リ。先生又示シテ曰。再病意アリ。其病頭ヘ上リ、腐爛シテ命ニモ係ルコアラン。愼ムベシト云フ。後果シテ瘡毒頭ニ發シテ死セリ。此白蛾先生天眼通ノ占法ニ倣フノ密象ナリ

○或人余ノ婚姻ノ吉内チ問フ。筮シテ臨ノ節ニ之チ得。占レ之曰。臨ハ彼我相望ナリ。節ハ節義チ守ルノ義アリ。且坎ノ中男上ニ位シ、兌ノ少女下ニ居テ男女位チ正クシ。宅齊ノ象ナリ。吉孰カ此ヨリ大ナラント云フ。終ニ娶テ吉ナリ。○或人曰。予ガ子二人アリ。女子ト男子トナリ。然ルニ女子ハ姉ナレバ婿チ取テ嗣トセンヤ。他ニ嫁セシメテ吉ナリヤチ問フ。因テコレチ筮シテ賁ノ大有ニ之チ得。占レ之曰。離ハ日ナリ。中女ナリ。艮ハ山ナリ。家ナリ。乾ハ天ナリ。外ナリ。賁ハ文飾ナリ。大有ハ冢チ四有ッナリ。蓋中女家ニ在リテハ賁ノ卦ニシテ賁チ文飾トスレバ、外見ハ

ヨケレドモ、日山ノ下ニアッテ用ヲナサズ。中女外ニ出レバ大有ニシテ、其家チ有ツ。尙日ノ天ニアルガ如シ。故ニ貴ノ大有ニ之ハ中女家デ出テ外ニ嫁クノ象ナリ。是ニ由テ觀レバ他ニ嫁セシメテ吉ナリト云フ。果シテ富家ノ妻トナル○余武庫ニ遊學セシ時ニ、書肆某ナル[モ]ノ大坂從弟ニ女チ媒妁シテ婚姻ノ期ニナリケレバ再浪華ニ到テ婚チ調ヘントスルニ臨テ親筮シテ革ノ既濟ニ之チ得タリ。以テ余ニ示ス。余占レ之ヲ曰。革ハ改革ノ義。既濟ハ盡クルノ象アレバ此婚姻ハ調ヒ難キ意アリ。且外卦ノ兌口相背ノ象ニシテ坎ト變ズレバ內卦ノ離火チ剋ス。是彼ヨリ我チ剋スルナリ。勝敗ノ占ニ於テハ生克チ用ルナシト雖モ生克ノ說ハ詳ニ易學階梯附言ニ見タリ。言繁ク故ニ略ス　此女ノ方ヨリ約チ背クノ象アレバ內ナリト示ス。某ナルモノ從弟ノ家ニ到レバ女ノ方俄ニ約チ背キ昨夜彼方ヨリ納徵テ返セリト云ヘリ。○或富家哀ヘタル所金五十兩ノ持參ニテ養子ニ來ルモノチ媒セント云。成カ否カチ問フ。故ニ筮シテ需チ得タリ。占レ之ヲ曰。需ハ待ツナリ。調ハザルニアラズ。然レドモ今調ルニ非ズ。先天方位ニテ考フルニ木巽ナリ。今坎ニナリ。又艮ニ之ク意アリ。然レバ我ヨリ進ム時ハ小畜トナリ。又需トナル。故ニ此所ニテ待ツベシ。坎ヨリ艮トナレバ大畜トナル。大畜ハ養子來ルノ象ナリ。又乾ノ三爻ハ三貫目ノ數アリ。故ニ金五十兩持來ルベシト云フ。果シテ養子金チ持來セリ。○或人養子ニ往ノ吉凶チ問フ。小過ノ豫ニ之クチ得。占レ之ヲ曰。小過ハ背クノ占ナリ。豫ハ進行ノ象アレドモ俱ニ和スルノ象ナシ。故ニ凶ナリト云フ。其人間カズシテ養子ニ往ク。日アラズシテ離別セリ。○商家ノ手代番頭トスベキ者二人アリ。何レチ番頭トスベキヤ。吉凶チ問フ。コレチ筮シテ蒙ノ豫ニ之チ得。占レ之ヲ曰。一ノ手代ハ蒙ノ上爻ニ當ル。二ノ手代ハ二爻ニ當ル。一ノ手代蒙昧ナリ。故ニ亢リ誇ル者ナラ[ン]。又二ノ手代一ノ手代ノ艮山ニ押ヘラレテ險メドモ中チ得タル者ナリ。且其爻辭ニ曰ク。子克レ家ト。故ニ二チ番頭トシテ宜カラン。又一ノ手代蒙チナスモノナレバ家內チ蒙昧ニスルモノナリ。退ケテ可ナラン。二チ番頭トシタラバ上爻ノ一手代暇チ取テ退クベシ。二ノ手代一段上テ豫トナサバ手代ノ正位チ得テ其人出精シテ吉ナリト云ニ皆中ス。○或士ノ曰。我國モトヨリ役替チ告來ル[ア]リ。其役チ勤ムル者四人ノ中何レノ人ナルヤ。但シ一ヨリ四マテ順アリト云フ。之チ筮シテ家人ノ小畜ニ之チ得。占レ之ヲ曰。離チ明トシ。巽チ命トス。故ニ明ナル人ニ君命ノ下ル義アリ。又四人ノ中何ノ人ナル[カ]チ云ハバ初上チ外トシテ取ラズ。是初上ヲ無位ノ地トスレバナリ。二ヨリ四マデ順ニシテ四人トス。其四人ノ中一番ノ人ナラント云フ言。二爻變ジテ動ナリ。且二ハ中正チ得。五ノ君ニ應ズ。故ニ二爻ナランコトチ知ル。又三爻ハ動カズ。應ナシ。因テ二爻ノ人ト云フニ。果シテ然リ。○或醫師問テ曰。自宅チ求メテ醫業チスルヤ否ヤ。又他ヘ養子ニ行クガ宜ヤ。同姓ニ家ノ亡ビタルアリ。其跡チ建テ宜ヤ。此三ノ中ノ吉凶テ決セヨト。因テ筮シテ蠱ノ大畜ニ之ヲ得。占レ之ヲ曰。蠱ハヤブレナリ。且初爻ノ辭ニ。幹ニ父之蠱。有レ子。考。无レ咎。厲。終吉。ト云ヘリ。然レバヤブレタル

跡ヲ建テ業ヲスルヿヲ告ゲタル卦ナリ。又初爻變ジテ大畜トナルハ大ニ畜ユノ義ナレバ同姓ノ家ヲ建テ醫業ヲシテ吉ナリト云フ。果シテ同姓ヲ建テ業用繁昌セリ。

谷川龍山は又左傳國語の易に付て「相國易一家言」を著はせり。今其中の一節を引用して以て參考に供す。

第三節　周の史、陳敬仲が齊に興るとを占す

莊公二十二年、傳、陳の厲公、敬仲を生む。其の少きや周の史、周易を以て陳侯に見ゆる者あり。陳侯之を筮せしむ。

敬仲、太子御寇の難を避けて齊に奔る。齊侯之をして卿たらしむ。其の子孫田氏竟に齊に代つて國を有つ。傳、往時を追ふて而して敬仲が少き時周史の|||筮の詞を記して以て其の占驗を證す。○周禮に曰はく、大卜三易を掌る。一に曰はく連山、二に曰はく歸藏、三に曰はく周易と。今周の大史周易を掌る者陳侯に見ゆ。陳侯之をして敬仲が生涯の吉凶を筮せしむ。

觀䷓の否䷋に之くに遇ふ。曰はく是を國の光を觀る、用つて王に賓たるに利しと謂ふ。

觀は觀示なり。全體を以て言はゞ、二陽上に在り、四陰下に在り、是れ陽剛尊に居て衆陰の爲に瞻仰せらるゝの象あり。故に觀と名づく。又人君德を修め政を行ひて以て衆民に臨觀し衆民も亦其の德を仰觀するの義あり。故に觀と名づく。又兩體を以て言はゞ、巽を風と爲し坤を地と爲す。風地上に行けば、徧く萬物に觸る。觀示の義なり。故に觀と名づく。否は否塞なり。卦たる。上を天にし下を地にす。夫れ天氣上升し地氣下降すれば則ち陰陽交らず。陰陽交らざれば則ち雨を成さず。雨を成さゞれば則ち百物生ぜず。故に否と名づく。又乾は君なり、坤は臣なり。蓋し君上に在つて逸豫し臣下に在つて驕慢なれば則ち其の志通ぜず。志通ぜざれば則ち政綱亂れ國家否塞す。故に否と名づく。今觀の六四變じて否と爲る。故に其の辭を引いて以て敬仲の子孫諸侯たるべきの徵を謂ふ。按ずるに易經は其の象の正義に由つて以て卦名を成し此の篇は占者の意味を主として以て卦名を轉用す。故に其の義各異なり。其の爻辭に於ける亦然り。通篇を熟讀して以て見るべし。○道に二あり。常道なり、權道なり。聖人彖爻を作つて以て

常道を敎へト筮を設けて以て權道を誨ふ。夫れ觀は消長の卦、大壯と相反す。故に大衰と名づくべし。然れども、世敎に嫌あり。是を以て聖人之を名づくるに觀を以てす。其れ觀は君子上に在つて仁德を施し而して衆民に觀示し衆民も亦其の君子を仰觀し而して其の德化に悅服するの義なり。且つ其の六四の爻漸くに陽を剝して以て君位に逼る。故に君臣に在ては則ち其の大義に諱む。是を以て聖人之を遷し此の爻を賓として以て王に賓たるに用ふるに利しと謂ふ。見るべし象爻は唯其の常道を以て敎を不朽に垂るゝことを。大傳に曰はく聖人の情は乎辭に見ると。又曰はく吉凶は情を以て遷ると。其の旨深い哉。今周史觀の否に之くを以て其の辭を假りて以て占徵と爲す。直に此の辭を以て占を爲する非ず。故に其の辭其の事に契ふ者は取つて以て占を爲す。其の事に當らざる者は取らず。通篇を熟讀して以て見るべし。原るに夫れト筮の法たる、必ず先づ其の窮理を詳にし其の事實を審にし而して後其の事實を得卦に照し其の卦象を觀て以て吉凶を斷ず。大傳に曰はく蓍の德は圓にして神、卦の德は方にして以て知ありと。夫れ微妙なる者は神なり。顯著なる者は象なり。神は蓍に具

にして以て靈に、象は卦に見れて以て著し。故に筮者其の窮理に由つて以て其の象を觀、其の象に由つて以て其の義を察し、引いて而して之を伸べ類に觸れて而して之を長ずれば天下の能事畢んぬ。朱子此の書に象爻の辭を取つて以て占徵と爲す者あるを見て直に象爻を以てト筮の辭と爲す。此れト筮の道を知らざる者なり。大傳に曰はく易は象なりと。是の故に象爻は其の象を觀て之に辭を繫けて以て敎を君子に成しト筮も亦其の象に由つて以て吉凶を象人に示す。且つ夫れト筮の道たる變動して而して居らず。故に其の象を取る變化して窮なし。天下の事物豈に象爻に窮盡するとか之あらん。聖人其の象の一端を取つて以て敎を君子に設く。故に偶ま其の事に契ふ者は假つて以て徵とせるのみ。大傳に曰はく君子居ては則ち其の象を觀て而して其の辭を玩び動けば則ち其の變を觀て而して其の占を玩ぶと。又曰はく占事來を知ると。一も象爻を以てト筮を爲すと謂ふ者あること無し。大傳を熟讀して以て見るべし。朱子象爻を以てト筮を爲し常道を以て權道に混せんと欲する者は誤れり。後世其の說に由つて以て失する者多し。故に辨じ及ぶ。

此れ其れ陳に代つて國を有たんか。此に在らずして其れ異國に在らん。此れ其の身に非ずして其の子孫に在らん。光遠くして他自耀くと有る者なり。

此れとは敬仲を指す。是れ陳國衰亡すれば則ち敬仲が子孫將に諸侯となり國土を有たんとするを謂ふ。今生卦法を以て之を觀れば　卦の觀を陳と爲す。後は剝と爲り坤と爲る。是れ陳衰亡するの象なり。之く卦の否は本卦より一爻復り來り遯と爲り遯より姤と爲り乾と爲る。其の勢漸次に隆盛にして遂に諸侯と爲り國土を有つの象なり。蓋し敬仲陳に在らずして必ず異國に出奔せん。若し異國に在らば則ち敬仲の生涯に諸侯と爲り國土を有つの窮理無し。故に必ず敬仲が其の身に非ずして而して其の子孫に在らんとなり。然れども其の子孫諸侯と爲り國土を有つ所以の者は必ず敬仲の令德光耀以て其の子孫に及ぶに在り。自は於の猶し。他は敬仲の子孫を指す。○觀を陳國と爲し否を敬仲と爲す者は其の本卦を本と爲し親と爲し之く卦を末と爲し子と爲すを以てなり。

坤は土なり。巽は風なり。乾は天なり。風天と爲る。土上に於くは山なり。山の材有つて而して之を照すに天光を以てす。是に於てか土上に居る。

此れ八象を擧げて以て占する也。坤獨り地と曰はずして而して土と謂ふ者は蓋し敬仲の子孫國土を有つ當きの意あるを以てなり。風天と爲る。此れ巽乾と爲る。則ち觀の否に之くなり。其の巽風を坤土の上に於くは則ち觀るなり。觀は全體の艮。艮を山と爲す。故に曰はく土上に於くは山なりと。材は其の德質を謂ふ。之を照すに天光を以てすとは天命を得て國土を有つを謂ふ。之とは敬仲を指す。言ふこゝろは敬仲の令德美材大山の如く且つ天より之を祐く。故に其子孫に及んで當に國土を有つ當きなり。此れ前章光耀の字此の照の字と相應ず。皆天命を得るを謂ふ。土上に居るとは諸侯と爲り國土を有つを謂ふ。其れ敬仲の德大山の如く天の時を得、地の理を得、三才の全きを得。而して其の子孫遂に諸侯と爲るの象なり。

故に曰はく國の光を觀る。

此れ爻辭を引いて以て其の言を徵するなり。己下利用賓于の四字あり。蓋し下文より重復す。今刪正す。

王庭に旅百を實し之に奉ずるに玉帛を以てす。天地の美具る。故に曰はく用つて王に賓たるに利し。

王庭は朝廷の猶し。夫に王庭に揚ぐと。是れなり。蓋し觀は坤卦の艮。坤卦の艮を大艮と爲し大艮を宮闕と爲す。此れ王庭の象。實は實滿なり。旅百は衆多にして而して物備るを言ふ。坤の象、乾を金玉と爲し坤を布帛と爲す。夫れ觀否排列して之を見れば則ち衆多の玉帛、宮闕に滿るの象。此れ諸侯玉帛を奉じて以て王庭に朝し天地の美具るの義。故に曰はく用つて王に賓たるに利しと。此れ爻辭を引いて以て之を徵するなり。

猶、觀ると有るが猶し。故に曰はく其れ後に在らんか。

觀は我より他を觀るの義なり。此れ敬仲直に諸侯と爲るの謂ひに非ず。猶其の子孫の美盛を觀ると有るが猶し。故に曰はく其れ後に在らんかと。此れ前文此れ其の身に非ずして其の子孫に在らんの句に應ずるなり。蓋し省略法なり。按ずるに此の條占者の意味含蓄して而して文妙に其の意を形容す。學者宜しく熟讀玩味すべし。

風行いて而して土に著く。故に曰はく其れ異國に在らんか。

此の文、言簡にして而して能く其の意を盡くす。其れ觀の卦象を以ては則ち風地上に行くと謂ふべし。大象に風地上に行くは觀と。是れなり。蓋し風地上に行く、諸れを人に取れば則ち出奔の象と爲る。是れ敬仲出奔の象ありと雖も然れども出奔して而して後齊に行くことを知るべからざるなり。故に曰はく風行いて土に著くと。此れ風行の二字をして敬仲の出奔を示し著於土の三字を以て敬仲齊國に在つて而して爵祿を得、其の子孫に及んで國土を有つことを知らしむ。此の條獨り觀卦を擧げて以て出奔して而して異國に在ることを占するなり。生卦法に於て之を觀れば坤の卦數箇を以て齊齊に排定し巽の一卦をして其の坤卦上に横行せしむ。巽を以て敬仲に當つ。是れ方所無くして而して出奔するの象。然れども其の坤地を離れず。故に曰はく土に著くと。其れ出奔して土に著けば則ち陳國に在らず。必ず異國に在らんとなり。○坤地より此に至つて皆首章の言を徵す。下文復た其の端を更め、丁寧反復して以て其の意を終ふ。

若し異國に在らば必ず姜姓ならん。姜は大嶽の後なり。

此れ上文を承けて以て其の精微を盡すなり。敬仲若し異國に在つて封土を得るは必ず齊國ならん。夫れ齊は姜姓、古昔太公望の封國、其の先堯の四嶽たり。故に曰はく大嶽の後なりと。大嶽は大艮の象なり。

山嶽は則ち天地に配す。

觀を山嶽と爲す。否は天地の象。今觀、否と相並ぶ。是れ大艮の六畫、否の六爻と相配するなり。

物能く兩大莫し。陳衰ふれば此れ其れ昌へんか。

仲齊に在つて而して繁昌せば陳は必ず衰へん。是れ則ち生卦の法なり。辨已に前章に見たり。物能く兩大莫しと謂へる者は蓋し定理を以て言ふ。其生卦たるを顯說せず。是れ占法なり。此れ前文陳に代つて國を有たんに應ず。敬仲の子孫に至つて此れ其れ益昌へんか。

陳の初亡ぶるに及んで陳桓子始めて齊に大なり。

此れ備に其の終始を言つて以て卜筮の效驗を紀するなり。桓子は敬仲五世の孫陳無宇。

其の後亡ぶ。

哀の十七年楚復た陳を滅す。

成子政を得。

成子は陳常なり。敬仲八世の孫。陳常に及んで君を弑し國を簒つて以て其の政を執る。而るに國を得と謂はずして政を得と謂へる者は蓋し其の簒逆の罪を諱むなり。

第四節　梅花心易要領

此の占法は宋の邵康節の作と稱せらるゝもの。今其の一二を述ぶ。

イ　根本の理

先づ左の數を記憶せよ。

乾 ☰	1	兌 ☱	2
震 ☳	4	巽 ☴	5
離 ☲	3	坎 ☵	6

艮 ☶ 7　　坤 ☷ 8

乾と艮とを加ふれば8となり、兌と坤とを加ふれば10となる。其他此に準ず。又

年		月		日		時	
子	1	正	1	一	1	子	1
丑	2	二	2	二	2	丑	2
寅	3	三	3	三	3	寅	3
卯	4	四	4	四	4	卯	4
辰	5	五	5	五	5	辰	5
巳	6	六	6	六	6	巳	6
午	7	七	7	七	7	午	7
未	8	八	8	八	8	未	8
申	9	九	9	九	9	申	9
酉	10	十	10	十	10	酉	10

戌 11　二 11　二 11　戌 11

亥 12　三 12　以下至三十日　亥 12

此の如く、年、月、日、時にも一定の數を定め置きて此の數に由りて卦を出すなり。

□ 梅花の占

辰の年十二月十七日申の時、康節先生偶ま梅を觀る。二雀枝を爭ふて地に墜つ。先生曰はく、動かざれば占はず。事に因らざれば占はず。今二雀枝を爭ふて墜るは怪しと。因りて之を占ふ。

辰　十二月　十七日

5 ＋ 12 ＋ 17 ＝ 34　八ニテ除スレバ二殘ル

因りて兌 ☱ を立つ。又

辰　十二月　十七日　申

5 ＋ 12 ＋ 17 ＋ 9 ＝ 43　八ニテ除スレバ三ヲ得

因りて離 ☲ を立つ。而して

革 ䷰

を得たり。更に四十三の總數を六にて除し、一つ餘まる。卽ち下より第一爻變ずとなす。革變じて䷰となる。互卦に(下より二三四又は三四五を一卦と見て互卦といふ。周易の通例なり)乾卦あり。兌を金となし、少女となし、離を火とす。互卦の巽を木とす。乾を金となす。金は木を破るもの故に梅木損傷せらるゝの象あり。而かも兌を少女となし、巽を股となす少女の股傷くの象あり。本卦革の下卦變じて艮となる。艮を山となす。兌の金艮の山に逢ふ。卽ち金の生ずる意あり。此れ等を綜合して考ふれば、梅木少女のために傷けられ、少女其の股を傷くも其の傷深からざるの象となす。

ハ　夜門を叩き物を借る占ひ

冬夕酉の時先生、子と同く爐を擁して坐す。門を叩くものあり。一聲にして止む。繼いで復叩くこと五聲す。且つ物を借らんと欲す。先生借る所を言ふを緩るくせしめ、其の子をして試みに借る所のものは何物ぞやと占はしむ。一聲を以て乾に屬し、上卦となし、五聲を以て巽に屬し、下卦となす。又一乾と五巽と共にして六數なるを以て酉の時の十數を加へ總て十六數を得。二六一十二を除き、零る四數を得。動爻となす。是を天風姤の四爻變となす。巽の互は重乾を見る。卦中二乾金二巽木二體のみ。乾を剛金となし、巽を長木となす。

斷に曰はく。其の子云はく。金は短かくして木は長し。借る所のものは必ず鋤ならんと。先生曰はく。但だ鋤にはあらず。必ず斧を借るならん。之を問ふ。曰はく。果して斧を借るなり。子の曰はく。何を以ての故ぞ。先生曰はく。數を論ずれば又須らく理を論ずべし。卦を以て之を論ぜば鋤も亦可なり。理を以て之を推すに夜晩し。安んぞ鋤を用ひん。斧を借る是なり。蓋し斧は柴を劈くに切なるのみ。大凡そ數を論ずれば又須らく理を明かにすべし。斯れを切占の要となす。數を論じて理を論ぜざれば明かならざるなり。學者宜しく兼ねて之を誌るすべし。

ニ　牛の哀鳴する占ひ

癸卯の日、午時牛あり。坎の方に哀む。聲極めて哀し。因つて之を占ふ。牛を坤に屬し、上卦となし、坎の方を下卦となす。地水師を得たり。坤八坎六を以て午七を加へ、二十一の總數となす。三六十八を除きて零る三數を得。動爻となす。是を師の六三となす。易に曰はく。師或は尸を輿す。凶なり。是れ易の辞凶なり。卦は師を得たり。變

升の互は震坤を見る。體となす。互變、倶に之を対す。並びに生意なし。

斷に曰はく。此牛二十一日の内、必ず屠殺に遭はんと。果して後に二十日、一人あり。來つて此牛を買ひ、宰して以て匠衆を犒ふ。悉皆之に應ず。

假令ひ、學問的に占驗の理を考察せんとするも吾人は此れ以上に其の所謂實例なる者を引用するを要せず。梅花心易の占法なるものが如何程の價値あるものなるかは要するに讀者各自の見積りに由るより外なかるべきのみ。

卽ち占筮は必ずしも一定の法則あるにあらず。其の時に臨みて、之を判斷するのみ。殊に、邵子父子占ひを異にせるは同じ卦に對しても判斷の異なるものあるを知るべし。然らば則ち中る中らぬといふことは一は常識又は所謂頓才の發達如何に由る者と見るべし。二人同じく明日の天氣を占しても二人共に異なれる卦を得べく、而して二人共に異なれる占ひをなすべし。乃ち何れを以て中るべしとなすか。故に曰はく、中ると中らざるとは其の事あつて後の事なりと。易其れ自身に於ては吾人は今日の思想に於て其中るとの根據を發見すること能はず。又中らざるとの根據をも發見すること能はざるなり。中ると中らざるとは其場の

ことなり。乃至其人のことなり。故に常識の發達して微細のと一より能く、其の結果を推測するが如き能力ある者は必ず能く適中し得べきのみ。其人を待て然る後行はるゝ」は易に於て然りとなす。岡白駒の開口新話に左の一句あり。

算卦先生。臨岐問路農夫。農夫曰。子非賣卜先生耶。臨岐不能斷從何以爲人卜筮爲。

算卦先生曰。吾既筮之。繇云。當問農夫。是以問爾爾。

蓋し賣卜者頓才の一端を示めしたるものなるべし。或は文字占をなすものありといふ。例へば田有禽の句に付いて田の字は戸棚に似たりとなし、遺失物の戸棚に在ることを豫言するが如き是れなり。然れども恐くは今此に擧るの要なかるべし。

第三章　占筮法の原理

第一節　占筮の原理(一)

未來未知を知ること可能なりや、易は古來占筮のために用ひられし者なり。如何にして占筮し得べきか。先づ第一に六十四の各一が宇宙一切現象を網羅することを許さゞる可らず。此の方法如何にして出來得べきか。大凡そ左の如し。

一、八卦各々象あり、融通すべからず。口は乾に求むべからず、馬は離に求むべからず。雞は之を離に求むべし、龍は之を震に求むべし。此く融通すべからざるものとすれば到底占筮の餘地なきなり。雞を卜して乾の出ることもあるべく、家を卜して坤の出ることもあるべく、乃至は長女を卜して離の出ることもあるべく、長男を卜して中男の出ることもあるべければなり。然るに融通の道あり。互體約約是れなり。彼の梅花心易が多く互體を取れるを以て見るべし。例へば

䷀に䷀に䷀又は䷀又は䷀ありと見るべく。
䷀ありと見るべし。

或は約象として

䷀に䷀と見ることもあるべく。

䷀を䷀を見ることもあるべし。

或は一爻に就いて一卦の義を取る。

䷀の九三を以て震の一陽と見ることもあるべし。

此くすれば則ち殆んど至らざる處なきが如くなれども易の義を取るや極めて多方面なり。但だ「變の行く處にす」とは易の根本原理なり。或は又變爻に就いても意味を取り得べし。

此くの如くなるが故に、卦の象よりするも六爻卦の各一は無數の卦象を包藏するものと見ることを得べきなり。占筮の出來得べき條件の一は此にあり。

第二節　占筮の原理(二)

次ぎに周易の經文より考ふるに其の文句は又如何にも之を解釋し得べき者少からず。例へば蠱の卦

元亨。利。涉。大川。先甲三日。後甲三日。

といふは一種の謎なり。故に何んとにても之を解釋し得べきことは占筮に取りて最も好都合なる條件なり。更に文字の占をなすものは

田有禽

の田を戸棚と見ることあるべく

先甲三日

の甲を人と見ることもあるべく、或は三の字に重きを置いて直ちに取りて占ふこともあるべきなり。要するに此れ等は占筮のために好都合なる一條件たらずんばあらず。周易經文には

貞吉

貞凶

等の句多し。此れ等は尋常のことをいふ。貞正なれば吉とか、貞なれども凶とかいふことにして別に妙味なし。故に此れ等の言葉丈にては占ひをなすに足らず。殊に周易經文には凶といふ處甚だ少し。經文丈にては到底以て占ふに足らざるなり。種々なる方面より之を解釋するの必要ある所以なり。

第三節　占筮の原理(三)

六十四卦の各一が宇宙一切の現象を包藏すとなすは占筮の起り得る所以なり。然れども、遇ふ所の卦(遇卦、本卦、得卦ともいふ)を以て根本となし、之れにて占筮するなるが故に、得る所の卦は兎に角、其の何なるにせよ、其の現象の意味を發揮したるものと解せざる可らず。此れ卽ち易の斷定なり。然らば此斷定は如何にして出來得べきかといふに、後世の筮儀にては皆神明の力を借るとなす。儀禮以下然り。然れども此れ易と宗教思想とを混合したるもののみ。易本來の意味に於ては天地自然の進動を計算したるものなり。(次節を參照すべし)

卽ち得卦ありて其の象あり。其象は宇宙一切の現象に關係するものなりと雖も何等か其場合一種の象として斷定せられざる可らず。此點に於ては易は徹頭徹

尾不得要領に終るものにあらざるなり。

然るに二度占ふ時は二度共に別卦を得、三度占ふ時は三度共に別卦を得るは火を睹るよりも明かなり。然らば何れに從ふて可なるや。蒙に云はく。

蒙亨、匪我求童蒙、童蒙求我、初筮告、再三瀆、瀆則不告、利貞。

再三に及べば則ち告げずといふなり。神を瀆すが故に神告げずとも解すべきも、亦一方に於ては易が一種の運命觀を取りし者とも亦之を解すべきなり。

第四節　占筮の根底

以上は占筮の出來得べき根本的條件なり。然らば如何なる原理に本づきて占筮が出來るか。余は嘗て一小論文「易と人生」に於て委細に之を論究せり。由りて今其の全文を引用せん。

占筮は未來の現象を知らんとする者である。故に曰はく「占事知來」（下繫第十二章）と又曰はく「遂知來物」（上繫第五章）と又曰はく「極數知來之謂占」（說卦第三章）と來は卽ち未來である。占筮の司る所を見るべきである。又曰はく

數往者順、知來者逆、是故易逆數也。

往を數ふるとは過去を知るの意にあらずして筮竹を數ふることを謂ふ。筮竹を數ふるは則ち過去の因果的連絡を踪蹤するに象るのである。是れより一直線に進むで未來なる某の現象を知らんとす。卽ち本文は未來を知ることを言ふたのである。然るに未來に關する「逆」なる文字より直ちに「是故易逆數也」と言へるを以て見れば占筮の「未來にあるを知るに足る。又曰はく。

夫易彰往而察來、而顯微闡幽、開而當名、辨物正言、斷辭則備矣。

彰往は卽ち筮竹を數ふるに外ならない。易の占筮は過去の進動より推して以て未來を知らんとする者なること此れ等の引用文によりて明かである。然らば占筮の此の思想は易の哲學より如何にして起り來るかと云ふに宇宙生成の思想よりする者に外ならない。易の哲學は宇宙生成動の進を以て太極、兩儀、四象、八卦となす自然現象を指すのである。八卦を重ねたる六十四卦は社會に於ける六十四の狀態を示めす者而して今占せんとする某の現象は其の中の何れか一に該當すとなす卽ち某現象卽ち六十四卦の或る

一個は「太極兩儀四象八卦」の順序を經て生成せし者となさゝるを得ない。是れ易の哲學にありては正當なる思想である。

天文學に於て日月の蝕を豫測するは自然の法則を數ふるによる。易も亦宇宙生成の自然の法則を數へて以て未來を豫測せんとするものである。此の「數ふる」と云ふことが易の作者に取りては占筮の正確なる所以の基礎と思はれたのである。故に十翼の中「數」なる文字は屢々用ひられた。易の作者以爲らく太極陰陽四象八卦の順序を追ふたる者なるが故に正確にして誤りなき者であると。然れども今日より見れば重卦を得る所以の此の方法は易の作者の符號にして知らざる者より見れば必ずしも宇宙自然の法則を數ふる者とは思はれない。又天文學が計算によりて未來を豫測し得るは具體的事實に對する具體的の計算によるがためであるが易の占筮にて宇宙自然の進動を數ふるとすれば此れ一般的の計算法にして隨て某の具體的現象を豫知することは出來ない譯だ。進化論と比較して之を示さんに進化論は敎へて曰はく。無機物の後に有機物あり、有機物の後に精神あり、精神の後に人類あり、人類には幾種ありと。若し人あり。無機有機精神人類の四階段を或有形的方法によりて想像し、而して後我出でたりとなさむか。此れ進化論を其儘心に反覆せるに外ならない。今占筮が一二四八の順序を說くも亦單に易哲學を心に反覆せるに外ならない。進化の一般の四階段を如何に心に反覆するも某の現象は指名せられない。占筮法によりて重卦を得たりとするも其の重卦は一般の理論を指すもので某の現象を指すのではない。但だ占筮は之を以て某の現象を指すとなす、若し某の現象を指すものとすれば各一現象は二、四、八の順序を經て作られし者となさゝる可らず。此二四八は其現象の原因なるが故に具體的ならざる可らず。若し具體的となさば占筮せんとする刹那に於て己に今の占筮は普遍的なる意味ある者でなく某具體的因果關係を示めす者となさゝるを得ない。是れ易の占筮の唯一の核で其理論的方面より言はんか。天地の數五十五を弄びつゝありし間に一面には天文學的に未來を豫見することに思ひ及び又他の一面には天地間の進動は陰陽の分裂を以て根抵となすことに思ひ至り此に占筮法を生じ來

つたのである。

乃ち占筮の原理は此に至りて最も明かなり。

易の原理及占筮終

孔子——商瞿子木——橋庇子庸——馯臂子弓——周醜子家

孫虞子乘——田何子莊

王同子中——楊何

張禹

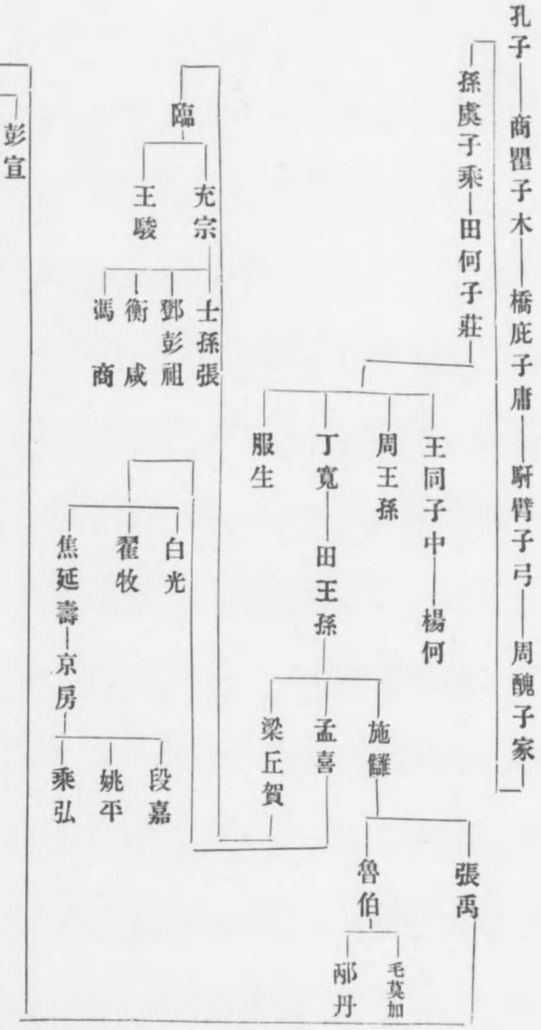
京兆陳元
扶風馬嬰
河南鄭衆
北海鄭康成
潁川荀爽
傳費氏易

（劉表）

（虞翻）（陸績）

永嘉之亂施。氏梁丘之易亡。孟京費之易。人無傳者。唯鄭康成。王輔嗣所注行於世、而王氏爲世所重。其繫辭已下。王不注。相承以韓康伯注續之。

易の原理及占筮終



後漢戴憑傳京氏易

孫期

魏滿

費氏學、本以古字、古文易、
參象繫辭文言解說上下經、
後漢時費氏與高氏微、

費直—王璜

自言出丁將軍

高相—相—子康
　　母將永

田何

楊叔元
丁將軍　大義同

京氏

京兆陳元
扶風馬蜺
河南鄭衆　傳費氏易
北海鄭康成
潁川荀爽

（劉表）

（虞翻）（陸績）

永嘉之亂施。氏梁丘之易亡。孟京費之易。人無傳者。
唯鄭康成。王輔嗣所注行於世、而王氏爲世所重。
其繫辭己下。王不注。相承以韓康伯注續之。

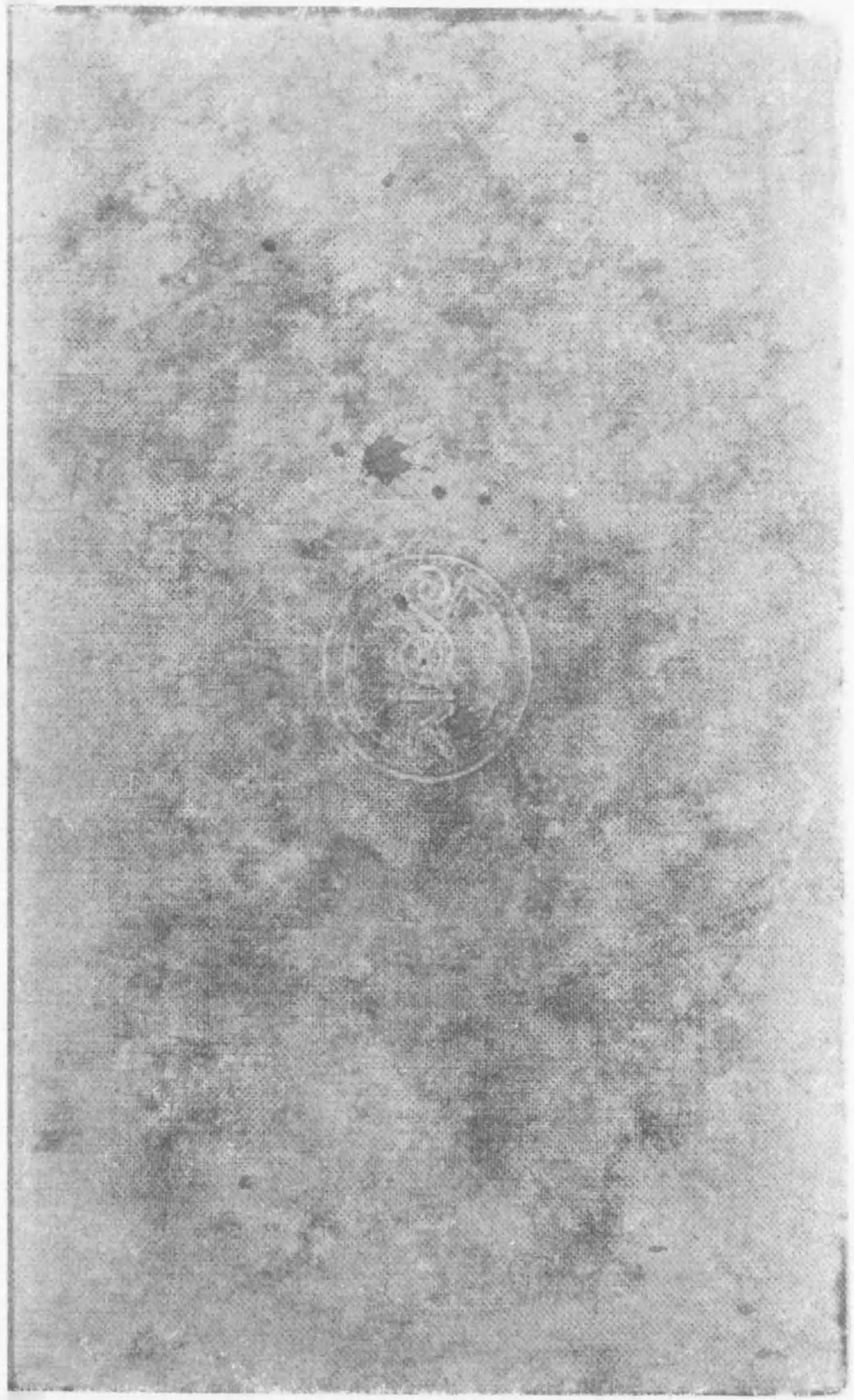
大正五年十二月一日　印刷
大正五年十二月五日　發行

易の原理及占筮
定價金貳圓五拾錢

版權所有

著者　遠藤隆吉

發行兼印刷者　東京市日本橋區大傳馬鹽町十八番地　松崎善太郎

發行所　東京市日本橋區大傳馬鹽町十八番地　明誠館書店
電話神田一四〇六番
振替口座一〇七〇八番

終